

古代生産遺跡の研究

— 宮都の窯業生産 —

古代生産遺跡の研究
— 宮都の窯業生産 —
* 目次

第一章	奈良山丘陵の埴輪窯	1
第一節	上人ヶ平埴輪群の概要	2
一	はじめに	
二	埴輪窯の概要	
三	上人ヶ平古墳群の概要	
四	円筒埴輪を中心とした埴輪の編年	
五	上人ヶ平古墳群での埴輪の樹立	
六	上人ヶ平古墳群からみた上人ヶ平埴輪窯の操業状況	
第二節	埴輪窯について	23
一	これまでの埴輪窯研究	
二	埴輪窯の平面構造	
三	埴輪窯の実態	
四	埴輪製作工房の様子	
五	上人ヶ平埴輪群の築窯契機	
六	新池埴輪窯との比較	
第二章	奈良山丘陵における瓦窯の展開	49
第一節	奈良山丘陵の瓦窯	50

一	はじめに	
二	宮都における瓦窯の展開	
三	平城京の瓦窯	
四	奈良山丘陵の瓦窯の様相	
第二節	奈良山丘陵における瓦窯構造について	77
一	瓦窯の各部位の名称	
二	梅谷瓦窯の調査	
三	奈良山瓦窯群での窯体構造	
四	窖窯から平窯への変遷	
五	他地域での類例	
第三節	国分寺の創建瓦窯	109
一	聖武天皇の仏教政策	
二	丹波国分寺の創建瓦窯	
三	丹波国分寺と三日市遺跡	
四	丹波国分寺以前の亀岡盆地の寺院	
五	各地における国分寺とその関連瓦窯の事例	
六	国分寺の瓦窯	

第三章	奈良山丘陵での瓦工房の復元	134
第一節	鹿背山瓦窯の復元	133
一	はじめに	
二	検出遺構	
三	出土遺物	
四	鹿背山瓦窯の復元	
五	通路検出の意味	
第二節	上人ヶ平遺跡の瓦工房	150
一	上人ヶ平遺跡の概要	
二	瓦工房について	
三	「造瓦所」について	
第四章	奈良山丘陵の瓦陶兼業窯	181
第一節	京へ供給した瓦窯	182
一	はじめに	
二	瀬後谷瓦窯の概略	
三	瀬後谷瓦窯出土の軒瓦	
四	軒瓦からみたその供給先と年代	

五、	瀬後谷瓦窯の須恵器	
六、	瀬後谷瓦窯の性格	
第二節	瓦窯出土の土製塔	205
一、	土製塔の出土状況	
二、	各部位の特徴	
三、	土製塔の出土状況	
四、	瀬後谷瓦窯出土土製塔の意味	
第五章	篠・須恵器窯の変遷	219
第一節	篠窯跡群の概要	220
一、	はじめに	
二、	篠窯の概要	
第二節	篠窯跡群の土器	245
一、	土器の分類基準	
二、	前半期の篠窯の須恵器	
三、	後半期の篠窯の須恵器	
四、	消費地からみた篠窯後半期の年代	

第三節 篠窯の小型窯	272
一. 西長尾五・六号窯の窯体構造	272
二. 窯体構造の変化	272
第四節 篠製品の流通とその画期	281
一. 篠の製品	281
二. 第三期の土器様相	281
三. 篠産緑釉陶器・須恵器の分布状況	281
第五節 篠窯の展開	298
一. 平安京造営以前の須恵器窯	298
二. 平安京遷都以後の須恵器・緑釉陶器窯	298
三. 篠窯の変遷	298

緒言

恭仁京・長岡京・平安京の三都をもつ京都府では、都城の発掘調査が数多くおこなわれ、宮城の実態、離宮、京域内での貴族の邸宅跡や条坊復原など数多くの成果を得ている。

都城では、宮城内の各施設、京域内の邸宅、大路・小路に面した築地、羅城門などで数多くの瓦が使用されており、また宮・京域での調査では多量の須恵器や緑釉陶器なども出土している。

これら都城に必要な瓦や須恵器は、国・役人の管理のもと、瓦工・陶工が実際の作業をおこない、その下部には労力を提供する民衆がいた。瓦工・陶工は特殊技術によって国家を支えた集団である。

恭仁京に遡る平城京では、宮の背後、京都府と奈良県を区切る奈良山丘陵に数多くの瓦窯が点在しており、表舞台である宮・京の人々を支えた窯業集団が息づいていた。同様のことは、平安京における洛北・洛西・篠地域に点在する。

瓦生産の基礎となったものが、5世紀中頃に大陸から伝来した技術であり、これまでの縄文・弥生土器、土師器焼成技法とは異なつた須恵器を焼成するための構築窯である。

この須恵器を焼成する構築窯は、これまで解放窯で焼成されてきた埴輪の焼成技法にも変化が加えられ、窖窯焼成の埴輪窯が生まれる。さらに7世紀前半には、本格的な寺院である飛鳥寺の造営を契機として瓦窯が生まれ、その後、藤原京・平城京の造営を契機として、日本独自の瓦焼成窯が生まれる。

本書で取り上げる奈良山丘陵では、古墳群（瓦谷古墳群、上人ヶ平古墳群、西山塚古墳など）と古墳の外表施設である埴輪を焼成した埴輪窯群（瓦谷埴輪群、上人ヶ平埴輪群）、奈良時代には瓦工房（上人ヶ平遺跡・鹿背山瓦窯）と瓦生産の一工程である瓦窯（梅谷瓦窯・瀬後谷瓦窯・市坂瓦窯・五領池東瓦窯）など、数多

くの注目される遺跡の発掘調査が行われた。

これら生産遺跡は、初期大和政権と深く係わった佐紀盾列古墳群に関連した埴輪窯群、平城宮・京へ瓦を供給する奈良山瓦窯群がある。

須恵器生産は、5世紀前半、一部地方にも須恵器窯が築窯されるが、その生産に定着性は乏しく、陶邑窯で一元化される。古墳時代を通じて一元化された陶邑古窯跡群は奈良・平安時代まで続くが、長岡京、平安京へと都が移るとともに、陶邑古窯跡群での燃料の確保や地理的条件により衰退傾向にあり、陶邑窯から亀岡市篠窯へと須恵器生産の拠点が移動する。

亀岡市篠町にある篠窯跡群は、平安京にのみならず日本全国に篠製品が供給されており、平安時代の須恵器生産の有り様とともに、その製品の供給関係から流通を追える資料であり、古代末期から中世への胎動を示す窯跡群である。

これら奈良山瓦窯跡群・篠窯跡群は、その時代の政権中枢部の意思をそのまま反映するとともに、最先端の技術を取り入れ、独自に工人たちが試行錯誤しながら造り出した生産遺跡である。また、この地で生み出された生産技術が地方へと影響を及ぼしている。

本書では埴輪窯・瓦窯・須恵器窯など窯業遺跡の発掘調査成果を通じて、都を支えた窯業の実態を、検討していきたい。

第一章 奈良山丘陵の埴輪窯

第一章 奈良山丘陵の埴輪窯

第一節 上人ヶ平埴輪窯群の概要

一．はじめに

京都盆地の最南端、京都府木津川市(旧木津町) 上人ヶ平遺跡は丘陵平坦面にあり、5世紀中頃から6世紀前半にかけて、造り出し付き円墳一基を含む一七基の小規模な古墳群(上人ヶ平古墳群)^{注1}がある(第一一四図)。また、この古墳群とは同一丘陵で、丘陵西側斜面に築窯された三基の埴輪窯(上人ヶ平埴輪窯)^{注2}が、古墳群が立地する尾根の北西で、東西にのびる別尾根の南斜面に築窯された三基の埴輪窯(瓦谷埴輪窯)^{注3}があり、発掘調査がおこなわれた。

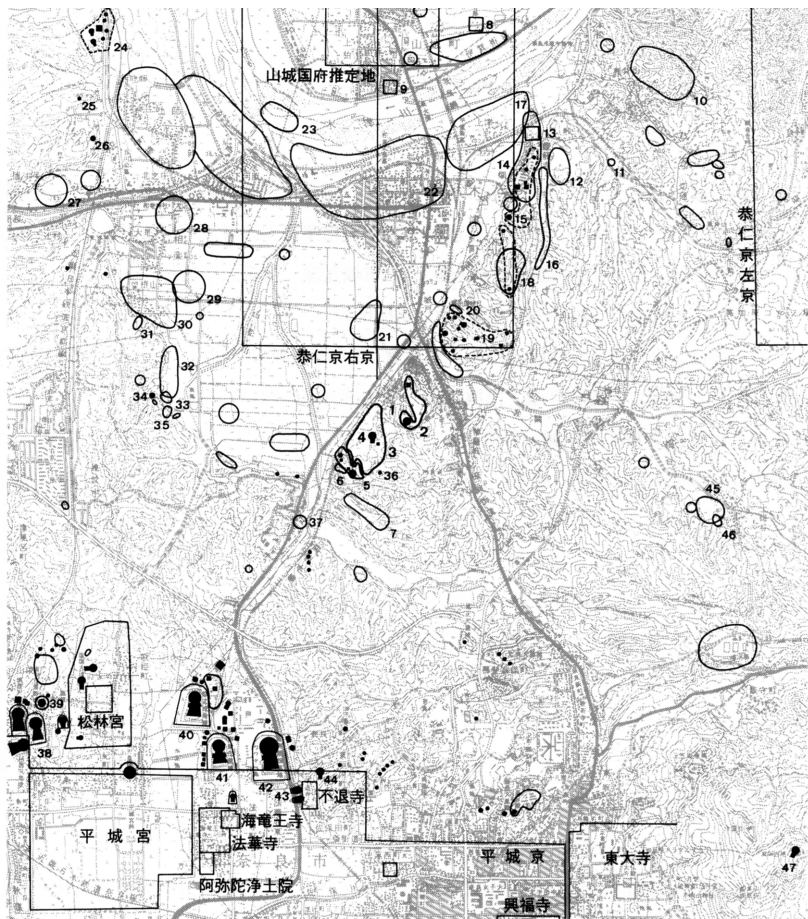
上人ヶ平古墳群と埴輪窯は、日本における須恵器生産の技術を取り入れてまもない時期の埴輪窯であるとともに、生産地(埴輪窯)とその製品の供給先(古墳群)が同一丘陵にある良好な遺跡群であることが明らかとなった。^{注4}ここでは、上人ヶ平古墳群と上人ヶ平埴輪窯の概要について調査成果をもとに報告する。

二．埴輪窯の概要

瓦谷埴輪窯は平成五年度に発掘調査がおこなわれ、三基の埴輪窯を検出した。

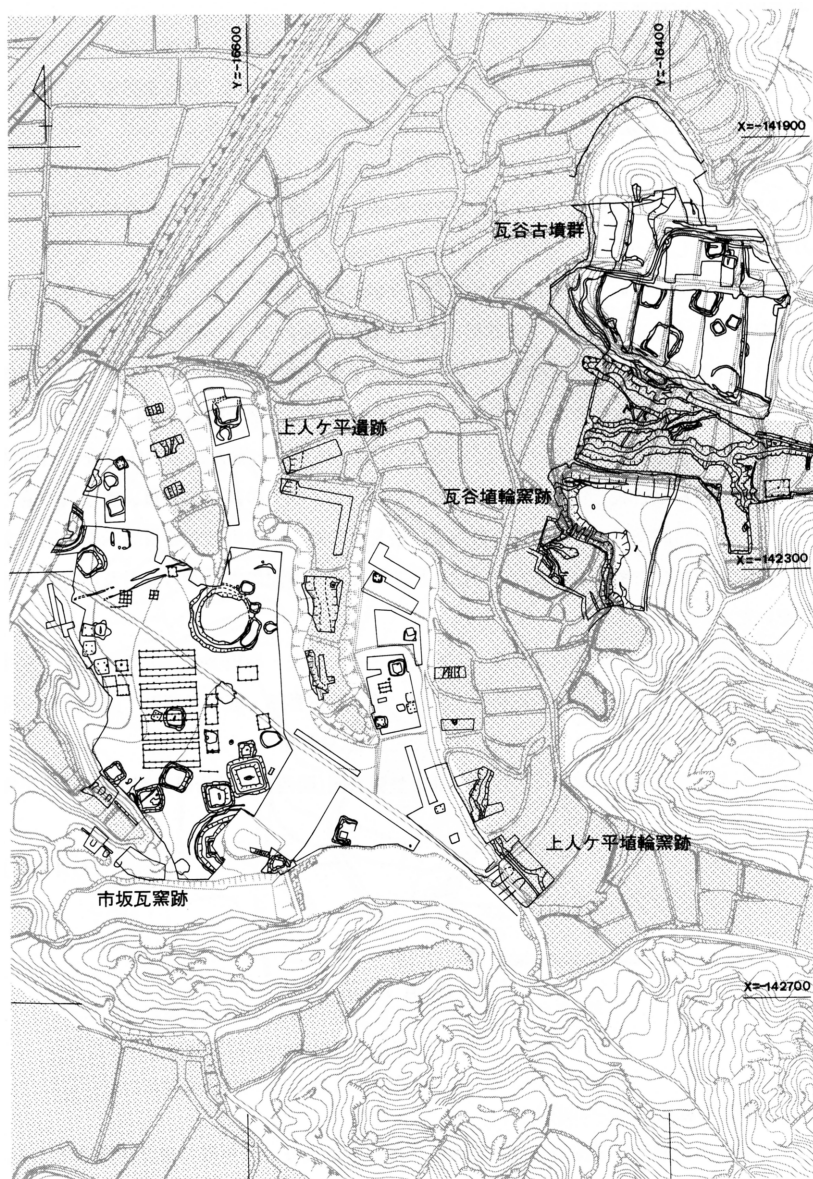
瓦谷埴輪窯は、後述する上人ヶ平古墳群とは東の谷部を挟んであり、丘陵部の南斜面地に構築されている。窯体内及び灰原内からは埴輪のみで須恵器を含まず、埴輪焼成のための埴輪専用窯であることが明らか

第1節 ● 上人ヶ平埴輪窯群の概要



- | | | | | |
|-----------|-----------|------------|-------------|-----------|
| 1：西山塚古墳 | 2：西山遺跡 | 3：瓦谷遺跡 | 4：瓦谷古墳群 | 5：上人ヶ平遺跡 |
| 6：市坂瓦窯跡 | 7：瀬後谷遺跡 | 8：高麗寺跡 | 9：泉橋寺跡 | 10：鹿背山城跡 |
| 11：鹿背山瓦窯跡 | 12：赤ヶ平遺跡 | 13：燈籠寺廃寺跡 | 14：燈籠寺遺跡 | 15：内田山古墳群 |
| 16：釜ヶ谷遺跡 | 17：上津遺跡 | 18：木津城跡 | 19：天神山古墳群 | 20：大谷窯跡 |
| 21：八後遺跡 | 22：木津遺跡 | 23：木津北遺跡 | 24：土師七ツ塚古墳群 | 25：坊谷古墳 |
| 26：白山古墳 | 27：樋ノ口遺跡 | 28：相楽遺跡 | 29：八ヶ坪遺跡 | 30：曾根山遺跡 |
| 31：大仙堂遺跡 | 32：大島遺跡 | 33：音如ヶ谷瓦窯跡 | 34：音乗谷古墳 | 35：歌姬西瓦窯跡 |
| 36：幣羅坂古墳 | 37：歌姬瓦窯跡 | 38：佐紀陵山古墳 | 39：マエ塚古墳 | 40：ヒシアゲ古墳 |
| 41：コナベ古墳 | 42：ウワナベ古墳 | 43：平塚1・2号墳 | 44：不退寺裏山古墳 | |
| 45：中ノ島遺跡 | 46：梅谷瓦窯跡 | 47：鶯塚古墳 | | |

第一一1図 上人ヶ平遺跡位置図



第一-2図 上人ヶ平埴輪窯群と上人ヶ平古墳群

となった。

上人ヶ平埴輪窯は、瓦谷埴輪窯の南約一五〇mの位置にあり、後述する上人ヶ平古墳群の立地する台地上の基部、東側斜面に立地する埴輪窯である。昭和六三年度の調査で上人ヶ平1号埴輪窯を、平成五年度にその南側で新たに二基の埴輪窯を検出し、窯体及び灰原の発掘調査を実施した(第一―2図)。

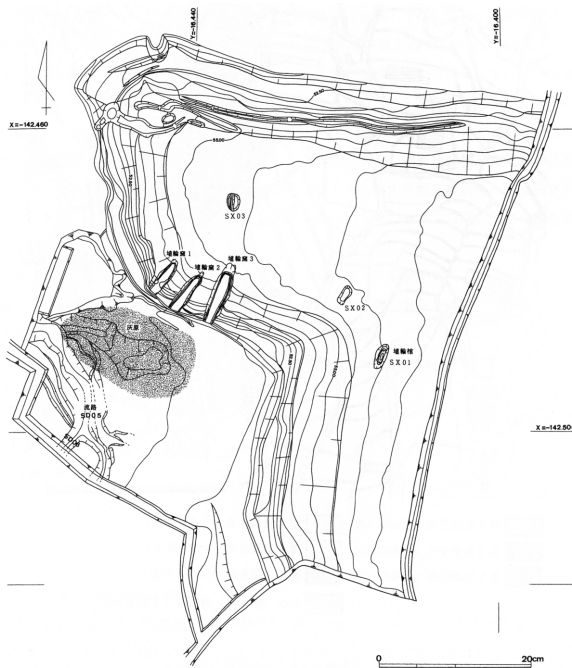
瓦谷埴輪窯・上人ヶ平埴輪窯は、立地する丘陵は異なるものの、丘陵斜面地の狭い範囲に三基の窯が並列して築窯されている。

ここでは、遺跡名称での煩雑さを避けるために、瓦谷埴輪窯を上人ヶ平A支群埴輪窯、上人ヶ平埴輪窯を上人ヶ平B支群埴輪窯と呼称して検討を加えていく。

A・上人ヶ平A支群埴輪窯(第一―3図)

上人ヶ平A支群埴輪窯(瓦谷埴輪群)は、約一〇mの範囲内に三基の窯が並列して存在し、西から1号埴輪窯・2号埴輪窯・3号埴輪窯と遺構番号がついている。

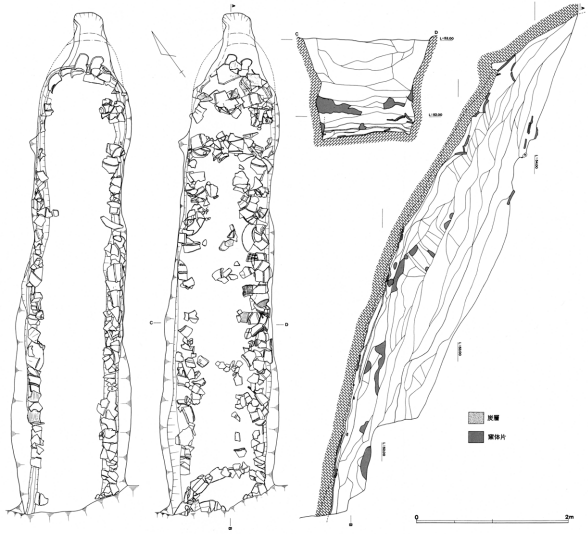
A支群1号埴輪窯は、検出全長約55mで、床面最大幅約13m、床面傾斜角約20〜30度を測る。焼成部床面は一面で、明確な高上げの痕跡がない。燃焼部床面は焼土を含む黄褐色



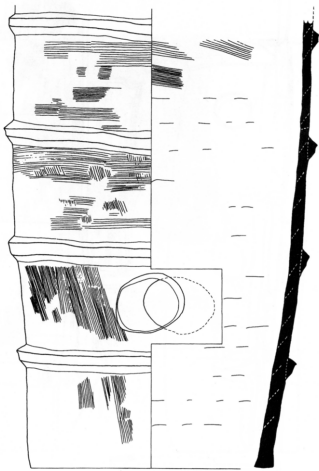
第一―3図 上人ヶ平A支群埴輪窯平面図

土の間層を挟んで、炭層と床面と思われる堅緻な層を三層確認し、燃烧部のみ三回にわたって床面の高上げが行われている。

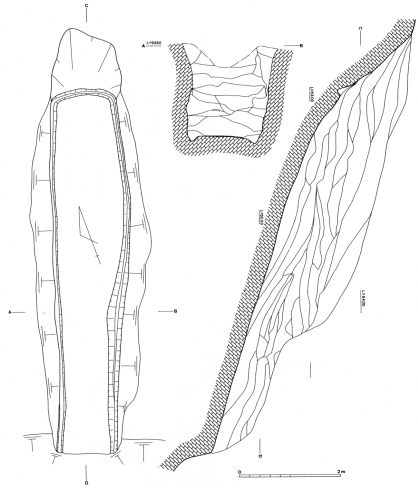
A支群2号埴輪窯は、A支群1号埴輪窯の東約2mにあり、検出全長約6.5mで、床面最大幅約12m、床面



第一-4図 上人ヶ平A支群2号埴輪窯平面図



第一-6図 上人ヶ平A支群埴輪窯
出土の円筒埴輪



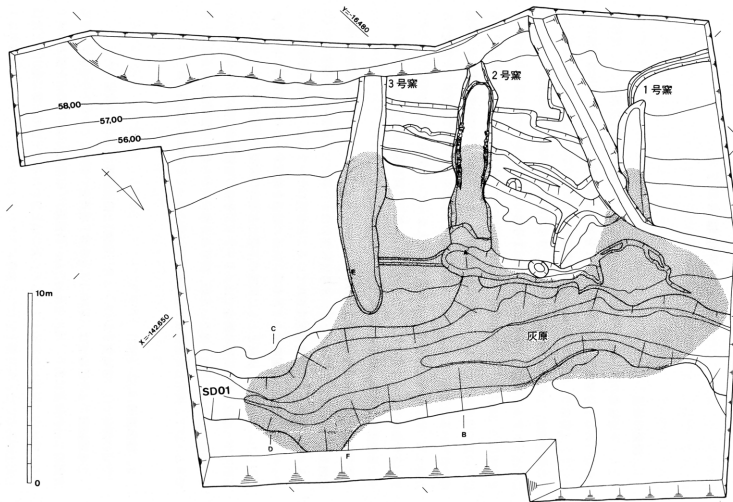
第一-5図 上人ヶ平A支群3号埴輪窯平面図

傾斜角約20度を測る(第一—4図)。焼成部・燃烧部床面とも二回にわたって床面の高上げが行われている。

A支群3号埴輪窯は、A支群2号埴輪窯の東約3mにあり、検出全長約9.5mで、床面最大幅約1.6m、床面傾斜角約15度を測る(第一—5図)。A支群3号埴輪窯は、窯体内に埴輪片がなく、焼成部・燃烧部床面、天井部とも焼けた痕跡が確認できなかった。窯の構築後に焼成することなく、廃棄したかあるいは焼成前に天井部が崩落し、窯が廃棄された可能性が高い。

A支群1・2号埴輪窯の灰原は、東西約18m、南北約6mの範囲に広がり、その範囲内の東西二ヶ所で埴輪片が集中している。灰原の堆積状況からはA支群1号窯と2号窯の前後関係や、埴輪がA支群1・2号窯のいずれに帰属する資料であるかは判然としていない。また、公表された報告書では、窯体及び灰原の一部資料が提示できたのみで、A支群埴輪窯での埴輪の全容については明らかでない。

公表した資料では、A支群埴輪窯で焼成された埴輪は、普通円筒埴輪のほか、蓋形・家形・盾形・短甲形・



第一—7図 上人ヶ平B支群埴輪窯 平面図

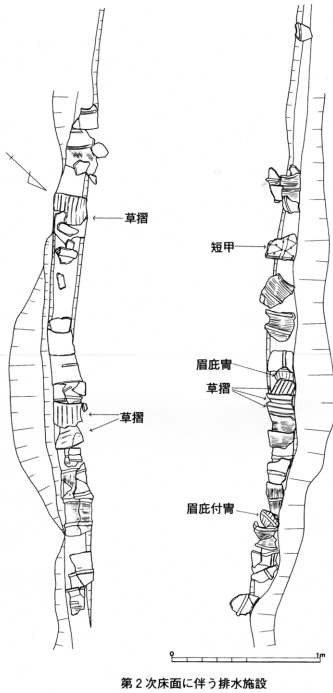
冑形・靴形・馬形の形象埴輪がある。

B. 上人ヶ平B支群埴輪窯(第一—7図)

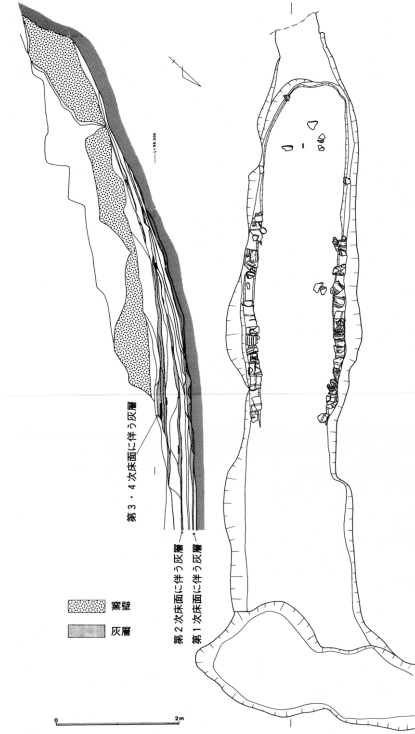
B支群(上人ヶ平埴輪窯) 1号埴輪窯は、検出全長約80mで、床面最大幅約1.45m、床面傾斜角約10〜20度を測る。焼成部・燃焼部は三回にわたって床面の高上げが行われている。

B支群1号窯の築窯当初の第一床面では、器高60〜70cmで、外面二次調整としてB種ヨコハケを施した円筒埴輪(伊賀分類A類)が含まれるが、第二床面では器高50cmの小型の円筒埴輪(伊賀分類B類)で、「省力化・形骸化の要素」のある円筒埴輪となる。

形象埴輪は、詳細な形態変化を読み取ることは困難であるが、上人ヶ平B支群埴輪窯の灰原から出土した馬形埴輪(第一—12図)は、馬の形態や馬具

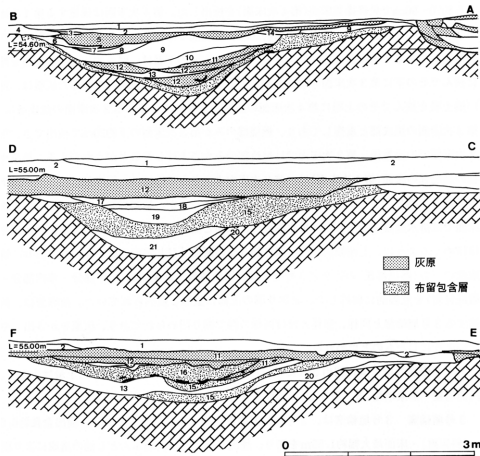


第一—9図 上人ヶ平B支群2号埴輪窯
床面細部平面図

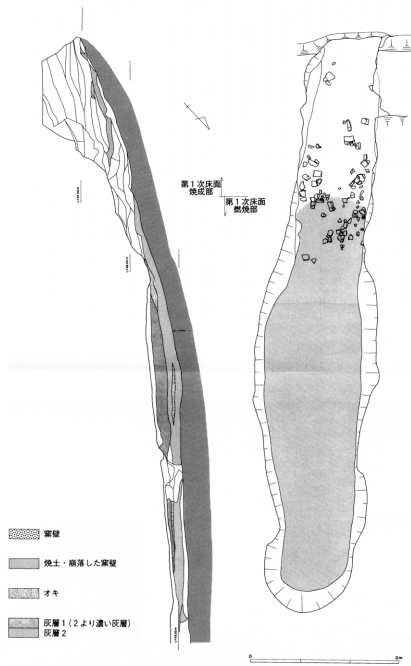


第一—8図 上人ヶ平B支群2号埴輪窯平面図

第1節 ● 上人ヶ平埴輪窯群の概要



第一—10 図 上人ヶ平B支群埴輪窯 灰原堆積状況
断面図

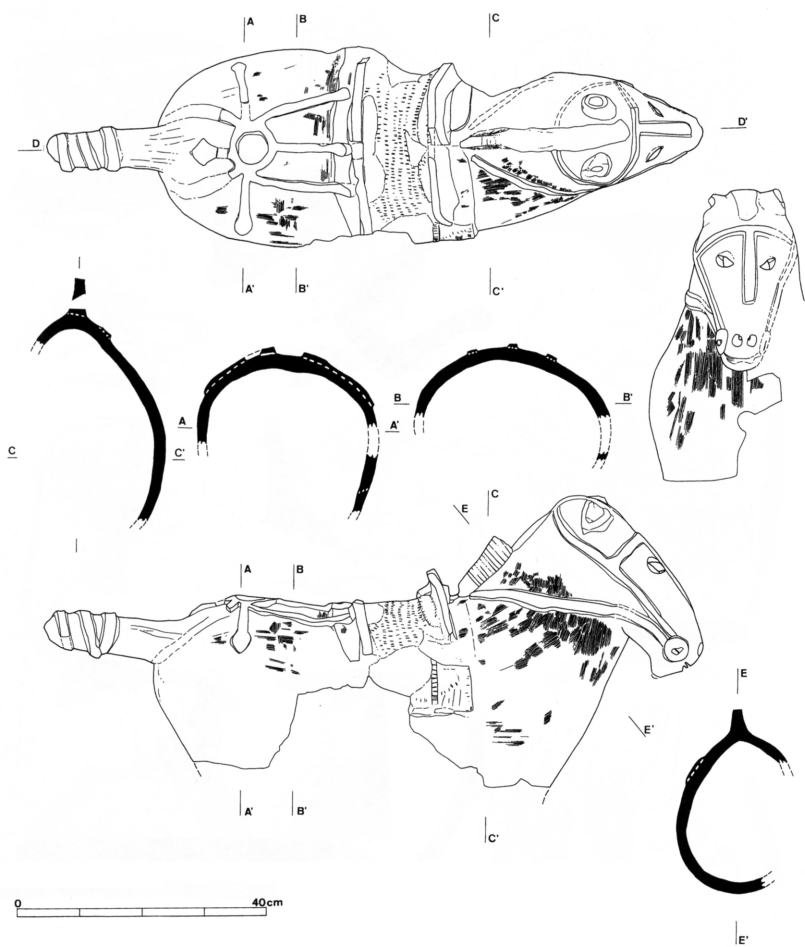


第一—11 図 上人ヶ平B支群3号埴輪窯平面図

を忠実に表現したものであり、同じ資料が上人ヶ平5・7号墳でも出土している。また、蓋形埴輪でも笠部立ち飾り部に線刻で区画を表現しており、同じ表現のものは上人ヶ平5・7号墳と共通している。

上人ヶ平B支群2号埴輪窯は、B支群1号埴輪窯の南東約7mにあり、検出全長約7.6mで、床面最大幅約1.65m、床面傾斜角約20度を測る(第一—8・9図)。B支群2号埴輪窯は、焼成時の床面から最終時の床面まで、燃焼部の高上げが50〜70cmの厚さであり、四面の床面を確認している。

上人ヶ平B支群3号埴輪窯は、B支群2号埴輪窯の南東約4mにあり、検出全長約6.5mで、床面最大幅約1.55mを測る。燃焼部では2層の灰層を確認しているが、焼成部は床面での明確な高上げの痕跡は認められなかった(第一—11図)。



第一-12図 上人ヶ平B支群埴輪窯灰原出土馬形埴輪

上人ヶ平B支群の埴輪窯は、各窯の床面の観察からはB支群2号埴輪窯での焼成回数が多く、次にB支群1号埴輪窯で、上人ヶ平B支群3号窯の焼成回数は少なかったものと思われる。灰原は、長さ約26m、幅約7.0mの範囲に広がり、灰原の堆積状況(第一—10図)から、操業当初は南端の上人ヶ平B支群3号埴輪窯からB支群2号埴輪窯、そしてB支群1号埴輪窯へと変遷が考えられる。

上人ヶ平A支群埴輪窯・B支群埴輪窯とも三基が並列して築窯されており、粘土による埴輪の成形、乾燥・焼成の手順からみていくと、各支群で三基の埴輪窯を一ユニットにして築窯されている。これは窯を同時に焼成するよりも、生製品の窯入れ、焼成時間、窯出しの工程をずらすことによって作業効率を高めたためと考えられる。

上人ヶ平B支群1・2・3号埴輪窯で焼成された埴輪の全容については明らかでないが、公表した一部資料では普通円筒埴輪のほか、蓋・家・盾・鶏・馬形の形象埴輪がある。

このように、狭い谷部を挟んでA支群三基、B支群三基の総数六基の埴輪窯で構成されている。これらの埴輪窯で焼成された製品は、その埴輪の特徴から、丘陵部に造られた上人ヶ平古墳群の各古墳へ供給されたことが明らかである。

三． 上人ヶ平古墳群の概要

上人ヶ平古墳群は、17基の中・小規模古墳で構成(第一—13図)され、上人ヶ平5号墳を中心とした南支群と1号墳を中心とした北支群に分かけることができ、その年代は5世紀後半から6世紀前半で、埴輪の特徴から南支群が先行して造られ、続いて北支群に移行していったものと思われる。

南支群の盟主墳である上人ヶ平5号墳は、造り出し付き円墳(帆立貝形前方後円墳)で、全長26.4m、円丘

部の直径23.2m、造り出しの幅9.0m、長さ5.0m、墳丘高3.5mを測り、墳丘を巡る形で、上面幅約7.0m、深さ0.5m前後の周溝がめぐっている(第一—21図)。

5号墳の周りには6・7・8・14・15・16・17号墳の小規模な方墳が造られているが、奈良時代の瓦工房によって墳丘の大半が削平されていた。須恵器を含む古墳としては、8号墳でTK216型式^{註15}前後の須恵器杯蓋、7号墳ではTK208型式の把手付き鉢、18号墳からはハソウなどが出土している。

北支群の盟主墳は、墳丘直径約19mを測る円墳(1号墳)で、その周辺には9・10・11・12・13号墳が存在する。ただ、埴輪を樹立した可能性のある古墳は限られており、1号墳と9号墳のみである。1・9号墳の埴輪は、川西埴輪編年^{註16}のV期の特徴を備えたものであり、南支群のIV期の埴輪群とは様相を異にしている。

上人ヶ平古墳群及び上人ヶ平埴輪窯群(A支窯群・B支窯群を含む)の埴輪の特徴について、先述のように、伊賀高弘がA・B・C・Dの四類に分類して論述している。

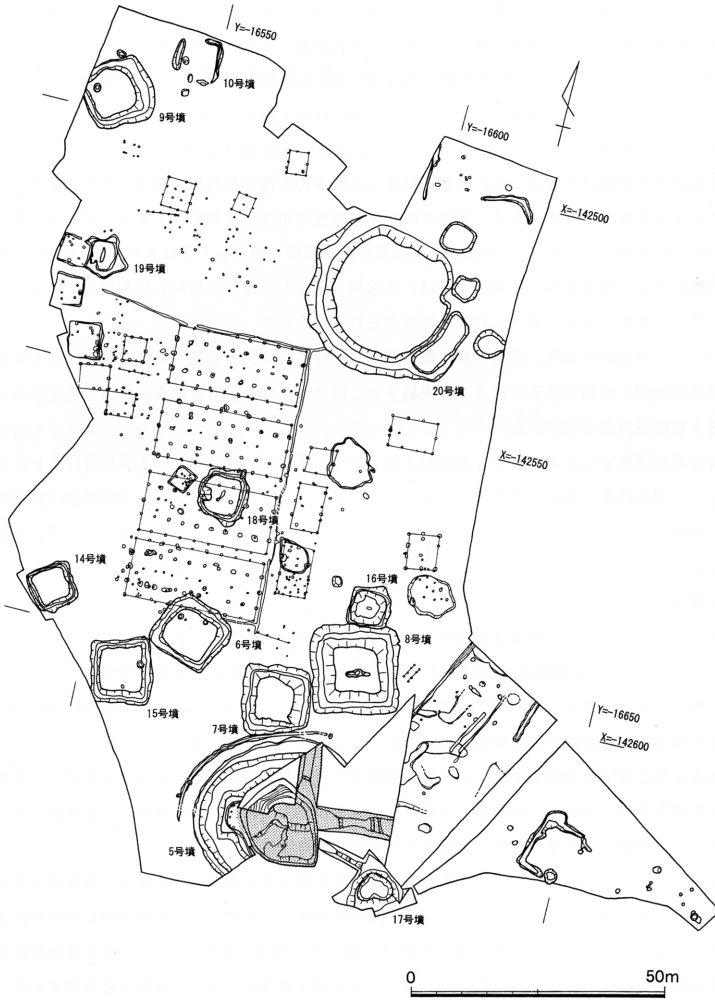
A類は、普通円筒埴輪の器高60〜70cm、底径25〜30cmで、タガ突帯が6条、タガ成形後の二次調整には連続的ヨコハケ(川西宏幸分類のB種ヨコハケ)を施したものである。

B類は、タガ成形後の二次調整に連続的ヨコハケを施すなどはA類と共通するが、普通円筒埴輪の器高50cm、底径17cmの小型品で、タガ突帯が三条を配するものである。

C類は、普通円筒埴輪の大きさ・タガの条数はB類と共通するが、製作技法がB類に比べて簡略・粗雑化したもので、タガ成形後の二次調整が省略されている。

D類は、普通円筒埴輪の大きさ・タガの条数はC類とかわらないが、C類よりもさらに簡略化されたものと分類している。なお、上人ヶ平古墳群における伊賀分類の普通円筒埴輪A・B類は川西埴輪編年のIV期で、上人ヶ平古墳群普通円筒埴輪C・D類は川西埴輪編年のV期に相当する。

第1節 ● 上人ヶ平埴輪窯群の概要



第一—13図 上人ヶ平古墳群 古墳配置図

四・円筒埴輪を中心とした埴輪の編年

朝顔形円筒埴輪を含む普通円筒埴輪は、形象埴輪に比べて小規模古墳でも使用される例が多く、その埴輪の編年作業については研究が進んでいる。

川西宏幸は、「円筒埴輪総論」において、円筒埴輪の成立から消滅にいたる期間を対象にⅠ期からⅤ期に分け、それぞれを製作技法の特徴を通じて論じている。

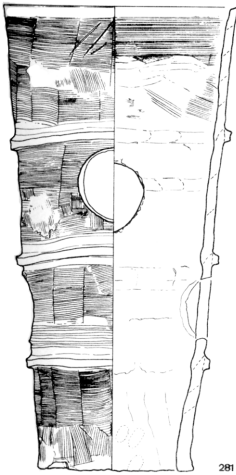
川西埴輪編年Ⅰ期は、定型化した円筒埴輪の多量配列が本格化する時期で、タテハケの外面調整が主体的となる。また、三角形・長方形などの透かし穴を施している。

川西埴輪編年Ⅱ期は、タガ接合以前の外面一次調整がタテハケのほかに、タガを貼り付けた後に、タガとタガの間を行う「二次調整」は、タテハケ・ナデのほかに、工具を「全周するあいだに、器面から工具が二回以上離れる」もので、「ハケ同士に切りあい」があるA種ヨコハケが出現する。透かし穴は三角形・逆三角形・方形・円形があり、変化に富む。また、鱧付き円筒・楕円円筒のものが出現する。鱧付き円筒埴輪は大和南部、山城南部での特徴としてあげられている。

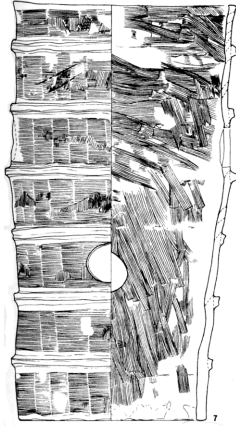
川西埴輪編年Ⅲ期は、外面一次調整はタテハケ、二次調整は「工具を器面上で止めながら施したようにみえるもの」で、「止めた際の工具痕が縦の条線となって残る」B種ヨコハケが一般化する。透かし穴は円形にほぼ画一する。タガは断面台形が主体となる。

川西埴輪編年Ⅳ期までは、埴輪焼成に窖窯を使用する前の解放窯段階で、川西埴輪編年Ⅳ期は須恵器焼成技術の導入により、埴輪焼成にも窖窯で焼成される段階で、これまでの黒斑を有する埴輪から無黒斑の埴輪が出現する。焼成方法を除けばⅣ期の円筒埴輪の基本的な特徴はⅢ期と同じである。

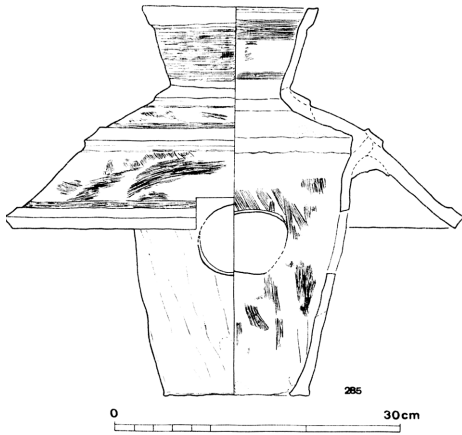
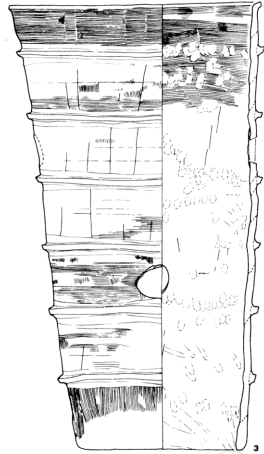
第1節 ● 上人ヶ平埴輪窯群の概要



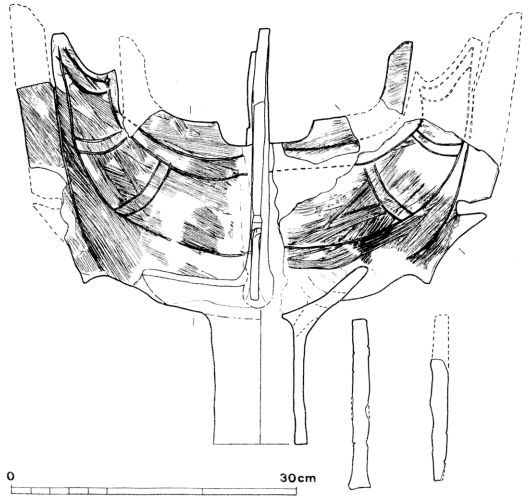
第一一 15 図 上人ヶ平古墳群 B類
普通円筒埴輪 (上人ヶ平 14号墳)



第一一 14 図 上人ヶ平古墳群 A類
普通円筒埴輪 (上人ヶ平 5号墳)



第一一 17 図 上人ヶ平 14号群出土
蓋形埴輪 (笠部分)



第一一 16 図 上人ヶ平 14号墳出土蓋形埴輪
(立ち飾り部分)

埴輪の焼成方法に窖窯を使用した初出の例として、古市・百舌鳥古墳群の応神陵古墳がある。応神陵古墳での窖窯による埴輪焼成を契機として、以後、埴輪焼成が窖窯に変化していったと思われる。

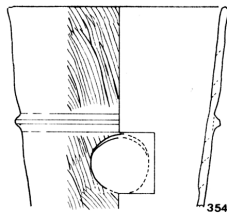
川西埴輪編年Ⅳ期は、外面二次調整にB種ヨコハケのほかに、「工具を器面上で止まらず、タガ間を一気に全周する」C種ヨコハケが出現する。これは須恵器成形に利用されたロクロを埴輪成形にも使用したものと推定されている。

川西埴輪編年Ⅴ期は、外面二次調整がなく、一次調整のタテハケ(まれにナデ・ケズリ)となるもので、円筒埴輪の小型化と二次調整の省略へと変化する。

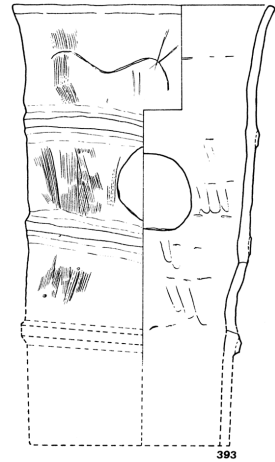
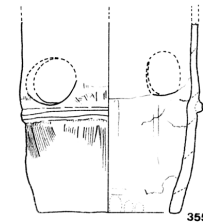
この川西埴輪編年を軸として、それぞれの地域で埴輪の検討が加えられているが、大局としては川西埴輪編年を踏襲、支持されている。

形象埴輪は、家形埴輪・動物埴輪・器財形埴輪・人物埴輪など多種あるが、それぞれの形象埴輪について出現期と消滅期などその消長変化が論じられている。

埴輪出現の初期の段階では鳥形埴輪があり、続いて家形埴輪が、その後、盾・鞞・蓋・甲冑形などの器財



第一一 19 図 上人ヶ平古墳群D類 普通
円筒埴輪 (上人ヶ平9号墳出土)



第一一 18 図 上人ヶ平B支群埴輪窯
灰原出土普通円筒埴輪

形埴輪が出現する。盾・蓋・靱・甲冑・鞆形などの威儀具や祭祀・武器を表現した形象埴輪は、佐紀地域の古墳築造を契機として生まれたと考えられている。

馬は弥生時代に飼育していた例はなく、中国・朝鮮半島との交流によって持ち込まれた動物であり、5世紀以降、乗馬の風習、馬具の副葬が行われる。この影響から馬形埴輪が生まれたもので、最古の馬形埴輪の例として応神陵古墳出土の資料が考えられている。

上人ヶ平古墳群・上人ヶ平埴輪窯群の埴輪資料を検討していくと、普通円筒埴輪の形態と調整技法、埴輪製品が窖窯焼成であること、形象埴輪に盾・蓋形などのほか、馬形埴輪が存在することがあげられる。

上人ヶ平古墳群の大半は、埋葬施設が削平されており副葬品の出土例が少ないが、時期を検討できる資料がある。

上人ヶ平7号墳の組合式木棺の北小口で、白色粘土で覆われた方形区画部分がある。その方形区画部分から柳葉式の鉄鏃2本、長頸篋被柳葉式の鉄鏃2本が出土した。7号墳の埋葬施設からは、これらの鉄器とともに陶邑TK208型式の把手付鉢が、また、周溝内からは陶邑TK208型式の須恵器樽形ハソウが出土している。8号墳には埋葬施設(組合式木棺)があり、その墓壇内で棺外の遺物床から鉄器類・土器類が出土している。鉄器類は長頸鏃17本、小型鉄斧・鉄鎌・鑿などがあり、土器類には陶邑TK216型式の須恵器杯蓋が出土している。

これらの出土遺物から、上人ヶ平古墳群の南支群は5世紀中頃で、窖窯焼成による埴輪生産の早い段階に位置づけられ、北支群は南支群に遅れて6世紀前半の時期に築造されたものと考えられる。

上人ヶ平古墳群と埴輪窯から出土した埴輪の特徴から、「畿内における前方後円墳の編年基準」^{注18}に従うと、上人ヶ平古墳群および埴輪窯群は、7期に相当し、埋葬施設等が明らかでない上人ヶ平5号墳とその古墳へ

埴輪を供給したと考えられる上人ヶ平埴輪窯A支群は6期に遡る可能性がある。

五、上人ヶ平古墳群での埴輪の樹立

上人ヶ平遺跡の古墳群で、埴輪樹立状況が明らかかなものとして上人ヶ平5号墳がある。上人ヶ平5号墳は、造り出し付き円墳（帆立貝形前方後円墳）で、全長26.4m、円丘部の直径23.2m、造り出しの幅9.0m、長さ5.0m、墳丘高3.5mを測る。墳丘を巡る形で上面幅約7.0m、深さ0.5mの周溝がめぐり、造り出し部では周溝がすばまる形になっている。

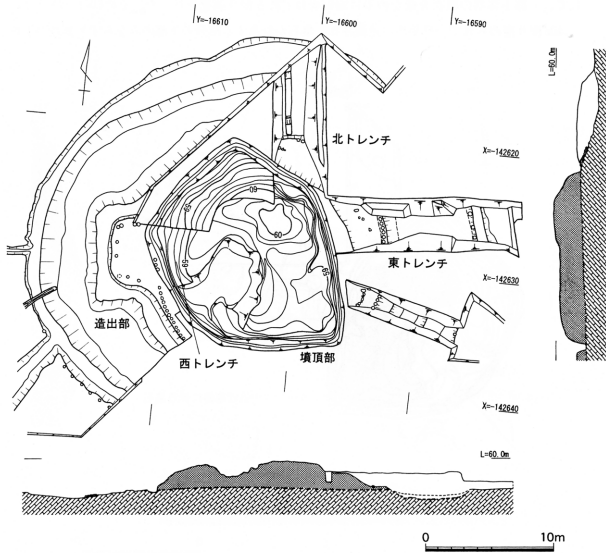
上人ヶ平5号墳は、墳丘の調査が実施された。^{注1)}この調査の結果、攪乱が大きくおよんでおり、墳頂部での埴輪の据え付け穴は確認できなかったが、埴輪片が散布しており、推定で72本の普通円筒埴輪が存在したことが想定されている。

墳丘の第一目テラスには、布掘りした溝に底部直径30cmの普通円筒埴輪と朝顔形埴輪（普通円筒五本に対して朝顔形円筒一本の割合）が隙間無く配置されていた。墳丘規模と埴輪の大きさから想定して168本の埴輪が巡っていたことになる。また、造り出し部も同様の埴輪配置で、26本の埴輪が樹立していたことが想定できる。

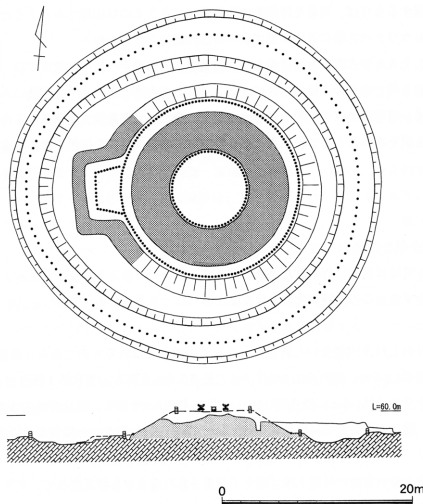
周溝の外周部分に、埴輪は約1m間隔（中心間の距離）で埴輪を据えた据え付け穴がある。そのことから72本の埴輪本数が想定できる。

このことから、上人ヶ平5号墳では392本の普通円筒（あるいは朝顔形埴輪）が圍繞したことが想定できる。また、墳頂部の埋葬施設を囲むように家・鳥・盾形などの形象埴輪を使用していたことが、発掘調査成果から想定されている。

第1節 ● 上人ヶ平埴輪窯群の概要



第一-20図 上人ヶ平5号墳 遺構図



第一-21図 上人ヶ平5号墳 墳丘復元図

上人ヶ平7・8・16・17号墳は、奈良時代の瓦工房によって墳丘の大半が削平されており、埴輪列の状況は不明である。7号墳で、仮に墳丘の一段目平坦面(埴輪部推定東西5.5m、南北6.0m)に隙間なく埴輪を並べた場合(埴輪規模からA類の小型吉品を想定)、80本の普通円筒埴輪が樹立していたことが想定できる。

同様に、埴輪平坦面が7.5mと想定される上人ヶ平8号墳では、一辺に25本で、総数98本の普通円筒埴輪を使用すると想定できる。16号墳は、埴輪部平坦面に一辺4.5mの方形区画が想定でき、南・北・東辺の中央部に蓋形埴輪を、西辺に家形埴輪を据えたと仮定して、24本の普通円筒埴輪の樹立が想定できる。17号墳は埴

丘を含めてその規模や埴輪が樹立されていたかどうか明確でないため、ここでは保留としておく。

上人ヶ平7・8・16・17号墳の4基の古墳に普通円筒埴輪を樹立した場合、総数202本の普通円筒埴輪が必要となる。この4基の古墳は小規模古墳であり、上人ヶ平5号墳のように伊賀分類A類の大型普通円筒埴輪ではなく、B類の小型円筒埴輪が使われたと考えられる。

伊賀分類B類の普通円筒埴輪を樹立した古墳として上人ヶ平14号墳がある。14号墳では、元位置を大きく移動することなく、墳丘から転落した状況で、蓋形埴輪1点、普通円筒埴輪1点が出土しており、他に円筒埴輪の細片が出土している。14号墳の墳丘上にも埴輪が樹立していたものと思われ、一辺に17本（一辺5mの区画）として、墳丘平坦面に総数64本の埴輪が樹立したことになる。仮に64本の埴輪を想定した場合、上人ヶ平埴輪窯1基で、1回の焼成回数でまかなうことができる本数となる。

C類の埴輪を樹立した古墳には6・15号墳がある。6号墳では、馬形埴輪が出土しているほかに、多くの普通円筒埴輪が細片となって出土しており、墳丘上に埴輪が圍繞していたことが明らかである。墳丘上部平坦面を東西7.0m・南北6.5mと仮定すると、88本の埴輪が樹立したと想定できる。15号墳は、墳頂部平坦面を一辺6.5mと仮定すると84本の普通円筒埴輪が樹立したことになる。6号墳の88本、15号墳の84本の合計172本の普通円筒埴輪をまかなうには、上人ヶ平埴輪窯1基で操業した場合には4回、2基の窯で操業した場合には2回の操業でまかなえる本数である。

D類の埴輪を使用した古墳としては1・9号墳がある。1号墳は、調査地対象外に墳丘の大半があり、埴輪の樹立状況が明らかでないが、墳丘頂部に埴輪列が樹立されていたものと思われる。墳丘頂部平坦面の直径を5mと仮定すると、普通円筒埴輪は64本圍繞することになる。一方、9号墳は方形で、墳丘頂部に一辺7m前後の平坦面があり、埴輪で区画されたものと仮定すると84本の埴輪が必要である。このことから、1・

9号墳で使用されたD類普通円筒埴輪は148本となる。

六・ 上人ヶ平古埴群からみた上人ヶ平埴輪窯の操業状況

伊賀高弘による普通円筒埴輪分類を元に、上人ヶ平A支群埴輪窯（瓦谷埴輪窯）とB支群（上人ヶ平埴輪窯）の窯内の床面資料をみると、上人ヶ平A支群埴輪窯では伊賀埴輪分類A・B類が主体となる。一方、上人ヶ平B支群埴輪窯では、窯操業時の床面では伊賀埴輪分類A類に近似した埴輪が出土しているが、最終操業時の床面では伊賀埴輪分類C・D類の埴輪が主体である。

このことから、上人ヶ平A支群埴輪窯で焼成された製品（埴輪）は、上人ヶ平古埴群の5・7・8・16・17号墳に供給され、上人ヶ平B支群埴輪窯で焼成された製品（埴輪）は、1・6・9・10・15号墳に供給するために造られた埴輪窯と思われる。

上人ヶ平5号墳の普通円筒埴輪は、底径20cmを測り、B種ヨコハケを主体としたA類である。上人ヶ平古埴群で使用されたA類の大型円筒埴輪は、上人ヶ平B支群埴輪窯でも出土している。ただ、その出土状況は焼成時の焼台として利用されたもので、主に伊賀埴輪分類のC・D類は上人ヶ平B支群の埴輪窯で焼成したものである。普通円筒埴輪A類は主に上人ヶ平A支群の埴輪窯で焼成されたと考えられる。

上人ヶ平A支群埴輪窯の1・2号窯で、5号墳の普通円筒埴輪総数約600本を焼成した場合、A支群1号埴輪窯の床面のスペースから45～50本、A支群2号埴輪窯で50本前後の普通円筒埴輪が焼成できるスペース（ただし、形象埴輪などが含まれた場合にはそのスペースはさらに狭くなる。）があり、2基の窯で6回以上の操業を繰り返して上人ヶ平5号墳の埴輪が供給できることとなる。

上人ヶ平B支群埴輪窯では3基の窯があり、B支群3号窯が古く、2号窯、1号窯へと変遷することが、

灰原の堆積状況から考えられるが、仮にA類の埴輪を焼成した場合、3基の窯を1回焼成すると、上人ヶ平7・8・16・17号墳に並べる普通円筒埴輪をまかなうことができることになる。

上人ヶ平古墳群の北支群にある1・9号墳の埴輪は前述のように、伊賀埴輪分類のD類の普通円筒埴輪であり、D類の埴輪は、上人ヶ平埴輪窯B支群の3基の埴輪窯を併用して焼成すると2回の操業で埴輪をまかなうことが可能となる。

上人ヶ平A・B支群埴輪窯の窯体内、および灰原から出土する埴輪の観察によつて、その焼成した埴輪と埴輪を樹立した古墳との状況を復原すると、5号墳のA類の大型埴輪は上人ヶ平A支群埴輪窯が主体となる窯で焼成され、その操業回数は2基から3回の操業となる。

上人ヶ平南支群の7・8・16・17号墳の普通円筒埴輪のうち、B類普通円筒埴輪は上人ヶ平A支群埴輪窯とは違った上人ヶ平B支群埴輪窯で焼成され、その操業回数は1回から数回の焼成で供給可能となる。

上人ヶ平北支群の1・6・9・10・15号墳は、上人ヶ平B支群埴輪窯で、数回の操業で焼成したことが想定できる。

ただ、この操業回数は上人ヶ平古墳群で出土した馬・家・蓋・盾・鳥形などの形象埴輪は含まれておらず、本来は、普通円筒埴輪とともに形象埴輪も同時に焼成していたものと思われる。普通円筒埴輪と形象埴輪を分けて焼成したと想定されている埴輪窯として高槻市新池埴輪窯^{注10}がある。上人ヶ平A・B支群埴輪窯では、窯体内から普通円筒埴輪とともに家・盾・馬形の形象埴輪も存在しており、普通円筒埴輪と形象埴輪を同時に焼成したものと思われる。

第二節 埴輪窯について

一、これまでの埴輪窯研究

ここでは、奈良山丘陵で検出した上人ヶ平埴輪窯群を通じて、埴輪生産の様相を検討していきたい。

古墳時代研究には、古墳の造営・分布・規模を通じた首長権の系譜、地域性、個別遺物の変遷など数多くの論考があるが、埴輪窯からみた分業体制、專業集團の動向などを論じた資料はさほど多くない。その中で、昭和五年、森本六爾による「埴輪の製作所址及窯址」^{注11}が先駆としてある。

森本六爾は、武蔵國荏原郡調布村大字下沼部小字堀廻の埴輪製造址で、下底及び側壁を打ち固めた、埴輪片が押しつぶされた状態で出土した埴輪製造址を検出した。また、埴輪製造址に近接して造られた土師器製作址と思われる土坑を紹介している。森本六爾は、埴輪製作工人が專業的な階級集團で、家族的な小人数で埴輪生産が行われていたこと、古墳の被葬者と埴輪工人の階層差を対比させて言及しており、埴輪生産遺跡を考える上での方向性を示した。

森本六爾の論考以降、埴輪窯の調査は関東地方を中心に進められた。昭和四〇年、埴輪製作の一連の工程が推定できる良好な遺跡として、馬渡遺跡の埴輪窯の調査が明治大学^{注12}によって行われ、埴輪生産の実態が明らかとなった。

馬渡遺跡の埴輪窯では、埴輪窯と埴輪工房址、工人の住居、粘土採掘穴と埴輪製作場所、埴輪捨て場など埴輪生産に係わる一連の作業工程が確認されている。その出土遺物から、供給された古墳の追求とともに、馬渡遺跡の埴輪製作に従事した人々を「專業的な工人」と位置づけている。埴輪製作を葬送に係る仕事

と意義づけ、凶事にかかわる工人の性格と宗教的・祭祀的な側面をもっている^{注13}と意義づけた。

埴輪製作遺跡の論考とともに埴輪研究を大きく飛躍させたのが川西宏幸の一連の論考である^{注13}。

川西宏幸は「円筒埴輪総論」で、円筒埴輪のタガを付ける以前の調整を第一次調整、タガをつけた後の調整を第二次調整とし、その調整方法やタガの形状、焼成方法などからⅠ～Ⅴ期に細分し、全国的な視野で埴輪の編年をおこなった。このなかで、埴輪編年のⅢ期とⅣ期をわける基準として、黒斑の有無から推定できる窖窯での焼成と位置づけ、埴輪焼成に窖窯が導入されて以後をⅣ期と位置づけた。また、川西宏幸は「中期畿内政権論」で埴輪生産を土師器生産から分岐し、須恵器技術の導入以後、窖窯焼成法を埴輪焼成に導入し、土師器生産とも須恵器生産とも違う独自の技法体系をそなえた窯業生産の一分野として確立したと位置づけた。

一九八〇年代、川西宏幸の体系によって埴輪研究は進み、古墳の検討を論じたものが多くなるが、埴輪生産遺跡を論じた論考は少なかった。そのなかで、今回報告する京都府木津川市上人ヶ平埴輪窯群、高槻市新池埴輪窯、奈良市菅原東埴輪窯^{注14}の調査が一九九〇年を前後する時期に行われ、近畿地方における埴輪窯の様相も明らかとなってきた。

近畿地方での埴輪窯の調査が進むとともに、調査成果をもとにした森田克行・鐘方正樹の検討とともに、埴輪生産の論考として高橋克壽の「埴輪製作の展開」がある。

高橋克壽は、大型古墳と中小の各古墳での、古墳に並べられた埴輪の種類^{注15}の差異などから、埴輪生産組織と埴輪の供給体制を明らかにした意欲的な論文である。5世紀の中尾古墳、宮山古墳の分析から大型古墳と中小の各古墳の埴輪生産が別々の集団でおこなわれ、5世紀中頃の窖窯の導入以後、大型古墳と中小の各古墳の埴輪の使い分けが解消に向かい、6世紀を生産拠点から広範囲に、その地域に継続的に埴輪を供給した

生産組織の定着段階と位置づけた。

これら先学の論考をもとに上人ヶ平埴輪窯群を検討していきたい。

京都府内で発掘調査が行われた埴輪窯は、上人ヶ平埴輪窯群・宇治市西隼上り遺跡^{注15}の二例の調査例があるのみで、京都府内での比較検討が難しいため、西日本・東日本での埴輪窯の比較から上人ヶ平埴輪窯群を検討していきたい。

埴輪窯は、笠井敏光^{注16}によると八六遺跡、森田克行^{注17}によると近畿以西で三八遺跡、八四基以上で、静岡県以東の東国では関東地方での調査例が大半である。ただ、埴輪をもつ大規模古墳の多くは、近畿地方に集中する傾向にあり、大阪府野々上埴輪窯などのように大規模古墳（仁賢陵古墳）の外堤から、今後検出される可能性が考えられるとともに、高槻市新池埴輪窯のような大規模な埴輪工房が、近畿地方でみつかると可能性が高い。

二．埴輪窯の平面構造

埴輪窯は、平場における野焼きを想像させる解放窯と須恵器窯の導入を契機として採用された窖窯がある。窖窯は、トンネル状に丘陵をくり抜いた地下式と丘陵斜面を溝状に掘ったのち、スサ入り粘土で天井部を構築する半地下式窖窯がある。この地下式と半地下式の構築方法の差異には、築窯された地山土の性質が考えられる。これは各報告書で築窯時の丘陵の性質（洪積層かどうか等）の記載が少なく、また私自身も埴輪窯の検出地点に立った例が少ないため明らかにはしたが、トンネル状に掘り込むことに地山土が耐えうる地質かどうかの問題となる。上人ヶ平A支群3号埴輪窯のように焼成前に陥没した例もあり、天井部が陥没しやすい土質であれば地下式窖窯には適さない。この地山土の性質とともに考えられるのが時期的変化であ

る。

5世紀後半に築かれた埴輪窯の調査例が少ないが、5世紀後半に築かれた福岡県立山山窯1・2号窯、京都府上人ヶ平埴輪窯が地下式構造である。6世紀以降では、地下式構造と半地下式構造の窖窯が併存する群馬県出生塚窯跡群などあるが、その多くは半地下式の窯体構造である。

同一丘陵斜面に5世紀中頃から6世紀初頭(川西編年のⅣ期からⅤ期の埴輪)にかけて18基の埴輪窯を検出した高槻市新池埴輪窯では、Ⅳ期(新池埴輪窯のA期)の1～3号窯は地下式構造であるのに対して、時期が新しくなるⅤ期の埴輪窯(新池埴輪窯のB・C期)は半地下式構造である。

これは従来の解放窯で造られた土師質の堅さと色調を踏襲するために、当初は地下式構造の窖窯を採用したが、土師質の堅さと色調を踏襲する必要がなくなったことから半地下式構造に変化したこと。また、窖窯による埴輪生産が定着するとともに、須恵器焼成の窯工人が深く係わったため、半地下式構造の窖窯に変化した可能性がある。

埴輪窯の平面形態には地域差が顕著である。近畿・東海以西では、「うなぎの寝床」ともいわれるように、全長5～10m・幅2m未満の細長い平面形態のものが多く、灰原は焚口部から扇形に広がるものが大半である。一方、近畿以東、特に関東地方では近畿以西とは異なった形態のものがある。塩野博の分類^{注18}によると、

- ①「焚口と灰原のプランが隅丸方形を呈し、その長さが焼成部とほぼ同じ」(馬室タイプ)
 ②「灰原部が燃焼部とほぼ直線的に直結し、袋状に浅く掘り込まれており、焚口部との区別が認められない」(公津原タイプ)

- ③「灰原が長方形プランを呈する」(富沢タイプ)

- ④「灰原が扇形に広がる」(馬渡タイプ)の4タイプに分かれる。

萩原恭一^{注19}は、塩野の形態分類に加えて、「焼成部が弾頭形のもの」と方形を示すもの、「江南権現山1号窯のように」3の部屋に区別される」窯体構造のものを含めている。

近畿・東海以西の埴輪窯が比較的統一された窯体構造に対して、東海以東、特に関東地方では数タイプの窯体構造に分かれる。

これは、丘陵の比較的急な斜面が埴輪窯の立地条件として確保できる地域と関東地方、特に出生塚埴輪窯群に代表されるような、丘陵とはいいがたい台地のなだらかな斜面に造らざるを得なかったという立地・自然条件に差異があったと考えられる。また、近畿・東海以西では埴輪生産のための專業窯、あるいは須恵器を併用して焼成する窯であるのに対し、東海以東では土師器と併用して焼く例が多く、須恵器生産工人が関与したものと土師器生産工人が関与したものととの差異であるのかもしれない。

三．埴輪窯の実態

平成一三年段階で、森田克行^{注20}の調べによると、埴輪窯の検出例は近畿地方以西で38遺跡、84基以上、そのうち24遺跡、73基が近畿に偏在していると記されているが、平成一三年以後、関東地域では生出塚遺跡などで数多くの発掘調査例が増加している。

埴輪窯は、瓦窯のように焼成部床面は有階・有段のものではなく、無階・無段である。床面が無段では製品である埴輪を立て並べることが困難である。そのために生製品の底部と床面の間に埴輪片を入れ、製品を立てやすくしている。

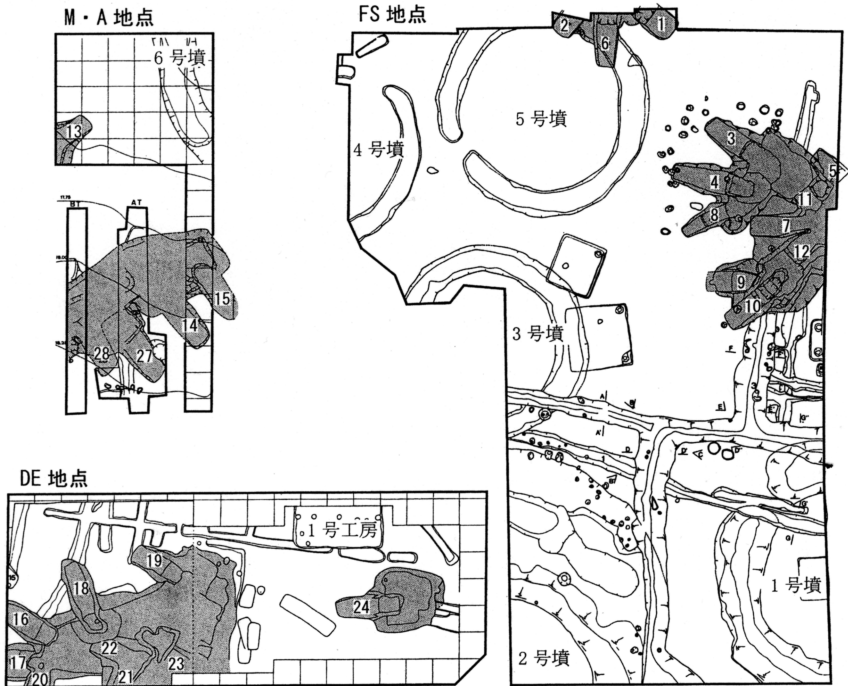
上人ヶ平A支群2号埴輪窯では、窯の主軸に直交するように、埴輪片を焼成部床面に階段状に並べている。同様のものには高槻市新池埴輪窯、唐沢山ゴルフ場埴輪窯跡などがある。福岡県立山山窯1号窯^{注21}では側壁に

近い部分に円筒埴輪の基底部をつなげて「入れ子」状に並べている例もある。また、床面の全面に埴輪片を厚く敷き詰めている例として大阪府日置荘埴輪窯^{注12}がある。

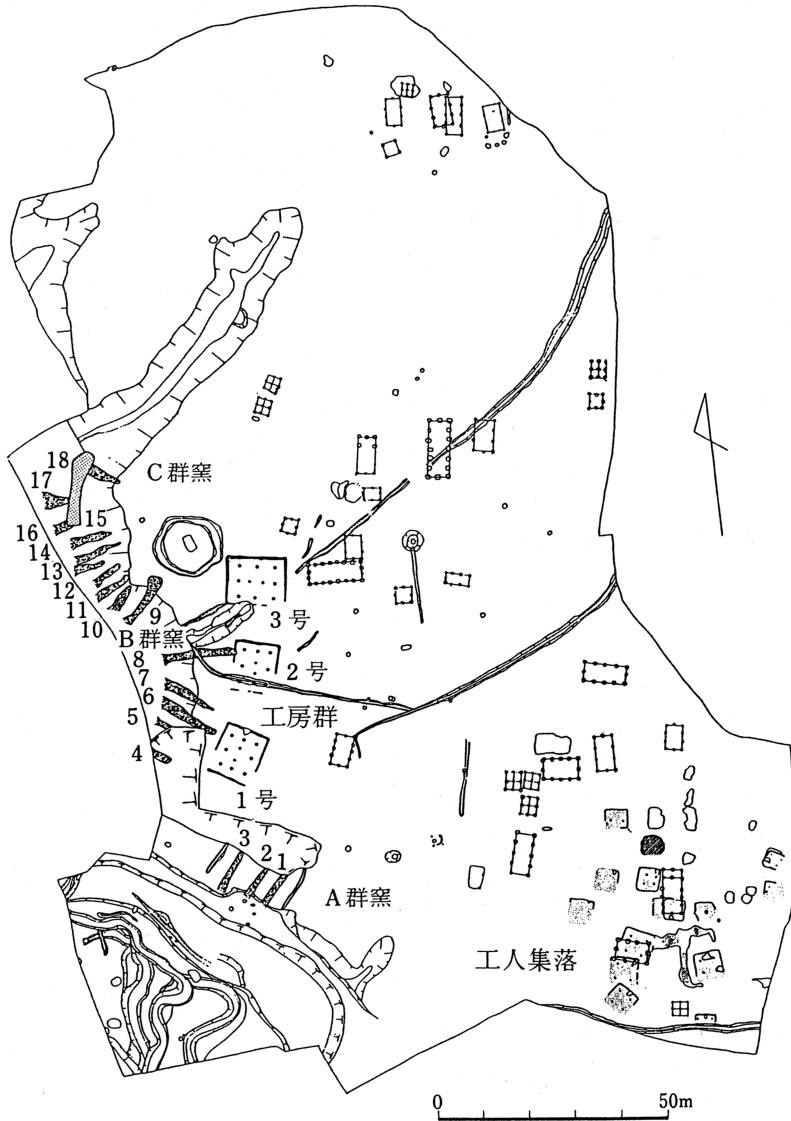
煙道部は、焼成部幅に比べて狭くなっており、焼成部内に火が籠もるように造られている場合が多い。上人ヶ平A支群2号埴輪窯では、焼成部端から煙道部にかけて直径17cm、高さ24cmの特製円筒埴輪を設けて火の引きを調整しているものがある。

焼成部床面は2〜3回の床上げを行っている例が多く、6回も床面の高上げをおこなった例（大阪府野々上1号窯・馬渡2号埴輪窯）もある。

埴輪窯は、数基の窯が近接して築かれる例が多い。大阪府誉田白鳥埴輪窯^{注13}は埴輪窯の全容解明までにはいたって



第一-22図 埼玉県生田塚埴輪窯平面図



第一一-23 図 大阪府高槻市新池埴輪窯 遺構図

いないが、11基以上の窯が近接して築かれている。

高槻市新池埴輪窯では、3基(A期)を一ユニットとして構築されたと考えられている。上人ヶ平埴輪窯群でも同じ基数である。一方、時期が新しくなる新池埴輪窯のC期では11基を単位としており、供給先の様相、工人組織の整備によって変化しているものと思われる。

関東では同時期に操業していたのかどうかは明らかでないが、茨城県小幡北山埴輪製作遺跡の59基以上、埼玉県割山遺跡の20基、同生出塚埴輪窯跡の31基などがある。

この埴輪窯の基数も窯体構造の差異と同様、東海以西と以东では差異がある。

東海以西では上人ヶ平埴輪窯群、新池埴輪窯などのように、基数を単位として窯が数mの間隔で整然と築かれている例が多く、窯本体が重複する例は少ない。一方、関東地方、特に埼玉県では、生出塚埴輪窯(第一―22図)に代表されるように狭い範囲に2―5基の埴輪窯が重複してあり、古い窯を壊すかあるいはその一部を利用して新たに築いている。このため、最終調査後の平面形態は、基数の窯が重複し、あたかも「ヤツデ」のような形となるものが多い。

山崎武の指摘^{注24)}によると、生出塚遺跡の埴輪窯では、ゆるい傾斜地に窯を構築せざるを得ないため、窯本体よりも灰層の搬出に大きな労力を必要とする。このため、窯本体の掘り込み、あるいは前庭部の掘り込みを当初より深く、広く掘る傾向にあり、前庭部の掘り込みを共有するように当初から計画されていた可能性があること。そのため最終の発掘調査結果として「ヤツデ」のような形になったものとなる。

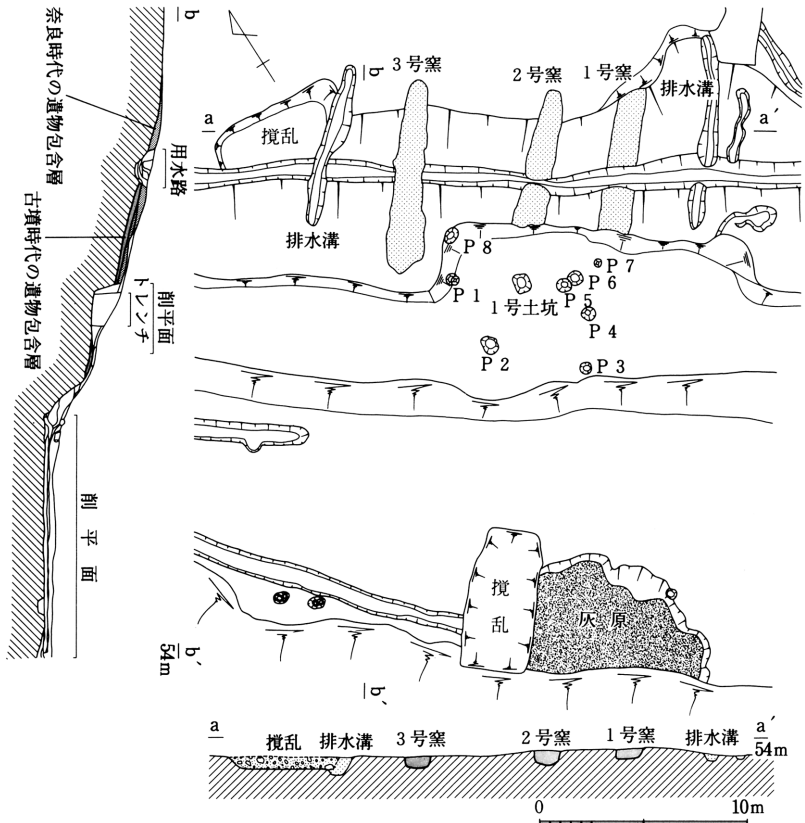
なお、出生塚遺跡の埴輪窯では、「ヤツデ」状の埴輪窯とともに、西日本でみられるような埴輪窯も築かれている。

埴輪窯の焼成では、福岡県立山山窯・島根県平所遺跡・大阪府野々上1号窯・京都府上人ヶ平埴輪窯群

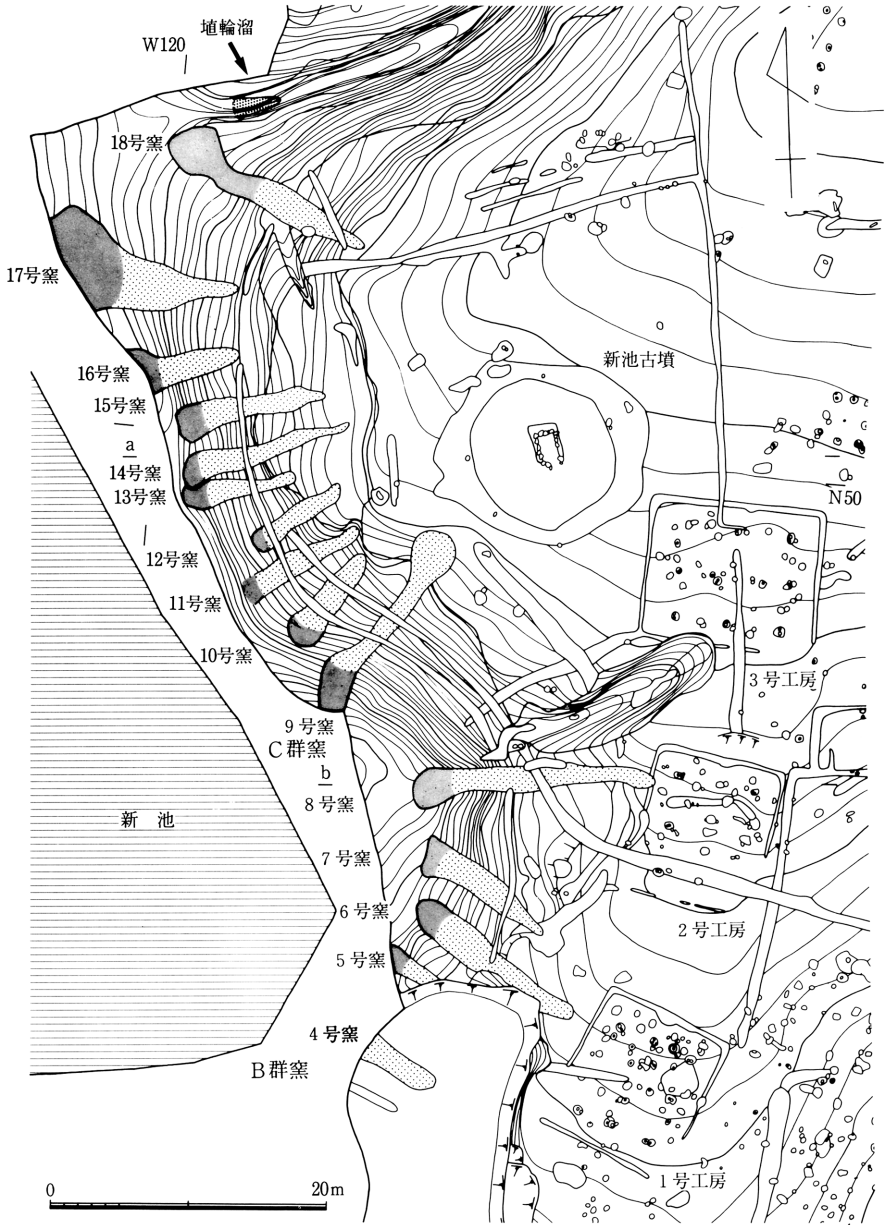
などで、また、東海以西でも埴輪専門窯が多いが、和歌山県砂羅谷窯・兵庫県波野丸窯では埴輪とともに須恵器を焼成した窯が、また、愛知県・三重県では須恵器窯の中に一部埴輪を焼成している例がある。須恵器生産集団の管理地内での埴輪生産と位置づけられているものもある。関東地方では土師器(鬼高期)が相伴遺物として出土する例が多い。

四・埴輪製作工房の様子

埴輪生産には埴輪窯とともに埴輪の成形に係わる工房・工人の住まい・粘土の採掘穴などが必要である。上人ヶ平遺跡では、竪穴建物が一五棟、掘立柱建物



第一—24図 高槻市新池埴輪窯A群平面図



第一-25図 高槻市新池埴輪窯B・C群平面図

六棟が奈良時代以前の遺構としてある。

竪穴建物の分布状況を見ると、台地の南西方向から北東方向にのびる主尾根に、弥生時代後期の竪穴建物が一棟、台地中央部の北西部分に四棟の竪穴建物、台地東端で南北方向に延びる尾根に一一棟の竪穴建物がある。

一五棟の竪穴建物のうち、一棟(SH101)は弥生時代後期、他の一四棟は古墳時代前期として報告書では位置づけた。報告書刊行以後、遺物を再度検討していくと、古墳時代前期はSH102、古墳時代中期(須恵器出現以前)はSH103、SH121、SH122、SH124、SH133、掘立柱建物SB106がある。他の竪穴建物では土師器細片が出土しているのみで、時期決定の資料に欠けるが、上人ヶ平埴輪窯が操業していた時期と併行する時期の可能性がある竪穴建物としては、主にI支群の竪穴建物群であり、埴輪工人の住まいであった可能性が高い。

前述のように上人ヶ平古墳群では、埋葬施設や周溝内からは、TK216・TK208型式の須恵器が出土している。一方、この竪穴建物群からは須恵器の出土はないが、土師器高杯・壺の特徴からTK216・TK208型式の須恵器と共伴する時期のもので、埴輪窯が操業した時期に造られた竪穴建物と考えられる。この竪穴建物のなかで、SH101は床面に柱が存在せず、掘り込みを囲むように方形に区画された溝がめぐる住居である。この方形の掘り込みからはロクロピットや粘土貯め穴などは存在しないが、埴輪窯に関連した工房と考えることができ、工房は四基の竪穴建物で構成されていたことがわかる。

この竪穴建物を埴輪工人の住まいと考えると、工房が立地する丘陵上部平坦面で埴輪の成形作業をおこなう、その対岸の上人ヶ平A支群や同一丘陵斜面の上人ヶ平B支群の埴輪窯で埴輪を焼成したものと思われる。埴輪窯に関連した工房跡の調査例として、群馬県本郷埴輪窯跡・茨城県馬渡埴輪製作跡などがある。その

調査例からは一般集落と同様、小規模な竪穴建物内で行われていたと考えられていた。ところが、高槻市新池埴輪窯では、埴輪窯が立地する丘陵の上位平坦面に一辺12.8m×10.7mを測る大形竪穴建物が三棟あり、一般住居とは異なった工房が存在することが明らかとなった。

新池埴輪窯の三棟の大形竪穴建物では、10本の柱で屋根を支え、床面には埴輪を成形するための粘土穴と作業用のピット等が検出されている。群馬県太田市駒形神社埴輪窯跡では工房跡はみつからないが、焼成された製品(埴輪)を、一旦保管しておく埴輪集積場を検出している。京都府内でも、上人ヶ平埴輪窯群よりは新しい時期(川西編年Ⅴ期、6世紀前半)の埴輪を多量に出土した京都府木津川市弓田遺跡^{註125}がある。弓田遺跡でも埴輪集積場所と思われる遺構が検出されている。

五. 上人ヶ平埴輪群の築窯契機

奈良山丘陵周辺では、佐紀盾列古墳群が4世紀以降順次築造される。それらの古墳に使われた多量の埴輪を焼成した遺跡(焼成遺構)は明確ではないが、近接した位置でみつかった埴輪の焼成遺構として、平城宮東院下層1号窯^{註126}(Ⅲ期)がある。この平城宮東院下層1号窯に続く埴輪窯として上人ヶ平遺跡の埴輪窯がある。平城宮東院下層1号窯の埴輪窯は、平場における野焼きを想像させる普通円筒埴輪Ⅱ期の「解放窯」である。一方、上人ヶ平埴輪窯は、須恵器生産技術の導入を契機として採用された「窖窯」である。この窖窯の導入時期については、伝心神陵古墳の埴輪の中に窖窯焼成で作られた埴輪が出土していることから、5世紀中頃には畿内を中心に、窖窯による埴輪焼成が始まったと考えられている。

この奈良山丘陵では、埴輪窯に先行する時期の須恵器窯がなく、埴輪製作・焼成に際して須恵器工人の関与は希薄である。

森田克行^{注17}によると、土師器工人による埴輪生産と須恵器集団の管理地での埴輪生産があると指摘されている。一方、上人ヶ平A支群埴輪窯は、土師器の焼成仕上がりを意識したような土師質の埴輪であり、灰色の須恵質の埴輪は見られない。これは祭祀の道具でもある土師器を意識して埴輪を焼成したものであり、時期が新しくなると土師質を意識することなく、須恵質のものや焼き歪んだものでさえ埴輪として利用でき、須恵器工人の関与した埴輪へと変化したことが考えられる。上人ヶ平埴輪窯は、須恵器工人の管理地での埴輪生産に先行する土師器工人が深く係わった埴輪窯と考えている。

上人ヶ平埴輪窯群の成立には、土師器工人との密接な関与があると想像しているが、この埴輪窯群に先行する遺跡として、上人ヶ平A支群埴輪窯とは同一丘陵あるいは北の谷を挟んだ丘陵に造られた瓦谷古墳群^{注128}がある。瓦谷古墳群は、瓦谷1号墳(全長51m、前方後円墳)を盟主墳とし、小規模の方墳八基、円墳一基からなる古墳群であり、古墳の周辺には二六基の埴輪棺が点在している。各古墳・埴輪棺には上人ヶ平古墳群と同様、円筒埴輪のほか、多種の形象埴輪が使われている。

瓦谷1号墳の墳丘は、前方部の大半が後世に削平されていたが、後円部は墳丘が削平されることなく残っており、その後円部からは中心埋葬施設とともに、埴輪棺が存在した。埴輪棺S.X01で使用された埴輪は、伝日葉酢媛陵(佐紀陵山古墳)と同じタイプの蓋形埴輪であり、墳丘規模や中心埋葬施設の様子から考えると不釣り合いな大型の蓋形埴輪を使用しているのが特徴である。伝日葉酢媛陵(佐紀陵山古墳)に使用された埴輪を一部使用して埴輪棺に転用したものと考えており、佐紀盾列古墳群の埴輪生産に係わった集団の古墳として瓦谷古墳群が造られたと考えたい。

上人ヶ平古墳群も瓦谷古墳群と同様、佐紀盾列古墳群に関わった埴輪工人に関連した被葬者と考えており、古墳規模に比して大型古墳で使用するかのような円筒埴輪や多彩な形象埴輪を使用することができたと考え

ている。また、佐紀盾列古墳群での埴輪焼成における解放窯から管窯への転換は、ウワナベ古墳^{注129}の造墓作業を契機として、多量の埴輪を必要とするために、これまでの野焼きによる埴輪生産から、須恵器工人による窯の技術を採用して、新たに導入した埴輪窯を採用したものとと思われる。

瓦谷古墳群の造営時期は、瓦谷1号墳の副葬品と墳丘に使用された埴輪、1号墳の周辺に造られた埴輪棺の特徴から、古墳時代前期（4世紀後葉～5世紀前半）にかけて順次築造されたもので、上人ヶ平古墳群に繋がる古墳群（主に川西編年のⅡ期で、一部Ⅲ期を含む）である。

瓦谷古墳群の埴輪は、高橋克壽^{注130}によると「斉一的な鱗付埴輪円筒」である。瓦谷古墳群が中・小規模の古墳群であるにも係わらず、奈良市伝日葉酢媛陵（佐紀陵山古墳）・同マエ塚古墳などに類似した蓋形埴輪や盾形埴輪など、多彩な形象埴輪を含んでおり、埴輪棺でも形象埴輪を多用していることから、大和北部の佐紀盾列古墳群との密接な関係が考えられる。

斉一的な鱗付埴輪円筒、蓋・盾・甲冑・鞞形などの器財形埴輪の確立は、高橋克壽によると「大和北部勢力の手によって創られた」と考えられており、その一翼を担った集団に関連した古墳として瓦谷古墳群があったと考えられる。

瓦谷古墳群では、二六基の埴輪棺を検出している。4世紀後葉で、前方後円墳とともに墳丘あるいはその周辺に埴輪棺が点在する例として長野県森將軍塚古墳、京都府作り山古墳などがある。

これら古墳に伴う埴輪棺に埋葬された人々を、そのまま埴輪工人と位置付けることはむずかしいが、瓦谷古墳群の場合、大和佐紀盾列古墳群という大型古墳群に近接して瓦谷古墳群が位置すること、斉一的な形象埴輪を埴輪棺として利用していること、小規模な古墳に使用するにはやや不釣り合いな、精美で大型な蓋形・盾形などの形象埴輪を使用していることが瓦谷古墳群の特徴としてあげられる。

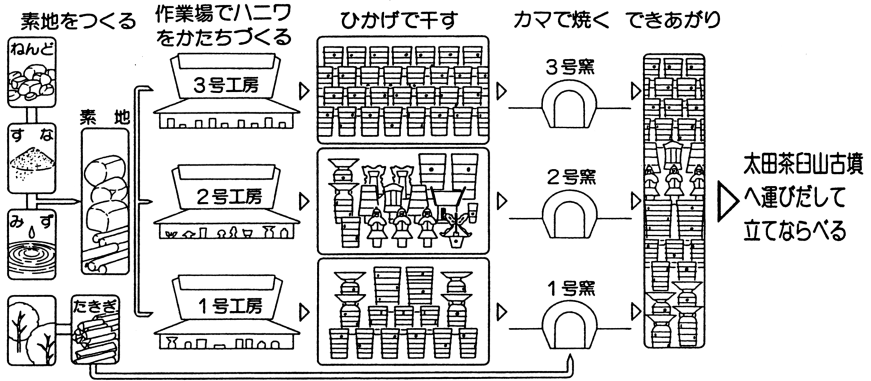
高橋克壽がいう「齊一的な埴輪」を作り出した大和北部勢力の一翼を担った埴輪工人が存在し、佐紀陵山古墳と瓦谷古墳群との埴輪の類似性からその工人を統括した集団に関連した古墳として、瓦谷古墳群が存在したものと思われる。

大型前方後円墳であるウワナベ古墳の造墓を契機として、埴輪製作体制を再編するとともに、伝心神陵の造墓で採用された窖窯焼成による埴輪生産を採用し、土師器工人が須恵器の焼成技術を採用して埴輪を焼成したものと思われる。大和佐紀盾列古墳のなかのウワナベ古墳と上人ヶ平5号墳のA類の普通円筒埴輪を比較した場合、口縁部の立ち上がりがタガとタガの間隔よりも狭い(短い)傾向にあり、口縁端部を折り曲げているという特徴があり、埴輪の規格・大きさは異なるが、技法の類似性が窺える。

ウワナベ古墳は総長325m、墳長約270mを測る、大和盆地北部の佐紀古墳群のなかでは最後の大形前方後円墳に位置づけられている。ウワナベ古墳の墳丘の大半は陵墓のためその詳細については判然としないが、ゴーランド^{注131}による埴輪列の存在が明治年間に知られていた。昭和四五年に奈良国立文化財研究所によって東側外堤部分及び前方部前面の外堤部分の発掘調査^{注132}がおこなわれ、外堤に二条の埴輪列が並んでいたこと、西側造り出し部からはTK216型式の須恵器が確認された。また、昭和四八年には、奈良県橿原考古学研究所^{注133}によって外堤西側でも埴輪列を検出するとともに、その外側に落ち込みがあり、二重の堀を有することが確認されている。

これらの調査からウワナベ古墳は、幅50cm・深さ10cmの布握りした溝に、約45cm間隔で、円筒埴輪が並ぶ埴輪列が存在することが明らかとなっている。埴輪列に使用する円筒埴輪は基底部のみで、最小の埴輪底部は28.6cm、最大は36.2cmを測る。

上人ヶ平5号墳を含めた上人ヶ平A類の普通円筒埴輪(底径25～30cm)は、ウワナベ古墳の中では小型埴



第一-26図 新池埴輪窯 窯システム図 (拠『継体天皇と今城塚古墳』)

輪に属するものである。ただ、ウワナベ古墳では古い様式に含まれる鱈付円筒埴輪が存在していたが、上人ヶ平5号墳では鱈付円筒埴輪が含まれておらず、上人ヶ平5号墳がウワナベ古墳よりも、その埴輪の特徴から新しい傾向にあることが考えられる。埴輪の規格・規模はウワナベ古墳と上人ヶ平古墳では異なるが、形態・調整方法など共通した点が多く、ウワナベ古墳との関連で上人ヶ平古墳群を検討する必要がある。

ゴランドによる試算では、ウワナベ古墳で使用された埴輪の個数を四七四〇個以上と推定しているが、昭和四五年・四八年の調査によって二重の堀が存在することから、一万個以上の埴輪が使用されたと推定できる。

上人ヶ平古墳群とはその規模が異なるが、大阪府藤井寺市津堂城山古墳では、大型円筒埴輪は内堤の一角という特定の箇所少量出土、中型円筒埴輪は墳丘や堤のいたるところから出土するという調査成果があり、墳丘・外堤などで埴輪の大小を使い分けていた事例がある。津堂城山古墳以降、古墳の格差が円筒埴輪の形式にまで貫徹されているとの指摘がある。

ウワナベ古墳の埴輪生産に従事した工人の一部が、ウワナベ古墳の造墓以後、上人ヶ平古墳群の造墓にあたり、上人ヶ平埴輪窯

群を築窯した可能性が高いと考えられる。ただ、ウワナベ古墳に代表される埴輪生産集団は、次に造られる大型古墳の造墓のために移動し、その一部の集団が上人ヶ平古墳・埴輪窯群にとどまり、上人ヶ平古墳群の造墓に関わったものと思われる。

六・新池埴輪窯との比較

上人ヶ平埴輪窯群が5世紀後半に、佐紀盾列古墳群を含めて埴輪生産を契機として、その一角に造られている時期、高槻市三島古墳群の一角に新池埴輪窯が造られる。

新池埴輪窯は、大型前方後円墳である太田茶臼山古墳（現継体陵）へ供給することを主な目的として造られた埴輪窯群であり、半環状に取り巻く1本の排水溝によって三基の窯が造られている。出土する埴輪の特徴（川西編年のⅣ期）から三基の半地下式窖窯が同時に操業していたことが確認されている。

全長26mを測る大型の前方後円墳である太田茶臼山古墳に並べるための埴輪の総量から推定して新池埴輪窯の三基の窯ではまかないきれないため、周辺あるいは別地点でも埴輪窯が存在したものと思われるが、上人ヶ平遺跡群のように三基の窯を一ユニットとして窯が築かれている。

新池埴輪窯では、新池埴輪A期に続く新池埴輪B期（川西編年のⅣ期）には4号～8号の五基の埴輪窯が、新池埴輪窯A期のような排水溝で区画されることなく築かれている。この新池埴輪窯B期の埴輪の供給先が三島古墳群（土保山古墳ほか）に限らず他の地域にも供給され、さらに新池埴輪窯C期には今城塚古墳のほか、奈良県天理市西山塚古墳、兵庫県神戸市天王山3号墳など淀川水系を介して広範囲に埴輪が供給されている。

新池埴輪窯は供給先が広範囲で、長期に亘って埴輪生産をおこなっているのに対して上人ヶ平埴輪窯群は短期間で、その供給先は、ウワナベ古墳を含めた佐紀盾列古墳群などの限られた範囲に供給された可能性も

ある。中・小規模の首長墓の古墳の造営に係わる埴輪窯、埴輪工人が上人ヶ平埴輪窯群であるのに対して、新池埴輪窯は「王権直属の埴輪製造所」の違いが見て取れる。

新池埴輪窯のA期の三基の埴輪窯の内容を分析した森田克行によると、新池1号窯では大型円筒Ⅰ類・中型円筒Ⅱ類を、新池2号窯では大型円筒Ⅱ類、小型円筒、形象埴輪というように窯ごとに製品の焼き分けが行われている。

上人ヶ平埴輪窯では、窯ごとに焼成する製品を分けていたかどうかは検討できていないが、窯内の遺物や灰原からの遺物の出土状況からみて、製品の焼き分けはなかったものと思われる。これは大前方後円墳である太田茶白山古墳へ供給するための埴輪窯ではその必要性から生じた可能性もあるが、上人ヶ平埴輪窯では窯ごとの製品の焼き分けを認められず、中・小規模の古墳への供給という差異があり、それが窯業体制に反映していると考えられる。

注一―1 石井清司・伊賀高弘ほか『上人ヶ平遺跡』（『京都府遺跡調査報告書』第一五冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）一九九二

注一―2 石井清司『京都府木津町上人ヶ平遺跡の埴輪窯』（『京都府埋蔵文化財情報』第三二号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）一九八九

注一―3 石井清司ほか『瓦谷遺跡第7次・上人ヶ平埴輪窯第2次』（『京都府遺跡調査概報』第六一冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）一九九四

注一―4 三辻利一『上人ヶ平遺跡出土埴輪・瓦の蛍光X線分析』（『上人ヶ平遺跡』京都府埋蔵文化財報告書第

一五冊収録) 三辻氏の上人ヶ平埴輪窯と上人ヶ平古墳群の埴輪の胎土分析結果によると、上人ヶ平埴輪窯と上人ヶ平古墳群の埴輪はRFS分布図でいくと同じ領域内に分布するとともに木津町白山古墳も同様の領域内に分布している。また吐師七ツ塚古墳の埴輪も同様の領域に含まれている

注一―5 田辺昭三『須恵器大系』

田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」(『研究論集』第一〇号 平安学園考古学クラブ) 一九六六

注一―6 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第六四卷 第二号 日本考古学協会) 一九七八

川西宏幸「中期畿内政権論」(『古墳時代政治史序説』塙書房) 一九八八

注一―7 高橋克壽「埴輪生産の展開」(『考古学研究』第四一巻 第二号 考古学研究会) 一九九四

注一―8 広瀬和雄「畿内の前方後円墳の畿内編年」(『前方後円墳体系』畿内編 山川出版社) 一九九二

注一―9 福島孝行・田中智子「2. 上人ヶ平5号墳」(『京都府遺跡調査概報』第一二四冊 (財) 京都府埋蔵文化

財調査研究センター) 二〇〇七

注一―10 森田克行ほか『新池 新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書』(『高槻市文化財調査報告書』第一七集 高槻

市教育委員会) 一九九三

高槻市教育委員会編『継体天皇と今城塚古墳』(吉川弘文館) 一九九七

森田克行「埴輪の産地(西日本)」(『季刊考古学』第七七号) 二〇〇一

注一―11 森本六爾「埴輪の製作所址及窯址」(『考古学』第壹巻、第四号) 一九三〇

注一―12 大塚初重・小林三郎『茨城県馬渡における埴輪製作所址』(『明治大学文学部研究報告考古学』第六冊 明

治大学) 一九三〇

注一―13 注一―6に同じ

- 注一―14 鐘方正樹ほか「菅原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題」〔奈良市埋蔵文化財調査センター紀要〕 奈良市埋蔵文化財調査センター）一九九一
- 注一―15 浜中邦弘「西牟婁遺跡発掘調査概報」〔宇治市埋蔵文化財発掘調査概報〕第三三集 宇治市教育委員会）一九九五
- 注一―16 笠井敏光「2 埴輪の生産」〔古墳時代の研究〕九 古墳Ⅲ 埴輪 雄山閣）一九九二
- 注一―17 森田克行「埴輪の産地（西日本）」〔季刊考古学〕第七七号）二〇〇一
- 注一―18 塩野 博「窯跡の構造について」〔馬室埴輪窯跡群〕埼玉県教育委員会）一九八七
- 注一―19 萩原恭二「関東地方の埴輪生産遺跡」〔研究連絡誌〕第五号（財）千葉県文化財センター）一九八三
- 注一―20 注一―17に同じ
- 注一―21 立山山窯・小田富士雄「立山山窯跡群」〔八女古窯跡群調査Ⅴ・総集篇〕八女古窯跡調査団）一九七二
- 注一―22 日置荘遺跡・日置荘遺跡（その5）〔現地説明会資料〕一九八八
- 入江正則「日置荘遺跡 埴輪窯跡」〔大阪の埴輪窯〕埴輪窯の検討・発表会資料）一九八九
- 岡本健二「日置荘遺跡（その5）で検出された埴輪窯」
- 注一―23 百舌鳥梅町窯跡・中村浩「窯業遺跡入門」〔考古学ライブラリー〕一三、ニューサイエンス社）一九八二
- 注一―24 生出塚埴輪窯跡・増田逸朗・山崎武「生出塚遺跡」〔鴻巣市遺跡調査会報告書〕第2集、鴻巣市遺跡調査会）一九八一
- 山崎武「鴻巣市遺跡群Ⅱ―生出塚遺跡（A地点）―」〔鴻巣市文化財調査報告〕第2集 埼玉県教育委員会）一九八七
- 注一―25 辻本和美ほか「弓田遺跡第二次」〔京都府遺跡調査概報〕第七四冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究セ

ンター) 一九九七

注一―26 岸本直文「平城宮東院下層1号窯」(『平城宮跡発掘調査概要』奈良文化財研究所) 一九九四

注一―27 注一―17に同じ

注一―28 石井清司ほか『瓦谷古墳群』(『京都府遺跡調査報告書』第二七冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九七

注一―29 『前方後円墳集成』6期(円筒埴輪Ⅳ式・須恵器TK73型式)、全長325m、墳長約270m。円筒埴輪Ⅳ式
佐紀古墳群中の最後の大型古墳

注一―30 高橋克壽「器財埴輪の編年と古墳祭祀」(『史林』第七一卷 第二号)

高橋克壽「器財埴輪」(『古墳時代の研究』九 古墳Ⅲ 埴輪)

注一―31 ゴーランド「日本の古墳」(『考古学』埴輪の研究第一卷・第四卷) 一八七八

注一―32 『平城宮発掘調査報告Ⅳ』(奈良国立文化財研究所) 一九七四

注一―33 伊藤勇輔「ウワナベ古墳」(『奈良県古墳発掘調査集報』(『奈良県文化財調査報告書』第二八冊) 一九七六

埴輪窯文献

立山山窯…小田富士雄「立山山窯跡群」(『八女古窯跡群調査Ⅴ・総集篇』八女古窯跡調査団) 一九七二

大井埴輪窯…山本 博「長門国大井村発見の埴輪窯について」(『考古学雑誌』第二七卷第八号) 一九三七

平所遺跡…松本岩雄「平所遺跡」(『国道九号線バイパス建設予定地内・埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ、島根県教育委員会)

一九七七

谷田1号窯跡・西尾幸則「愛媛県形象埴輪出土地一覧表」〔『形象埴輪の出土状況資料』第17回埋蔵文化財研究会〕

一九八五

野々上窯跡群・笠井敏光ほか「古市遺跡群Ⅲ」羽曳野市教育委員会 一九八二

誉田白鳥遺跡・野上丈助「誉田白鳥遺跡発掘調査概要」〔『大阪府文化財調査概要』一九七一一四、大阪府教育委員会〕

一九七二

土師の里遺跡・野上文助「埴輪生産をめぐる諸問題」〔『考古学雑誌』第六一卷第三号〕

上田 睦「土師の里埴輪窯跡群発掘調査概要」〔『大阪の埴輪窯』埴輪窯の検討・発表会資料〕一九八九

日置荘遺跡・日置荘遺跡(その5)〔『現地説明会資料』一九八八

入江正則「日置荘遺跡 埴輪窯跡」〔『大阪の埴輪窯』埴輪窯の検討・発表会資料〕一九八九

岡本健一「日置荘遺跡(その5)で検出された埴輪窯」

日置荘西町窯跡・十河稔郁「日置荘西町窯跡群(昭和五九・六〇年調査の埴輪窯について)」〔『大阪の埴輪窯』埴輪窯

の検討発表会資料〕一九八九 岡本健一氏のご指示による

百舌鳥梅町窯跡・中村浩「窯業遺跡入門」〔『考古学ライブラリー』二三 ニューサイエンス社〕一九八二

泉ヶ丘町土山・末永雅雄「和泉陶器村窯跡発掘概要」〔『考古学雑誌』第二二卷第三号〕一九三二

新池窯跡群・森田克行「新池 新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書」高槻市文化財調査報告書第一七冊 一九九三

青池南岬窯跡・桜塚下原窯跡・藤沢一夫・小林行雄「埴輪と祝部の窯跡」〔『考古学』第五卷第一〇号〕一九三四

『豊中市史』本編1 豊中市

鳥見山麓・松本俊吉「大和国桜井町鳥見山麓派遣の埴輪出土遺跡及び窯址」〔『考古学雑誌』第二七卷第四号〕

一九三七

菅原東埴輪窯跡・鐘方正樹ほか「菅原東遺跡埴輪窯跡群跡をめぐる諸問題」(『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』)

奈良市教育委員会 一九九一

那波野丸山3号窯・森内秀造氏のご教示による

森小手穂埴輪窯跡・藤井保夫「和歌山市所在井辺前山古墳とその関連遺跡」(『広域遺跡群細分布調査』I 和歌山県

教育委員会) 一九八七

砂羅谷4-II号窯・中村浩「古代窯業史の研究」柏書房

藤谷埴輪古窯・橋本滋「藤谷遺跡―埴輪古窯跡」(『津市民文化』第四号) 一九七七

久居2号窯・児玉高明・山沢義貴「久居窯跡群発掘調査報告」久居古窯址群発掘調査団 一九六八

下原2号窯跡・愛知県建築部・小牧市教育委員会「桃花台ニュータウン遺跡調査報告、小牧市篠岡古窯址群」

一九七六

城山2号窯跡・3号窯跡・東山11号窯跡・斉藤孝正「猿投窯成立期の様相」(『名古屋大学文学部研究論集』LXXX

VI―史学29―) 一九八三

上向佃3号窯跡・4号窯跡・猿投町誌編集委員会「来姓遺跡群・上向佃古窯址群」一九六九

水神2号窯跡・赤塚次郎「愛知県形象埴輪出土地一覧表」(『形象埴輪の出土状況資料』第17回埋蔵文化財研究会)

一九八五

東山48(218―I)号窯跡・荒木実ほか「東山218号窯の古式須恵器について」(『古代人』三三 名古屋考古学会)

一九七八

斉藤孝正「猿投窯成立期の様相」(『名古屋大学文学部研究論集』LXXXVII―史学二九―) 一九八三

馬室埴輪窯跡・塩野博・増田逸朗・駒宮史朗「馬室埴輪窯跡群」(『埼玉県埋蔵文化財調査報告』第七集 埼玉県教育

委員会) 一九七八

桜山埴輪窯跡・水村孝行・岡村和子ほか『桜山窯跡群』(『日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査—VI—』(財

埼玉県埋蔵文化財調査事業団) 一九八二

生出塚埴輪窯跡・増田逸朗・山崎武『生出塚遺跡』(『鴻巣市遺跡調査会報告書』第二集 鴻巣市遺跡調査会)

一九八一

山崎武『鴻巣市遺跡群Ⅱ—生出塚遺跡(A地点)—』(『鴻巣市文化財調査報告』第二集 埼玉県教育委員会)

一九八七

城倉正祥『生出塚窯産円筒埴輪の編年とその生産の諸段階』(『考古学雑誌』第94巻第一号) 日本考古学

二〇一〇

権現坂埴輪窯・小沢国平『江南・権現坂埴輪窯址』(『台地研究』一四 台地研究会) 一九六四

割山遺跡・今泉泰之・大和 修ほか『割山遺跡』(『深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書』深谷市割山遺跡調査会)

一九八一

和名埴輪窯・宥勝寺裏窯跡・八幡山窯跡・赤坂窯跡・宇佐久保窯跡・本郷埴輪窯跡・駒形神社埴輪窯・金井口埴輪窯・

金井塚良一ほか『討論群馬・埼玉の埴輪』あさを社 一九八七

畑沢埴輪窯・安藤鴻基『千葉県木更津市畑沢埴輪窯の調査速報』(『古代』第五七号、早稲田大学考古学会) 一九七四

公津原埴輪窯・『公津原』千葉県企業庁・(財) 千葉県地域振興公社 一九七五

白井坂埴輪窯・坂詰秀二『神奈川県白井坂埴輪窯跡』(『武蔵野』四四—二・三) 一九六五

馬渡窯跡群・大塚初重・小林三郎『茨城県馬渡における埴輪製作址』(『明治大学文学部研究報告考古学』第六冊)

一九七六

元太田山埴輪窯跡・陣屋埴輪窯跡・木幡北山埴輪窯跡・若松良一・萩原恭一「埴輪窯址集成」(『生出塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会) 一九八一

唐沢山ゴルフ場埴輪窯跡・佐野市史編纂委員会編『佐野市史』資料編Ⅰ 一九七五

飯塚埴輪窯・富沢窯跡・若松良一・萩原恭一「埴輪窯址集成」(『生出塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会) 一九八一

初出：「京都府木津町上人ヶ平遺跡の埴輪窯」(『京都府埋蔵文化財情報』第三二号 (財) 京都府埋蔵文化

財調査研究センター) 一九八九

第二章 奈良山丘陵における瓦窯の展開

第二章 奈良山丘陵における瓦窯の展開

第一節 奈良山丘陵の瓦窯

一. はじめに

日本における本格的な寺院の造営は、崇峻元(五八八)年、大和飛鳥寺にはじまる。飛鳥寺は蘇我氏の寺であるが、飛鳥寺造営に際しては、百濟から寺工、露盤博士、瓦博士、画工を呼び寄せ、最先端の技術を駆使して造営された。飛鳥寺及び瓦窯の発掘調査は、昭和三〇年におこなわれた。瓦窯は飛鳥寺の寺域外の南東、丘陵斜面と近接した位置にあり、二基の窯跡が検出されている。

飛鳥寺瓦窯以前の、瓦窯発掘調査例としては、大正二年の北白川廃寺に関連した瓦窯^{注12}があり、昭和五年には平安京へ瓦を供給した京都市栗栖野瓦窯^{注13}、昭和六年の京都府宇治市大鳳寺跡の創建瓦を焼成した山本(宇治)瓦窯跡^{注14}、昭和八年の平城宮に瓦を供給した京都府精華町乾谷瓦窯^{注15}などがある。また、奈良山丘陵一帯では、昭和四六年以降、平城ニュータウンによる事前調査^{注16}により、平城宮に瓦を供給した数多くの瓦窯の調査例が公表されており、瓦窯の変遷が明らかになりつつある。

飛鳥時代の初期寺院の変遷については、大脇潔^{注17}・毛利光俊彦^{注18}によると、三期に区分されている。

変遷一期は、初期寺院の六〇〇年頃までで、蘇我氏あるいは朝鮮半島と強い結び付きをもつ一部の氏族が造営した寺院で、飛鳥寺を除いて草堂程度の建物であり、瓦葺きの本格的な寺院の造営までには至っていない時期。

変遷二期は、推古三二(六二四)年「寺四十六所、僧八百十六人、尼五百六十九人、併せて一千三百八十五人有り」から六三〇年の中宮寺の創建までの時期で、瓦をもたない寺院、堂塔は金堂がつくられる程度で、蘇我氏の傍系氏族、上宮王家、旧勢力の一部氏族に寺院の造営が広がる時期。

変遷三期は、山田寺の造営が始まる舒明天三(六四一)年までで、豊浦寺・斑鳩寺の伽藍が整備される時期。この時期に京都府内では、京都市幡枝瓦窯、宇治市隼上り瓦窯、八幡市平野山瓦窯が造られる。

飛鳥寺瓦窯は、飛鳥寺の寺域外の南東の丘陵斜面で、全長1022m・幅55〜75cm、二〇段の階段を含む二基の瓦窯を検出している。飛鳥寺の寺域における軒瓦の使用状況を見ると、弁端に切り込みのある素弁十葉蓮華文軒丸瓦グループ(通称「花組」)が中金堂など伽藍の中樞に多く、やや角張った花卉の先端に珠点を置く弁端点珠の素弁十一葉蓮華文軒丸瓦(通称「星組」)は中門・回廊に多い。

大和豊浦寺は、推古天皇が豊浦宮で即位(五九二年)したのちに、寺として改築した寺院で、その瓦を供給した瓦窯として7世紀初頭に築窯を開始した宇治市隼上り瓦窯^{注19}がある。

豊浦寺と隼上り瓦窯の距離は、直線距離にして50m離れている。近接した場所に瓦窯を造ることなく、寺領である宇治に取って窯を造っていることが明らかとなっている。隼上り瓦窯では、瓦とともに須恵器を焼成した瓦陶兼業窯四基、瓦窯に近接して六棟の建物や溝などがあり、その瓦窯で焼成された軒瓦は、豊浦寺使用の軒丸瓦四種のうち、同範の三種が隼上り瓦窯で焼成されている。

隼上り瓦窯と同様、供給先が遠方の瓦窯に、京都府八幡市平野山瓦窯^{注10}がある。平野山瓦窯は、大阪市四天王寺に瓦を供給した瓦陶兼業窯で、七世紀初頭から中葉まで操業されている。平野山I期は、四天王寺の創建瓦を焼成するほかに、供給先が不明であるが奥山久米寺式軒瓦も焼成している。また、平野山III期(七世紀中葉)でも四天王寺II期の軒瓦を焼成している。瓦窯は八基検出しており、窯体構造は有段式の窖窯である。

京都市幡枝瓦窯は、岩倉窯跡群の一面にある7世紀初頭頃に造られた瓦陶兼業窯（有段式窖窯）で、秦氏の氏寺である京都市北野廢寺に瓦を供給している。

二・宮都における瓦窯の展開

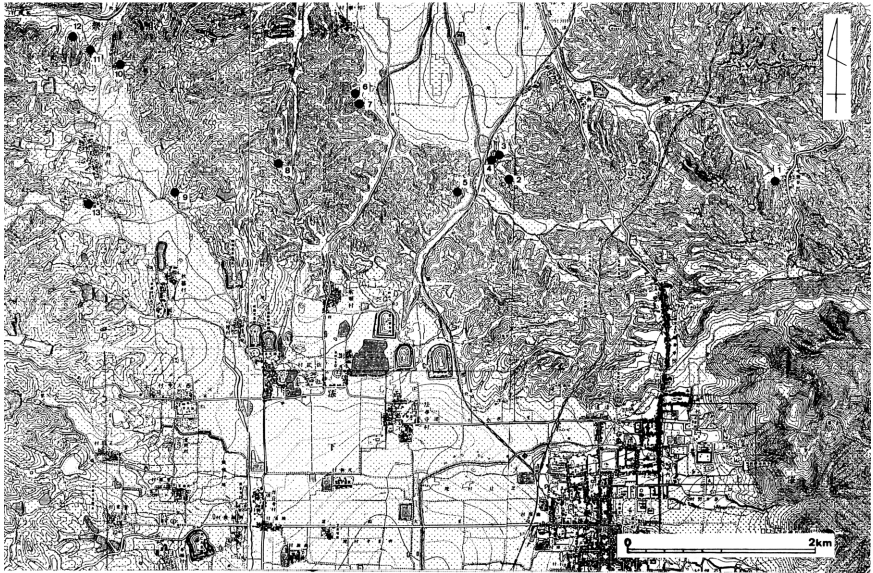
宮都で本格的に瓦を使用したのは持統八（六九四）年の藤原京からである。

藤原京では大極殿・朝堂院・大垣に限ったとしても推定一五〇万枚、藤原京全域では推定二〇〇万枚以上^{註11}の瓦を使用したといわれている。藤原京出土の軒瓦は瓦当文様・製作技法・胎土から八群に分類でき、その生産地については奈良盆地の縁辺部で確認されているほか、和泉・近江や遠くは香川県三豊郡三野町宗吉瓦窯、兵庫県洲本市土生寺瓦窯などからの供給も指摘^{註12}されている。

上原真人・毛利光俊彦によると、藤原京の中枢部では7世紀前半以来の拠点的な窯業地帯である御所市高台・峰寺瓦窯、生駒郡平群町安養寺瓦窯、大和郡山田市西田中瓦窯などの製品が用いられ、大極殿・朝堂院では主に高台・峰寺瓦窯産の瓦が、大垣ではいくつかの瓦窯の瓦が混用^{註13}されている。また、橿原市日高山瓦窯や同久米瓦窯などでは、寺の造営にともなって生産された瓦の一部が宮・京に流用された可能性も指摘^{註14}されている。

近年の考古学の調査成果によると、藤原宮の大垣の東面北門の瓦の生産地は、牧代瓦窯産の6276C型式、推定和泉産の6274A型式（大垣には日高山瓦窯産を含む）。大垣北西隅や大垣西南隅などに比べて東面北門、東面大垣が瓦の型式からは古い様子で、藤原宮の中枢部に先行して東面大垣から始まる^{註14}ことが指摘^{註14}されている。

藤原宮中枢部に葺かれた軒瓦は、日高山瓦窯の製品で、大和盆地以外の瓦生産が終了した時期。また、そ



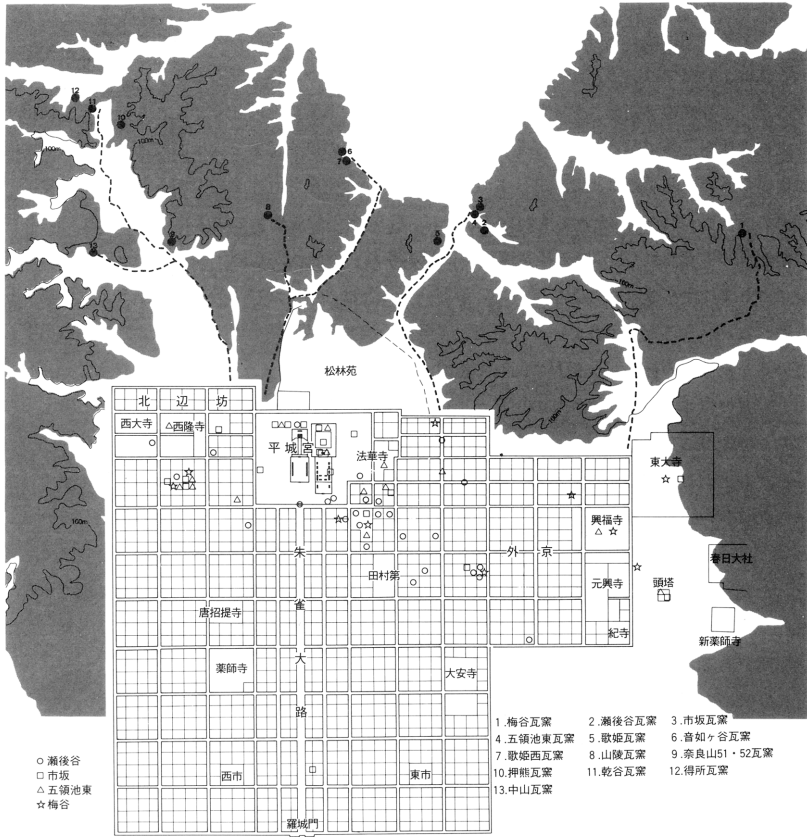
- | | | | | |
|-----------|----------|----------|----------------|----------|
| 1. 梅谷瓦窯 | 2. 瀬後谷瓦窯 | 3. 市坂瓦窯 | 4. 五領池東瓦窯 | 5. 歌姫瓦窯 |
| 6. 音如ヶ谷瓦窯 | 7. 歌姫西瓦窯 | 8. 山陵瓦窯 | 9. 奈良山51-52号瓦窯 | 10. 押熊瓦窯 |
| 11. 乾谷瓦窯 | 12. 得所瓦窯 | 13. 中山瓦窯 | | |

第二-1図 平城京と奈良山瓦窯群位置図

のほかの施設に葺かれた瓦は、高台・峰寺瓦窯跡、西田中・内山瓦窯・安養寺瓦窯跡などで生産された。このことから、中枢部は大極殿の造営が先行し、続いて朝堂院の東第一堂、第二堂に移り、第三堂以下が順次造営されていく。

藤原宮・京での造瓦体制を上原真人^{（註15）}は、瓦窯が7世紀前半以来の窯業地帯に近接していること、操業形態が前代の延長線上にあること、瓦も十分に規格化されていないことから「官営工房としては、まだ未成熟」な段階と位置づけられている。

一方、平城宮における造瓦組織については、前述の乾谷瓦窯、昭和二八年の音如ヶ谷瓦窯の調査は知られていたが、その実態は明らかでなかった。ところが、昭和三七年、奈良山一带の分布調査が行われ、奈良市北部、精華町、木津川市（旧木津町、旧加茂町）にかけて四三ヶ所の窯跡の存在が確認された。また、



第二-2図 奈良山瓦窯分布図

昭和三九年には、京都府と奈良県をまたぐ平城ニュータウン造成計画地内の確認調査を受け、押熊瓦窯、歌姫西瓦窯、音如ヶ谷瓦窯の発掘調査が行われ、奈良山丘陵における瓦窯の実態が明らかになってきた。

これら奈良山丘陵における瓦窯の調査成果をもとに、小笠原好彦^{注16}は、奈良山丘陵における瓦窯は、造宮省に所属して造宮事業の一端をうけもった造瓦所の施設で、中央政府が直接営んだ官窯と位置づけ、初期の造宮事業は主に中山瓦窯で瓦生産を行い、燃料の不足などによって歌姫西瓦窯、押熊瓦

窯などへと展開し、ほぼ奈良時代いっぱい奈良山丘陵内に移動して操業を続けたとした。

黒崎直^{注17}は、瓦窯の構造変遷を検討し、登(甕)窯から平窯への変化を、少ない燃料でいかにおおきな燃焼効率をあげるかにより、熱の廻り方や通り方などの効率を良くする改良を加えた結果と考えた。

毛利光俊彦は、飛鳥寺瓦窯の登(甕)窯から、焼成部の温度をむらなく、しかも効率良く保つため、築窯の簡便さ、瓦の量産化を考慮して平窯が生まれ、分焰柱の工夫から有牀(畦)式平窯へと変化していく変遷を説いた。

森郁夫^{注18}は、藤原宮所用瓦を焼いた日高山瓦窯が平窯の初現と位置づけた。

奈良山丘陵の瓦窯の調査や先学によって、飛鳥寺瓦窯から始まった瓦窯は、瓦の量産化に伴うとともに燃焼効率を考慮して登(甕)窯から平窯へ変化していくこと、奈良山丘陵における瓦窯の性格とその変遷について言い尽くされた感がある。定着しつつある奈良山丘陵の瓦窯については近年の平城宮での瓦編年の確立と昭和六〇年以降に始まった木津地区所在遺跡群(梅谷瓦窯、瀬後谷瓦窯、市坂瓦窯、五領池東瓦窯、鹿背山瓦窯)の調査によって先学の指摘が追認されるとともに、瓦窯構造の実態がより明らかになってきた。ここでは最近の調査成果を踏まえ、奈良山丘陵における瓦窯についてさらに検討していきたい。

三・平城京の瓦窯

和銅三(七一〇)年に造営された平城宮・京は、長岡京遷都までの約七〇年間にわたって営まれた都である。ただ、この間には、紫香樂宮・恭仁宮・難波宮などへと一時期遷都した時期もあるが、長期に機能した都であり、平城宮・京では、五〇〇万枚とも六〇〇万枚ともいわれる瓦が使用された。

平城宮跡の発掘調査の成果によると、大極殿を中心とした建物群では、奈良山丘陵を中心とした瓦窯で新

調された瓦を多く使用し、全体の数%を占める藤原宮からの搬入・再利用瓦は、専ら朱雀門や大垣、あるいは第一次朝堂院の南門や塀などに使用されている。

奈良山丘陵は、宮の背後にあり、瓦窯の分布は昭和四八年度段階では奈良市中山町から歌姫町にかけて標高七〇m未満の位置に約四〇基の窯の存在が知られ、その分布状況は平城宮から半径五kmの範囲におさまる。ただ、瀬後谷瓦窯・五領池東瓦窯・鹿背山瓦窯など、発掘調査前の状況では丘陵斜面裾部の水田下に瓦窯が埋まっている例もあり、分布調査では検出できない窯が存在するものと思われる。

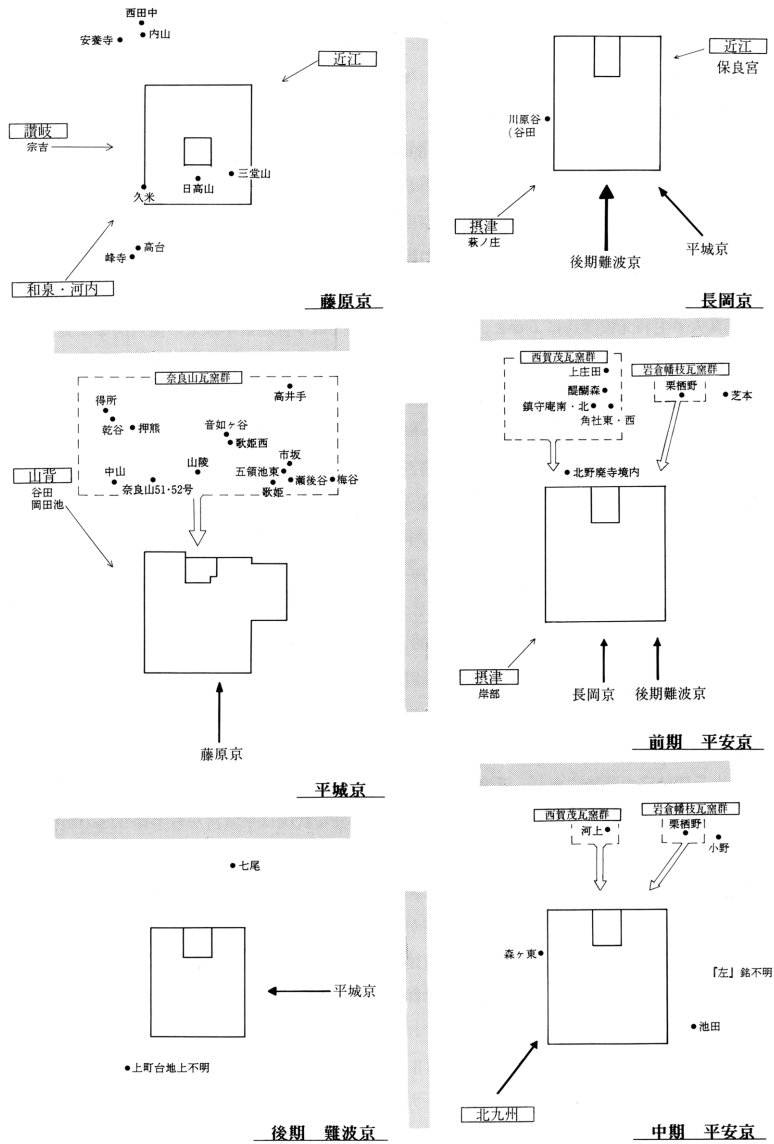
現在、奈良山丘陵で確認できた瓦窯は二三窯跡群、五〇基で、平城遷都以後で、その前半期の瓦窯は奈良山丘陵の西部が主体であり、後半期以降に奈良山丘陵の東部に移行していくことが知られている。また、平城宮・京出土の瓦は、藤原宮の瓦よりもひとまわり小さく、製品の均一化が進むこと^{註19}、瓦窯の分布も前述したように奈良山丘陵にはほぼ集中する傾向にあることから、官営瓦工房^{註20}の確立が指摘されている。

瓦工人は、中山瓦窯から押熊・山陵瓦窯へと移動したことが、軒瓦の瓦当範の状況や瓦の成形技法などから想定されている。ただ、興福寺創建瓦を焼成した梅谷瓦窯、平城京へ瓦を供給していた瀬後谷瓦窯など、平城宮とは供給先を異にする瓦窯の存在が明らかになり、中山・押熊・山陵瓦窯とは系譜を異にする瓦窯組織が想定できる。

副都であった後期難波宮は、神亀三(七二六)年、知造難波宮事に任じられた式部卿藤原宇合によって宮の大改修がおこなわれた後、天平一六(七四四)年に遷都が行われるものの、翌年には平城京へ復する短命の都であった。

後期難波宮の宮域内では、重圈文系軒瓦の出土比率が高いのに対して、後期難波宮の内裏正殿周辺部や内裏東外郭築地部分・京域内では蓮華・唐草文系軒瓦の出土例が多いことがあげられている。後期難波宮の供

第1節 ● 奈良山丘陵の瓦窯



第二-3図 宮都と瓦窯模式図

給瓦窯の生産地は大阪市上町台地周辺が推定されているが、その実態は明らかではなく、難波宮からやや離れた吹田市七尾瓦窯が知られるのみである。

七尾瓦窯^{注121}は、これまでの調査で七基の瓦窯が確認されているが、その軒瓦は、蓮華唐草文系軒丸瓦・軒平瓦各一型式のみであること、七基の窯が同時操業の可能性があることから、藤原学は「聖武朝難波宮の整備に際して急時に準備され、短期間に多量の屋瓦供給にのみ稼働した」瓦窯と位置づけている。

延暦三(七八四)年、平城京から遷都した長岡京では、朝堂院には後期難波宮の、内裏には平城宮の瓦を中心に使用し、その補充瓦として新たに長岡宮式瓦を使用している。長岡宮では難波・平城宮式軒瓦が出土数の80%前後の高比率を占め、長岡宮式軒瓦は15%前後にすぎないことが指摘されている。

この長岡宮式瓦を生産した瓦窯として、長岡京市谷田瓦窯・高槻市摂津萩ノ庄瓦窯がある。谷田瓦窯は、奈良時代に西大寺の造営のために操業された瓦窯であるが、長岡京遷都にともなって操業を再開した瓦窯であり、同じ様相は摂津萩ノ庄瓦窯でも考えられている。谷田瓦窯・摂津萩ノ庄瓦窯出土の長岡京式軒瓦の長岡宮での分布状況を検討した山中章^{注122}は、長岡宮式軒瓦について「あくまでも補充用瓦としての位置づけ」と考えている。

延暦一三(七九四)年、長岡京から平安京へ遷都する。平安京では長岡京・後期難波宮からの瓦が朝堂院・内裏に比定される地点で使用されているが、豊楽院に代表されるように平安宮式の瓦^{注123}も多用している。

この平安宮式瓦を生産した瓦窯は、吹田市紫金山瓦窯など平安宮から30 km以上、京都府乙訓郡大山崎町大山崎瓦窯^{注124}の17 km以上と遠隔地のものもあるが、その主体は西賀茂瓦窯群・岩倉幡枝瓦窯群など宮の北方で、宮から半径6 kmの範囲におさまる地域に分布している。また、後述するように窯の構造も統一されており、本格的な瓦生産の組織化がうかがえる。

このように、藤原京から平安京までの宮都と瓦生産を概観すると、都の機能していた期間を考慮する必要があるが、藤原京ではこれまでの在地型窯業生産を利用し、後期難波宮と長岡京では一部新たに瓦窯を構築するものの、その主体は旧都からの瓦の再利用によって必要な瓦を賄っており、多量の瓦を生産するために本格的に瓦生産の組織化をはかったのは、平城京と平安京であると思われる。

四・ 奈良山丘陵の瓦窯の様相

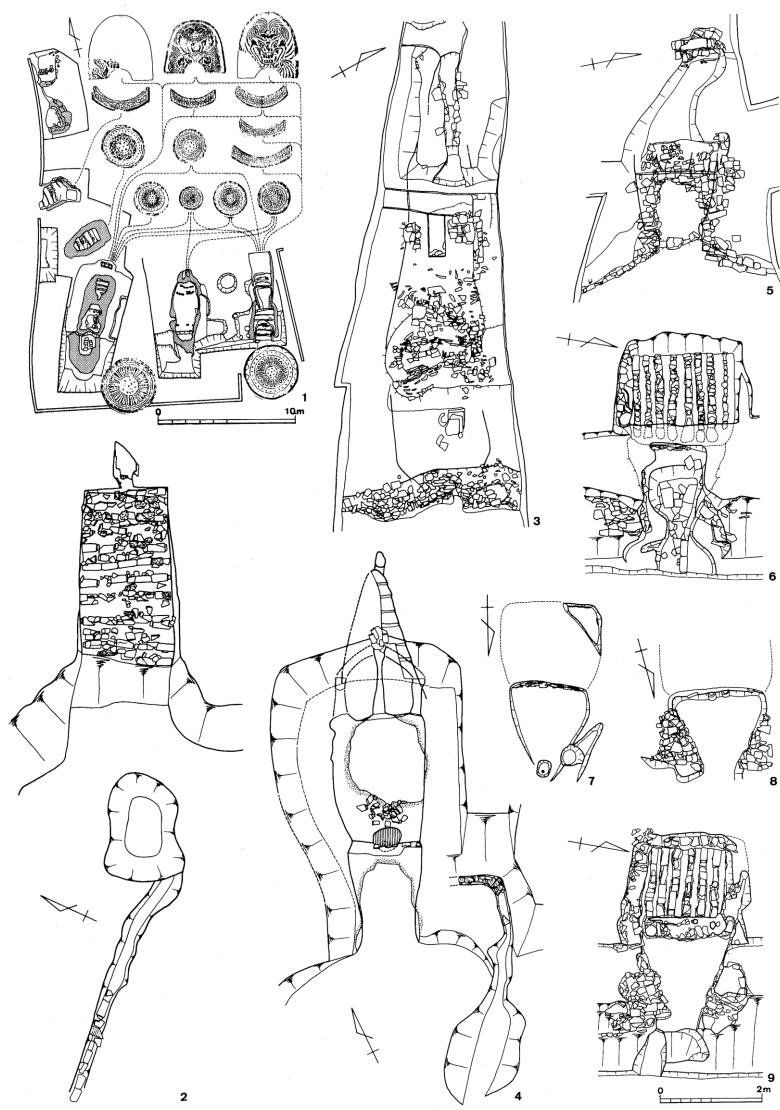
平城宮・京の背後にあり、大和と山背を画する奈良山丘陵には、前述のように一三窯跡群、五〇基以上の瓦窯跡を確認しているが、平城宮・京での瓦の総数から考えると奈良山丘陵にはさらに数多くの瓦窯が埋まっているか、未検出であるものと思われる。

ここでは、これまでに発掘調査された奈良山丘陵の瓦窯についてその概略を記す。

① 奈良市中山瓦窯跡 昭和四七年に奈良国立文化財研究所によって発掘調査が実施された。瓦窯は丘陵南斜面を利用して築かれており、重複のあるものを含めて西向きで五基、南向きで五基の合計一〇基ある。注125

各窯は、窯の主軸に直交するように半截した平瓦を並べて焼成部床面を階段状に成形しているもの(1号窯・4-A窯・6-A窯・7号窯)、階段状に造っていないもの(4-B窯・5号窯)がある。窯体の規模は、現存長約2.2×6.1m・幅1.5m前後のもの、現存長約1.3m・幅1.5m前後のもの(2・3-A・3-B号窯)がある。窯は、1・4-A・6-A・7号窯↓4-B・6-B号窯↓2・3号窯という築造順位が考えられており、焼成部床面が階段状を呈する有段式窖窯↓階段状の段をもたない無段式窖窯↓窖窯風平窯へと変化している。6-B号窯は掘形をもち、日干し煉瓦を積み上げ、奥壁には3ヶ所の煙道を設けている。

中山瓦窯出土の軒瓦には、平城宮第一次大極殿院の南門や築地回廊・東楼(SB 7802)注126などに使用され、



1. 中山瓦窯群 2. 山陵1号窯 3. 歌姫西1号窯 4. 山陵II・III号窯 5. 歌姫西4号窯
6. 音如ヶ谷I号窯 7. 音如ヶ谷III号窯 8. 音如ヶ谷IV号窯 9. 音如ヶ谷II号窯

第二-4図 奈良山丘陵の瓦窯実測図

第1節 ● 奈良山丘陵の瓦窯

瓦窯名	基数	第Ⅰ期		第Ⅱ期		第Ⅲ期		第Ⅳ期		第Ⅴ期
		1	2	1	2	1	2	1	2	
		和銅元年 聖徳元年		養老5年頃		天平初年頃		天平17年		
中山瓦窯	竈7・平3 群九 群五	6282 A 6284 C 6664 C	6304 C 6664 K	6269 A 6313 A・C・E 6311 A・B	6314 B・D	6307 A・E 6308 A・C 6311 D・H	6225 A			
梅谷瓦窯	竈2・平2 竈3・平3	6301 A 6301 D 6671 A	6671 K	薫郭紋 6671 E						
瀬後谷瓦窯	竈3以上	6284Ea 6664 I 6668 A		6671 I 6700A	6679 A		6316 S?			
歌給西瓦窯	竈1・平5			6285 A 6667 A・D	6313 A・C 6685 B	6285 B 6669 A			6144 A	
佐保山瓦窯						6135 A	6318 A			
山腰瓦窯	竈2・平1					6308 D・L・N	6133Ka・Kb 6682 A			
押櫃瓦窯	平6					6291 A・C 6652 A 6681 A・B・E・S	6314 A 6727 A	6307 B・F 6663 E	6307 D・H 6307 G	
歌給瓦窯								6714 A 6138 B		
音如ヶ谷瓦窯	平4						6137 C 6716 A 6714 A	6138 F～I 6767 A・B 6768 A～D		
奈良山51・52瓦窯							6682 A			
市坂瓦窯	平8							6130 B 6133Aa・B・C 6732 A・C 6718 A		
五領池東瓦窯	平3							6133 Aa 6138 A・F・I 6767 A・B 6768 A～D		
得所瓦窯	平?								6710 C	

「平城宮発掘調査報告XⅢ」をもとに作成

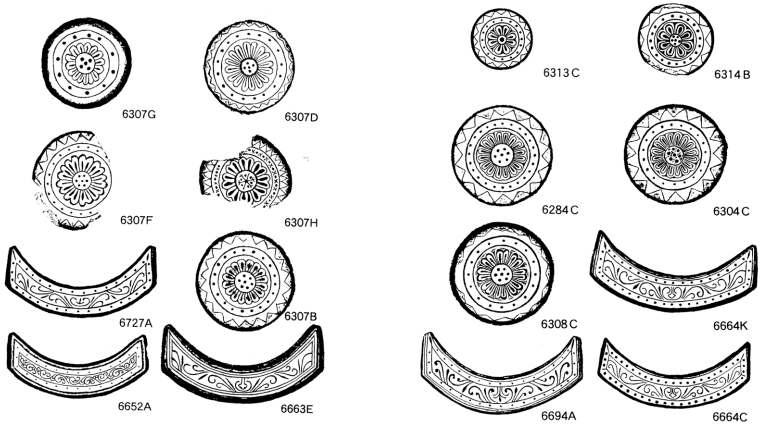
第二-5図 奈良山瓦窯出土軒瓦一覧

軒丸瓦は 6282A・6284C・6304C・6308C・6313C・6314B 型式などがある。軒平瓦は 6664C・6694A 型式などがある。軒平瓦 6664C 型式は、平城宮瓦編年の第Ⅰ―Ⅰ期に^{注127}、軒平瓦 6666A 型式と組み合う軒丸瓦 6314B 型式は平城宮瓦編年の第Ⅱ―Ⅰ期に、軒平瓦 6663C_b 型式と組み合う軒丸瓦 6225A 型式は平城宮瓦編年の第Ⅲ―Ⅰ期^{注128}にあたることから、この瓦窯の操業時期は、平城宮瓦編年の第Ⅰ―Ⅰ期から第Ⅲ―Ⅰ期と長期にわたる瓦窯であることが知られている。

② 押熊瓦窯 昭和四七年に奈良国立文化財研究所によって発掘調査がおこなわれた。小丘陵の西斜面に築窯されており、五基は西向きに焚口部を設け、一基は南丘陵裾に離れてあり、南向きに焚口部を設けている。発掘調査されたのは一基のみで、他の窯は窯の範囲や基数を確認するための試掘調査^{注129}が実施された。

一号窯は、長さ4.4m・幅1.2mを測り、燃烧室と焼成室の区別が明確でない平窯である。他の瓦窯は、上面のみの観察で窯体構造の詳細な追求は行われなかったが、二―六号窯は平窯である。そのうち、両側壁に各二枚の鬼瓦を立て、窯壁は軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・埴などを組み合わせて構築されているもの(四号窯)もある。この鬼瓦と同範のものが山陵瓦窯(二号窯)からも出土している。

押熊瓦窯出土の軒瓦は、平城宮瓦編年の第Ⅱ―2期から第Ⅳ―



第二-7図 押熊瓦窯で焼成された軒瓦

第二-6図 中山瓦窯で焼成された軒瓦

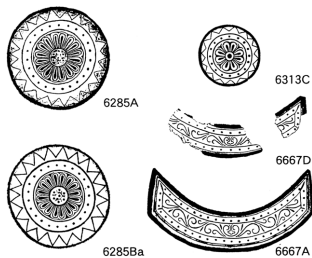
1期のものである。軒丸瓦 6307B・6307D・6307F・6307G・6307H・6291C型式、軒平瓦 6652A・6663E・6681A・6727A・6727B型式などがあり、主な軒瓦である軒丸瓦 6308A型式と軒平瓦 6663A型式が、軒丸瓦 6291C型式と軒平瓦 6681A型式が組み合い、平城宮瓦編年の第Ⅲ—2期に位置づけられている。

③ 奈良市歌姬西瓦窯 昭和四七年に奈良国立文化財研究所によって発掘調査^{注130}がおこなわれた。瓦窯は、丘陵の一小塊から東北にのびる低い尾根の東南斜面に立地し、六基(うち一基は推定)を確認した。

一号窯は平窯風の管窯で、全長9.5m・幅2mを測り、焼成室の壁面は平瓦と粘土を交互に積み上げられている。焼成部後面隔壁から全長4mの煙道を設けている。平窯五基は、全長4～5m・幅1.5～2.0mを測り、二号窯の壁体は平瓦と粘土で構築されており、煙道と分焰柱を備えている。四号窯が、全長5m・幅2mで、焼成部と燃焼部の境に段差(階)があり、分焰柱を備えている。

歌姬西瓦窯では、軒丸瓦 6285A・6285B・6313C型式、軒平瓦 6667A・6667D・6668B・6669A型式などがある。軒丸瓦 6285A型式と軒平瓦 6667A型式が、軒丸瓦 6313C型式と軒平瓦 6685型式がそれぞれ組み合い、いずれも平城宮瓦編年の第Ⅱ—1期に、軒丸瓦 6285B型式と軒平瓦 6669A型式が、平城宮瓦編年の第Ⅱ—2期に位置づけられている。軒瓦は平城宮瓦編年の第Ⅱ期が主体で、平城宮や法華寺前身の建物に瓦が供給されたと考えられている。また、窯付近からは宝相華文の軒丸瓦が二点、六号窯から出土している。

④ 奈良市第51号窯 奈良山丘陵の西方、秋篠川にとって形成された丘陵で、谷の東側に面して立地する^{注131}。瓦窯は一基で、焼成部の奥半部と煙出部が遺存していた。焼成部は方形で、掘形を有し、その内側に日干し煉瓦と粘土で側壁を構築し



第二—8図 歌姬西瓦窯で焼成された軒瓦

た可能性が考えられている。床面は畦をもたないものである。後面隔壁は半截された平瓦と粘土を積み上げて構築されている。

⑤ 奈良市山陵(奈良山第五三号) 瓦窯 昭和四七年に奈良国立文化財研究所によって三基の窯の発掘調査^{注132}がおこなわれた。瓦窯は、奈良山丘陵のほぼ中央で丘陵南斜面の中腹にあり、重複関係のあるものを含めて三基の瓦窯を検出した。

I号窯は全長7.5mを測る窖窯で、「間口が広く奥行きが浅い焼成室をもち、奥壁部分にあたかも平窯のそれと同じような肩の張った直線的な作り」となっている。床面は、当初階段状に造り、のちに粘土と丸瓦で二度にわたって補修を行い、最終床面では丸瓦を横に並べて一〇段の段を造っている。側壁は日干し煉瓦を使用し、奥壁は中央で平瓦を立てて幅25cm・高さ30cmの通煙孔をあけている。

II号窯は、III号窯の上面に再構築されたもので、掘形をもつ全長約6mの平窯である。焼成部床面には畦などの施設はなく、燃焼部と焼成部には段差(階)があり、その上面には軒平瓦を数枚あわせて芯にした分焰柱がある。後面隔壁は焼成部床面から10cm上で三本の煙道部があり、上方で一本にまとまっている。

III号窯は、II号窯の下層に重なるっており、現存長約4.5mの窖窯で、焼成部床面に階段状施設がある。床面傾斜角は約22度を測る。

山陵瓦窯は、遺構の重複関係からIII号窯が最も古く、I号窯が新しい。

I号窯の灰原からは、軒丸瓦6308D・6308L・6308N・6133K型式、軒平瓦6682A型式が出土しており、軒丸瓦6308C型式は軒平瓦6682型式と組み合わせ、平城宮瓦編年の第II―2期に、軒丸瓦6133K型式は軒平瓦6682型式と組み合わせ、平城宮瓦編年の第III―2期に相当する。

⑥ 木津川市音如ヶ谷瓦窯 北東方向にのびる奈良山丘陵の東側裾部に立地し、四基の瓦窯を確認^{注133}した。I

・II号窯は焚口部を東に、III・IV号窯は焚口部を北に向けている。

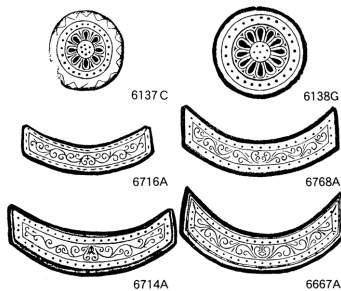
I・II・III号窯は、現存長3.2～3.9m・幅1.5～2.4mを測り、焼成室床面には畦を、燃焼室と焼成室の境には前面隔壁をもつ有畦式平窯で、I号窯(B期)の側壁には歌姫瓦窯の製品(あるいは音如ヶ谷瓦窯A期の第III・IV号窯の製品)と思われる軒平瓦6714A型式を粘土とともに積み上げて窯を構築している。有畦式平窯の発掘例としては最古の例と位置づけられている。

音如ヶ谷瓦窯では、軒丸瓦6137C・6138G型式、軒平瓦6714A・6768A型式が出土しており、軒丸瓦6137C型式と軒平瓦6716A型式が組み合い、平城宮瓦編年のIII—1期に、軒丸瓦6138B型式と軒平瓦6714A型式が組み合い、平城宮瓦編年の第III—2期に相当する。

音如ヶ谷瓦窯の製品は、大和法華寺阿弥陀浄土院からも出土しており、阿弥陀浄土院の造営に関わる瓦窯と考えられている。ただ、最近の法華寺の調査^{注134}では、法華寺の創建時にも音如ヶ谷瓦窯で焼成された軒瓦が使用されており、音如ヶ谷瓦窯が、天平宝字三(七五九)年以前の瓦も焼成していた可能性が高いと考えられている。

⑦ 奈良市歌姫瓦窯 昭和二八年に奈良県教育委員会によって発掘調査^{注135}がおこなわれた。平城宮東三坊大路から北にのびる起伏の少ない幹道の東側斜面に立地する瓦窯で、六基の瓦窯を確認している。

窯は、焼成部の床が水平で、床面に瓦を埴状に築いた有畦式平窯である。「奥行きよりも間口が広くなる焼成室をもつとともにロストル(有畦)も完備し、ロストル(有畦)式平窯の一応完成したかたち」とされている。歌姫瓦窯からは軒平瓦6714A型式が出土している。



第二-9図 音如ヶ谷瓦窯で焼成された軒瓦

⑧ 精華町乾谷瓦窯 丘陵の上辺にあり、西側斜面で一基(一号窯)、その北側約20mの池の堤の下に一基(二号窯)を確認している^{注136}ほか、窯体と思われる凹みが二ヶ所ある。そのうち、調査されたのは一号窯のみである。

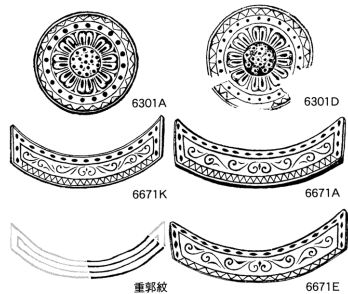
一号窯は、全長約8.1m・焼成部幅75〜90cmを測る窖窯で、燃焼部と焼成部の境には1mの段差をもつ階がある。側壁には日干しレンガを使用している。乾谷瓦窯では丸・平瓦は出土したが、軒瓦は出土しておらず、時期決定の資料を欠く。

⑨ 精華町得所瓦窯 得所瓦窯は、乾谷瓦窯跡の西方約三〇〇mの丘陵で、窯体に伴う瓦積みの一部が露出していることからその存在が明らかになった^{注137}が、発掘調査は実施されていない。瓦積みは平瓦が九段程、平積みされており、平窯と思われる。なかには平・丸瓦のほか、軒平瓦6710C型式が出土しており、平城宮瓦編年の第IV期に相当する。

⑩ 木津川市梅谷瓦窯 梅谷瓦窯は、その軒瓦の文様構成・瓦当范の特徴から大和興福寺の創建瓦を焼成した瓦窯であることが知られていた。

藤原氏の氏寺であり、藤原不比等が造営した興福寺は、藤原京から平城京への遷都移転を推進した藤原不比等が、平城京の宅地割・平城京の造営と同時期に造営が開始されたとする七〇八年前後説、造興福寺仏殿司の成立した養老年間(七二二年)以降に造営を開始したとの説がある。窯体および灰原からは軒丸瓦6301A・6301D型式・軒平瓦6671Aa・6671Ab・6671E・6671K型式などが出土し、平城宮瓦編年の第一期後半〜第二期前半、七二〇年を前後の時期には窯の操業を開始していたものと想定している。

梅谷瓦窯では七基の窯が存在し、五基の窯について窯体内を含めて発掘調査をおこなった^{注138}。残り三基につ



第二-10図 梅谷瓦窯で焼成された軒瓦

いては現状保存が明らかとなり、窯体内の詳細な発掘調査は実施しておらず、上面輪郭を確認したのみである。この七基の窯の前後関係は、各窯で出土した軒瓦の範傷の状況や窯体内側壁の構築物として使用された軒平瓦の観察から、四・五号窯がまず築窯され、続いて二・三号窯、六・七号窯が築窯されたことが確認されている。

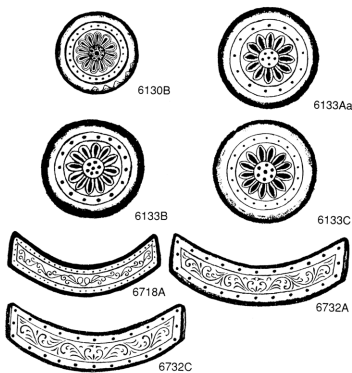
①木津川市瀬後谷瓦窯 瀬後谷瓦窯^{注23)}は、近世の新田開発によって大きく削り取られているためにその遺存状態が悪く、一・二号窯の窯体構造が明らかになるほかには、燃燒部の一部(三号窯)と削平された窯に伴う灰原を検出した。窯は瓦專業窯(管窯)と瓦陶兼業窯(管窯)がある。

軒瓦は平城宮瓦編年の第Ⅰ・Ⅱ期に属するもので、軒丸瓦 6284Ea・6298A・6316S 型式が、軒平瓦は 6640A・6664I・6668A・6700A・6679A・6671I 型式がある。また、瓦・須恵器とともに土製塔も出土している。

②木津川市市坂瓦窯 市坂瓦窯は、瀬後谷瓦窯とは低い丘陵を挟んで北西方向にある瓦窯で、それに伴う瓦工房跡が上人ヶ平遺跡である。

市坂瓦窯では谷の北東側斜面に五基、南西側斜面に三基の総計八基の平窯を確認し、そのうち窯体内の調査をおこなった二・八号窯は有畦式平窯であることが明らかとなった。^{注14)}

市坂瓦窯の調査では、窯体全体と灰原全域の調査までには至らなかったため、その出土遺物には限りがあるが、平城宮瓦編年の第Ⅳ―Ⅰ期に属し、軒丸瓦 6133Aa・6133B・6133C・6130B 型式、軒平瓦 6732A・6732C・6718A・6768D 型式が出土している。また、市坂瓦窯に関連した瓦工房である上人ヶ平遺跡からは軒丸瓦 6235Ma、軒平瓦 6225Ba・



第二-11 図 市坂瓦窯で焼成された軒瓦

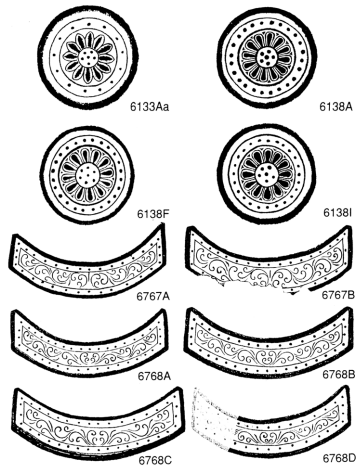
6225Bb 型式などの軒瓦が出土しており、平城宮瓦編年の第IV期で、その製品は平城宮の大膳職などから出土している。

⑬木津川市五領池東瓦窯 市坂瓦窯の南西の谷にある四基の平窯であり、その窯体構造は有畦式平窯^{註一七}である。

軒丸瓦 6133Aa・6138A・6138B・6138F・6138I 型式、軒平瓦 6714A・6716A・6767A・6767B・6768A・6768B・6768C・6768D・6732Fb 型式が出土しており、平城宮瓦編年の第IV—1—2期のもと思われる。出土瓦は音如ヶ谷瓦窯と同型式のもので、範傷の進行状況から音如ヶ谷瓦窯で使用されたのち、五領池東瓦窯に持ち込まれたことが判明している。

⑭木津川市鹿背山瓦窯 平城京の北に広がる奈良山丘陵の北東部にあり、平成一八年度の調査で、丘陵南側斜面から一号窯と二号窯の二基の瓦窯^{註一七}を検出した。ただ、瓦窯は上面輪郭、灰原もその範囲を一部掘削したもので、瓦は瓦窯の時期を決定するためのサンプル資料として取り上げたのみである。このため、窯の内部構造や灰原からの出土遺物の全容調査にはいたっていない。一・二号窯の上面での平面輪郭によると、一号窯は方形の掘形をもつ平窯で、前面隔壁は二本の円柱粘土で分煙柱をつくり、通焰孔を一部塼で構築されている。

二号窯は窖窯構造で、操業時の窯から二回の改築が焼成室でおこなわれている。第一次焼成室の煙出孔は一ヶ所存在する。第二次焼成室の煙出孔は三ヶ所。第三次焼成室の煙出孔は不明である。灰原からは重圏文の軒丸瓦、重郭文・重弧文軒平瓦などが出土している。



第二-12図 五領池東瓦窯で焼成された軒瓦

⑮井手町岡田池瓦窯 京都府綴喜郡井手町に所在し、奈良山丘陵から遠く離れるが、平城宮式瓦が出土しているためここで取り上げる。岡田池瓦窯^{注143}は発掘調査は行われていないが、奈良大学考古学研究会の踏査によると、瓦の散布状態や地形条件から三基の窯跡が想定されている。瓦は、丸・平瓦のほか、軒丸瓦6382E型式、軒平瓦6691A・6663C・6721D型式が出土しており、平城宮瓦編年の第Ⅱ・Ⅲ期に相当する。

⑯井手町石橋瓦窯 平成一四年度に発掘調査^{注144}が行われ二基の瓦窯を検出した。窯は瓦の粘土を積み上げて窯壁を築き、燃焼室と焼成室の境に段をもつ梅谷六・七号窯に近似したもので、窯体内及び灰原からは軒丸瓦6304D型式、軒平瓦6664A・6691A型式が出土しており、大安寺の創建瓦を焼成した瓦窯である。

⑰木津川市高井手瓦窯 高麗寺の北西に隣接する瓦窯^{注145}で、高麗寺との関連については明確でない。この窯からは鬼面の顔面のみを表現した鬼瓦八枚以上が窯詰め状態で発見されている。

木津川市山城町では、高井手瓦窯のほか、松尾神社境内遺跡にも軒丸瓦6382Bb型式のほか、多量の布目瓦が散布しており、瓦窯の可能性が高い。

⑱長岡京市谷田瓦窯 京都府長岡京市今里南平尾に所在する瓦窯^{注146}であり、奈良山丘陵から離れるが、最近の検討から平城宮に瓦を供給した瓦窯として位置付けられている。窯体構造は不明である。

谷田瓦窯出土軒瓦は、当初、長岡京期のものと考えられていたが、軒平瓦6732Q型式が平城宮や西大寺でも出土しており、花谷浩^{注147}は「谷田瓦窯では、はじめ西大寺の瓦窯として軒平瓦6732Q型式を生産し、長岡京の軒平瓦6732Q型式が西大寺あるいは平城宮で使用されたものが搬入されたものである」と考えている。

- 注二一 1 網干善教「高市郡飛鳥村飛鳥瓦窯跡」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第五輯) 一九五五
 網干善教「飛鳥寺発掘調査報告」(『奈良国立文化財研究所学報』第五冊) 一九五八
 大川 清「日本の古代瓦窯(増補版)」(『考古学選書』三 雄山閣出版株式会社) 一九七二
- 注二一 2 梅原末治「北白河町ノ窯址」(『京都府史蹟勝地調査報告』第四冊) 一九二三
 注二一 3 西田直二郎・梅原末治「栗栖野瓦窯址調査報告」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第一五) 一九三四
- 注二一 4 柴田 實「宇治古代登窯遺址遺」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第一四冊) 一九三三
 注二一 5 梅原末治「山田莊乾谷の瓦窯址(相楽郡)」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第一四冊) 一九三三
 平良泰久「乾谷瓦窯跡」(『精華町史』史料篇Ⅰ 精華町) 一九九〇
- 注二一 6 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部編『奈良山 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』京都府教育委員会 一九七三
- 注二一 7 大脇 潔「七塔伽藍の建設」(『古代史復元』八 古代の宮殿と寺院 講談社) 一九八九
- 注二一 8 毛利光俊彦「5仏教の開花」(『新版 古代の日本』第六卷 近畿Ⅱ 角川書店) 一九九一
- 注二一 9 杉本 宏ほか「隼上り瓦窯跡発掘調査概報」 宇治市教育委員会 一九八三
- 注二一 10 奥村清一郎・肥後弘幸ほか「平野山瓦窯跡発掘調査概報」 八幡市教育委員会 一九八五
- 注二一 11 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮発掘調査部「藤原宮と京」 一九九一
- 注二一 12 上原真人「古代の造瓦工房」(金子裕之編『古代史復原』九 古代の都と村 講談社) 一九八九
- 注二一 13 毛利光俊彦「近畿地方の瓦窯」(『仏教芸術 特集古代寺院の生産遺跡』第一四八号) 一九八三
 毛利光俊彦「建設資材の調達」(『季刊考古学』第二二号 古代の都城 雄山閣出版) 一九八八

- 注二一 14 石田由紀子「藤原宮出土の瓦」(『古代瓦研究Ⅴ』奈良文化財研究所編) 二〇一〇
- 注二一 15 注二一 12に同じ
- 注二一 16 小笠原好彦「奈良山丘陵の瓦窯」(『奈良県観光』一九九) 一九七三
- 注二一 17 黒崎直「奈良山瓦窯の構造変遷」(『奈良県観光』一九九) 一九七三
- 注二一 18 森郁夫「古代の瓦窯」(『仏教芸術 特集古代寺院の生産遺跡』第一四八号) 一九八三
- 注二一 19 森郁夫「考察 屋瓦」(平城宮発掘調査報告区「奈良国立文化財研究所」一九七八) によると、藤原宮の平瓦の平均は狭端幅28cm・広端幅31cm・長軸長35cm・重さ5.5kg、平城宮の一枚作り平瓦の平均は狭端幅17cm・広端幅21cm・長軸長26cm・重さ3.5kgという指摘がある。
- 注二一 20 上原真人は、官営瓦工房(主に中央官衙系瓦屋)の理念型として「窯業生産部門の工人が本貫地から切り離されて、消費地の近辺に集住し、専門的・継続的に造瓦にたずさわる。しかも、その製品は一定の規格のもとに、官営の営繕事業を目的として製作される」と位置づけている。
- 上原真人「基調報告 官窯の条件―律令制下造瓦体制を検討するための作業仮設―」(『北陸の古代寺院その源流と古瓦』北陸古瓦研究会編 桂書房) 一九八七
- 注二一 21 藤原 学「昭和五八年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報―七尾瓦窯跡・垂水南遺跡―」吹田市教育委員会 一九八四
- 注二一 22 山中 章「長岡京の造宮と瓦」(『長岡京古瓦聚成』向日市教育委員会) 一九八七
- 軒丸瓦は難波宮式44%・平城宮式34%・長岡宮式16%・その他6%、
軒平瓦は難波宮式35%・平城宮式49%・長岡宮式11%・その他5%
- 長岡京市谷田瓦窯で、軒丸瓦 T133C 型式、軒平瓦 7757Q・7757B 型式が、高槻市摂津萩ノ庄瓦窯で軒

丸瓦 7133G・7181 型式、軒平瓦 6775B・7785 型式²⁹⁾が生産された。

注二一 23 近藤喬一『瓦からみた平安京』教育社 一九八五

注二一 24 林 亨『大山崎町第五六次遺跡確認調査概要』（『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第三一冊 大山崎町

教育委員会）二〇〇五 大山崎瓦窯は、西賀茂瓦窯群・岸部瓦窯から瓦範の移動を受けて開始された

瓦窯で、平安宮・京、嵯峨院跡、河陽離宮推定地に瓦を供給されている。

注二一 25 吉田恵司『中山瓦窯』（『奈良観光』第一九九号）一九七三

吉田恵司・岡本東三『中山瓦窯』（『奈良国立文化財研究所年報』一九七三 奈良国立文化財研究所）

一九七四

今井 晃『中山瓦窯』（奈良文化財研究所編図説『平城京事典』椋風舎）二〇一〇

注二一 26 今井 晃『平城宮・京の瓦』（『特集平城京研究の現在』季刊考古学第一一二号 雄山閣）二〇一〇

注二一 27 平城宮・京出土軒瓦については

第Ⅰ期：和銅元（七〇八）年～養老五（七二二）年頃

第Ⅱ期：養老五（七二二）年頃～天平一七（七四五）年

第Ⅲ期：天平一七（七四五）年～天平勝宝（七五七）年間

第Ⅳ期：天平宝字元（七五七）年～神護景雲三（七七〇）年

第Ⅴ期：宝亀元（七七〇）年頃～延暦三（七八四）年をあてている。

注二一 28 原田憲二郎『奈良時代の瓦コンピナート―瓦から見た奈良山瓦窯跡―』（第二五三回「帝塚山大学市民大

学講座」発表資料）二〇一〇

注二一 29 奈良国立文化財研究所「第二号地点―押熊瓦窯の調査」（『奈良山 平城ニュータウン予定地内遺跡調査

- 概報』京都府教育委員会 一九七三
- 注二一 30 今井 晃「押熊瓦窯」(奈良文化財研究所編 図説『平城京事典』 柀風舎) 二〇一〇
 奈良国立文化財研究所「歌姫西瓦窯の調査」(『奈良山 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』京都府教育委員会) 一九七三
- 注二一 31 今井 晃「押熊瓦窯」(奈良文化財研究所編 図説『平城京事典』 柀風舎) 二〇一〇
 中島和彦「奈良山第51号窯の調査第一次」(『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成一八(二〇〇六)年度』奈良市埋蔵文化財センター) 二〇〇九
- 注二一 32 八賀 晋・西村 康「奈良山第53号窯の調査概要」(平城団地第八号遺跡調査委員会) 一九七一
 今井 晃「山陵瓦窯」(奈良文化財研究所編 図説『平城京事典』 柀風舎) 二〇一〇
- 注二一 33 奈良国立文化財研究所「奈良山Ⅲ 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報」京都府教育委員会 一九七九
- 注二一 34 平良泰久「音如ヶ谷瓦窯跡」(『木津町史』史料篇Ⅰ 木津町) 一九九四
 今井 晃「音如ヶ谷瓦窯」(奈良文化財研究所編 図説『平城京事典』 柀風舎) 二〇一〇
 奥村茂樹「法華寺阿弥陀浄土院の造営」(『佛教藝術』二五七号) 二〇〇四
- 注二一 35 奥村茂樹「平城京造営時における瓦生産」(『考古学雑誌』第九二卷第四号 日本考古学会) 二〇〇八
 藤沢一夫「屋瓦の変遷」(『世界考古学大系』日本Ⅳ 平凡社) 一九六一
 岸 熊吉「大和に於ける古代窯跡」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第一一輯 奈良県教育委員会) 一九五九
- 注二一 36 梅原末治・赤松俊秀「山田荘村乾谷の瓦窯趾」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第一四冊 京

都府) 一九九三

平良泰久「乾谷瓦窯跡」〔精華町史〕史料篇Ⅰ 精華町) 一九九〇

注二一 37 平良泰久「得所瓦窯跡」〔精華町史〕史料篇Ⅰ 精華町) 一九九〇

注二一 38 有井広幸「梅谷瓦窯跡」〔京都府遺跡調査概報〕第六八冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九六

石井清司・森島康雄編「奈良山瓦窯跡群」〔京都府遺跡調査報告書〕第二七冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九九

石井清司「梅谷瓦窯」(奈良文化財研究所編 図説『平城京事典』 柘風舎) 二〇一〇

石井清司・森島康雄編「奈良山瓦窯跡群」〔京都府遺跡調査報告書〕第二七冊(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九九

石井清司「瀬後谷瓦窯」(奈良文化財研究所編 図説『平城京事典』 柘風舎) 二〇一〇

注二一 39 石井清司・森島康雄編「奈良山瓦窯跡群」〔京都府遺跡調査報告書〕第二七冊(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九九

石井清司「瀬後谷瓦窯」(奈良文化財研究所編 図説『平城京事典』 柘風舎) 二〇一〇

石井清司・森島康雄編「奈良山瓦窯跡群」〔京都府遺跡調査報告書〕第二七冊(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九九

注二一 40 森島康雄「市坂瓦窯」〔京都府遺跡調査概報〕第六一冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九五

森島康雄「市坂瓦窯跡」〔京都府遺跡調査概報〕第六八冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九六

石井清司「市坂瓦窯」(奈良文化財研究所編 図説『平城京事典』 柘風舎) 二〇一〇

石井清司・森島康雄編「奈良山瓦窯跡群」〔京都府遺跡調査報告書〕第二七冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九六

石井清司「市坂瓦窯」(奈良文化財研究所編 図説『平城京事典』 柘風舎) 二〇一〇

石井清司・森島康雄編「奈良山瓦窯跡群」〔京都府遺跡調査報告書〕第二七冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九六

石井清司「市坂瓦窯」(奈良文化財研究所編 図説『平城京事典』 柘風舎) 二〇一〇

注二一 41 石井清司・森島康雄編「奈良山瓦窯跡群」〔京都府遺跡調査報告書〕第二七冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九六

調査研究センター） 一九九九

有井広幸「五領池東窯跡群」〔京都府遺跡調査概報〕第七九冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）
一九九七

石井清司「五領池東瓦窯」（奈良文化財研究所編 図説「平城京事典」 椋風舎） 二〇一〇

注二一 42 竹原一彦「鹿背山瓦窯跡第一次調査」〔京都府遺跡調査報告集〕第二六冊（財）京都府埋蔵文化財調

査研究センター） 二〇〇八

注二一 43 山田良三「京都府綴喜郡井手町の先史遺跡」〔立命館文学〕三一六 一九七一

奈良大学考古学研究会「文化財保護問題に関する一考察―京都府井手町における実情―」〔盾列〕五号
奈良大学考古学研究会） 一九七九

京都府立山城郷土資料館「山城の古瓦」 一九三三

常磐井智行「井手岡田池瓦窯出土瓦」〔京都考古〕第三一号 一九八四

注二一 44 内田真雄「石橋瓦窯跡発掘調査概報―平成一四年度―」〔井手町文化財調査報告〕第四集 井手町教育
委員会） 二〇〇〇

注二一 45 中島 正「遺跡の位置と環境」（史蹟高麗寺跡）山城町教育委員会） 一九八九

京都府立丹後郷土資料館「京都府の古瓦」 一九七三

注二一 46 小田桐淳「右京第144次(TANIMO地区)調査概報」〔長岡京市埋蔵文化財センター年報―昭和五八年度〕
（財）長岡京市埋蔵文化財センター） 一九八四

木村捷三郎「長岡京所用瓦雑感―官窯を中心に―」〔長岡京古瓦聚成〕向日市教育委員会） 一九八七

注二一 47 花谷 浩「考察 軒丸瓦の変遷」〔平城京発掘調査報告XⅢ〕奈良国立文化財研究所） 一九九一

初出：「第二節 奈良山丘陵の瓦窯」「第一節 宮都と瓦窯の展開」（『奈良山瓦窯跡群』（『京都府遺跡調査報告書』第二七冊）（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 一九九九

第二節 奈良山丘陵における瓦窯構造について

一・瓦窯の各部位の名称

飛鳥寺の瓦を焼成した飛鳥寺瓦窯以降、平安宮造営に関わった栗栖野瓦窯群までの発掘調査成果を略述してきた。瓦窯は飛鳥時代の須恵器窯に近似した窖窯から、もっぱら瓦を焼成するために造られた平窯へと窯体構造が変化するが、この変遷過程で奈良山丘陵の瓦窯が大きく関わったことが明らかである。

ここでは、窯の構造変遷について詳述していきたい。

瓦窯の各部位の名称

瓦窯の呼称には登(窖)窯、平窯、平窯風登窯、ロストル(有畦)式平窯、さらに地下式、半地下式などと呼称されてる。

瓦窯の場合、窯全体の構築に際しては、丘陵をトンネル状に削り抜くもの(地下式)と当初は天井部を設けずに、溝状に掘り窪めた後、竹や樹木でアーチ状に組み上げたのちスサ入りの粘土で天井を構築したもの(半地下式)がある。半地下式構造のものには、掘削した地山の掘り込みをそのまま利用するものと、その内側に瓦や粘土で窯壁を構築するものがある。

それぞれの窯は、築窯当初のものから、瓦あるいは粘土を積み上げて一部焼成部床面を改変したものがあ
る。ここでは埴輪窯の記述と同様、築窯当初の床面を第一床面、そのうち、改変されるごとに第二床面、第三床面として記述を行う。

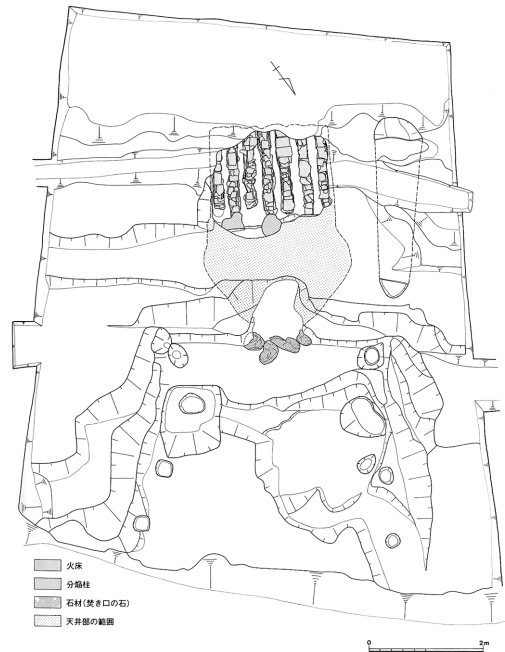
古代の瓦窯は、窖窯と平窯に大別されているが、私見では、後述するように一般の須恵器焼成窯に近い

窖窯で、焼成部床面の主軸長が幅に対して長く、焼成部床面の傾斜角が20度以上のもの(窯Aタイプ)。一般の須恵器焼成窯に近い窖窯で、焼成部床面の傾斜角が20度未満、焼成部床面の主軸長に対して幅が広いもの(窯Bタイプ)。焼成部が方形に近い平窯で、床面には粘土や瓦で構築した火床(畦)がない無畦式のもので、分焰柱を有するが明瞭な隔壁のないもの(窯Cタイプ)。焼成部が方形に近い平窯で、床面には粘土や瓦で構築した火床(畦)がある有畦式で、燃焼室と焼成室の境に分焰柱や通焰孔があり、明瞭な前面隔壁を有するもの(窯Dタイプ)に大別できると考えている。

窖窯・平窯は、大きくは前庭部・燃焼部(室)・焼成部(室)・煙道(排煙)部に分かれる。

a 前庭部 前庭部は、窯本体よりも前面に広がる平坦部で、焼成時には燃料であるマキ(あるいは炭)を仮置きするとともに、焼成後には一部製品を取り出すための作業空間で、多くの場合、燃焼部から掻き出された炭や灰の堆積(灰原)がある。

前庭部については、その変遷を追うだけの資料がないが、木津川市市坂瓦窯(第二―13図)のように方形の掘り込みをつくり、覆屋があったものと思われるものもある。



第二―13図 木津川市市坂瓦窯 前庭部

b 燃烧部(室)

マキあるいは炭を入れて焼く空間。燃烧部は前面を刳り貫くか、掘り窪めたもので、焚

口部は河原石・埴・瓦を組み合わせて間口を狭くつくっている。焚口部が完存していた市坂2号窯では、焚口部の内法高35cm、幅60cmを測る。須惠器窯のように燃烧部と烧成部の境に段差を有する階があるが、その境が明瞭でないものを「燃烧部」、燃烧部と烧成部が隔壁によって明確に分かれるものを「燃烧室」と呼称する。

c 烧成部(室)

成形された生瓦を据え、烧成する空間。隔壁・分焰柱の存在によって燃烧部との境が明

瞭であるものを「烧成室」と呼称する。烧成部床面には第一章で記したように、埴輪片を床の傾斜面と生製品の間にはめて生製品を置きやすくしているが、瓦は埴輪のように大ききの差異が少ないため、烧成部床面に段を造り付けているものが多い。烧成部床面の段は粘土や瓦を利用して、生瓦が立てやすいように幅数10cm以上の平坦部(段)を設けている有段式と水平な平坦面をもたない無段式がある。

窯の主軸に並行する壁を側壁、燃烧部から煙道部をみて右側を右側壁、左側を左側壁とする。また窯の主軸に対して直交する面で、燃烧部から離れた壁を奥壁とする。奥壁の背後には空氣の調整、排煙のための排煙孔を有するものがある。

マキ(あるいは炭)を入れて焼く燃烧部は前面に焚口部があり、埴や平石によって40cm程度の焚口部を設けている。生製品を置く烧成部の境には段を持たない無階式と比高差数十センチの段差をもつ有階式があり、多くの場合、燃烧時に生じた炭・灰が堆積している。

製品を置く烧成部は、有階の場合には燃烧部の段の上面、無階の場合には烧成部と燃烧部の境が不明瞭であるが、炭・灰が堆積していない部分から烧成部とみる場合が多い。

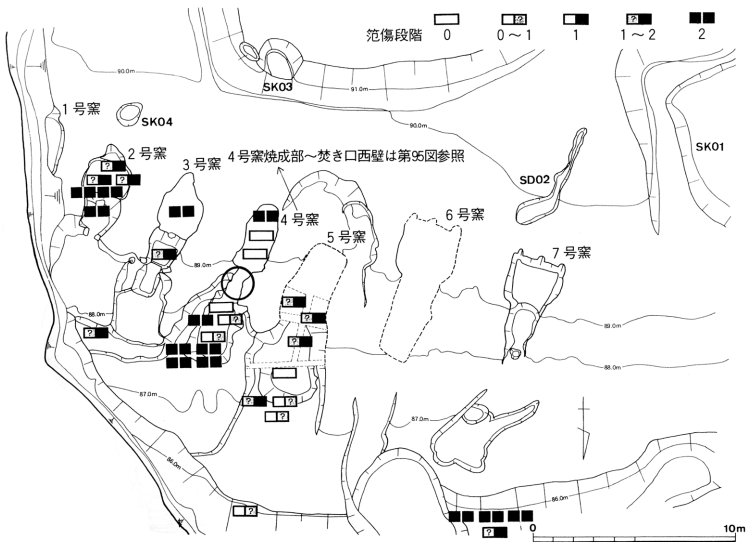
烧成部と煙道部の境も不明瞭な場合が多いが、床面が大きく傾斜、立ち上がる部分までを言うが、木津川市梅谷瓦窯・瀬後谷瓦窯などでは後述するように、丸・平瓦や粘土で築かれた後面隔壁をもつものがあり、

その後面隔壁までを焼成部とした。

焼成部・煙道部と焼成部を限る隔壁は、焼成部内にて
 できるだけ火が煙道部へ逃げないようにするための施設
 で、須臾器窯や埴輪窯の場合、その検出例はないが、梅
 谷瓦窯では丸・平瓦や粘土で10cm四方の通焰孔を設ける
 後面隔壁を造っている。

d 隔壁 窯A・窯B・窯Cタイプでは不明瞭あるいは
 存在しない可能性が高いもので、窯Dタイプの有畦式
 平窯に存在する。

隔壁は、焼成室と焼成室の境にあるものを「前面隔壁」、
 焼成部と排煙部の境にあるものを「後面隔壁」と仮称す
 る。隔壁は、床面から天井部にむかって粘土や瓦を積み
 上げて壁をつくるもので、前面隔壁の存在によって、窯
 で焼かれた製品が焼成室から取りだすのか、焼成室の天
 井部を毀して取りだすのかがわかる。この前面隔壁の下
 位には焼成室からの火を分散させる複数の「分焰柱」と、
 その柱の間には焼成室からの火を取り入れる「通焰
 孔」がある。分焰柱や通焰孔の構築には地山を削り貫い
 たもの（市坂瓦窯）のほか、瓦や粘土などで構築したも



第二 - 14 図 梅谷瓦窯 遺構全体図

のがある。

e 煙道部(排煙部) 焼成部に止まった火力を排出するとともに空気の取り入れ、温度調整をおこなう空間・施設である。煙道部で通風・排煙をおこなうための穴を「排煙孔」と呼ぶ。

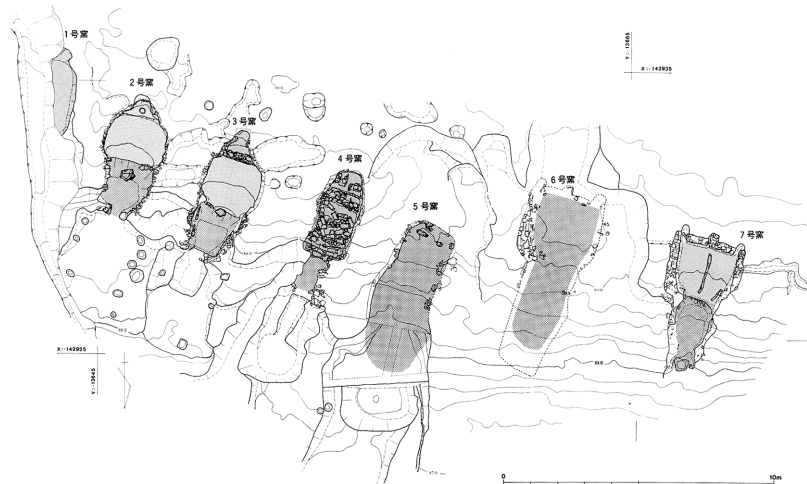
二・梅谷瓦窯の調査

A・各窯の概要

第二章第一節では、奈良山瓦窯群におけるこれまでの発掘調査成果を略述した。

前述のように平城ニュータウン造成計画内の確認調査によつて奈良山瓦窯群の様相がわかりつつあったが、昭和六〇年から始まった木津地区所在遺跡群の調査によつて木津川市梅谷瓦窯、同瀬後谷瓦窯、同市坂瓦窯、同五領池東瓦窯・同鹿背山瓦窯の調査がおこなわれ、特に梅谷瓦窯では、奈良山瓦窯群における窯体構造の変遷が追える有効な資料を得ることができた。ここでは、梅谷瓦窯で検出した七基の瓦窯の調査成果^{注149}を詳述して瓦窯の変遷を検討していきたい。

梅谷瓦窯は、奈良山丘陵の東部から北に向かつて分岐する丘陵の先端で、標高80～90mの丘陵斜面に立地する。窯の立



第二-15図 木津川市梅谷瓦窯 窯配置

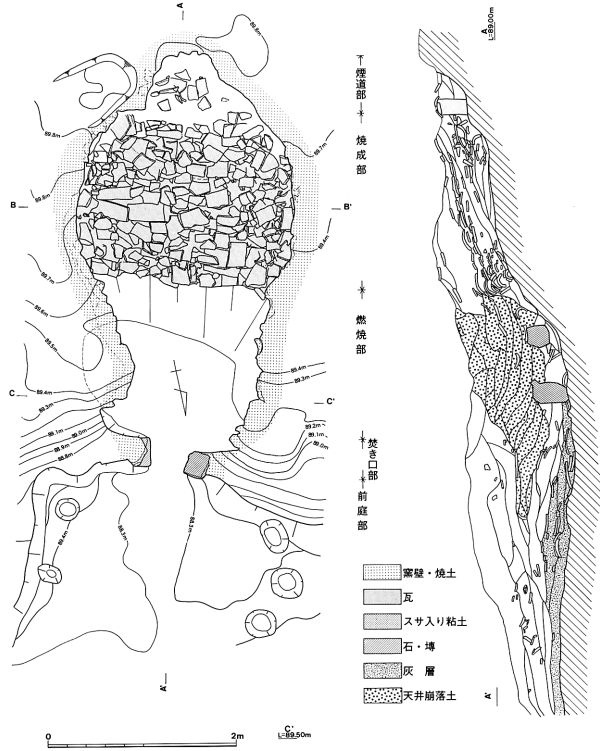
地する丘陵斜面の大部分は黄灰色系砂質土からなるが、標高89～90m付近でわずかに粘土～シルトの堆積があり、この粘土～シルト層を選んだかのような位置に窯が築かれている。

調査対象地の東端にある一号窯が、近接した集落によってその東半部が削り取られているほかは、窯は良好な状態で遺存していた。また、発掘調査により七基は、窯体構造の異なる瓦窯が2基一対になっていることが明らかとなった。

① 梅谷一号窯

梅谷一号窯は、前述のように東半部は削平されており、わずかに焼成部と煙道部の一部が遺存しているのみであった。このため、窯の全体構造は明らかでない。

焼成部床面は、床面傾斜角約7度と水平に近く、後述する梅谷二号窯の床面傾斜に近い。煙道部は焼成部床面から約85度と急角度で立ち上がり、梅谷二・三号窯とは異なる。後面隔壁の有無については遺存状態が悪く不明である。梅谷一号窯は地山を掘り込んで構築されており、側壁および床面にわずかに粘土が貼り付



第二-16図 梅谷二号窯 第3床面実測図

けられている。半地下式窖窯の場合、天井部にスサ入り粘土を使用する例が多いが、一号窯では窯体内の崩落した土にスサ入り粘土が含まれていることから、半地下式構造の窖窯と思われる。

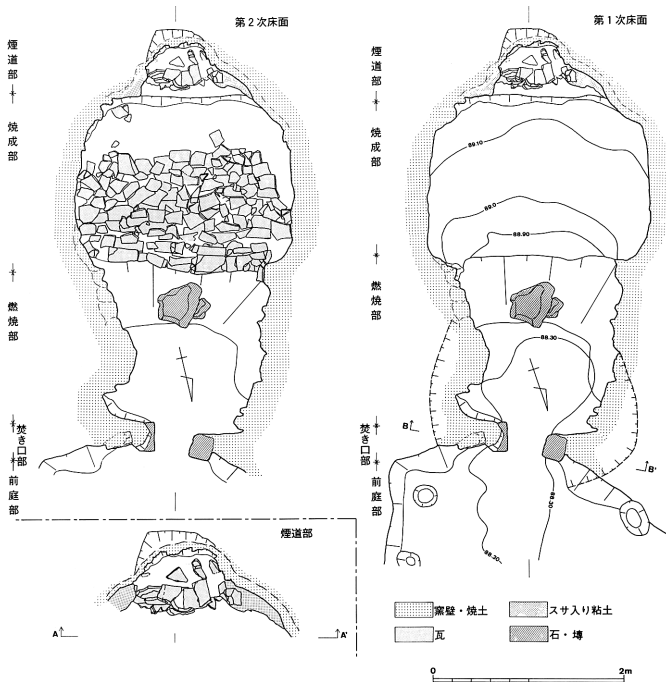
② 梅谷二・三号窯(第二―16・17・18図)

梅谷二・三号窯の焼成部は、楕円あるいは方形の平面形態を呈し、二回ないし三回の床面補修・改修が行われている。

操業当初の床面は、床面傾斜角10度にも満たないもので、わずかに粘土を貼り付けていた可能性もあるが明確ではない。

第二・第三床面は、瓦や炭を含む土や粘土で高上げをした後、瓦を粘土で塗り込めて床面を成形している(梅谷二号窯第二床面)。第二床面の上面には、さらに半截した平瓦を敷き並べた第三床面を形成し、床面傾斜角を高めている。

梅谷二・三号窯とも、第一床面での、煙道

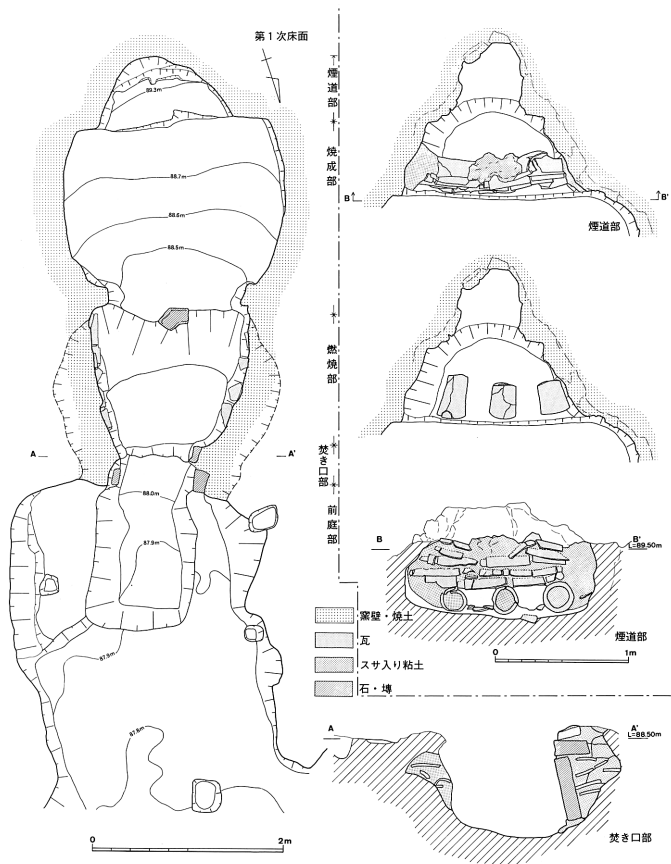


第二-17図 梅谷2号窯 第1・第2床面実測図

部と焼成部を限る後面隔壁は明らかではないが、第二・第三床面での後面隔壁は遺存しており、その一端を知ることができる。

梅谷二号窯の第二床面の後面隔壁は、軒平瓦二枚を瓦当面向上に向けて両側壁に立て、軒平瓦二枚の間には半截前の丸瓦を一本立てている。軒瓦と丸瓦の間、二ヶ所が通煙孔となる。

一方、梅谷三号窯(第二一八図)の第二床面では、同様の土管で内側に粘土を込めたものを両側壁に接するように、もう一本は窯の主軸に平行するようにして三本を寝かせて据え、それを支柱として上面に丸瓦を積み上げている。通煙孔は粘土を込めた土管ではなく、土管と土管の間の隙間二ヶ所となる。このような後面隔壁の施設は管見では知らず、後面隔壁が定着する以前の工夫・思考錯誤のあらわれと思われる。



第二一八図 梅谷3号窯 第1床面実測図

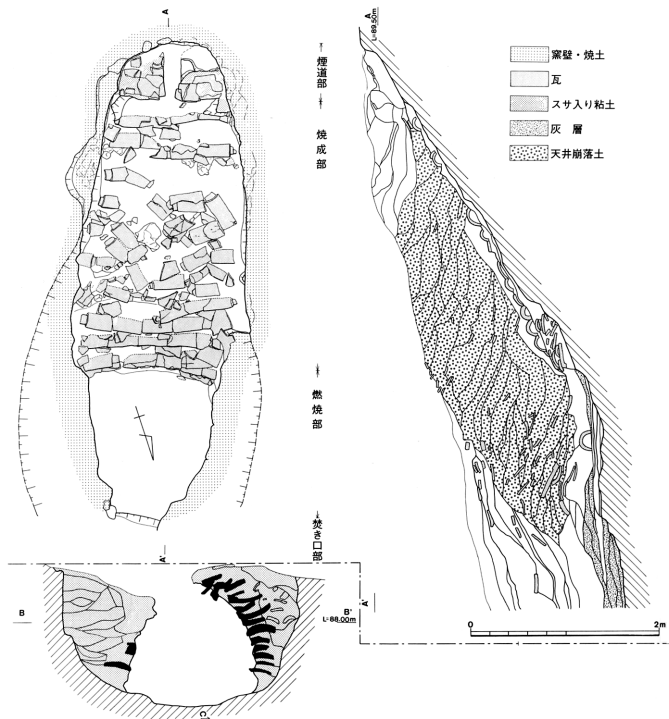
梅谷二・三号窯の燃焼部と焼成部の境にはわずかな段差(階)があり、その中央には平石が据えられている。この平石付近には、スサ入り粘土が付着した瓦を検出しており、平石が分焰柱の基礎部分であったと思われる。

燃焼部側壁には何回かの補修があり、瓦を含む粘土で塗り込められている箇所もある。

焚口部には埴(三号窯)や花崗岩の切り石(二号窯)を使用している。前庭部では灰原を除去した面で数ヶ所のピットを検出しており、前庭部と焚口部を覆う覆屋があったものと思われる。

③ 梅谷四・五号窯

梅谷四・五号窯は、窯体幅に対して主軸長が長いもので、焼成部床面は窯の主軸に直交するように丸瓦を並べて段を成形している。同じ構造のものには瀬後谷一・二号窯がある。瀬後谷一号窯では、丸瓦を利用して段を設ける焼成部第二床面から、第三床面ではさらに半截した平



第二-19図 梅谷4号窯 実測図

瓦を並べて床面を造っている。

梅谷四号窯(第二—19図)では、焼成部奥には煙道部を分ける後面隔壁がある。この後面隔壁は、両側壁に接するようになら、一對の平瓦を積み上げた後、積み上げられた両瓦に架けるように平瓦をのせたもので、積み上げた平瓦の間が通煙孔となっている。同様の後面隔壁の構造は瀬後谷二号窯でもある。

燃焼部側壁は、操業時に崩落したためか、補修作業が確認できる。この補修作業は、床面から七段目までは、瓦当面を焚口部方向に向けて積み上げ、その上部では天井部を持ち送るために瓦当面を燃焼部中央に向けるように積み上げている。

なお、梅谷五号窯は、当初から保存対象となったため、その上面での窯の輪郭を検出したのみであり、後面隔壁の有無、焼成部床面の状況は明らかでない。

④ 梅谷六・七号窯(第二—20図)



第二—20図 梅谷7号窯 実測図

梅谷七号窯の焼成部の平面形は方形で、掘形をもち、側壁及び奥壁は瓦と粘土を積み上げて成形している。焼成部床面は、梅谷二・三号窯と同様、炭を含む土と瓦の碎片を床面に敷き詰めている。ただ、市坂瓦窯や五領池東瓦窯のような畦はない。築窯当初の床面は地山が露出しており、この床面では瓦を焼成しなかったものと思われる。

燃焼部と焼成部の境には明瞭な段差(階)があるが、梅谷二・三号窯のような分焰柱や市坂瓦窯・五領池東瓦窯のような前面隔壁はない。粘土と瓦で積み上げた奥壁には、中央および両側壁に接して3ヶ所の通煙孔がある。梅谷六号窯も窯の上面を検出したのみであるが、西側に隣接した七号窯と同じ構造の窯と思われる。

B. 各窯の先後関係

梅谷瓦窯の調査では、現地の調査段階から一部保存が検討されていたため、全面にわたって窯体の断ち割り作業を行っていない。このため、築窯方法・築窯順序など詳細な検討を行うだけの資料はないが、一部、窯体や灰原・周辺の遺構の状況から築窯順序を推定することができる。

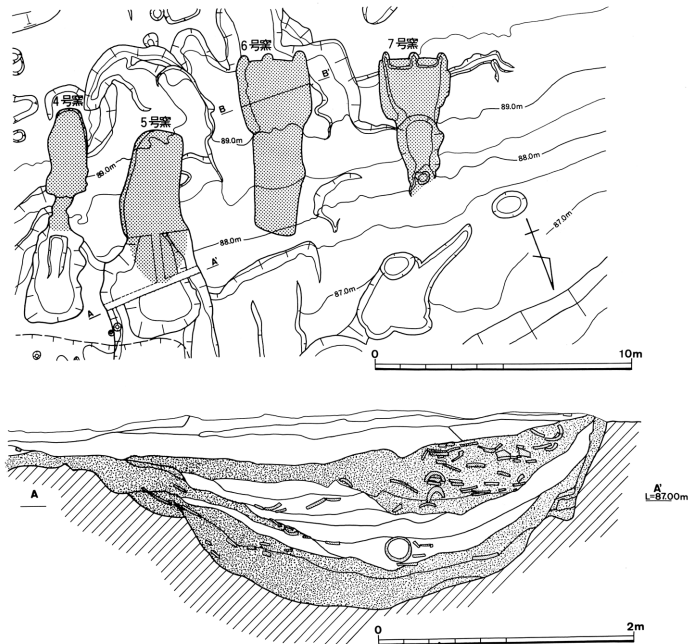
梅谷四・五号窯の前庭部で、一部断割作業をおこなった結果、地山の上面には黄褐色粘質土層(1層)とその上面に炭層(灰層1)があり、さらにその上面に黄褐色粘質土層(2層)と炭層(灰層2)が堆積していた。黄褐色粘質土層(1層)は、窯(梅谷四・五号窯)を構築する際に生じた排土で、谷地形を整地して前庭部を形成し、その操業で発生した灰原が灰層1と思われる。黄褐色粘質土層(2層)はこの周辺では少ない良質の粘土を含んでおり、その堆積状況から梅谷二・三号窯の構築時に生じた排土と考えられる。そして灰層2は梅谷二・三号窯の操業時の炭層と考えられる(第二―21図)。

このように梅谷4・5号窯の前庭部の堆積状況から、四・五号窯が先行して構築・操業され、続いて二・三号窯が構築・操業されたと推測できる。

梅谷六・七号窯と梅谷四・五号窯の前後関係を示す資料はないが、梅谷七号窯の窯壁に使用された瓦が、梅谷六・七号窯とは別の窯で焼かれた瓦を利用したと仮定すれば、梅谷四・五号窯、あるいは梅谷二・三号窯で焼かれた瓦と想像できる。

梅谷六号窯と梅谷五号窯の上面は、焼土塊や瓦片を含んだ土坑状の落ち込みがある。この落ち込みが窯の構築・補修に使用する粘土を採取した粘土採掘穴で、採掘後は二・三号窯で生じた焼土塊・瓦を廃棄するために利用したと考え、六・七号窯が二・三号窯に先行する可能性がある。

梅谷瓦窯出土の軒瓦のうち、軒平瓦6671A型式には范傷のないもの（范傷0段階）のほか、外区右下の外縁に范傷がある范傷1段階のものと、さらに左下の外縁に范傷が加わった范傷2段階のものがある。



第二-21図 梅谷5号窯 前庭部東西断面図

軒平瓦 6671A 型式の範傷段階別の窯出土状況を見ると、四・五号窯では崩落した焼成部を修復するために使用された軒平瓦 6671A 型式は範傷 1・2 段階のものが上半部で出土しているが、下半部では範傷 0 段階である。一方、二・三号窯では範傷 1・2 段階、六・七号窯の灰原でも範傷 1・2 段階となる。

これらのことから類推すると、梅谷瓦窯では四・五号窯が先行して築窯・操業を開始し、六・七号窯、二・三号窯へと展開していくが、四・五号窯の操業を停止することなく、ある時期には六基あるいは一号窯を含めた七基以上の窯で同時期に操業していたものと思われる。なお、軒丸瓦 6301A・6301D 型式・軒平瓦 6671Aa・6671Ab・6671E・6671K・重郭文型式は平城宮瓦編年の第 1—2 期までの資料である。

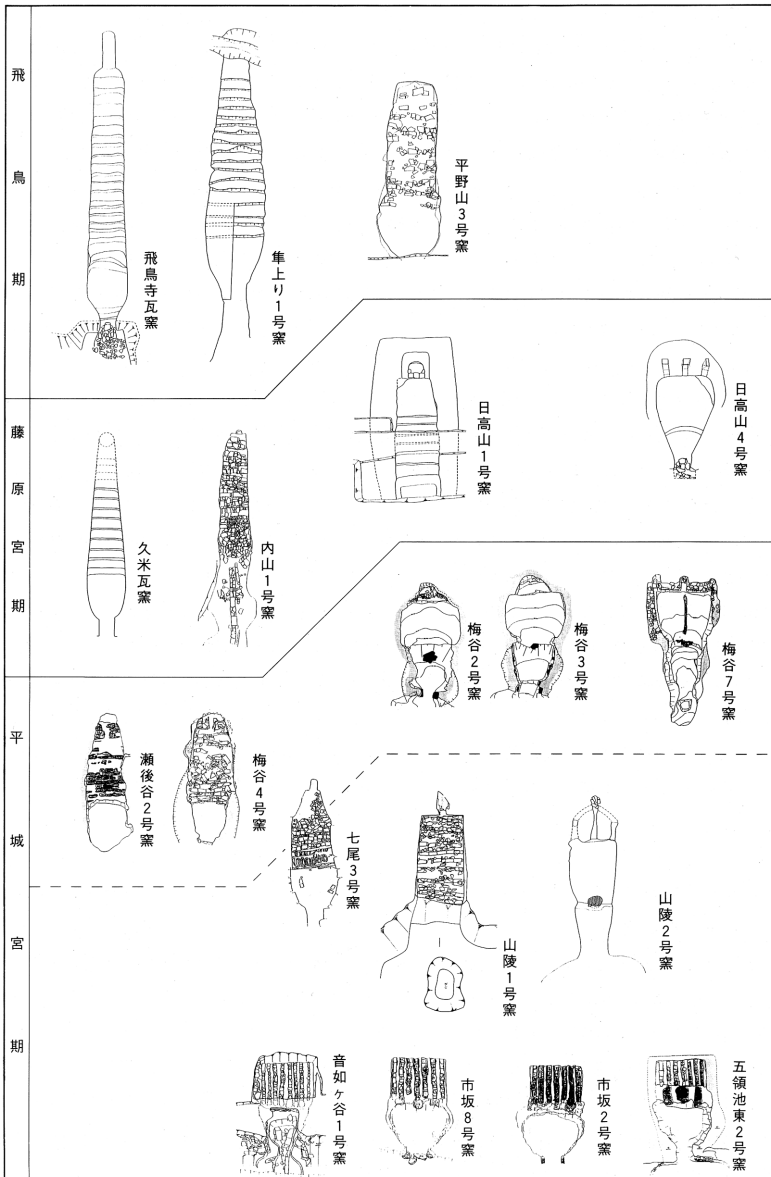
C. 梅谷瓦窯での窯体構造の変遷

奈良山丘陵における瓦窯の窯体構造は大きくは四タイプに分類できることは前述した。

窯 A タイプは、いわゆる地下式あるいは半地下式構造の管窯で飛鳥寺瓦窯以降、7 世紀段階から続く窯構造に近似しているもので、梅谷四・五号窯、瀬後谷二号窯がある。7 世紀段階の瓦窯では後面隔壁の類例を知らないが、梅谷四・五号窯や瀬後谷二号窯では平瓦を利用した後面隔壁がある。

窯 B タイプは、前庭部・焼成部・煙道部に分かれていることは基本的には A タイプの窯と同様である。ただ、焼成部床面は床面積に対して主軸長が短いものである。窯 B タイプの梅谷二号窯焼成部の長さは 1.97 m、梅谷三号窯は 1.77 m を測るが、窯 A タイプの梅谷四号窯は 3.82 m である。一方、焼成部幅は窯 A タイプの梅谷四号窯の 1.76 m に対して窯 B タイプの梅谷二・三号窯とも 2.28 m と広くなる。

梅谷四号窯のような主軸の長い窯 A タイプは、煙道部近くまで火を回すには多量の燃料、火力が必要であるが、梅谷三号窯のような主軸長が短い窯 B タイプは、火力が行きわたり、燃料も少なくてすむ利点がある。



第二-22図 宮都の主な瓦窯変遷図

その反面、床面を短くした窯Bタイプでは、製品の焼ける焼成部の床面積（生産量）は小さくなる。それを解消するために新たに焼成部を両側に掘り広げて床面積を拡張（梅谷四号窯では焼成部床面積4.4㎡に対して三号窯では4.0㎡）したものと思われる。

第一床面で、平瓦を主体に第一段目のみを並べたとすれば、梅谷四号窯の場合、四九八枚を並べることができるが、梅谷二・三号窯では三七七枚・四三九枚を並べることができる。ただ、焼成部の幅を広げると側面付近では火の回りが十分でないために、燃焼部と焼成部の境に分焰柱を設けて、側面にも火が効率よく回るように工夫を加えたものと思われる。

焼成部床面は、窯Aタイプに比べて窯Bタイプは傾斜角がゆるい。築窯当初の床面は平坦な床面を造っているが、改変された床面では火の引きを良くするために、粘土や瓦を利用して床面にやや傾斜をもたせている。焼成部と煙道部の境には、粘土あるいは瓦を利用して後面隔壁を造り、焼成部に火がこもるように造られている。

窯Bタイプの成立には、他地域からの影響も考えられるが、梅谷瓦窯の工人独自の工夫で考案された可能性がある。これは、焼成部に数回にわたって床面の改変をおこなっていること、周辺地域を含めてあまり例のない瓦窯構造であり、瓦窯構造の試行錯誤の結果生まれたものと思われる。

窯Cタイプは、掘形が明瞭であり、側壁および奥壁には粘土や瓦を積み上げて壁を造っている。焼成部の平面形態は方形を呈し、焼成部床面には後述するような火床（畦）はなく、粘土や瓦を敷き詰める程度である。燃焼部と焼成部の境には窯Bタイプと同様、明瞭な段差（階）をもつが、後述する窯Dタイプのような分焰柱を数本立て、燃焼部と焼成部をかぎる前面隔壁はない。煙道部は、奥壁に10cm四方で数ヶ所の通焰孔がある。

梅谷六・七号窯の状況から、焼成後の製品は燃焼部から取り出すか、焼成部の天井を壊して取り出したも

のかは判然としない。

窯Dタイプは、焼成室・燃燒室の平面形態は窯Cタイプと同じであるが、焼成室床面には瓦と粘土を積み上げて火床(畦)をつくり、焼成室・燃燒室の境には数本の分焰柱を立てた前面隔壁がある。煙道部は奥壁にはなく、天井部にあったものと思われる。焼成後の製品は燃燒部から取り出したものと思われる。

以上のように、梅谷瓦窯では、梅谷四・五号窯の窯Aタイプ、梅谷一・二・三号窯の窯Bタイプ、梅谷六・七号窯のような窯Cタイプがあり、梅谷瓦窯では築窯されていない市坂二・八号窯・五領池東一・二・三号窯が窯Dタイプとある。

三・奈良山瓦窯群での窯体構造

飛鳥寺瓦窯は、全長10.1mを測る。焼成部には地山を階段状に成形した段を二〇段設けている。焼成部と燃燒部の境には高さ1.8mの高低差をもつ階があり、大川清の分類注150によると「地下式有階有段登窯」で、前述の分類では窯Aタイプである(第二―22図)。

大和豊浦寺へ瓦を供給した宇治市隼上り瓦窯では、一・三号窯が焼成部と燃燒部の境に高低差約20～30cmの低い段差(階)があり、焼成部にも一四段程度の段を設けている。同じく四天王寺創建瓦を焼いた八幡市平野山瓦窯も焼成部に段を設けている。ただ、平野山瓦窯では、燃燒部が削平されており、階は明確でない。これら7世紀代の窯は窯Aタイプである。

このように、7世紀代の瓦窯は、長さに対して幅の狭い窯Aタイプで、焼成部と燃燒部の境には階を、焼成部には瓦を多く焼成するために一〇段以上の段を設けており、同時期の須恵器窯を瓦が焼成しやすいように一部改良したものである。なお、焼成部と燃燒部の境には後述するような分焰柱はない。

7世紀の前半段階では寺を中心に瓦が供給されたが、瓦窯の総数としてはさほど多くなく、総数や規模が拡大するのは7世紀末の藤原京の造営以降である。

藤原京の造営に伴う瓦窯には、天井部の遺存状態が良好な形で検出された大和郡山市内山瓦窯(一号窯)^{注151}をはじめ、橿原市久米瓦窯などがある。これらの瓦窯は、燃焼部と焼成部の段差の有無の違いはあるが、いずれも窯Aタイプである。

一方、四基の窯を検出した橿原市日高山瓦窯では、7世紀代から続く窯Aタイプとともに、焼成部の平面形態が逆台形で、窯壁には日干し煉瓦を使用した窯Cタイプがある。

藤原京につづく平城京では、前述のように奈良山丘陵に瓦窯が点在し、丘陵の西側では宮城へ、丘陵の東側では京域や特定寺院へ瓦を供給するための窯が築かれている。奈良山丘陵で古く位置づけられる瓦窯として中山瓦窯がある。

中山瓦窯では、梅谷瓦窯の分類によると、焼成部に窯の主軸に直交するように半截した平瓦を並べて階段状に造っている窯Aタイプ(一号窯・四一A窯・六一A窯・七号窯)と階段状に造っていない窰窯(四一B窯・五号窯)、窰窯的な平窯の窯Bタイプ(二号窯か・三号窯か)がある。また、掘形をもち、日干し煉瓦を積み上げて側壁をつくり、奥壁には3ヶ所の煙道を設けている窯Cタイプ(六一B号窯)がある。

歌姬西瓦窯は、平城宮瓦編年の第Ⅱ―1期から平城宮瓦編年の第Ⅱ―2期に位置づけられる瓦窯で、四号窯は焼成部と燃焼部の境に段差(階)があり、分焰柱を設けている。歌姬西瓦窯については窯Bタイプか窯Cタイプのいずれかと思われるが、なお検討を要する。

山陵瓦窯は、平城宮瓦編年の第Ⅱ―2期と平城宮瓦編年の第Ⅲ―2期で、重複関係のあるものを含めて三基の窯を検出した。I号窯は二回にわたって補修を行い、最終床面では丸瓦を横に並べて一〇段の段を造っ

ている。側壁は日干し煉瓦を使用し、奥壁は中央で平瓦を立てて幅25cm・高さ30cmの通煙孔を設けている。

Ⅱ号窯は、掘形をもつ平窯で、Ⅲ号窯の上面に再構築されたものである。焼成部床面には畦などの施設はなく、燃焼部と焼成部には段差(階)があり、その上面には軒平瓦を数枚あわせて芯にした分焰柱がある。奥壁は焼成部床面から10cm上で三本の煙道部があり、上方で一本にまとまっている。Ⅲ号窯は、焼成部床面に階段状施設があり、床面傾斜角は約22度を測る。

山陵瓦窯は、前述の分類ではⅠ・Ⅲ号窯は窯Aタイプと恐れ、Ⅱ号窯は窯Cタイプの可能性もあるが、分焰柱の存在から窯Bタイプにあたるものと思われる。

奈良山第51号窯は、方形の掘形を有し、後面隔壁と焼成部側壁に半截された瓦を積み上げた壁面を成形しているが、燃焼部と焼成部には前面隔壁をもたない窯Cタイプである。

音如ヶ谷瓦窯は、四基とも前述の五領池東瓦窯に近似しており、焼成室には火床(畦)を、燃焼室と焼成室の境には前面隔壁をもっている。同じ構造のものには歌姫瓦窯^{注152}がある。

奈良山丘陵ではないが、後期難波宮の補充瓦を供給したといわれている吹田市七尾瓦窯がある。

七尾瓦窯では七基の窯を検出し、二号窯は燃焼部と焼成部の境の段差(階)が高く、焼成部では粘土や瓦を利用して段を造っている。三号窯は平面形態が「舟形」で、二号窯の焼成部床面の傾斜が40度に対して三号窯は、17〜19度とゆるく造られている。また、七号窯は焼成部床面の傾斜角が2度の「平窯構造」である。一〜六号窯は登窯と記されており、窯Aタイプに属するが、三号窯は窯Bタイプになる可能性がある。七号窯も梅谷一号窯に近似した窯Bタイプと思われる。出土瓦は難波宮6303型式軒丸瓦と、難波宮6664B型式軒平瓦である。

以上、奈良山瓦窯を中心とした瓦窯の窯体構造について以下のように大別できる。

窯Aタイプ 梅谷四・五号窯、中山瓦窯（階段式登窯四基）、瀬後谷一・二号窯

窯Bタイプ 梅谷二・三号窯、山陵二号窯、奈良山第51号窯、歌姫四号窯、瀬後谷一号窯

窯Cタイプ 梅谷六・七号窯、石橋瓦窯、日高山四号窯

窯Dタイプ 音如ヶ谷瓦窯、市坂瓦窯、五領池東瓦窯、歌姫瓦窯

四・窖窯から平窯への変遷

奈良山瓦窯群の瓦窯構造について分類をおこなった。そのうち、窯Bタイプは、瓦と須恵器を併用して焼成する窯Aタイプから、瓦のみを焼成する瓦專業窯へと構造を変えたものである。窯Bタイプの窯を考案した段階は、瓦工人が試行錯誤をくり返した段階であり、その結果、多種多様な構造のものが生まれる。窯Cタイプは窯Dタイプの先行形態で、これまでの須恵器窯の工人とは異なった瓦工人によるものと想像しており、この構造の窯の類例は少ない。窯Dタイプは奈良時代、特に平城宮瓦編年の第Ⅲ期のいずれかの時期に考案され、長岡京・平安京の造営に際しても同様の窯構造のものが使われ、わが国で、一定の定着をみた古代瓦窯構造である。

窯Dタイプの瓦窯構造の定着を、古代における一定の構造変遷での到達点と仮定すると、その変遷過程がどのようなものであったのかをその部位ごとに検討していく。

①奈良山瓦窯における各部位の構造変化

奈良山丘陵のある瓦窯の構造変化・変遷を各部位の変化が明瞭なa…隔壁・分焰柱・通焰孔、b…焼成部床面、c…煙道部（排煙部）の三項目で検討していく。

a…隔壁・分焰柱・通焰孔 隔壁は操業終了後に毀されるか、後世の攪乱、削平される例が多く、その遺

存状態が明瞭なものが少ない。特に窯Dタイプの類例が多いが、窯A・B・Cタイプではその構造が明確でないのが現状である。ここでは、隔壁の一部である分焰柱の位置を含めて、その変化を検討する。

窯Aタイプの梅谷四号窯、瀬後谷二号窯では、分焰柱の痕跡を示す遺構がなく、分焰柱は存在しなかったと想像している。7世紀段階の窯Aタイプでは、基本的に分焰柱はなかったものと思われる。分焰柱は藤原京所用瓦窯の可能性がある大和三堂山二号窯^{注153}での存在が指摘されており、分焰柱の初源と思われる。

窯Bタイプの梅谷二・三号窯（平城宮瓦編年の第IあるいはII期）では、燃焼部の奥、焼成部側で燃焼部と焼成部の境にある階で一ヶ所、人頭大の平石が置かれている。この平石が燃焼部の火を焼成部の両側面にまで行きわたらせるための分焰柱の礎石・位置を示すものと理解している。この分焰柱の存在により、焼成部を幅広くすることが可能になった、あるいは焼成部を幅広くするために分焰柱が必要になったと考えている。

平城宮瓦編年の第II―2期に操業を開始し、第III―2期まで続く山陵二号窯でも一ヶ所分焰柱が確認されており、その位置は焼成部前端、焼成部と燃焼部の段の斜面にあることが断面図から読みとれる。

焼成された製品を燃焼部から取り出した可能性が高い窯Aタイプに対して、窯Bタイプは分焰柱の存在によって燃焼部からの取り出しが困難となる。焼成部側から製品を取り出したことが考えられる。

窯Cタイプの梅谷七号窯・石橋瓦窯では、燃焼部・焼成部とも分焰柱の存在を示す礎石・あるいは粘土の痕跡などはみつかっていない。窯Cタイプでは、分焰柱が存在しなかった可能性が高い。これは日高山四号窯・梅谷七号窯とも焼成部の前端、燃焼部との境が狭まっていることから想像する。

窯Dタイプでは、窯Bタイプの本一の分焰柱から、地山削り貫き（市坂八号窯）、瓦や粘土平石（市坂二号窯、五領池東瓦窯・音如ヶ谷瓦窯）で二・三ヶ所に分焰柱を立て、各分焰柱の間が通焰孔となっている。分焰柱

の上部には粘土や瓦を積み上げて壁をつくっている。

窯Dタイプの分焰柱・通焰孔・前面隔壁の存在によって、燃烧部からの取りだしが困難となり、焼成部側から製品を取り出したことが考えられる。(なお、市坂二号窯では焚口部が粘土や瓦で閉塞された状態で廃棄されていた。焼成部は天井部が除去されており、焼成された製品も取り除かれていた。)

b・焼成部床面 窯Aタイプの焼成部床面は、床面傾斜角20〜40度を測り、そのままでは瓦を立てることができない。そのため、粘土や瓦を利用して一定の幅で、窯の主軸に対して直交するように水平面をつくって段を形成している(梅谷四号窯では九段、瀬後谷二号窯では七段以上、瀬後谷一号窯では七段以上)。

この構造は飛鳥時代の飛鳥寺瓦窯、藤原京へ瓦を供給した大和郡山市内山瓦窯でもあり、瓦窯の当初からある形態のものである。梅谷三号窯では、燃烧部と焚口部の主軸はほぼ一致しているが、焼成部の主軸は燃烧部・焚口部とは異なっている。また、焼成部の平面形態は左右対称となっていないこと、焼成部床面と煙道部床面とは10cmの段差がある。これは、当初梅谷四号窯に近似した窯構造から焼成部床面を幅広く改変した結果生じたものと思われる(第二一―24図)

窯Bタイプの焼成部床面は、床面傾斜角20度未満で、窯Aタイプの瓦窯に較べて床面が水平に近づき、段を成形することなく造られている。ただ、この床面傾斜角は燃烧効率が悪かったためか、補修時には、窯の主軸に直交するように瓦を並べて傾斜角を変更しているものや、粘土に破碎した瓦を組み込んで床面傾斜角を変更しているもの(梅谷二号窯)がある。また、窯Bタイプではその平面形態から舟形(七尾三号窯)やダルマ形と表現してよいような窯がある。これらの形状は、規格化された瓦を効率よく焼くために、焼成部の空間を工夫したものであり、基本的には方形を意識したものである。

窯Aタイプの須恵器系統の窯を瓦專業窯へ改変していく過程で、窯Aタイプの窯構築工人が窯Bタイプの

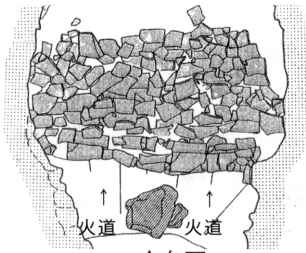
形態の工夫・改変を加えたものと思われる。

窯Cタイプは、創業時の焼成部床面傾斜角は10度にも満たない平坦なもので、破碎した瓦を敷き詰めて床面を形成しているもの（梅谷七号窯）がある。この形態は藤原京の造営に係わった橿原市日高山四号窯にその祖形がある。

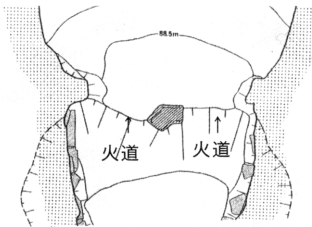
窯Dタイプは、その焼成室の形状が窯Cタイプに近似したもので、焼成室床面に瓦や粘土を利用して五条以上の畦を成形している。畦の間の窪みが火の道・空気の通り道であり、焼成する生瓦を畦の上に並べることによって、燃焼効率をあげている。窯Cタイプの床面構造を改良したものと考えている。

C・煙道部（排煙部）

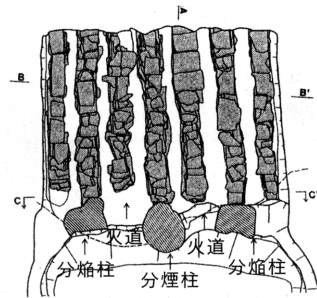
窯Aタイプのうち、地下式構造の飛鳥寺瓦窯・大和郡山市内山1号窯では、焼成部端から地山を削り貫いて排煙孔をつくっている。一方、半地下式構造の梅谷四号窯では、窯本体の下半部が地山を掘り込んでつくり、その上半部は粘土などで覆っていた。この窯では排煙孔をつくる必要から、瓦を積上げた一对の障壁を



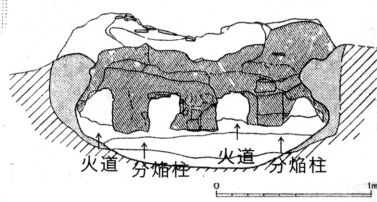
梅谷2号窯 分焔柱の台石



梅谷3号窯 分焔柱の台石



市坂8号窯 分焔柱



五領池東1号窯 立面図

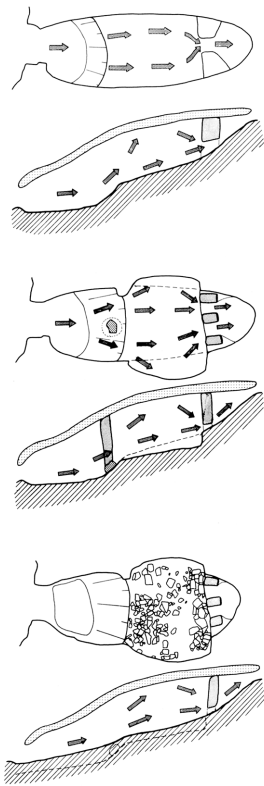
第二-23図 奈良山瓦窯 分煙柱の配置

つくり、その一对の積上げられた瓦の上面に瓦を懸けて通焰孔をつくっている。同じものは瀬後谷二号窯があり、焼成部奥壁に工夫が加えられている。

窯Bタイプの山陵二号窯は、地山を掘り込んで三本の排煙孔を奥壁につくり、最終の排煙は三本の孔を一ヶ所に集めるかのように工夫されている。梅谷二・三号窯では丸瓦・平瓦を組み合わせて三ヶ所の排煙孔をつくり、その上面には瓦を積み上げて後面隔壁を構築している。窯Aタイプの一ヶ所の排煙孔から窯Bタイプでは三本を意識した排煙孔に変えている。

窯Cタイプの排煙は、窯構築時の掘り込み(掘形)段階で、奥壁に三本の排煙孔を予定して掘削し、奥壁の構築と同時に瓦を組み合わせてつくられている。奈良山第51号窯では排煙部の長さ1.1mで、その傾斜角40度以上と長いものになっている。

窯Dタイプの音如ヶ谷瓦窯・五領池東瓦窯では奥壁を瓦で構築、市坂瓦窯では瓦の構築がなく、粘土を貼りつけたもので、いずれの窯も奥壁には排煙孔がない。焼成室の天井部に排煙孔があると考えられる。窯Dタイプでは焼成室と焼成室の境に前面隔壁があることから、焼成された製品は焼成室の天井部を毀して取りだし、再作業の場合には天井部を覆うとともに煙道を付けている。市坂2号窯ではそれを裏付けるように焼成後に焚口部は瓦・土・粘土で密封されており、天井部が壊されて状態で廃棄されていた。注154有井広幸によると「焼成室の天井部は奥壁



第二 - 24 図 梅谷3号窯 窯体改変想定図

とつながっておらず、煙道部は奥壁と天井部のスリット状の隙間がその機能を果たした」と想定している。

② 釜窯から平窯・有畦式平窯へ

分焰柱・通焰孔・隔壁・焼成部床面・煙道部構造の差違を各窯タイプごとに列記した。

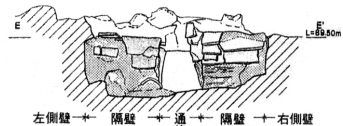
窯Dタイプの瓦專業窯が平城京以降、長岡京・平安京の造営に係わる官営の瓦窯に採用されることから、古代日本にお

ける瓦窯構造の一定の完成形態であったと理解している。この窯Dタイプが朝鮮半島には存在しないことから、現状では日本独自で考案された瓦窯と位置付けることができる。

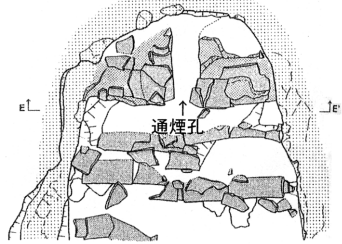
須恵器窯の構築が朝鮮半島の工人による技術移入であり、飛鳥寺の造営から須恵器窯工人の技術をもって瓦が焼成された。その変化のなかで、多量の瓦を必要とする藤原京では古墳時代から続く須恵器窯から変化工夫して、燃焼部と焼成部の段差(階)を、焼成部には段をつくる(窯Aタイプ)。この窯Aタイプから燃焼効率・燃料の省力化を図って、小型につくる意図で窯B・Cタイプが造られた。

窯Bタイプの分焰柱・排煙孔は、焼成部の主軸長を短くする半面、幅を広くする必要から炎の流れを考慮して分焰柱が生まれた。なお、窯Bタイプは朝鮮半島扶余の亭岩里瓦窯^{注135}で近似した構造のものがある。

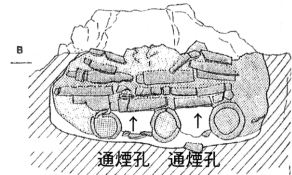
窯Bタイプの工夫と同時に、新たな発想として窯Cタイプが藤原京の時期に生まれる。窯Cタイプは平城



梅谷4号窯 煙道部立面図



梅谷4号窯 煙道部平面図



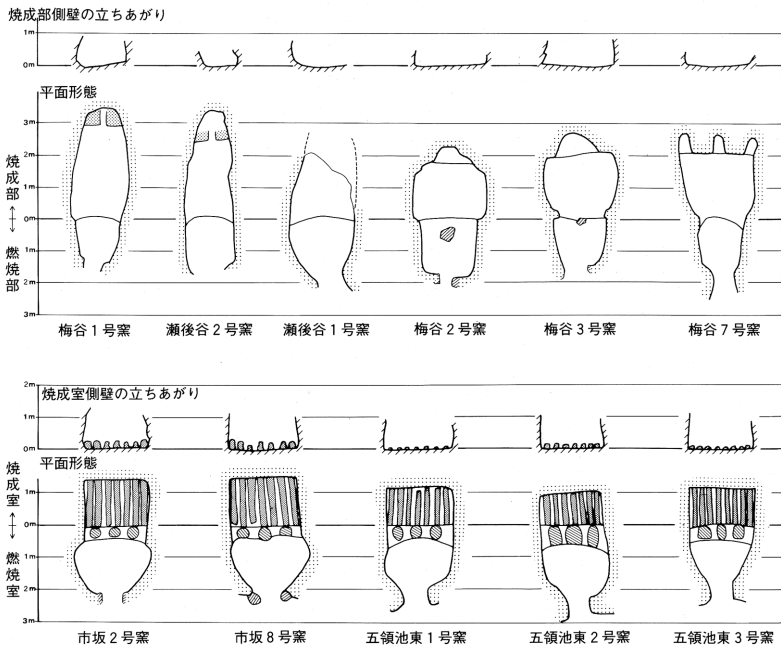
梅谷3号窯 煙道部

第二-25図 梅谷瓦窯 窯別排煙施設

京の前期の段階で、窯Bタイプと併用、技術を競うように、中山瓦窯・梅谷瓦窯では同一の窯場で併用して構築される。窯B・Cタイプが技術を競う時期が平城宮瓦編年の第II期、その中で官営の瓦窯の形態が定着するのが平城宮瓦編年の第III期、現状では木津町音如ヶ谷瓦窯が完成された例としてある。

帝塚山大学考古学研究所の「造瓦体制の変遷―東日本・西日本・近畿編^{注156}―」では、各発表者やシンポジウム参加者の多くが、七四〇から七五〇年の間に筆者のいう窯Dタイプ（有畦式平窯）の成立があったと想像されている。

窯Dタイプの成立が、複数箇所に分焰柱・通焰孔がつけられた前面隔壁で炎の流れ（火道）を分散することが可能となる。窯Dタイプの奥壁には排煙孔がなく、焼成室の天井部に排煙孔が想定できることから、天井部の排煙施設の存在と焼成室の畔の存在が連動するものと考えている。ここでは、その問題を解



第二 - 26 図 奈良山丘陵窯体模式図

窯名	梅谷 4号窯	瀬後谷 2号窯	瀬後谷 1号窯	梅谷 2号窯	梅谷 3号窯	梅谷 7号窯
全長 (水平距離) (斜距離)	4.79m	4.97m	3.68m	4.38m	4.80m	4.17m
	5.36m	5.40m	4.06m	4.71m	5.17m	4.45m
焼成部長 (水平距離) (斜距離)	2.83m	2.38m	2.03m	1.61m	2.00m	1.84m
	3.82m	2.40m	2.23m	1.97m	1.77m	1.94m
最大幅	1.76m	1.50m	1.94m	2.28m	2.28m	2.21m
床面傾斜角 (第1次床面) (第2次床面) (第3次床面)	29.5°	1.85°	26.5°	7.0°	8.5°	11.3°
			26.5°	17.0°	12.5°	
			22.3°	17.5°		
段差	0.36m	0.68m	0.73m	0.40m	0.42m	0.57m
燃焼部長 (水平距離)	1.36m	1.70m	1.84m	1.80m	1.86m	1.68m
最大幅	1.27m	1.50m	1.88m	1.78m	1.40m	1.20m
焼成部床面積	4.4㎡	3.28㎡	3.00㎡	3.58㎡	4.00㎡	4.08㎡
燃焼部床面積	1.54㎡	2.34㎡	2.88㎡	2.88㎡	1.84㎡	1.76㎡
瓦枚数	498枚	356枚	323枚	377枚	439枚	456枚

付表二-1 梅谷瓦窯ほか窖窯規模一覧表

決するだけの資料がないが、平成一八年にその存在が確認された京都府木津川市鹿背山瓦窯がある。鹿背山瓦窯の二基の瓦窯については、現状保存を前提とした調査であり、上面輪郭のみを確認した。ここでは、鹿背山瓦窯の構造について想像を含めて検討する。

鹿背山瓦窯で検出した二基の窯は東に一号窯、その西に二号窯がある。

一号窯(第二一七図)は、焼成室と燃焼室の間に幅0.6mの前面隔壁をもつ。この隔壁は円柱の粘土で分焰柱を造り、通焰孔は樽を使用する。

通焰孔に樽を使用する例としては、兵庫県加東郡東条町袴鹿谷二号窯^{注二一七}がある。袴鹿谷二号窯の焼成の最終遺構面では、焼成室床面に樽と平瓦を貼り付けた有畦式である。焼成室奥壁には排煙施設をもたないが、鹿背山一号窯では一ヶ所排煙孔を設けている。

鹿背山一号窯の焼成室床面に畦があるかどうかは今後の調査に期待をよせるしかないが、有畦式

窯名	市坂 2号窯	市坂 8号窯	五領池東 1号窯	五領池東 2号窯	五領池東 3号窯
全長 (水平距離)	3.06m	3.75m	3.60m	4.00m	3.70m
焼成室長 (水平距離)	1.47m	1.60m	1.20m	1.10m	1.20m
最大幅	2.02m	2.10m	2.10m	1.95m	2.04m
床面傾斜角 (第1次床面)	1.5°	2.0°	0.5°	0.5°	2.3°
段差	1.10m	1.1m	0.62m	0.58m	0.29m
燃烧室長 (水平距離)	1.70m	1.85m	1.50m	1.90m	1.80m
最大幅	2.40m	2.04m	2.10m	1.60m	2.00m
焼成室床面積	2.64m ²	3.12m ²	2.44m ²	1.92m ²	2.36m ²
燃烧室床面積	2.88m ²	2.84m ²	1.64m ²	2.08m ²	1.92m ²

付表二-2 市坂瓦窯ほか平窯規模一覧表

平窯の資料では奥壁部分に排煙施設が無いことを考えると畦は存在しないものと考えている。

鹿背山二号窯(第二―28図)は焼成室が数回にわたって改修がおこなわれているが、その上面輪郭からも確認できる。二号窯の焼成室の構造についても今後の調査を待つ必要があるが、焼成室を序々に縮小していることが明らかである。

焼成室は、横幅2.2mで、当初の焼成室上面の長さは3.2m、第一改修時の焼成室の上面長2.4m、第二改修時の焼成室の上面長1.8mで、改修ごとに焼成部を縮小している。

煙出部は、当初は一ヶ所であったものが、第一改修時には三ヶ所、第二改修時の状況は不明確であるが、窯出しごとに天井を壊すため、取り壊し可能な煙出であった可能性が考えられる。

鹿背山二号窯は、燃烧部と前面隔壁部分は改変された状況ではなく、焼成部の平面形態・規模を縮小しており、窖窯構造のものから平窯構造のものに変化・変遷した可能性がある。

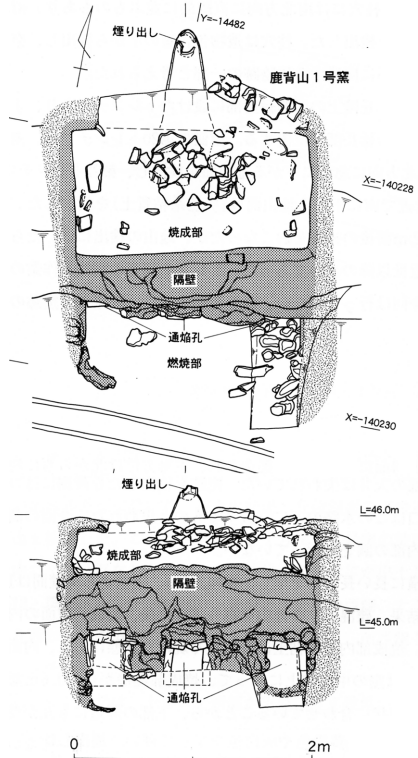
鹿背山二号窯に近似した可能性が高い窯構造のものとしては奈良市山陵Ⅱ・Ⅲ号窯がある。

山陵Ⅱ・Ⅲ号窯は、Ⅱ号窯が全長6mで、焼成部に畦を設けない無畦式平窯である。Ⅲ号窯は、Ⅱ号窯の下に重なるように

あり、現存長4.5mを測る窖窯である。山陵瓦窯は、平城宮瓦編年の第二―二期に操業を開始し、平城宮瓦編年の第三―二期まで続くと考えられている。

鹿背山一号窯と鹿背山二号窯の構築されたその前後関係は、窯が重複していないこと、灰原もその全容が不明であるため明確ではないが、窯の構造変化では鹿背山二号窯の窖窯から平窯風の変化を経て、一号窯の平窯へ変遷したと想像している。その築窯された時期は、鹿背山一号窯で須恵器が含まれていること、鹿背山瓦窯で検出した溝SD21の須恵器の特徴から平城土器編年の平城Ⅲの古・中段階と考えたい(略年代七三〇年代〜七四〇年代)。平城宮瓦編年から天平一四(七四二)年以前に鹿背山瓦窯が存在したことを考えており、その製品の供給先として平城宮の北方佐紀町での施設があげられる。

鹿背山二号窯は、前面隔壁を有し、焼成室の奥壁からやや離れた位置に丸瓦を利用した排煙孔が一ヶ所あることから、これまでにはその例がない窯Dタイプである。隔壁をもつ鹿背山一号窯に隣接して、窯Bタイプを改変した鹿背山二号窯がある。今後の調査の状況によっては、有畦式平窯の成立過程を検討する上で、良好な資料と思われる。



第二―27 図 木津川市鹿背山1号窯実測図

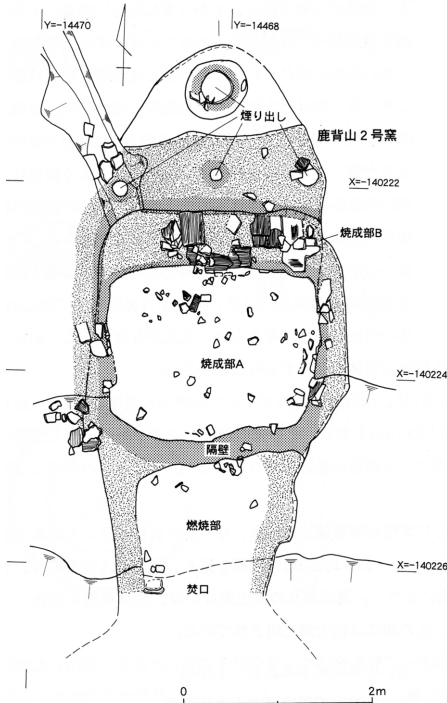
五・他地域での類例

奈良時代の瓦窯には、宮都に瓦を供給するために造られたもののほか、各国分寺や地方寺院に供給するために造られたものがある。各国分寺あるいは地方寺院では奈良時代全般を通じて窯Aタイプが、平安時代には窯Aタイプと窯Dタイプで瓦が焼かれていたものと思われ、窯B・窯Cタイプの窯は一部を除き、広くは普及しなかったものと思われる。

窯Bタイプは、窯Aタイプから変化・工夫された可能性があることは前述した。これは和銅年間から天平初年の時期に都での瓦の需要が増大し、これまでの窯Aタイプでは焼成量に対して燃料、窯の焼成時間を要するため、燃焼効率を考えて造りだされたものであり、多くの瓦を焼成するために試行錯誤を繰り返した結果である。窯Aタイプから窯Dタイプに間に窯B・窯Cタイプの瓦窯が生まれた。

その過程の中で生まれた梅谷2・3号窯のような窯Bタイプでは、焼成部の改変を数回にわたって行っており、燃焼効率の良い、完成された瓦窯ではなかったように思われる。

中国では西周から瓦生産が行われてい



第二-28図 木津川市鹿背山瓦窯2号窯平面図

るが、大脇^{注158}潔は「土器の製作に従事していた者たちが未分離のまま瓦生産にも携わったためか、土器窯をそのまま利用した瓦」を焼成している。

西周時代の瓦窯として三門狭市李家窯遺跡Y1号窯など、楕円形あるいは円形で、焼成部が傾斜を持たず平坦で、燃焼部に掘り込みをもつ窯がある。秦代以降の窯の構造もわずかながら知られているのみである。

秦代陶窯跡・甘肅省酒泉下河清漢代窯跡・四川省嘉陵枝漢代窯跡^{注159}などは、後述する亭岩里瓦窯の平窯によく似ているとされている。

朝鮮半島では百濟時代(三四六年以降)の瓦窯の発見があいつぎ、6世紀以降の扶余地域の亭岩里瓦窯で窖窯三基と平窯五基が検出されている。平窯の焼成部の平面形態は長方形のもの(一号窯)と、焼成部の奥壁側が狭く、焚口付近が広い台形のものがある。床面傾斜角は比較的ゆるく、燃焼部と焼成部の段が明瞭で、煙道部は風化岩盤層を掘った後に、壁を成形している。亭岩里瓦窯は窖窯と平窯が併用して造られ、また、二基一対で操業されているなど梅谷瓦窯に近似した要素をもっている。

窯Aタイプの窯が須恵器窯からの延長、窯Bタイプの窯が朝鮮半島からの影響を受けながら窯Aタイプに工夫・改良したものと考えられるのに対して、窯Cタイプはその祖型やどのような工夫のもとで造られたのかは明らかではない。

窯B・窯Cタイプは、奈良時代前半までで造られなくなり、奈良時代後半以降は窯A・窯Dタイプに統一され、窯Aタイプは地方窯で多用されるようになる。窯Dタイプは、その初現段階では、市坂瓦窯のように掘形をもたないものもあるが、その大半は掘形をもち、壁は瓦や粘土で成形されることは窯Cタイプと同じである。ただ、焼成室床面は窯Cタイプのように平坦ではなく、畦を設けることにより燃焼効率を良くしている。窯Cタイプでは焼成部と燃焼部の境に前面隔壁はないが、窯Dタイプでは数本の分焰柱を設けた前面

隔壁を造り、焼成室全域に満遍なく炎がまわるようになる。窯Cタイプの煙道部は奥壁に数ヶ所あけられているが、窯Dタイプでは奥壁に煙道部がなく、天井部にあったものと思われる。焼きあがった製品は、窯Cタイプでは燃燒部あるいは焼成部の天井の一部を壊して取り出しているが、窯Dタイプの窯では、焼成室の天井を壊して取り出したものと思われる。

この窯Dタイプが、窯Bあるいは窯Cタイプの窯を改良して日本で独自に造りだされたものなのか、あるいは中国の隋あるいは唐代の瓦窯や土器窯を模倣したものかは明らかではないが、官窯では、平城京還都を前後する時期に窯Dタイプが成立する。

注二一 48 森島康雄「第四章 市坂瓦窯跡」(『奈良山瓦窯跡群』(『京都府遺跡調査報告書』第二七冊)(財)京都府

埋蔵文化財調査研究センター) 一九九九

注二一 49 有井広幸「梅谷瓦窯群」(『京都府遺跡調査概報』第六八冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九六

有井広幸・石井清司「第二章 梅谷瓦窯」(『奈良山瓦窯跡群』(『京都府遺跡調査報告書』第二七冊)(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九九

注二一 50 大川 清『古代の瓦窯』雄山閣出版 一九七二

注二一 51 山川 均『内山瓦窯1号窯発掘調査概報』(大和郡山市教育委員会) 一九九五

注二一 52 藤原 学『昭和五八年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報―七尾瓦窯跡・垂水南遺跡』(吹田市教育委員会) 一九九四

注二一 53 分焰柱の初現として藤原宮付属瓦窯の可能性がある大和三堂山2号窯でその存在が知られている。(泉

森峻「南浦三堂山瓦窯跡」(『遺跡調査室だより』一) 一九七一

注二一 54 有井広幸「煙道部を持たない平窯の耕造について」(『京都府埋蔵文化財論集』第五集 (財) 京都府埋蔵

文化財調査研究センター) 二〇〇六

注二一 55 光燮・金 鐘萬「亭岩里窯場(Ⅱ)」(『国立扶餘博物館古蹟調査報告』第四集 国立扶餘博物館扶餘郡)

一九九二

注二一 56 帝塚山大学考古学研究所「シンポジウム報告書 造瓦体制の変革―畿内―」二〇〇七

注二一 57 加東郡教育委員会「揖鹿谷瓦窯跡見学会資料」二〇〇二

注二一 58 大脇潔「西周と春秋の瓦」(『藤澤一夫卒寿記念論集』帝塚山大学考古学研究所) 二〇〇二

注二一 59 熊 海堂「中国古代瓦・煉瓦を焼く窯炉とその技術の朝鮮・日本への伝播」(『古代学研究』一三〇 古

代学研究會) 一九九四

初出:「瓦專業窯の成立」(『龍谷大学考古学論集Ⅱ ―網干善教先生追悼論文集―』龍谷大学考古学論集

刊行会) 二〇一〇

石井清司・堀大輔「第四節 窯体構造」(『奈良山瓦窯跡群』(『京都府遺跡調査報告書』第二七冊) (財)

京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九九

第三節 国分寺の創建瓦窯

一・聖武天皇の仏教政策

官営瓦窯と位置付けた奈良山丘陵では、瓦窯の展開・窖窯から平窯への変遷について第一・第二節で論述した。

平城京・宮での瓦供給のために造られた奈良山丘陵の瓦工房は、地方窯へとその技術が派生していったと考えられる。ただ、この技術の伝播は、地域ごとにその受け入れ状況が異なっている。ここでは、聖武天皇が鎮護国家を願い発願した「国分寺・国分尼寺造営の詔」以後の造瓦体制の受け入れ状況を、瓦窯に代表される窯業変化から論述していきたい。

神亀元(七二四)年 叔母元正天皇から皇位を譲り受け、二四歳で首皇子(聖武天皇)が即位した。母はこれまでのような皇族ではなく、藤原不比等の娘、宮子である。皇后は、藤原不比等と橘三千代の娘で、聖武天皇の母宮子とは母を異にする妹である光明皇后である。聖武天皇の治世には、藤原氏と旧貴族の軋轢、自然災害、自らの健康不安など多くの苦悩があったようである。

天平元(七二九)年、二月一〇日、「長屋王の変」が起こる。長屋王は、臣下の藤原氏出身である光明子の立后に反対したことにより失脚。同年八月一八日、「六年のあいだ、皇后にふさわしい人物かどうか慎重に検討した結果」、光明子の立后が実現する。

聖武天皇の即位後、『続日本紀』には自然災害が多発している記事があり、大規模な誦経・転読、自分自身の政治がよくないことから三千人の得度を認めるなどの政策をおこなった。また、健康状態では、神亀三

(七二六)年、元正太上天皇が一時健康を害し、仏教による病氣平癒祈願をおこなう。神龜四(七二七)年、聖武天皇と光明皇后の間に皇子(男子)が誕生するが、生後一年を満たずに死去する。その冥福を祈るために、のちの東大寺の前身となる寺院「山房」(金鐘山房の前身)を建立する。光明皇后の実母であり、光明皇后に影響を与えた橘三千代が天平五(七三三)年に死去する。天平八(七三六)年、天然痘流行への危機意識と長屋王事件の記憶から光明皇后発願による一切経の書写開始。四月一七日参議藤原房前。七月一三日藤原麻呂、七月二五日藤原武智麻呂、八月五日藤原宇合が続いて他界、人口の七分の一が死去したともいわれている。

この頃には、光明皇后の信仰の深さを表すように、法隆寺で法華経講読の法会がおこなわれ、聖武天皇も仏教へ傾倒を強める。

天平九(七三七)年、聖武天皇は凶作や疫病の流行がやむことを祈願して、各国に釈迦像をつくり、写経することを命じ、天平一三(七四一)年、国分寺造営の詔が出される。聖武天皇の政策である鎮護国家のために、大仏造立を紫香樂宮で発するが、藤原仲麻呂の乱により実現せず、大仏造立を遅滞なく進めることを条件に平城京への遷都を受け入れる。

天平勝宝四(七五二)年、念願の大仏開眼をおこない、ここに総護国寺の東大寺が完成する。

聖武天皇発願による国分寺・国分尼寺の造営は、各国において速やかに実施されたのではなく、『続日本紀』では、国分寺の造営を急ぐようにとの勅が出されている。この詔を受け、各国では国分寺・国分尼寺の造営にむけ、それぞれの国の実情にあった対応をおこなう。

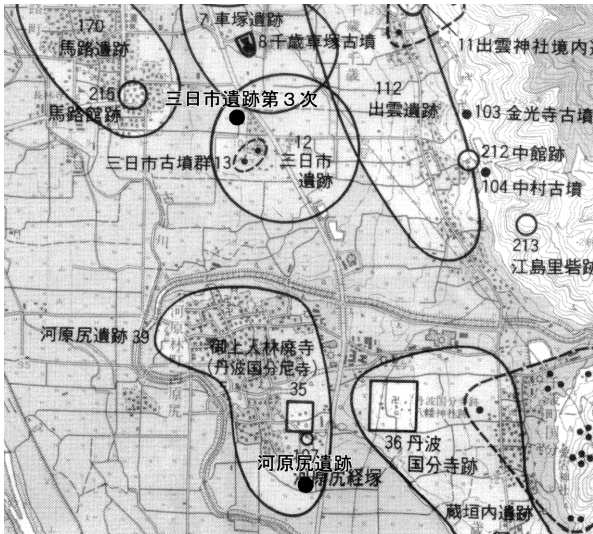
二・丹波国分寺の創建瓦窯

平成一五年、京都府亀岡市三日市遺跡(第三次調査)^{注160}で、丹波国分寺の創建瓦を焼成した瓦窯と思われる遺構を検出した。

丹波国分寺の発掘調査は、昭和五七年から亀岡市教育委員会により継続して進められ、金堂・塔・講堂・中門・僧坊・鐘楼などの堂塔を配し、寺域は方二町(約245m四方)の規模であることが明らかになっている。^{注161}

国分寺出土の軒瓦は、軒丸瓦一三種・軒平瓦一〇種が確認されており、創建時は忍冬文軒丸瓦と均正唐草文軒平瓦がセット関係であり、金堂の創建瓦は、八葉蓮華文軒丸瓦と均正唐草文軒平瓦がセット関係となっている。

山崎信二は、丹波国分寺の軒丸瓦は、唐招提寺・西大寺・西隆寺と、軒平瓦は唐招提寺・法華寺・薬師寺と同范関係にあるものがあること、これら平城京諸寺の軒瓦と丹波国分寺の軒瓦を比較すると、范傷の多くなつたものが丹波国分寺の瓦に使用されたことを明らかにした。^{注162} このことから、丹波国分寺の造営時期を推測すると、西大寺創建の天平神護元(七六五)年、西隆寺創建の神護景雲元(七六八)年以降に、丹波国分寺が創建されたと考えられている。なお、



第二-29図 亀岡市三日月遺跡と丹波国分寺位置図

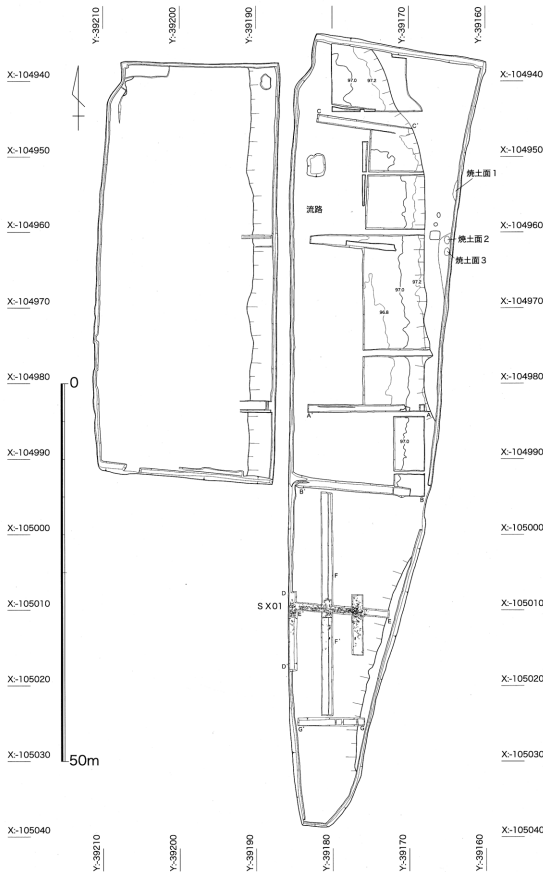
丹波国分寺は、平安時代中期に塔・金堂が廃絶し、平安時代後期に金堂の再建、再建された金堂は鎌倉時代後半に焼失したことが知られている。塔は大規模な修理または再建が行われた。

丹波国分寺とは中軸間で約450m西に、丹波国分尼寺(御上人林廃寺)ある。^{注163}丹波国分尼寺の寺域は、東西150m、南北約180mで、伽藍中軸線上に南門・金堂・講堂・尼坊を配し、丹波国分寺と同範の軒瓦のほか、唐招提寺・西大寺・西隆寺の創建瓦と同範のものである。

三．丹波国分寺と三 日市遺跡

三日市遺跡は、丹波国分寺・国分尼寺からの直線距離約1.75km、現道路を利用した場合2.3kmの位置にある。

三日市遺跡第三次調査では、縄文時代に形成され、埋没したと思われる南北約20mの自然流路を検出した。この自然流路では、流路に直交する形で、瓦や石を利用した突堤状に積み上



第二-30図 亀岡市三日市遺跡 遺構図

げられた状況（S X 01）がある（第二一30図）。この遺構を調査担当者は流水施設であるとともに簡易な船着き場としての機能を有した構造物と考えている。また、流路内からは炭・焼土塊・窯壁などとともに変形・癒着した平・丸・軒瓦のほか、道具瓦、埴などが多量に出土した。この調査を受け亀岡市教育委員会では、瓦窯の存在を想定して磁気探査を実施したところ、二ヶ所で磁気の変動があった。

出土した軒丸瓦・軒平瓦は、丹波国分寺の創建時の瓦と同範のものであるとともに、丹波国分寺の軒丸瓦に範傷が加えられていることが明らかとなった。

なお、一町四方の寺域を有し、塔・金堂などの主要伽藍を配した寺院の場合、その使用瓦は一万枚といわれているので、丹波国分寺の場合、一万五千枚以上の瓦が必要であり、さらに隣接する丹波国分尼寺をあわせると、三万枚以上の瓦を必要としたことが推定できる。

四．丹波国分寺以前の亀岡盆地の寺院

丹波国分寺・国分尼寺・三日市遺跡の位置する亀岡盆地には、飛鳥時代以降、奈良時代にかけて六ヶ所の寺跡が確認されている（第二一32図）。

亀岡盆地は、その中央に桂川（保津川）が流れており、寺跡は、その川を挟んだ川東地域に池尻廃寺と丹波国分寺跡・国分尼寺跡が、川西地域に



第二一31図 三日市遺跡出土軒瓦

桑寺廃寺・與能廢寺・観音芝廢寺がある。

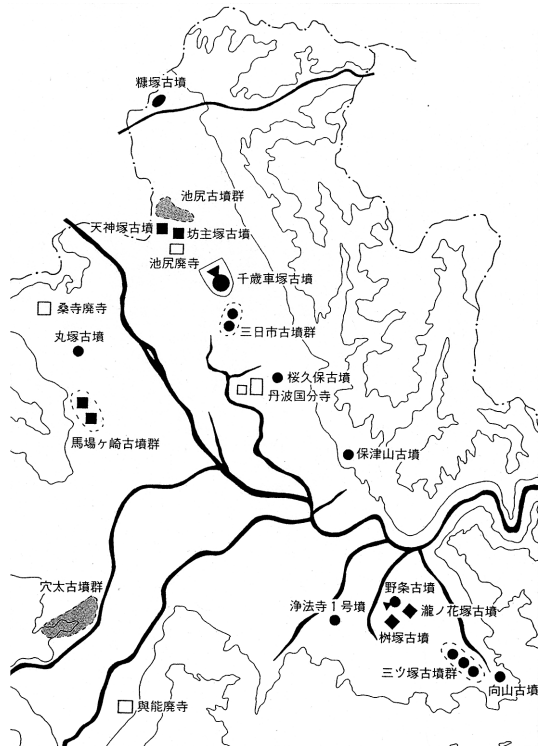
池尻廢寺は、千歳町池尻にあり、幅12m、長さ190mの範囲を発掘調査したところ、藤原京期の瓦とともに、礎石建物や掘立柱建物、溝、落ち込みなどを検出した。数次にわたる発掘調査の結果、寺域は東西135m、南北140mで、寺域内には金堂跡と考えられている西辺125m、北辺145m以上の瓦積基壇がある。

池尻廢寺では、細弁十五葉蓮華文軒丸瓦と四重弧文軒平瓦が出土しており、飛鳥時代(白鳳期)に創建され、単弁八

葉蓮華文軒丸瓦(6121A型式系)と変形忍冬唐草文軒平瓦(6647C型式系)が出土していることから、藤原京期に一部改修が行われたと推定^{注2)}されている(第二―33図)。

桑寺廢寺は千代川町にあり、幅3mと限られた調査で、基壇と思われる高まりとその西側で段差を、東端では築地あるいは柵列を検出した^{注1)}。寺域は東西幅150mと推定されており、南北幅については不明である。塔・金堂などの主要建物は不明である。

桑寺廢寺は、千代川遺跡(丹波国府推定地)に近接しており、国府付属寺院の可能性も考えられている。



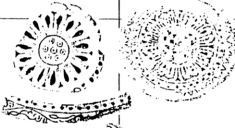

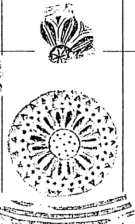

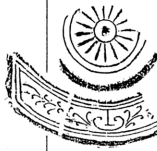

第二―32図 亀岡分地の古代寺院分布図

桑寺廃寺では、飛鳥時代末期様式の軒丸瓦三種（素弁八葉蓮華文・複弁八葉蓮華文軒丸瓦など）、軒平瓦二種（重弧文軒瓦など）がある。

與能廃寺は曾我部町にあり、與能神社の御旅所の裏とその北側の無量寺に礎石が残っている。また、御旅所周辺の農業水路の掘削時に複弁八葉蓮華文軒丸瓦（6976型式系・本薬師寺系）と偏行唐草文軒平瓦（6941型式系）が出土しており、藤原京期の寺の存在が予想されている。

観音芝廃寺は篠町にあり、金堂・講堂・僧坊と思われる建物のほか、築地を検出した。寺域は一辺115m四方と推定されている。

観音芝廃寺の創建瓦は、京都市西京区榎原廃寺の創建瓦と同じ文様系の単弁蓮華文軒丸瓦があり、軒平瓦は型引きの三重弧文軒平瓦である。寺の改修時には本薬師寺系の軒瓦がある。本薬師寺系の軒瓦は、大阪府四条畷市の正法寺と同範関係にあり、範の進行状況から観音芝廃寺から正法寺へ移動したことが知られている。観音芝廃寺は、軒瓦の型式から飛

池 尻 廃 寺	與 能 廃 寺	観 音 芝 廃 寺	桑 寺 廃 寺	古代寺院名
				年代
				700年
				
				

第二 - 33 図 亀岡盆地古代寺院出土軒瓦

鳥時代に創建され、奈良時代後期に大きく改築されていることが判明している。なお、観音芝廃寺に近接して篠窯跡群があり、その関連が考えられる寺跡である。

このように、亀岡盆地では、7世紀後半に池尻廃寺・桑寺廃寺・與能廢寺・觀音芝廢寺が相次いで造営されており、これら四廢寺では、池尻廢寺・桑寺廢寺・與能廢寺が丹波国分寺の造営直前の奈良時代後半に廢絶しており、觀音芝廢寺のみが国分寺造営以後も存立している。觀音芝廢寺は10世紀末の篠窯跡群の操業が終了する時期と期を一にして縮小しており、篠窯跡群を統括した私寺の性格を帯びた寺の可能性が高く、前三寺と性格を異にする廢寺である。

五. 各地における国分寺とその関連瓦窯の事例

国分僧寺・国分尼寺は、聖武天皇の発願により天平一三年二月に詔が出され、天平一六年七月、四畿内・七道諸国にむけ、国別に正税四万束を割取り、僧・尼寺に各二万束を入れ、出挙の利を造営費に当てている。また、同年一〇月に、国司に造国分寺の実情を檢校し、地方豪族に対して郡司職の譜代化や叙位をかざして、早成に図るよう措置するようにとの命が出されているが、その実態は国家が期待するように進んでいなかったことが窺える。

国分僧寺・国分尼寺の造営は、各国の諸事情によって一律ではない。ここでは国分僧寺・国分尼寺に関わる国分寺瓦窯をもとに各国の様相をみていきたい。

A. 東山道

東山道には、陸奥国・下野国・上野国・信濃国・飛騨国・美濃国などがある。

陸奥国 陸奥国分寺は、陸奥国庁である多賀城跡の北東方向約10 kmにあり、国分寺と国分尼寺は約700 m離

れている。陸奥国では多賀城の造営のち、やや遅れる多賀城政庁第Ⅱ期に国分寺が造営されるが、国分寺に使用された瓦の多くは多賀城跡と同じ瓦窯から供給されている。

多賀城・陸奥国分寺に係わる瓦窯は、台ノ原・小田原丘陵^{注170}に分布している。台ノ原・小田原丘陵に立地する窯跡群は、5世紀後葉に大蓮寺窯跡で生産を開始するが短期操業で、操業を本格的に開始するのは7世紀中葉以降である。8世紀前半には多賀城が創建され、宮城県内北部の下伊場野窯跡、木戸窯跡群、大吉山窯跡群、日の出窯跡群で瓦生産を展開し、8世紀末にはこれまでの郡単位であった須恵器を集約する形で統合される窯跡群である。

蟹沢瓦窯は、国分寺の北方約3.5kmにあり、多賀城・陸奥国分寺に係わる多賀城政庁第Ⅱ期に造られた瓦窯で、古代東北地方で唯一の有畦式平窯である。多賀城政庁第Ⅲ期には、地下式構造の窖窯である安養寺下瓦窯跡、半地下式構造の窖窯である安養寺中囲瓦窯跡がある。大沢瓦窯跡は四基の地下式構造の瓦窯で、国分寺の大改修（多賀城政庁第Ⅳ期）に対応した瓦窯である。

下野国 下野国では7世紀前葉から中葉に足利市馬坂窯跡などで須恵器生産を開始するが、8世紀第Ⅲ四半期には東部の益子窯跡群と西部の三龜山麓窯跡群の二大窯跡群^{注171}で安定した生産が行われる。三龜山麓窯跡群は、8世紀後半から9世紀中頃にかけて須恵器量産体制に入り、この時期に瓦陶兼業窯が存在する。三龜山麓窯跡群の中の北山・八幡窯跡は、8世紀前半から中頃の窯は未発見であるが、8世紀初頭に操業を開始し、9世紀後半には操業を終える窯跡群である。

下野国分寺関連瓦窯として栃木県佐野市町谷瓦窯跡^{注172}・鶴舞瓦窯跡がある。町谷瓦窯跡は、下野国分寺との直線距離17kmにあり、七基の地下式窖窯を検出している。写真資料によると窯の主軸に対して直交するように床面に平瓦を並べて階段状の施設を造るもので、焼成された瓦には「那瓦」「賀」などと那佐郡・芳賀郡（都

賀郡か)などの郡名を印刻された瓦が出土している。佐野市鶴舞瓦窯跡は、国分寺の改修に伴う補修瓦を焼いた窯の可能性が高い有畦式平窯である。また、宇都宮南部丘陵(河内郡)に造られた水道山瓦窯跡では、下野薬師寺の造営に係わって一・二号窯を築き、その後、三号窯を構築して下野国分寺のほか、上津主麩寺、推定河内郡衙に瓦を供給している。下野国分寺への供給は補充瓦の性格を帯びている。窯構造は半地下式の窖窯で、焼成部に平瓦を敷き詰めて床面を形成しており、燃焼部には平瓦を並べて排水溝を造っている。水道山瓦窯では河内郡、塩屋郡、那須郡などを想定する文字瓦が出土している。

上野国 上野国では、関東最大の古墳時代の窯(6世紀前半)である太田金山窯跡群が知られているが、奈良・平安時代には衰退する。その一方、7世紀末以降、西毛地域で開窯する窯跡群として藤岡窯跡群がある。藤岡窯跡群は9世紀後半頃まで操業を続ける窯跡群であり、瓦窯は7世紀に遡るらしい。

上野国分寺に関連した瓦窯には、東毛地域の笠懸窯跡群と西毛地域の吉井・藤岡窯跡群に分布している。



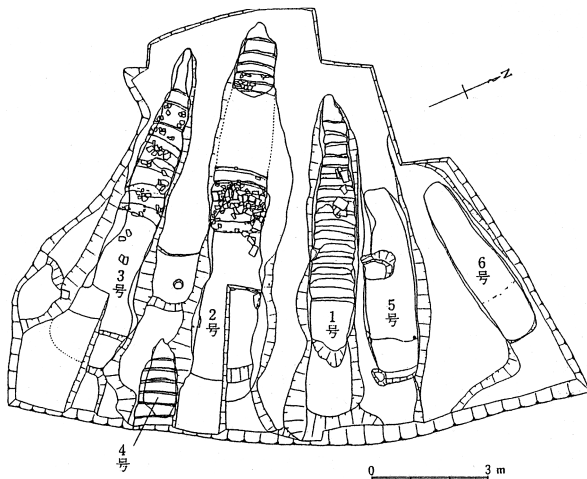
第二 - 34 図 上野国窯跡分布図

渡辺^{註173}によると、笠懸窯跡群と藤岡窯跡群では、軒瓦の文様・製作技法が異なること、吉井・藤岡窯跡群では文字瓦が認められるが笠懸窯跡群では出土しないこと、瓦の総量に多寡があることなどから、吉井・藤岡窯跡群は塔を主体として供給された窯。笠懸窯跡群（鹿ノ川窯跡、瓦專業窯）は、国分寺の塔造営以後の堂舎への供給を主な目的とした瓦窯と位置づけている。上野国分寺に関連した瓦窯として鹿ノ川窯跡、山際窯跡、金草窯があり、笠懸窯跡群↓山際窯跡↓金山・風呂谷瓦窯へと生産を拡大している。

信濃国 信濃の須恵器生産は7世紀以降盛んとなり、8世紀中頃から後半にかけては一群壹窯跡的な様相を呈している。信濃国分寺の創建瓦窯は管見にのぼるかぎり不明であるが、平安時代初期の国分寺の補修瓦を焼成した窯として国分尼寺金堂北東100mに有畦式平窯二基がある。なお、軒瓦は在地性が強いものであるらしい。

飛騨国 飛騨地域では6世紀後葉から7世紀前葉にかけて高山市楓が洞窯跡が造られるが、概して須恵器窯の築窯は活発ではなく、7世紀中葉には窯は確認されていない。一方、7世紀後葉から8世紀前葉にかけて古代寺院の建立が目立ち、瓦窯や瓦陶兼業窯が築かれる。

飛騨国分寺の瓦窯には、国分寺の北西方向で直線距離にして約35kmの位置に赤保木瓦窯^{註174}がある。赤保山瓦窯は四基の瓦窯と一基の須恵器窯で、瓦窯はいずれも有段有階式窖窯である。



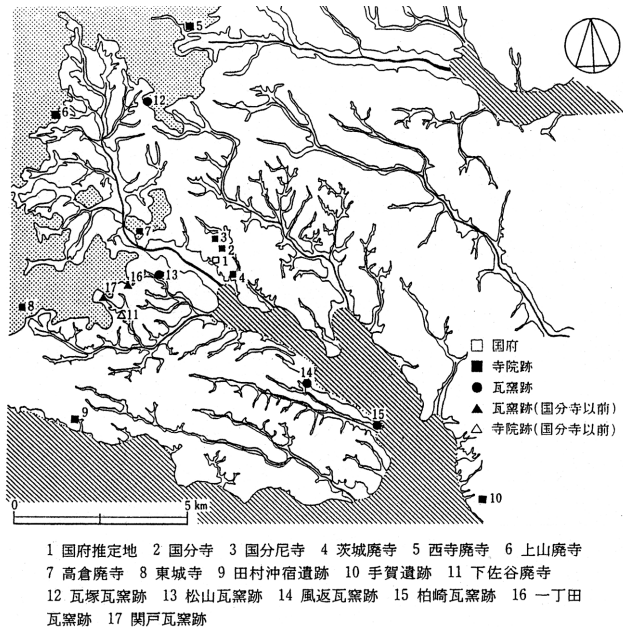
第二 - 35 図 赤保木瓦窯実測図

美濃国 美濃国分寺では、国分寺から直線距離にして約240mに国分寺瓦窯^{注175}(丸山)がある。丸山瓦窯では三基の瓦陶兼業窯があり、二号窯は無段無階式窖窯である。

B・東海道 東海道には、常陸国・下総国・上総国・武蔵国・相模国・甲斐国・遠江国・三河国がある。

常陸国 常陸国は、7世紀末の日立最大の窯跡群である新沼窯跡群から始まる(第二―26図)。新沼窯跡群は、径10kmの範囲に7〜9世紀の須恵器窯一ヶ所、瓦窯三ヶ所を確認している。新沼窯跡群が常陸国南部を中心に製品を供給しているのに対して、水戸市木葉下窯跡は、那須郡の中心地域にあり、径10kmの範囲に高取支群(8世紀代の窯三三基)、三ヶ野支群、金山支群があり、奈良時代前半に水戸市台浪寺周辺への供給から始まり、常陸国の南北の供膳器需要の大半を担っているが、国分寺瓦窯はこれら須恵器生産地から離れた地域に存在する。

常陸国分寺に関連した瓦窯として瓦塚瓦窯、松山瓦窯、風返(三ツ谷)瓦窯跡、柏崎瓦窯跡がある(第二―



第二―36図 常陸国分寺関連遺跡分布図

36図)。そのうち、窯の詳細がわかるものとして八郷町瓦塚瓦窯^{注二一六}がある。

瓦塚瓦窯は、常陸国分僧寺・国分尼寺の北方向に直線距離で約15kmの位置にあり、一二基の窯跡を確認している。一号窯は、地下式無階有段型式の窖窯、三号窯は有階有段型式の窖窯で、国分寺修理瓦を焼成している。

下総国 下総国では、千葉県香取郡下総町龍正院瓦窯で三基の地下式有段有階の窖窯(一・二号窯)と地下式無段有階の窖窯(三号窯)があり、下総国分寺と同範の宝相花文軒瓦が出土している。また、下総国分寺の東300mで補修瓦を焼成した下総国分寺東瓦窯^{注一七}三基(無段式窖窯)と西430mに下総国分寺西瓦窯(詳細不明)がある。

上総国 上総国では、市原市大和田窯跡群が7世紀前半に始まるが、8世紀中葉の市原市永田・不入窯の開窯を契機として上総各地に窯業生産が展開される。永田・不入窯は8世紀前半から9世紀初頭にかけて継続的に生産した窯跡で、二二基の窯が確認されている。

上総国分寺では、六種類の軒丸瓦、一四種類の軒平瓦が出土しているが、創建時の軒瓦は国分寺・国分尼寺共通のもので、平城宮系の蓮華文軒丸瓦・同系唐草文軒平瓦があり、常陸国分寺の様相に似ている。国分寺の創建瓦窯には、神門瓦窯跡、川焼瓦窯跡、南河原坂窯跡群がある。神門瓦窯跡は国分寺に近接した位置に築かれている。南河原坂窯跡^{注一八}は上総国の北端で、下総国と接した位置にあり、上総国分寺への瓦の供給を一つの契機として開窯された窯跡群である。採業当初は窖窯構造であったが、平安時代には有畦式平窯に変っている。

国分寺の修理瓦の瓦窯には、南田瓦窯跡、祇園原瓦窯跡があり、いずれも神門瓦窯跡と同様、近接した位置に築かれている。窯の構造は創建時の神門瓦窯跡・川焼瓦窯跡が窖窯構造であるのに対して、修理瓦を焼

成した南田瓦窯跡、祇園原瓦窯跡は有畦式平窯である。

武蔵国 武蔵国分寺の瓦窯として、南比企丘陵と南多摩丘陵が知られている。

南比企丘陵は、5世紀末葉から10世紀前半まで続く窯跡群であり、数百基（五〇〇基以上）の窯を推定している東国最大の窯跡群である。須恵器を主体としているが、国府・国分寺の造営を契機として、これまでの須恵器窯とともに瓦の焼成をおこなっている。

南比企窯跡群は、須恵器とともに国分寺のほか、各時代の寺院所用瓦を焼成した瓦陶兼業窯であり、国分寺出土の軒瓦の分類から、南比企丘陵では在地系軒瓦とともに平城宮系軒瓦も焼成している。

南比企丘陵の金沢窯跡では、瓦を多く焼成する窯は有段式窖窯、須恵器を中心に焼成する窯は無段式窖窯である。渡辺一によると、瓦陶兼業窯でありながらも、瓦の生産量の多い窯（A形態）として金沢窯跡、新沼窯跡が、瓦の生産量の少ない窯（B形態）として鳩山窯跡・小谷B窯跡・広町窯跡をあげている。

一方、南多摩丘陵は7世紀後半～8世紀前半に御殿山地区から大丸地区、和田地区に移り、9世紀後半から10世紀代の窯跡群である。大丸窯跡群ニュータウン遺跡群ナンバー513遺跡は、国分寺の南4.5kmにある瓦陶兼業窯で、有段式窖窯である。焼成された軒瓦は国府系の文様である。同じ南多摩窯跡群の谷野窯跡も有段式窖窯である。大丸窯が瓦専業窯で、本格的な瓦生産であるのに対して、南比企窯跡群は、須恵器生産を一時的に停止し、短期的に瓦生産を行っている。

末野窯跡群は、6世紀末に開窯され、7世紀代には武蔵最大の窯跡群となる。古墳時代には山裾の広い緩斜面に開折する小谷に窯が集中するが、8世紀には山中に入る傾斜地にあり、国分寺瓦を生産したと推定されているが、詳細は明らかではない。

八坂前窯跡^{注180}は、国分寺の塔の再建に伴う瓦窯で、須恵器とともに焼成している。窯構造は五号窯が半地下

式無段無階の窖窯、六号窯は地下式無段無階の窖窯である。新久窯跡も承和一〇年の塔再建の瓦窯であり、A一・二号窯がある。なお、八坂前窯跡では承和二二年を上限として須恵器生産が始まり、国分寺の塔の再建にもなつて瓦窯に変更、その後、須恵器生産にもどると指摘^{注181}されている。

武蔵国分寺の造営に対して各郡に瓦を割り当てたが、多くの郡には窯が存在せず、窯場を持たない郡は窯場をもつ郡に瓦を発注して国分寺に納めたと郡名瓦の分析から指摘されている。

相模国 相模国分寺は武蔵国分寺と同様、創建時の瓦窯は明らかでないが、国分寺補修瓦を焼成した瓦窯に瓦尾根瓦窯^{注183}がある。瓦尾根瓦窯は四基からなり、一号窯は窖窯を構築した後に平窯に改造されている。

甲斐国 甲斐国では甲斐国分寺に関連した瓦窯の調査例が少なく、7世紀後半の瓦陶兼業窯の天狗沢窯が3基確認されているのみである。

遠江国 浜名湖の西岸域約9 km、南北8 kmに198ヶ所の地点で窯跡が点在する湖西窯跡群がある。湖西窯跡群は5世紀末に明通り窯跡から開窯するが、大規模な窯跡群ではなく、操業期間も短く、点々と立地を変えて操業しているようであり、須恵器とともに埴輪を焼成した兼業窯である。瓦生産が行われるのは遠江東側で、この湖西窯と対峙した形で、8世紀中頃に須恵器とともに瓦を焼成した瓦陶兼業窯が造られる。

国分寺関連瓦窯としては遠江国分寺瓦窯^{注184}（清ヶ谷古窯）がある。清ヶ谷古窯は、国分寺の東12 kmで、奈良時代後半以降、平安時代中期までの三期に亘って操業された窯である。寺谷瓦窯は、国分寺の北約5.5 kmにあり、平安時代の有畦式平窯がある。

三河国 三河国分寺・国分尼寺に関連した瓦窯として豊川市西明寺西古窯、天間古窯、赤塚山古窯が知られており、窯体構造がわかるものとして赤塚山古窯^{注185}がある。赤塚山古窯は、三河国分尼寺の北東約1.5 kmの位置にあり、有畦式平窯一基を確認している。瓦窯からは素弁八弁蓮華軒丸瓦と飛雲文軒平瓦が出土している。

C. 北陸道

佐渡国 佐渡国分寺の瓦窯としては、日本海の広範囲に製品を供給したと思われる小泊窯跡群（百基）があり、佐渡国分寺の南東約20 kmに位置する。また、詳細は明らかでないが経ヶ峰窯跡がある。

D. 畿内

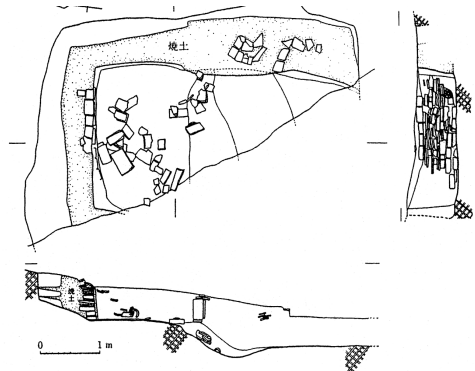
近畿地方では丹波国分寺に関連した三日市遺跡があるが、三日市遺跡で出土した軒瓦から、他の窯が存在した可能性が高い。他の近畿地方での国分寺瓦窯の実態は不明である。

E. 山陽道・山陰道 美作国・備中国・安芸国・石見国がある。

中国地方も国分寺に関連した瓦窯の実態は明らかでない。ただ、軒瓦を分析した亀田修一^{注186}によると、平城宮式瓦が美作・備中・安芸国分寺で使用されている。一方、備前国分寺では高句麗系、長門国分寺では新羅系軒丸瓦を採用している。周防国分寺では、国分寺修築瓦を焼成した窯として江泊古瓦窯跡の窑窯三基が知られている。

石見国 石見国では、5世紀末～6世紀初めに浜田市日脚一号窯で開窯され、7世紀前葉には各地で須恵器生産が行われている。石見国分寺に関連した瓦窯には、国分寺の南西約100 mにある国分寺瓦窯^{注187}がある。国分寺瓦窯は焼成部に火床（畦）を持たない無床式の平窯で、軒瓦のなかにも平城宮式の瓦を多く含んでいる。石見国分寺は「石見国守護撃事件」が良く知られ、国家が大きく関与した国分寺である可能性が高い。

F. 西海道 筑前国・筑後国・豊後国・肥前国・肥後国・豊後国・肥前国・肥後国・薩摩国がある。



第二-37図 石見国分寺瓦窯実測図

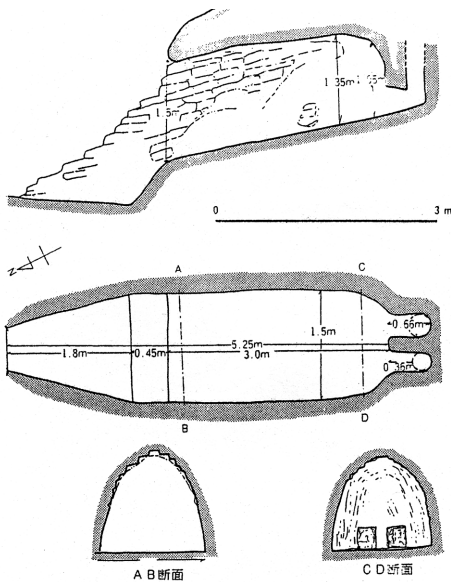
筑前国 筑前国での最古の瓦窯として、古墳時代から続く牛頸窯跡群内にある太宰府市神ノ前窯跡が知られている。神ノ前窯跡は、瓦陶兼業窯であり、相伴する須恵器はTK 209段階と位置づけられている。また、大宰府にある観世音寺に関連した瓦窯として福岡市老司瓦窯がある。

筑前国分寺に関連した瓦窯として国分寺瓦窯(第二―38図)がある。筑前国分寺瓦窯では一基の窯を確認しており、その窯構造は、京都府精華町乾谷瓦窯に近似しているもので、側壁から天井部にかけて日干しレンガを積み上げ、煙道部には通煙孔が二ヶ所開けられている。

筑後国 7世紀代に瓦陶兼業窯である八女市牛焼谷窯跡群が知られているが、筑後国分寺の創建時の瓦窯は明らかでなく、「延喜一九年」銘の瓦が出土した西行山瓦窯があるが窯体構造は不明である。

豊後国 豊前国では、6世紀末〜7世紀初頭に瓦陶兼業窯である中津市伊藤田窯跡群、踊ヶ迫窯跡群が知られており、7世紀後半には周辺の廃寺に瓦を供給している。また、8世紀には宇佐市虚空蔵寺に瓦を供給した虚空蔵寺瓦窯など数多く知られている。国分寺に関連した瓦窯としては国分寺の南東3kmにある船迫窯跡群がある。船迫窯跡群は地下式有階有段の窖窯が二基確認されている。平安時代の瓦窯としては徳政瓦窯がある。

肥前国 肥前国分寺には柿園瓦窯跡(第二―39図)がある。柿園瓦窯跡群は平窯四基からなり、燃焼部と



第二―38図 筑前国分寺瓦窯実測図

焼成部の境には隔壁があり、焼成部には六条の火道をもつ有畦式平窯である。

肥後国 肥後国では一五ヶ所の瓦窯が確認されており、国分寺瓦窯としては榎谷寺瓦窯跡が知られているが、窯体構造の詳細は不明。国分寺改修時の一〇世紀以降に操業された瓦窯としては無段無階の窖窯二基を含む神園山瓦窯^{注191}がある。

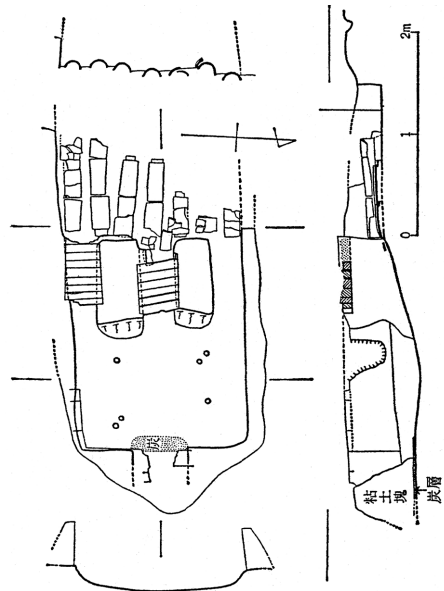
薩摩国 薩摩国分寺の8世紀後半の創建瓦窯として鶴峯窯跡^{注192}がある。鶴峯窯跡は須恵器窯一基と焼成部床面に四条の火道がある瓦窯(第二―40図)がある。

大隅国 大隅国分寺に関連した瓦窯としては、時期は明確ではないが宮田ヶ丘瓦窯^{注193}があり、三基の窯が確認されている。このうち、第三号窯は焼成部に瓦を利用して九段の階を設けた窖窯である。

六・国分寺の瓦窯

亀岡盆地に所在する丹波国分寺・国分尼寺の概要、新たに検出された丹波国分寺創建瓦窯の概要を記し、各国分寺に関連した瓦窯の検出例を紹介した。

広いとは言えない亀岡盆地における国分寺造営以前の寺跡には、池尻廃寺・桑寺廃寺・與能廃寺・観音芝



第二-39図 佐賀県柿園3号瓦窯址実測図

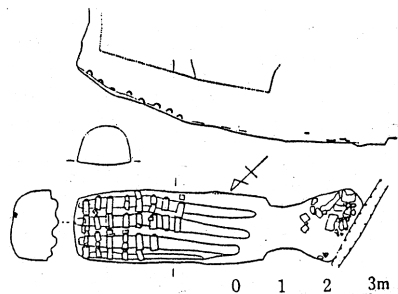
廃寺という四寺がほぼ同時に造営されるという特異は地域である。

これら四寺の性格については、旧山陰道の起点にあること、現撰丹街道という交通の要衝に四寺が選地されたことが窺える。また、寺の選地には古墳時代から続く有力首長の墓(古墳)が近接してあり、三ツ塚古墳に近接して観音芝廃寺。坊主塚古墳・天神塚古墳・出雲車塚古墳に近接して池尻廃寺。古墳群とその首長墓である拝田16号墳に近接して桑寺廃寺。群集墳が密集する地域にある與能廃寺がある。これら四寺を概観すると古墳時代から続く基盤のもとで四寺が造営されたことが窺える。

各寺の創建時期は、七世紀後半から末葉で、観音芝廃寺の十一世紀末葉を除いて、丹波国分寺の造営時期の奈良時代後半から末葉には廃絶している。想像をたくましくすれば、丹波国分寺の造営に際して廃絶され、その一部の部材が国分寺の造営に利用されたとも考えられる。ただ、観音芝廃寺は須恵器窯跡群に係り、奈良時代から平安時代にかけて一大窯跡群に係りした私寺であることから、国司あるいは国がその存続を容認した可能性が考えられる。

国分寺・国分尼寺の造営に際して、郡司の多くが半強制的に労役・資材を含めて撰取されたことが窺える。これは、下野国分寺瓦窯である町谷瓦窯では那佐郡・芳賀郡などの郡名を印刻した瓦が出土していること、同じく下野国分寺の補修瓦を焼成した水道山瓦窯でも河内郡・塩郡・那佐郡とも読める文字瓦が出土していることから、瓦供給分担の様子を想像することができる。武蔵国分寺の郡名瓦の分析から「窯跡をもたない郡は窯場をもつ郡に瓦を発注して国分寺に納めた」と高橋^{注194}夫は指摘している。

丹波国分寺・国分尼寺の造営に際しては、国分寺造営以前の寺院を廃絶して



第二-40図 鶴峯第1号窯実測

までもその資材を投入させられていたのではないかと考える。

丹波国分寺は二町域を有する寺域で、塔・金堂・講堂・鐘楼などで多くの瓦が出土しており、丹波国分寺独自の文様の軒瓦と平城京諸寺系列の軒瓦で構成されており、軒丸瓦一三種、軒平瓦一〇種がある。一方、三日市遺跡（瓦窯）では、窯本体の調査は実施していないが、灰原から出土した軒瓦は、軒丸瓦一種、軒平瓦一種であり、他の多くの丹波国分寺・国分尼寺の創建瓦を焼成した瓦窯の様子は明らかではない。ただ、各国の国分僧寺・国分尼寺がそうであるように、創建時に多量の瓦を焼成して瓦が葺かれるが、一定の造営・整備が進んで以後は、一部補修のための瓦を必要とするものの、多くの瓦を必要とせず、必要に応じて操業するだけである。瓦窯は創建時期に必要な一過性のものであり、平城宮・京に関連する瓦窯とは様相を異にするように思われる。具体例としては下野国分寺での町田瓦窯（栃木県佐野市）の七基、同じ下野薬師寺の造営に関わった水道山瓦窯で新たに瓦窯を一基築窯して国分寺の造営にあたって対応したことが知られているほかに、上津主麿寺・推定河内郡衙跡に供給した例がある。上総国分寺の神門瓦窯跡・川焼瓦窯跡・南河原坂窯跡群など広範囲の瓦窯から供給している例がある。

地方において寺院造営技術の有無、前時代の生産技術の差異によって受け入れ体制が異なり、中央で技術を習得した技術者が地方へ派遣されたことが考えられる。これは平城宮あるいは平城宮系瓦を使用した軒瓦の分布でも窺い知ることができる。

平城宮あるいは平城宮系瓦を使用した軒瓦では、軒丸瓦6225系・軒平瓦6663系が駿河・上総・美作・備前・国分寺で使用され、8325系軒丸瓦は甲斐・常陸・伯耆・播磨・備後国分寺で使用^{注16}されている。一方、窯構造をみると、その多くが古墳時代から続く階・段の有無はあるが管窯構造であり、国分寺創建時に有畦式平窯構造のものを採用したのは陸奥国分寺の蟹沢瓦窯、三河国分寺の赤塚山古窯、大隅国分寺の宮田ヶ岡瓦窯

など数例に限られている。有畦式平窯構造に定着する前の窯B・窯Cタイプの窯体構造に類似したものは、西国に多く石見国分寺瓦窯・筑前国分寺瓦窯がある。また、形態を異にするが豊前国虚空蔵寺の系譜をひく可能性がある焼成部床面に火道をもつ窯として薩摩国分寺の鶴峰瓦窯がある。

このように窯体構造と平城宮あるいは平城宮系軒瓦の分布状況は一致しない傾向にある。ただ、国分寺の補修のために造られた平安時代の瓦窯の多くは有畦式平窯であり、平安時代にはこの窯体構造のものが定着したものと思われる。

注二―60 石崎善久「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡（平成一五年度）（3）三日市遺跡第3次」（『京都府遺跡調査概報』第一一四冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）二〇〇五

注二―61 樋口隆久「丹波国分寺跡」（『亀岡市史』資料編第一巻 亀岡市市史編纂委員会）二〇〇〇

注二―62 山崎信二「平城宮・京と同範の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する基礎的考察」（一九九三年度 文部省科学研究費一般研究C）一九九四

注二―63 樋口隆久「丹波国分寺跡（御上人林廃寺）」（『亀岡市史』資料編第一巻 亀岡市市史編纂委員会）二〇〇〇

注二―64 柴暁彦「池尻遺跡第二次調査発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第五八冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）一九九四

中澤勝「池尻遺跡第三次調査発掘調査概要」（『亀岡市文化財調査報告書』第五五冊 亀岡市教育委員会）二〇〇〇

- 注二―65 柴晓彦「京都府亀岡市池尻出土瓦の検討」(『京都府埋蔵文化財論集』第三集(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九六
- 注二―66 森下衛「千代川遺跡第六・七次調査発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第一四冊(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九八五
- 注二―67 樋口隆久「與能廢寺」(『亀岡市史』資料編第一卷 亀岡市市史編纂委員会) 二〇〇〇
- 注二―68 樋口隆久「觀音芝廢寺発掘調査報告」(『亀岡市文化財調査報告書』第二〇冊 亀岡市教育委員会) 一九八八
- 注二―69 樋口隆久「觀音芝廢寺」(『亀岡市史』資料編第一卷 亀岡市市史編纂委員会) 二〇〇〇
新倉香「瓦当文様にみる技術伝播・交流の様相」(『帝塚山大学考古学研究所報告』I 帝塚山大学考古学研究所) 一九九八
工藤雅樹「宮城」(『日本の古代遺跡』15 保育社) 一九八四
『古代東国の産業―那須地方の産業と製鉄業―』(栃木県なす風土記の丘資料館 第2回企画展 栃木県教育委員会) 一九九四
- 注二―70 大川 清「下野の古代窯業遺跡」本文編一・二、資料編(栃木県教育委員会) 一九七五
- 注二―71 渡辺 一「国分寺と瓦造り」(関東古瓦研究会編『聖武天皇と国分寺』雄山閣) 一九九八
- 注二―72 田中 彰「飛驒」(『新修国分寺の研究』第七卷 補遺 吉川弘文館) 一九九七
- 注二―73 埋蔵文化財研究会「古代寺院の出現とその背景」 一九九七
- 注二―74 黒澤彰哉「第四章 常陸国国分寺の様相」(『新修国分寺の研究』第七卷 補遺 吉川弘文館) 一九九七
- 注二―75 滝口 宏「市川市史」第二卷 一九七四
- 注二―76
- 注二―77

- 注二―78 大野康男「第四章 第二節 国分寺の建立」(『房総考古学ライブラリー 歴史時代(二)』(財)千葉県埋蔵文化財センター) 一九九三
- 注二―79 渡辺 一「武蔵国の須恵器生産の各段階」(『王朝の考古学』雄山閣出版) 一九九五
- 注二―80 小林昭彦「入間市八坂前窯跡」(八坂前窯跡調査会・入間市教育委員会) 一九八四
- 注二―81 荒井建治「武蔵国府にみられる国分寺造営の影響」(関和彦編『古代王権と交流二 古代東国の民衆と社会』名著出版) 一九九五
- 注二―82 高橋一夫「埼玉における古代窯業の展開」(財)埼玉県埋蔵文化財調事業団 一九九一
- 注二―83 大川 清「日本の古代瓦窯(増補版)」(雄山閣考古学選書三 雄山閣出版) 一九七二
- 注二―84 安藤 寛ほか「平成元年度遠江国分寺跡周辺国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書」磐田市教育委員会 一九九〇
- 注二―85 斎藤嘉彦「第二 三河国 四瓦窯」(『新修国分寺の研究第七卷 補遺』) 一九九七
- 注二―86 亀田修一「瀬戸内海沿岸地域の古代寺院と瓦」(松岡弘宣編『古代王朝の交流六 瀬戸内海地域における交流の展開』名著出版) 一九九五
- 注二―87 内田律雄・江川幸子「第二 石見」(『新修国分寺の研究第七卷 補遺』) 一九九七
- 注二―88 鶴久嗣郎「肥前国分寺瓦窯址調査(昭和三三六年度西日本史学会春期大会 考古学関係研究発表要旨)」(『九州考古学』第一三三号) 一九六一
- 注二―89 高橋 章「第二編 第九章 都府楼の瓦を焼く (一)国分寺瓦窯」(『大宰府市史考古資料編』大宰府市) 一九九二
- 注二―90 高尾栄一ほか「船迫窯跡群」(『築城町文化財調査報告書』築城町教育委員会) 一九九八

注二一〇九 三島 格「神園山窯跡跡」(『熊本市東部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会) 一九七三

注二一〇八 小田富士男「薩摩国分寺瓦窯の発見」(『九州考古学』第三一号) 一九六七

注二一〇七 『宮田ヶ岡瓦窯跡』鹿児島県始良町教育委員会 一九九九

注二一〇六 注二一〇八に同じ

注二一〇五 森 郁夫「平城宮系軒瓦と国分寺造営」(『日本の古代瓦』雄山閣出版) 一九九一

初出：「丹波国分寺の創建瓦窯」(『京都府埋蔵文化財論集』第五集 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究セン

ター) 二〇〇六

第三章 奈良山丘陵での瓦工場の復元

第三章 奈良山丘陵での瓦工場の復元

第一節 鹿背山瓦窯の復元

一 はじめに

平成一九年、京都府木津川市鹿背山瓦窯の調査が実施された。

平成六年刊行の『木津町史資料編^{註1}』によると、鹿背山瓦窯は「大井手川の狭い谷筋の東側丘陵裾」に推定されており、採集遺物として三重圏文軒丸瓦、三重郭文軒平瓦が紹介されている。また、中島正は「相楽郡木津町鹿背山瓦窯出土の古瓦」で、木津町史に報告された資料のほか、木津川市(旧山城町)保管の資料とともに三上源一氏所蔵の瓦について紹介している。

このように鹿背山瓦窯は、古くからその存在が知られていたが、周辺地域での発掘調査例がなく、その実態については明らかでなかった。

平成一八年度から翌年の二年間をかけて、鹿背山瓦窯の発掘調査^{註13}が実施され、『木津町史』・『京都考古』で紹介された「大井手川の狭い谷筋の東側丘陵裾」「大池橋の東側斜面、柿畑」で、瓦窯二基を検出し、鹿背山瓦窯の実態が明らかとなった。

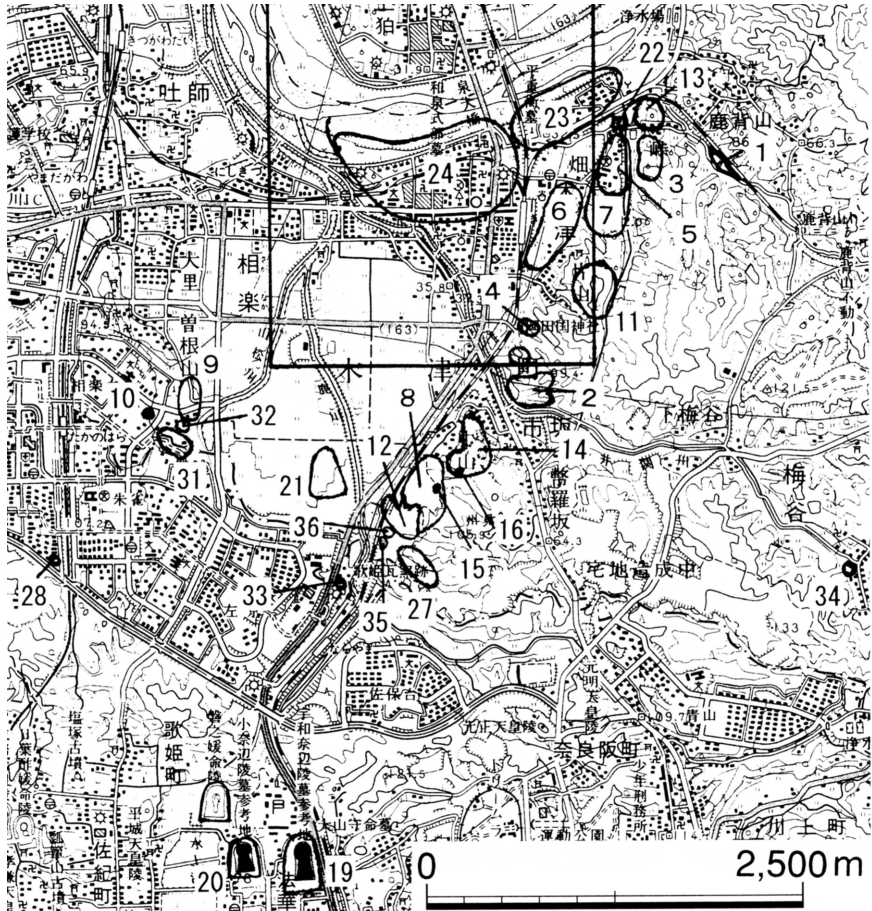
平成一八年度の発掘調査では、『木津町史』・『京都考古』で記載された柿畑で二基の瓦窯の存在を確認するとともに、丘陵上部で瓦・須恵器を含む土坑や掘立柱建物の可能性がある柱穴の存在を確認した(第三―二図)。平成一九年度には、丘陵部全域の発掘調査をおこない、掘立柱建物二棟、粘土採掘穴、通路状遺構二

条のほか、土坑などを検出し、鹿背山瓦窯（奈良時代中期）の瓦工房の全容が明らかとなった。

この鹿背山瓦窯の発掘調査成果をもとに、瓦工房の様子を復元的に検討していきたい。

二．検出遺構

鹿背山瓦窯跡は、平城京の北に広がる奈良山丘陵の北東部にあり、木津川の支流である大井手川の右岸丘陵に位置する。平成一八年度の確認調査で、丘陵南側斜面から一号窯と二号窯の二基の瓦窯跡と廃棄された多量の



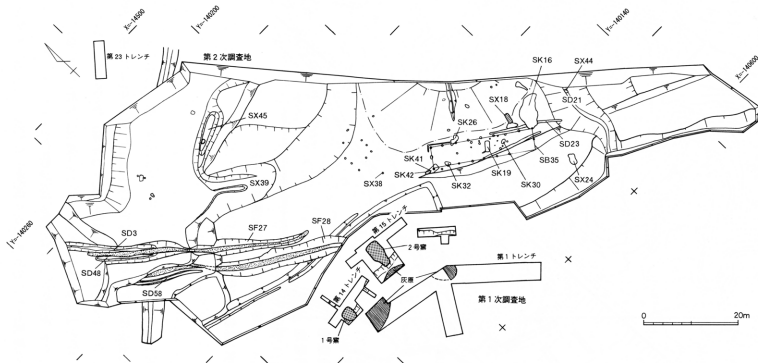
第三-1図 木津川市鹿背山瓦窯 位置図

瓦を含む灰原を検出した。ただ、瓦窯は上面輪郭、瓦窯に関連した灰原もその範囲の一部で瓦もサンプル資料として取り上げたのみである。このため、瓦窯は上面輪郭のみで、窯の内部構造や灰原からの出土遺物の全容調査にはいたっていないが、現状での調査成果を略述する。

①瓦窯 一号窯は平窯で、掘形を有し、焼成室の幅2.0m、厚さ0.6mで前面隔壁から奥壁間1.1m、煙道部は奥壁まで0.6mを測る。前面隔壁は二本の円柱粘土で分焰柱をつくり、通焰孔を一部塼で構築している(第三二二図)。

二号窯は、一号窯の東12mの位置にあり、窖窯構造で掘形を有し、焼成室は操業時のものから二回の改築がおこなわれている(第三一四図)。築窯時の焼成室は幅2.2m、隔壁から奥壁間3.2mで、上面では排煙孔1ヶ所が存在する。第二焼成室は、幅2.2m、隔壁から奥壁間2.4mで、排煙孔3ヶ所。第三焼成室は、平瓦を積み上げて壁面を構築したもので、幅2.2m、隔壁から奥壁間1.8mを測る。排煙孔は不明である。

一・二号窯とも窯の上面のみの調査であること、灰原も3ヶ所でのその存在を確認したが、一・二号窯から掻き出された灰原がその検出した3ヶ所の灰原のいずれであるかは明らかでない。なお、灰原からは『木津町史』・『京都考古』で紹介されたのと同型式の重圏文軒丸瓦、重郭文・重弧文軒平瓦が出土している。



第三-2図 鹿背山瓦窯遺構図

② 建物 窯が丘陵斜面に立地するのに対して、掘立柱建物などの瓦工房関連遺構は、比高差約4mの丘陵上部(窯の焚口部の標高約45m、掘立柱建物跡の検出面の標高約49m)に立地する。

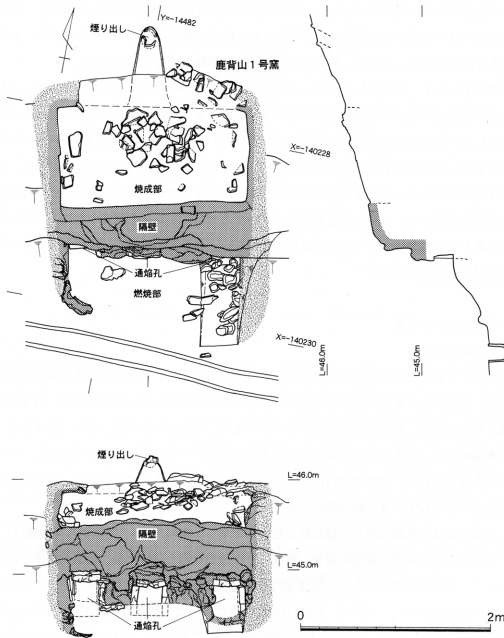
掘立柱建物は、調査地東半で一棟(SB35)と、調査区中央で柱筋は揃わないが小屋掛け程度の小規模な建物(一辺5m程度)が存在する。

掘立柱建物(SB35)は、東西(桁行)約21.6m×南北(梁行)約4.5mの東西棟の細長い建物で、柱間は桁行で27m(九尺)・梁行で225m(七・五尺)の等間隔で、掘形の直径0.3～0.5mを測る。建物内には東側柱から二列目と西側柱から二列目之間仕切りとも思われる柱穴が存在する。また、建物内には小規模なピットがあり、ロクロピットの存在の可能性も考えられる。

③ 通路 二基の瓦窯の北約2m、丘陵上部に二条の通路(SF27・SF28)を検出した。通路SF27とSF28は溝の心々距離4mと近接した位置にある(第三―6図)。

SF27は、全長48m、上面の掘り込み幅3m、深さ1m(丘陵部)の切り通し溝で、底部には細かい石を敷き詰めて路面を形成している。

この路面では上面幅0.3～0.4m、深さ5cm程度の窪みが一条、通路に平行してあり、ねこ車に



第三-3図 鹿背山1号窯 実測図

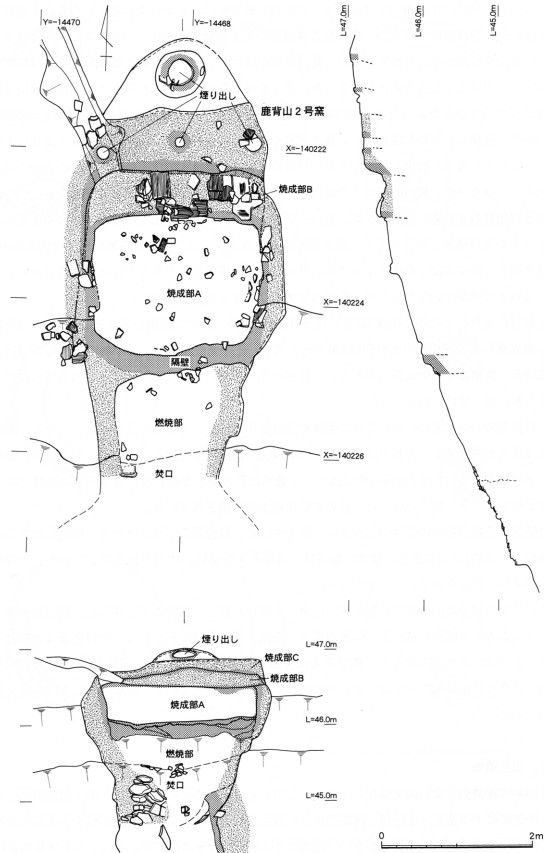
よる轍の跡と考えている。

下面(通路面)の傾斜角9度で、通路の西半部では細かい石敷きの上に砂などが堆積したために機能しなくなったためか、当初の通路の上面に砂の間層を挟んでさらに細かい小石を敷き詰めて、再度通路をつくっている。

S F 28は全長34 m、上面の掘り込み幅4 m、深さ1.1 m(丘陵部)の切り通し溝で、下面(通路面)は、S

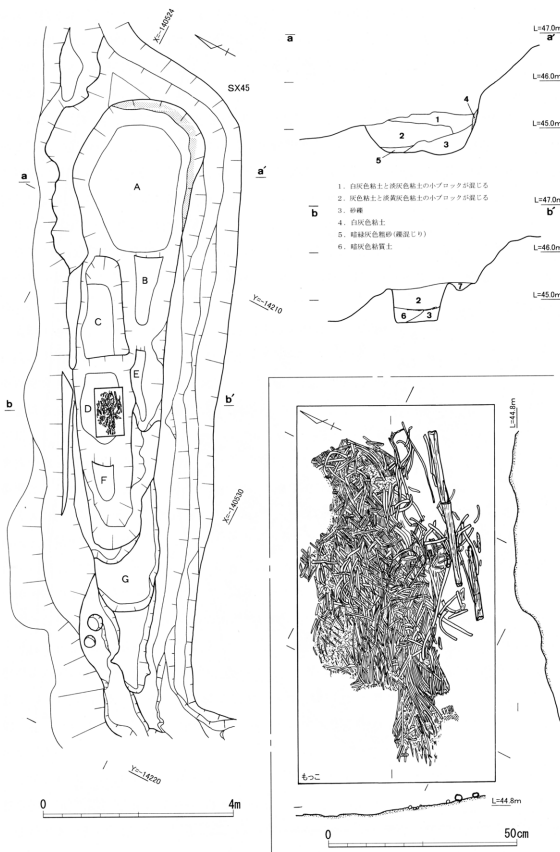
F 27と同様、底部には細かい石を敷き詰めて路面を形成している。下面(通路面)の傾斜角4度、轍の痕跡幅35 cm、深さ6 cmで、当初の通路の上に再度通路をつくっている。

S F 27とS F 28の二条の通路を比較すると、通路底部の傾斜角は、S F 27が傾斜角9度に対してS F 28は傾斜角4度で、S F 28がやや緩い傾斜になっている。また、通路内の轍の凹みは数値では表現できないがS F 27の轍の跡がS F 28の轍に比べて深い印象を受けている。



第三-4図 鹿背山2号窯 実測図

④粘土採掘跡 通路の北東方向約5mで、狭い谷部を開削した谷状地形がある。調査前には厚さ4mにわたって砂と粘質土が堆積していた。発掘調査当初はこの粘質土層が瓦成形のための粘土と思われたが、粘質土層下の砂層のさらに下層で、中世の遺物(瓦器碗・土師皿)を含む包含層を確認し、瓦窯の操業以後に堆積したことが明らかとなった。この堆積土は中世以降に北東にのびる谷部からの水と南側の大井手川からの堆積土によって形成されたもので、粘質土層下の砂層は湿地・汀を想像させるようなラミナー状に堆積していることが確認できた。さらに中世包含層の下層の土層堆積状況を確認したところ、調査地の東側で本来の大阪層群の堆積土が確認できた。その大阪層群では厚さ1mの粘質土が堆積しており、この粘質土を奈良時代の遺構が切り込んでいることを確認し、この粘質土が瓦に成形する主な粘土として奈良時代に採取したものと想像した。この粘質土

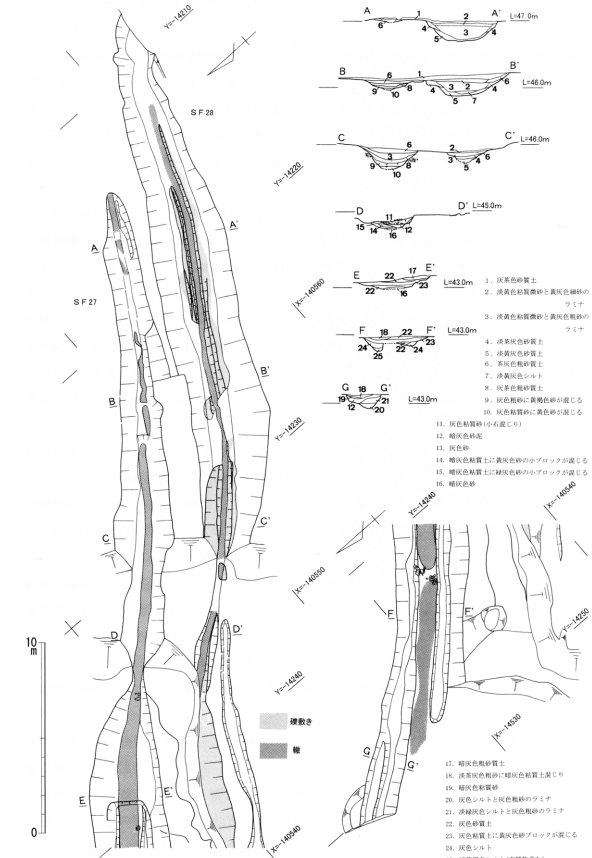


第三-5図 鹿背山瓦窯 粘土採掘跡 実測図

を採取した結果、上面幅が20 mの谷状地形(粘土採掘跡と仮称する)になったものと思われる。そしてその開削された谷部が、後世(中世以降)に、大井手川からの洪水あるいは湿地へと変化し、開削された部分に砂と粘土が堆積したものと想像できる。粘土採掘跡は幅約10 m、奥行き12 mを測る。

この粘土採掘跡の東側斜面で、全長約108 m、幅1.0 mで、底部の深さが異なる7ヶ所の窪み(土坑S X 45)を検出した(第三一五図)。土坑S X 45の1ヶ所からは植物繊維を編んだもので、モッコ状のものが出土している。

⑤土坑 7ヶ所の土坑を検出した。そのうち、掘立柱建物(S B 35)の掘形およびその建物に伴う排水溝(S D 23)を切る土坑(S K 16)がある。土坑S K 16は長軸約5.8 m・短軸4 m・深さ0.2 mで、瓦とともに土器が出土した。この土器・瓦は掘立柱建物の機能が停止された時期を表す資料と考えられる。



第三一六図 鹿背山瓦窯 通路実測図

⑥溝状遺構 調査地の東端には、この遺跡を区画するような溝状遺構（SD21）があり、その溝の東側には遺構・遺物は存在しない。溝状遺構SD21は上面幅3～5m、深さ約1mで、調査地内での検出全長は16m、溝はさらに北にのびるものと思われる。

溝SD21は、瓦工房に係わる遺跡の東を区画する水路と考えられているが、溝内からは焼けひずんだものや数個体が重なった状態のものを含む須恵器が多量に出土した。この遺物の状況から調査地内では検出されていないが、須恵器窯が存在した可能性が考えられるもの（第一案）と、検出した二号窯の天井部に須恵器が含まれることから、二号窯で焼成された須恵器をこの溝に廃棄した可能性（第二案）がある。

ただ、第二案では二号窯本体の内部の調査を実施していないこととともに、二号窯から溝状遺構SD21までは53mと離れた位置にあり、第一案の未調査地で、SD21に近接した位置に須恵器窯が存在した可能性を考えたい。

三．出土遺物

2ヶ年にわたる発掘調査で包含層のほか、各遺構から須恵器・瓦埴類、中世の瓦器などが出土した。このうち、奈良時代の瓦工房に関連した遺物には須恵器・瓦埴類がある。

①須恵器 SD21からは、癒着した須恵器杯Aのほか、杯蓋の焼け歪んだものなどがあり、周辺に須恵器窯の存在が想定できる。その須恵器窯を調査地の東側（調査地外の地点）にもとめるか、二号窯の創業時の窯で生産したか、結論はでない。これは灰原内からは、瓦とともに須恵器が含まれており、二号窯で須恵器を焼成した可能性が高いともいえることによる。

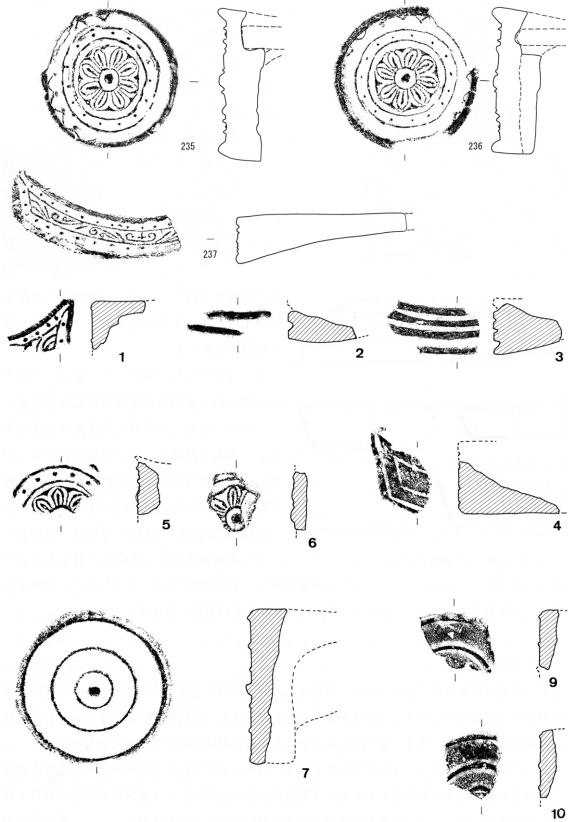
瓦工房（一部須恵器窯が存在した可能性もあり）の性格を特徴づけるように、土師器の出土量が少なく、

報告書でも図示されているのは5点に満たない量である。

須恵器は、遺構で記したように焼け歪みや重ね焼いた状態のものを含み、消費地での様相ではなく生産地(須恵器窯の存在)を想定できる遺物である。

須恵器は壺A・B・E・F・H・Q、壺蓋、杯A・B、皿A・B・C・E、皿蓋、盤、椀A、鉢A・D・F、甕A・C、無蓋高杯、椀、鉄鉢、托、水瓶、盤、平瓶、円面硯がある。

西端の溝(SD21)や土器だまりから出土した須恵器杯・杯蓋などの法量などが報告されていないため詳細に時期を検討する資料にかけるが、器種をみると、皿蓋(大型品)、鉄鉢形・盤・鉢F、無蓋高杯など、平城京の土器編年のなかでは古い様相を呈したものが出土している。高杯は、平城京の早い段階で消滅、平瓶で高台を持たないものが古い特徴で、平城宮土器Ⅲ古段階^{注三14}の長屋王邸SD5100の特徴に似ている。また、杯蓋の形態は頂部が丸みをもち、縁部との境が不明瞭な笠形の側面形を呈するもの(杯蓋B形態)と平らな



第三-7図 鹿背山瓦窯出土 軒瓦

頂部から屈曲する縁部になるもの(杯蓋A形態)がある。

土坑・溝状遺構出土の土器群は、平城宮土器Ⅲの古・中段階(略年代七三〇年代～七四〇年代)と思われる。

②瓦磚類(第二―七図)

窯の内部・灰原の調査を実施していないため全容はわからないが、土坑・溝・瓦窯の上面でとりあげた資料があり、軒丸瓦6313F型式・重圏文が出土している。重圏文軒丸瓦は、有心で外縁の張り出しをもたないもので、平城京・宮で同型式のものが確認されていない。軒丸瓦6313F型式は、平城宮の北方のほか、平城京左京三条一坊で出土している。

軒平瓦は6685E型式のほか、重郭文・重圏文軒平瓦がある。軒平瓦6685E型式は、軒丸瓦6313F型式と同様、平城宮の北方佐紀町で出土している。重郭文・重圏文軒平瓦は、重圏文軒丸瓦と同様、同範のものは平城京・宮ではいまのところ出土していない。

丸瓦は、有段(玉縁)式、平瓦は一枚つくりである。

軒丸瓦6313系軒瓦は、A・B・C型式などが平城宮還都以前の特徴をもち、軒丸瓦6313F型式の時期については明確ではないが、6313A・B・C型式と同様、平城宮還都以前(平城宮瓦編年^{注三〇}Ⅱ期：養老五(七二二)年頃～天平一七(七四五)年)の可能性が高いと思われる。

四・鹿背山瓦窯の復元

瓦生産には、①粘土の採掘→②粘土コネ→③粘土を瓦の形に成形→④生瓦の乾燥→⑤生瓦の焼成→⑥製品の搬出工程がある。これを鹿背山瓦窯における検出遺構にあてはめると、

①粘土の採掘 二条の通路(SF 27・28)の北側にある粘土採掘跡とSX 39がその採掘坑の痕跡と考えら

れる。

② 粘土コネ場 明確な遺構はないが、二条の通路の下位と粘土採掘跡のあいだに東西20m、南北8mの空地がある。この空地で粘土とともに砂などの混和材をくわえた粘土コネ場を想定したい。粘土・砂とともに水を確保する必要があるが、水は近接する大井手川から確保したと思われる。

③ 粘土から生瓦への成形 コネた粘土は通路1(SF27)を通り、掘立柱建物(SB35)へ運ばれて瓦に成形される。通路1は、通路2(SF28)に比べて、通路下面の傾斜度がやや急であり、コネた粘土はSX45でみつかったモッコを利用して、人が粘土コネ場と思われる谷状地形部分から掘立柱建物へ運び上げたと思像される。

他の瓦工房で、モッコの出土例を知らない。ただ、『当麻曼荼羅縁起』では、井戸を掘る状況が描かれており、そのなかに担ぎ棒をもち、モッコで土を運ぶ状況が描かれている。

混和材を含んだ粘土を建物SB35に運びこみ、建物SB35内で瓦に成形(成形された瓦を「生瓦」と呼ぶ)する作業と日陰で乾燥する作業をおこなう。建物SB35は、柱跡の検出状況から、建物内に間仕切りがあったものと思われ、作業内容により室が分かれていたものと思われる。また、検出したピットの一部には十分な観察ではあるが、ロクロピットと思像できるものもある。

④ 生瓦の乾燥 建物SB35は、東西に長い掘立柱建物である。建物の掘形の検出状況から、使用された建物の柱は直径20cm前後で、建物規模に対して柱が細いという特徴がある。また、桁行の柱間間隔は2.7mと広く、住まいとみるよりも仮設建物の様相を呈している。

SB35の南側は後世の開墾により奈良時代の遺構は検出できなかったが、SB35と同規模の建物も一棟南側に存在し、二棟が並列して建てられていた可能性がある。

⑤ 生瓦の焼成 S B 35で成形・生瓦を乾燥させたのち、丘陵斜面にある一号窯・二号窯で焼成される。焼き上げられた瓦は、一・二号窯の窯構造からみて、焚口部からではなく、焼成室の天井部を壊して製品を取り出したものと思われる。

⑥ 製品の搬出 窯で焼かれた製品は、窯の北側丘陵部の平場から、通路2 (S F 28) をネコ車に乗せ、西側の平場で役人が製品の品質や数量を確認し、確認された製品は、鹿背山西道・奈良山丘陵を越えて平城宮に運ばれる。時には木津川の水運を利用して他地域にも供給される。

高橋美久^{述16}二によると、『造東大寺司解』に「自瓦屋運瓦一千五百枚 功卅人」、『延喜式』卷三四木工車載条に「凡自小野栗栖野両瓦屋至宮中車一両賃卅文」と記載あり、「車を使用しての一日一往復に要した功」と考えている。

鹿背山瓦窯で焼成された製品が鹿背山西道を利用して、車での製品の移動なのか、大井手川から南下して木津川に入り、現在の山城大橋に近接した「木屋所」に集結して平城京・宮へ供給されたかのいずれかであると思われる。

五・通路検出の意味

これまでの瓦窯の調査では、瓦窯本体と掘立柱建物(瓦製作工房と瓦乾燥施設)の検出例が知られているが、瓦工房内での通路遺構の検出例は少なく、その論考についても限られている。管見にのぼる範囲で、瓦工房内での通路を論述したものを紹介すると、

高橋美久^{述17}二は、同じ奈良山丘陵にある木津川市上人ヶ平遺跡で、四棟の大型建物から窯(市坂瓦窯)につながる切り通しの道路遺構と大型建物の北東方向の二条の溝(道路側溝)の存在(瓦工房内の道路と製品の

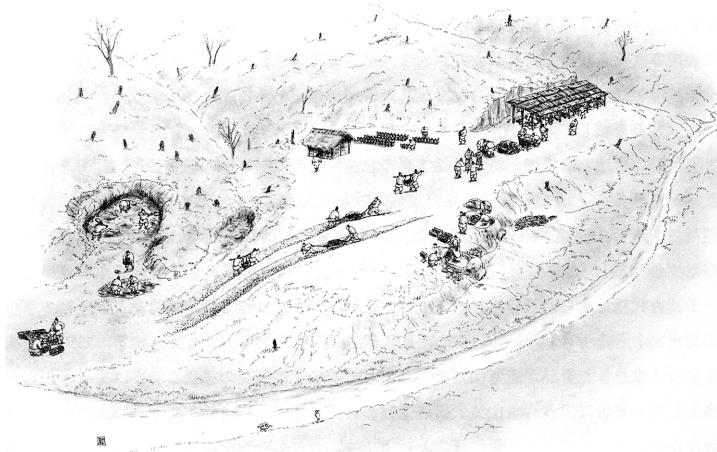
搬入路)を指摘し、車での製品の移動を含めて論述されている。

菱田哲郎^{注18}は、奈良山丘陵での瓦窯の発掘調査例から、木津川市梅谷瓦窯では焚口部の前面に製品の搬入・搬出路および薪の搬入路を想定し、後述の市坂瓦窯と上人ヶ平遺跡では「製品と薪の動線分離」を瓦生産の大きな革新と位置づけている。

なお、須恵器窯では7世紀を中心に煙道部から半円形にのびる溝状遺構が存在している例があり、排水施設とともに窯の製品の搬入・搬出のための通路としても利用されることが指摘されており、溝内には階段状の段を設けている例があるが、掘立柱建物と窯の関連を示す通路の例は知らない。

ここで、鹿背山瓦窯検出の二条の通路について検討すると、通路2(SF28)は、二号窯の立地する丘陵斜面の上位に先端が近接してある。二号窯で焼かれた製品を、丘陵上部から下位に搬出する通路と仮定することが可能である。通路に敷かれた玉石が中央で一条凹んだ状態であり、人の移動とともに重い荷駄(焼かれた瓦)をネコ車で搬出するための通路と考えたい。

ネコ車は現在でも民族資料として存在し、車輪の考古資料では兵庫県神戸市吉田南遺跡^{注19}で、奈良時代後半から平安時代の河川1から出土している。この車輪は厚い板を削り出したもので、



第三-8図 鹿背山瓦窯 想像復元図(早川和子作画)

このような車輪をつけたネコ車を利用したものと考えられる。

通路1(SF27)は、通路2(SF28)の北3mと近接した位置にあり、通路2のように明瞭なネコ車の利用を示すような一条の凹みは存在しない。通路1の西端は粘土採掘跡と推定しているSD46につながる広場にあたる。この広場は、採掘した粘土に混和材を混ぜて生瓦につくるための生地へと加工する場所であり、通路1はその広場から掘立柱建物(SB35)にモッコを利用して、粘土を建物へ搬入するための通路と考えられる。これは、通路2に比べてネコ車による轍の窪みが浅いこと、通路2に比べてネコ車を使用するような幅広の切り通しではなく、人が移動できるだけの幅を確保したように見てとれるためである。

通路2に比べて通路1の下面の傾斜度が急になっている。これは人による移動ではややきつい傾斜でも可能なためであったためで、ネコ車を利用しての移動では傾斜角をゆるくする必要があったためと思われる。

なお、この通路1と通路2の時期が異なり、時期を違えて造り変えられた可能性も考えられるが、鹿背山瓦窯が土器や瓦を見る限り短期間での操業であること、溝(切り通し部分)の堆積土がほぼ同様であることから、当初から二条の通路が存在していたと思われる。

注三一―1 平良泰久「八 鹿背山瓦窯」〔木津町史 史料篇Ⅰ 木津町〕一九八四

注三一―2 中島正「相楽郡木津町鹿背山瓦窯出土の古瓦」〔京都考古〕第六一号 京都考古刊行会 一九九一

注三一―3 竹原一彦「鹿背山瓦窯第一次」〔京都府遺跡調査報告集〕第二二六冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 二〇〇八

竹原一彦・柴暁彦・渡邊理気「鹿背山瓦窯第二次調査」〔京都府遺跡調査報告集〕第一三二冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 二〇〇九

注三一—4

玉田芳英「平城京土器編年の細分—SD 5100・5300・5310をめぐる—」(『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告—長屋王邸・藤原麻呂邸の調査—』奈良国立文化財研究所) 一九九五
平城宮土器については

平城宮土器Ⅰ…SD 1900を基準資料とし、七二〇年から七一五年頃

平城宮土器Ⅱ…SD 485を基準資料として七一五〜七三〇年頃

平城宮土器Ⅲ…SK 820を基準資料として七三〇年〜七五〇年頃

平城宮土器Ⅳ…七五〇〜七六〇年頃

平城宮土器Ⅴ…宝龜五年

平城宮土器Ⅵ…長岡京遷都後

注三一—5

岸本直文「考察 瓦埴類」(『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告—長屋王邸・藤原麻呂邸の調査—』奈良国立文化財研究所) 一九九五

平城瓦編年第一期…和銅年間〜養老五年頃(七〇八〜七二一年)

平城瓦編年第二期…養老五年頃〜天平一七年(七二一〜七四五年)

平城瓦編年第三期…天平一七年〜天平勝宝年間(七四五〜七五七年)

平城瓦編年第四期…天平宝字元年〜神護景雲三年(七五七〜七七〇年)

平城瓦編年第五期…宝龜元年頃〜延暦三年(七七〇〜七八四年)

注三一—6

高橋美久二「古代の道路と瓦の運搬」(『京都府埋蔵文化財論集』第二集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九一

注三一—7

注三一—6に同じ

注三一 8 菱田哲郎「第八章 奈良山丘陵の古代瓦窯と景観形成」(『南山城地域における文化的景観の形成と保全

に関する研究』平成一八年度京都府立大学地域貢献型特別研究成果報告書) 二〇〇七

注三一 9 奈良文化財研究所『木器集成図録 近畿古代編』(『奈良国立文化財研究所史料』第二七冊) 一九八四

初出：「木津川市鹿背山瓦窯跡の復元」(『京都府埋蔵文化財論集』第六集 (財) 京都府埋蔵文化財調査研

究センター) 二〇一〇

第二節 上人ヶ平遺跡の瓦工房

一・上人ヶ平遺跡の概要

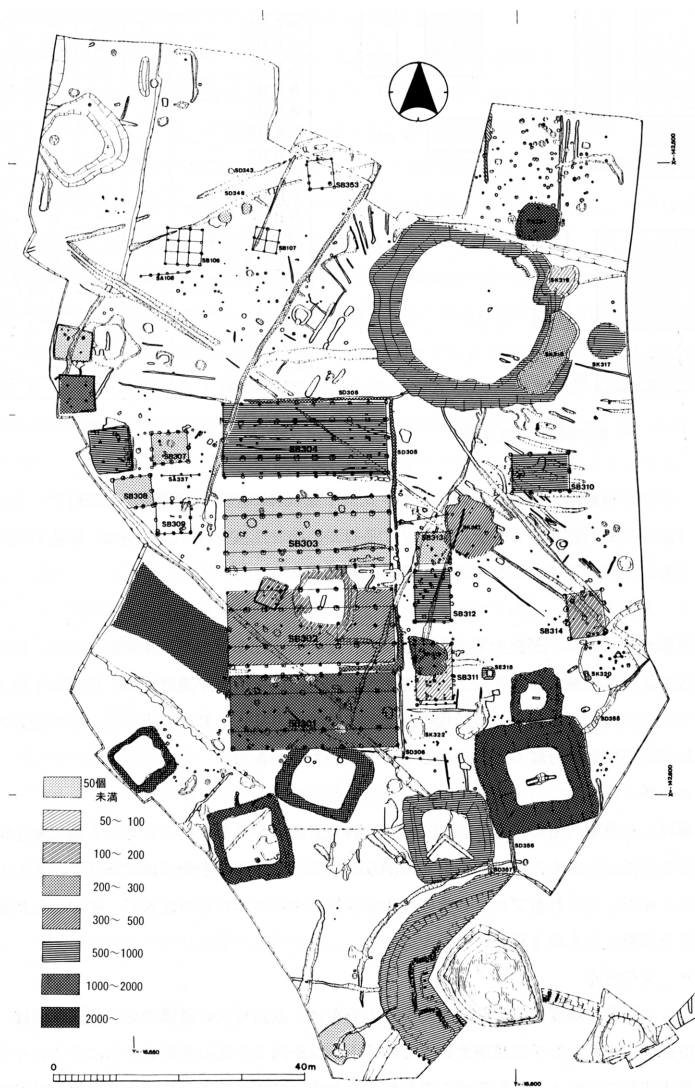
第一章奈良山丘陵の埴輪窯では、一七基の上人ヶ平古墳群と六基の埴輪窯について詳述した。この上人ヶ平遺跡は6世紀前半に古墳群の築造を終了し、おおよそ二百数十年を経て、新たに八基の瓦窯(市坂瓦窯)とその瓦窯に伴う工房跡が造られる。

市坂瓦窯を含めた奈良時代の上人ヶ平瓦工房は、昭和六三年・平成元年の二ヶ年に亘りおおよそ一〇〇〇〇m²の調査によってその様子が明らかになった遺跡である。注三・一〇

遺跡は、弥生時代後期から室町時代にいたる遺構・遺物が錯綜しており、弥生時代後期から古墳時代前半にかけて一基の竪穴建物と二基の周溝状遺構・土坑が、5世紀中葉〜6世紀前半には一七基の古墳が造られる。

古墳は調査前の段階でも墳丘など古墳の存在が確認できるもの(古墳A類)、墳丘が検出面より高く残るが現地表下に埋没しており、表土・床土を除去した調査段階で墳丘が確認できたもの(古墳B類)、墳丘が削り取られており遺構検出段階で周溝のみを確認したもの(古墳C類)がある。

続く奈良時代には九間×四間の大形掘立柱建物四棟と二間×四間の小形掘立柱建物九棟のほか、井戸・溝状遺構・土坑などがある(第三―九図)。掘立柱建物は、方位・基準尺・建物配置などから四期に細分することが可能であり、当初二棟の大形建物を造ったのち、順次一棟ずつ大形建物を増設し、上人ヶ平瓦工房の



第三-9図 上人ヶ平遺跡 遺構別瓦出土状況図

最終の段階には四棟の大形建物が同時並存していたものと思われる。

瓦窯は、掘立柱建物が立地する台地の北西斜面にあり、掘立柱建物から瓦窯に繋がる路面状遺構を検出している。この瓦窯は、確認調査の結果、八基あり、そのうち発掘調査を実施した市坂二・八号窯はいずれも有畦式平窯であるとともに、一・二・三号窯を囲むように窯の上部に排水用の溝がめぐること。窯の位置関係から二基単位と三基単位のユニットで瓦窯が構築されていることが明らかとなった。

上人ヶ平瓦工房は、後述するように短期間で廃絶し、中世遺構として一部、掘立柱建物などを検出しているが、奈良時代以降、大きく改変されることなく現代にいたっている。

このように上人ヶ平瓦工房は、前時代の古墳を大きくは壊すことなく、周溝の一部を利用し、大型掘立柱建物群で構成された奈良時代の大規模な瓦工房であり、奈良山丘陵における官営の瓦工房の様子を如実に表す遺跡である。

ここでは、発掘調査成果をもとに瓦操業の一連の作業である粘土の採取、生瓦の成形、乾燥、焼成とその製品の搬出先を明らかにし、奈良山丘陵での瓦生産の様相を検討していきたい。

上人ヶ平瓦工房には、掘立柱建物・井戸・溝状遺構・土坑のほか、性格不明のピットなどがある。上人ヶ平遺跡が立地する台地上での奈良時代の遺構の分布をみると、台地中央部とⅢ支尾根の基部に集中する傾向がある。

①掘立柱建物 一三棟の掘立柱建物がある。各建物跡はその分布・規模等からA建物群(S B 301・302・303・304)、A建物跡群の東側にあるB建物群(S B 310・311・312・313・314)、A建物群の西側にあるC建物群(S B 308・309)に大別できる。

以下、各建物の規模等、その概略を説明する。なお、各建物の掘形及び柱穴の説明に際しては、建物の南東隅の掘形を「一イ」とし、南北方向に一、二、三……、東西方向にイ、ロ、ハ……で表示する。

A 建物群(第三—10図)

台地中央部にあり、九間×二間の身舎に南北両面に廂をもつ建物で、四棟が整然と配置されている。

S B 301 S B 301は九間(26.19 m)×二間(5.82 m)の東西棟の建物で、南・北に各一間の廂をもつ。柱間寸法は桁行・梁行・廂とも2.91 m(10尺)の等間隔である。

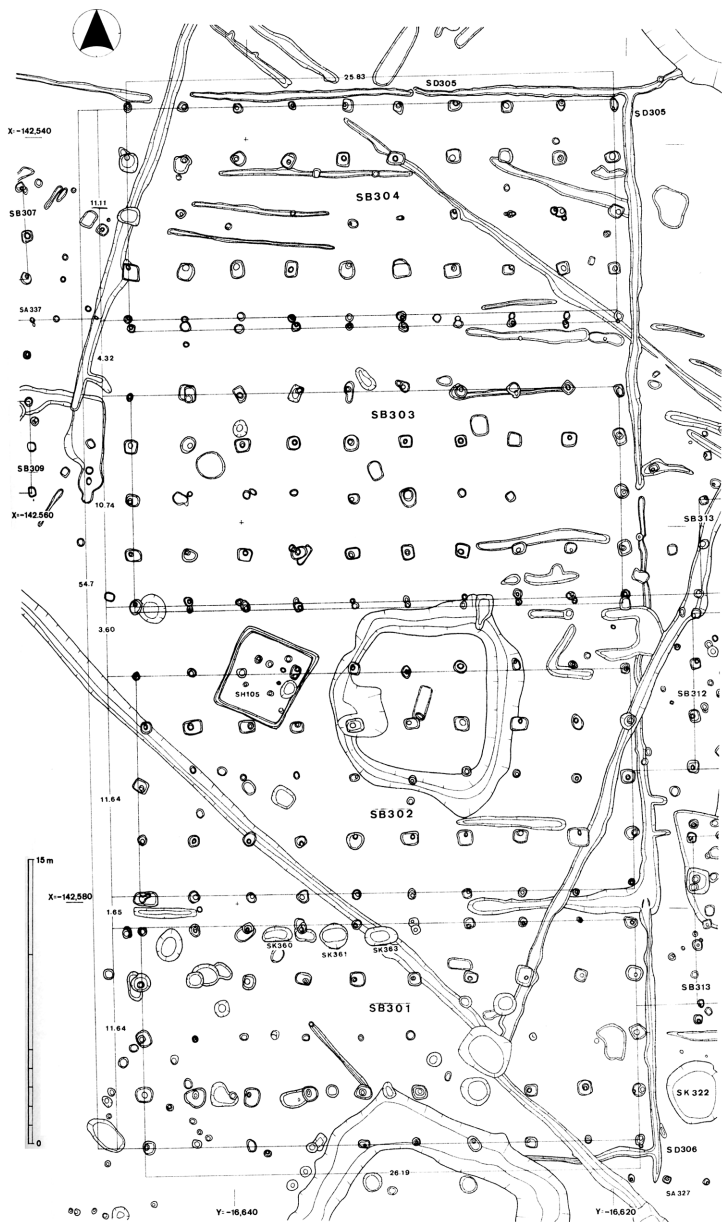
身舎の柱掘形は一辺0.61～1.1 mの方形で、検出面から掘形底部までの深さは38～84 cm(平均68 cm)を測る。一方、廂の柱掘形は一辺(あるいは直径)37～80 cm(平均48 cm)・深さ24～70 cmで、身舎に対して廂部分の掘形規模が一回り小さく、その深さも全体に浅い。

身舎及び廂部分の掘形内の柱痕は、身舎部分が直径20～40 cm(平均28.3 cm)、廂部分は直径14～24 cm(平均20.3 cm)を測る。掘形内の柱の抜き取り穴は「三・イ」の掘形をのぞき明瞭に残るものはない。

S B 301の特徴は身舎・廂のほか、棟通り(三列・ロくり列)にも直径26～46 cm、検出面からの深さ27～42 cm(平均36 cm)の小ピットが4ヶ所、短辺の柱筋に揃えて並び、長辺の柱配列(九本)に対して一本飛びに配されている。この棟通りの柱の性格については、後述するように梁を支えるための補助柱であった可能性が高い。

S B 301には東及び南の一部に建物に沿う形で、上面幅20～50 cm・深さ5～10 cmの溝(S D 306)があり、建物敷地内への悪水をふせぐための排水溝と思われる。また、北廂(五列)のホとへ・へとト・トとテの間に(S K 360・361・362・363)がある。土坑は生瓦を成形するためのもので、青灰色粘土を含む黄灰色粘質土を埋土とする。

S B 302 S B 301の北1.65 mと軒を接するように配された九間×二間の身舎に、柱間間隔2.91 mの南北両廂をもつ。

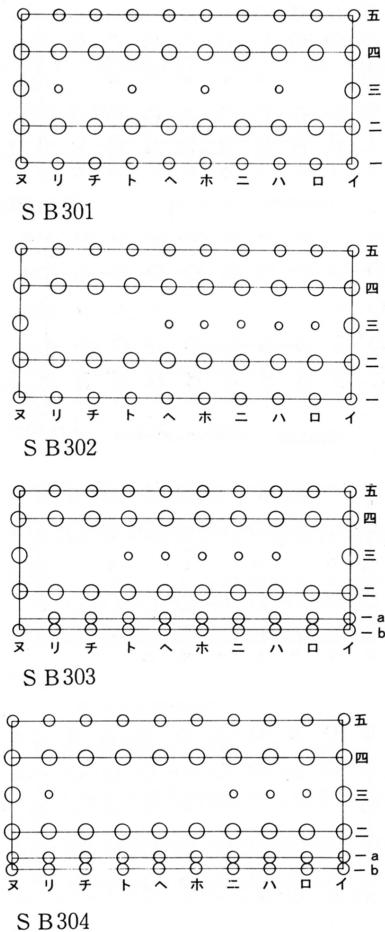


第三-10図 上人ヶ平遺跡 A建物群遺構実測図

つ東西棟の建物である。S B 302とS B 301の間には「L」字形に屈曲する溝(S D 305)がある。S B 302の身舎・廂棟通りの各掘形規模はS B 301とほぼ同じであり、身舎↓廂↓棟通りへと掘形規模が小さく、その深さも浅くなる傾向にある。棟通りの柱穴はS B 301のように一本飛び置きに配されるような傾向にはなく、東側に偏って配されている。

S B 303 A建物群の南から3棟目にあり、その規模はS B 301・302と同様、九間×二間の身舎に南・北に各一間分の廂をもち、棟通りにも小ピットが配されている。柱間間隔は身舎部分が2.87mの等間隔であるのに対して南・北の廂部分は廂の出が2.5mとなる。また、S B 303は南廂のみ建て替えにより2.5mから2.87mに拡張している。棟通りの小ピットはハ・ニ・ホ・ヘ・トの列に配されており、S B 302の配列とは若干異なる。

S B 304 A建物群の北端にあり、九間×二間の身舎に南・北各一間の廂をもつもので、柱間間隔は身舎及び北廂が2.87mの等間隔であるのに対して南廂は当初2.5mであったものを2.87mに拡張している。棟通りの小ピットは、口・ハ・ニの三列とリ列にある。S B 304の東及び北には、掘形から10〜30cmの間隔を



第三-11図 上人ヶ平遺跡A建物群模式図

おいた位置に「L」字状の溝SD 305(上面幅約0.4~1.4mに、深さ約20cm)がある。このSD 305の溝は、20号墳の周溝を利用した凹みに悪水が集まるように掘られている。

SD 305 A建物群SB 302・303・304を取り囲むように掘り込まれた上面幅0.4~1.4m、深さ0.2mの溝である。この溝は、本来はSB 302・303・304を取り囲んでいたものと思われ、西溝は後世に削りとられたものと思われる。このため現状では「コ」の字形を呈している。南北方向に走る東溝の長さは43.4m、東西方向に走る北溝の長さは23.5m、南溝の長さは10.2mを測る。

SD 306 SD 305と同様、SB 301を取り囲むように掘られた溝と思われるが、西と南辺の半分が削られ現状では南東隅を中心に「L」字状に曲がる。SB 301の短辺に平行する溝の検出長14.9m、長辺に平行する溝の検出長7mで、溝の上面幅は20~50cm・深さ5~10cmを測る。SD 306はSD 305を切っている。SD 305・SD 306の溝をA建物群に関連した溝(側溝)と考えれば、SB 302の後、SB 301が造られたことが考えられる。

SA 327 SB 301・SD 306の北側にある柵列で、検出長8.4m(四間分)、柱間間隔は2.1mの等間隔である。
SA 327の方位はSB 301・SD 306と異なりN2度30分Eを測る。

B 建物群

A建物群の東側にあり、A建物群に近接する南北棟の建物(SB 311・312・313)とA建物群からやや離れてあるSB 310・314・353がある。

SB 310 A建物群の西側で、SB 304の東柱列(イ列)から東に約19.5mの位置にある三間(9.0m)×二間(6.0m)の東西棟の建物で、掘形は一边(あるいは直径)35~70cmを測る。掘形の深さは四隅が深く、その間は浅い。SB 310の南柱列(一列)はSB 303の北廂の柱列(五列)と柱筋を揃えている。

SB 311 A建物群のSB 301・302の西側約3.15mにある二間(5.92m)×三間(8.88m)の南北棟の建物である。

柱間間隔は長辺が2.71 m・3.21 m・2.96 m、短辺が2.96 mの等間隔である。掘形は方形(あるいは円形)で一辺(あるいは直径)約30〜60 cmを測る。

S B 312 二間(5.67 m) × 三間(8.13 m)の南北棟の建物で、柱間間隔は長辺が2.71 mの等間隔、短辺は2.71 m・2.96 mを測る。S B 312はS B 311の東側柱列と柱筋を揃え、また、A建物群のS B 302の北廂の柱列(五列)とS B 312の三列の柱列が柱筋を揃えており、S B 311とS B 312の間は約3.56 m、S B 302とS B 312の間は3.35 mを測る。

S B 313 二間(5.42 m) × 二間(4.94 m)で、長辺は2.71 m・短辺は2.47 mの等間隔である。S B 313はS B 303の東側約4.25 mにあり、S B 303の南廂列(一a列)がS B 313の南列(三列)に柱筋を揃える。

S B 314 三間(7.11 m) × 二間(5.68 m)の南北棟の建物で、柱間間隔は長辺が2.37 m、短辺は2.84 mの等間隔である。掘形は方形で一辺約55〜85 cm・深さ約20〜60 cmを測る。S B 314の建物方位はA建物群とは異なっていてS B 307・308に近いN 8度45分Wを測る。

S B 353 他の建物群とは離れた位置にあり、二間(4.44 m) × 二間(3.96 m)で、柱間間隔は長辺が2.22 m、短辺が1.98 mの等間隔である。S B 353の方位はS B 307・308・309に近いN 6度00分Wを測る。

S D 325 S D 306に直交し、S B 311の短辺に平行して走る溝である。検出長約11 m・上面幅40〜50 cm・深さ約5 cmを測り、S D 325の東端は不整形土坑と重複する。

S A 324 S B 311とS D 325の間にある柵列で、検出長約4 m(四間分)・柱間間隔は約1 mの等間隔である。S A 324はS B 311の方位と平行する。

C 建物群

A建物群の西側にある三棟の建物群と柵列がある。

S B 307 四間(5.70 m) × 二間(4.80 m)の東西棟の建物で、方位はA建物群と異なり、後述するS B 308に近い。

長辺の柱掘形はイ・ハ・ホ列の掘形規模が60〜80 cm に対し、ロ・ニの柱掘形が50〜60 cm と一回り小さく、その深さもイ・ハ・ホ列に対し、ロ・ニ列が浅い傾向にある。柱間間隔は長辺が1.5・1.35・1.35・1.5 m、短辺が2.4 mの等間隔である。一・口の柱穴内に軒丸瓦6235Ma・6133Ab型式二点を含む瓦が柱痕上面で出土している。建物の廃絶後、瓦を廃棄したものと思われる。

S B 308 S B 307の南西に隣接してある四間×二間の建物と思われるが、長辺の西側が後世に削平を受けており明らかでない。S B 308はS B 309の掘形を切っている。

S B 309 四間(5.4 m)×二間(4.8 m)の東西棟の建物で、柱間間隔は長辺が1.5・1.35・1.35・1.2 m、短辺は2.4 mの等間隔である。S B 309の北列(三列)がS B 303の北廂の柱筋と並び、A建物群との関連が考えられる。

S A 337 A建物群であるS B 304の西側

(単位：m)

遺構	規模	棟方向	方位	廂	桁行全長	梁間全長	廂	柱穴(廂・柱穴)
S B 301	9×4	WE	N 1°45'W	N・S	26.19	5.82	2.91	身舎0.61~1.10(0.818) 廂0.37~0.80(0.543) 束柱0.25~0.46(0.349)
S B 302	9×4	WE	N 1°40'W	N・S	26.19	5.82	2.91	身舎0.47~0.96(0.710) 廂0.10~1.30(0.497) 束柱0.27~0.50(0.378)
S B 303	9×4	WE	東N 1°45'W	N・S	25.83	5.74	北廂 2.87 南廂 a 2.50 b 2.87	身舎0.55~0.89(0.713) 北廂0.32~0.92(0.599) 南廂 a 0.25~0.75(0.406) 南廂 b 0.27~0.70(0.399) 束柱0.27~0.56(0.419)
S B 304	9×4	WE	N 1°45'W	N・S	25.83	5.74	北廂 2.87 南廂 a 2.50 b 2.87	身舎0.50~1.15(0.774) 北廂0.43~0.96(0.569) 南廂 a 0.30~0.50(0.398) 南廂 b 0.16~0.80(0.435) 束柱0.30~0.54(0.4289)
S B 307	4×2	WE	N 3°45'W		5.70	4.80		0.45~0.65
S B 308	4×2	NS	N 7°00'W		6.00	4.80		0.45~0.6
S B 309	4×2	WE	N 1°15'W		5.40	4.80		0.35~0.7
S B 311	2×3	NS	N 1°40'W		8.88	5.92		
S B 312	2×3	NS	N 1°40'W		8.13	5.67		0.45~0.7
S B 313	2×2	WE	N 1°40'W		5.42	4.94		0.30~0.65
S B 310	3×2	WE	N 1°15'W		9.00	6.00		0.35~0.7
S B 353	2×2	NS	N 6°00'W		4.44	3.96		0.25~0.55
S B 314	2×3	NS	N 8°45'W		7.11	5.68		0.55~0.85

付表三-1 上人ヶ平遺跡掘立柱建物一覧表

で、S B 304の南廂（一 a 列）と柱筋を揃えてある。掘形は直径約25～30 cmの円形で、柱間間隔は1.3～2.0 mとバラツキがある。

路面

S F 380 A建物群から台地の西南斜面の瓦窯（市坂瓦窯）へ続く東西方向にのびる路面状の切り通しの通路である。S F 380は、上面幅0.6～1.0 m、深さ10～20 cmの両側溝（S D 343・S D 346）があり、両側溝は幅3～4 mの間隔で平行してのび、その総延長は約54 mを測る。S F 380は、S D 343・346のような明確な側溝がなく、遺構として分別しにくい^{註三12}が、地山が切り通し状に掘り込まれていること、その切り通し面の底部平坦面にあたかも荷重により、踏み固めたかのような状態で、小石とともに瓦片が散布している。

瓦窯

掘立柱建物群が立地する丘陵の南西側の斜面にあり、谷部を挟んで北東斜面に五基、南西斜面に三基の窯（市坂瓦窯）が確認されている（第三―12図）。市坂瓦窯の発掘調査は現状保存を前提とした調査であり、二八号窯の窯体構造を確認するための調査をおこなった。

市坂二号窯 市坂二号窯は有畦式平窯で、焼成室床面の幅2.0 m・奥行き1.4 mの長方形を呈し、焼成室床面には平瓦とスサ入り粘土を使った火床（畦）^{註三13}が七条設けられている。この畦は三本の分焰柱と四本の分焰孔にそれぞれ対応するように配されている。奥壁には梅谷七号窯のような通焰孔がなく、焼成室の天井に煙出があったものと思われる。有井広幸は奥壁と天井の間にスリット状の隙間を想定している。

焼成室の最大幅2.4 m・奥行き1.7 mで焼成室床面と燃焼室床面の比高差1.1 mである。

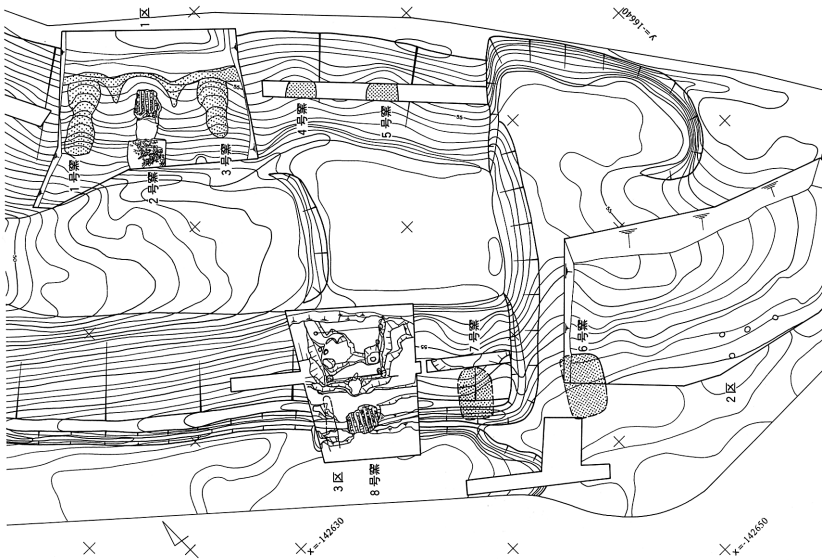
焚口部は、花崗岩を鳥居形に組んでいる。焚口部の検出状況では花崗岩を覆うように、瓦や窯壁があり、焚口部を密閉したかのような状態であった。

市坂八号窯 市坂八号窯は市坂二号窯と同様の有畦式平窯で、焼成室床面は市坂二号窯よりも一回り大きい。燃烧室と焼成室を限る前面隔壁は、地山を掘り残して分焰柱としているもので、三つの分焰柱と四つの通焰孔となる。

燃烧室は、幅1.2m、奥行1.6mで、地山を掘り込んだのち、一部粘土を貼り付けている。奥壁には排煙孔がない。焼き上がった製品は焼成室の天井部を壊して取り出したものと思われる。

焚口部には市坂二号窯と同様、花崗岩を鳥居形に組まれたもので、その前面(前庭部)には、4.0～5.3mの範囲に丘陵部を掘り込んで平坦面を造っている。前庭部の各隅部には柱掘形があることから、覆屋があったものと思われる。

上人ヶ平遺跡出土の軒丸瓦は3型式6種で6113Aa・6113Ab・6133B・6133C・6130B・6235Ma型式、軒平瓦は4型式6種で6732Aa・6732C・6725Ba・6725Bb・6691B・6718A型式が出土しており、市坂二・八号窯では軒丸瓦6113Aa・6113Ab・6133B・6133C・6130Ba型



第三-12図 市坂瓦窯 窯配置図

式、軒平瓦は 6732Aa・6732C・6718A 型式が出土している。

二・瓦工房について

上人ヶ平瓦工場の建物は一覽表(付表三―一)のとおり、大形建物(九間×四間)が四棟と、その大形建物の隣接して小形建物九棟がある。

これらの建物は、S B 307の柱抜き取り穴から軒丸瓦 6335Ma・6133Ab 型式が、瓦生産に利用した古墳の周溝などから小型瓦 6130 型式と 6718A 型式の軒丸瓦・軒平瓦があり、古い型式注三十四のものが含まれているが、軒平瓦 6133Aa・6113Ab・6133B・6133C 型式、軒平瓦 6732Aa・6732C・6691B 型式などから、平城宮瓦編年の第Ⅳ―Ⅰ期(天平宝字元(七五七)年～神護景雲元(七六五)年の軒瓦が出土している。また、直接建物とは関連しないが S B 334の南に近接してある土坑(S K 320)から万年通宝(初鑄七六〇年)、神功開宝(初鑄七六五年)が出土している。出土した少量の土器と瓦から築造開始から短期間に廃絶したことが窺える。ただし、この短期間ではあるが、遺構(柱穴)の切り合い、方位の相違あるいは建物配列などから、わずかながらも時期差が認められるため、以下に示す理由により、四小期にわけることができる。

建物の前後関係

建物の主軸をみると、真北に近い N 1 度 15 分 W 前後を測る I 群(S B 301・302・303・304・309・311・312・313・310)と N 5 度 W 前後を測る II 群(S B 307・303・314・353)に分けることができる。この I 群の建物のうち、S B 309の柱穴を切つて S B 306の柱穴があることから、I 群が II 群に先行することが明らかである。

四棟の大形建物をとり囲む小形の B・C 建物群の柱間間隔にはバラツキがあり、基準尺を読みとれなかった。これに対して大形建物の A 建物群は S B 304・303の北二棟は柱間間隔が 2.87m ではほぼ等間隔に、S B 302・301

の南二棟は柱間間隔が2.91mの等間隔に配されている。このため、北二棟の建物と南二棟の建物では西隅柱筋（又列）は通っているが、東へ行くにしたがい徐々にずれていく。

小型建物であるS B 309の掘形を切つてS B 308の掘形があることは先述した。このほかに各建物は整然と並んでいる。直接的な切り合い関係はないが、S B 304・S B 303はいずれも南廂に建て替えがあり、南廂の一a列を切つて一b列がある。

S B 304の南廂一a列の延長線上に柵列（S A 337）がある。S B 303では北廂（五列）の柱筋を揃えてS B 310の南側柱（一列）があり、その間はS B 303の柱筋（列）から東へ約19.5mの位置にS B 310の西側柱（二列）がある。また、S B 303の一a列の柱筋を揃えてS B 313の南側柱（一列）があり、その間隔は4.25mである。S B 309の二列もS B 303の三列と柱筋を揃えている。一方、S B 302の北側柱（五列）がS B 312の三列と、またS B 302の二列がS B 311の北側柱（四列）に柱筋をほぼ揃えている。このことからS B 303とS B 310・S B 313がS B 302とS B 311・S B 312が同時期の可能性が高い。

建物の変遷

このように主軸方位・基準尺の相違・遺構の切り合い・建物の配列等をみていくと四小期にわけることができる。ここでは時期を追って建物の配置をみていく（第三―13図）。

一期 S B 303・S B 304の大形建物が築造された時期で、その西側にはS B 304の南廂の延長線上に柵列（S A 337）を、そして柵列の南側にS B 309が配されている。また、大形建物の東側にはS B 310・S B 313が配されている。なお、一期の大形建物は南廂の建て替えがあり、南廂が当初2.5mの軒の出であったもの（一a期）を約37cm拡張し、軒の出を2.87mに拡張している（一b期）。

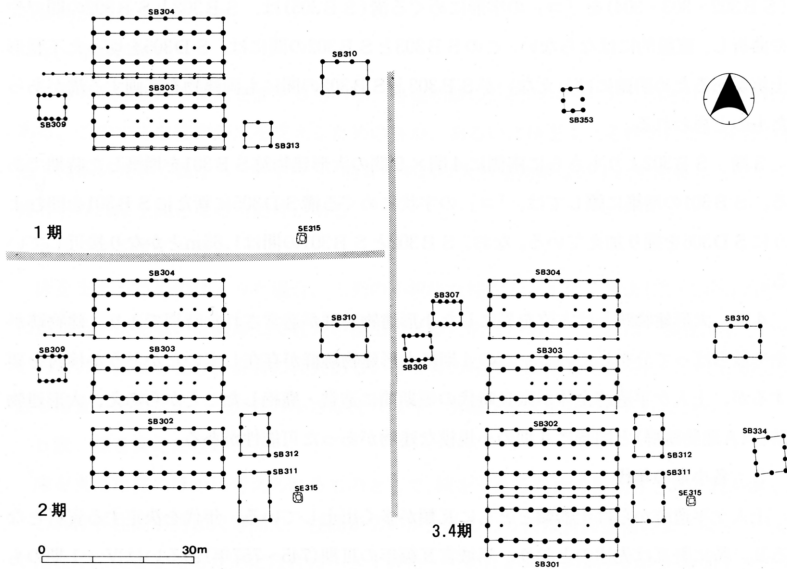
二期 S B 303・S B 304の二棟の大形建物に加えて、新たにS B 303の南3.23mに、四間×九間の大形建物を

増築している。建物配列からみて、この二期には西側の小形建物群（SB 309）は残っていたと思われるが、東側に配された二間×二間の建物（SB 313）は廃絶しており、新たに二間×三間の建物（SB 311・SB 312）に建て替えている。

二期の大形建物（SB 302・303・304）を「コ」の字形にめぐる溝（SD 305）は、SB 303とSB 302の間でやや曲折して直線的にはならない。SB 303とSB 302の間にはSD 305を切った不整形土坑があるため明確にはしえないが、SB 303とSB 302の間にも両建物を区画する溝があったものと思われる。

三期 SB 302よりもさらに南側に四間×九間の大形建物SB 301を増築している。SB 301の増築に際しては、「コ」の字状にめぐる溝SD 305に、新たにSB 301を囲むようにSD 306を掘り加えている。なお、SB 302とSB 301の間は1.65mとかなり接近している。

四期 大形建物とは方位を異にした小形建物群が造られた時期であり、建物がやや散らばって分布している。この四期に大形建物群が存在していたか



第三-13図 上人ヶ平遺跡掘立柱建物 変遷図

どうか検討を要するが、上人ヶ平瓦工房が奈良時代の短期間に造営・廃絶したことから考えて、大形建物群（A建物群）と同時に四期の小規模な建物があった可能性はある。

A建物群（大形建物群）の性格

上人ヶ平工房が、四棟の大形建物群とその三面（東・北・西）に小形の建物跡群を配していること、これらの建物群は四小期に細分することができ、当初は大形建物（S B 303・304）を中心に東・西に小規模建物を配し、新たに南へ二棟の大形建物を順次増築していた可能性が高い。

ここでは大形建物群の性格について検討してみたい。

A大形建物群（S B 301・302・303・304）は、九間×二間の身舎に南北一間の廂をもつ九間×四間の掘立柱建物であり、S B 303とS B 304はいずれも南廂に建て替えが行われている。

各建物の柱間はS B 303・304が約287m（十尺）の、S B 301・302が約291m（十尺）の等間隔で配され、前者（S B 303・304）の廂は当初2.5mの廂の出であったものを南廂のみ2.87mに拡張している。

身舎の間には東柱と思われる4〜5個の小さな柱穴があり、総数50本に近い柱穴で一棟の建物が構成されている。

この大形建物跡で検討を要するものに、各建物跡の三列のロウリ列に配された小柱穴がある。

この小さな柱穴が床を支えるための柱か、あるいは棟を支える柱かにより、建物の構造・性格が大きく異なる。

a 説 三列のロウリ列に配された小柱穴を、床を支えるための柱とみた場合、三列の小規模な柱穴とともに身舎（二・四列）の柱穴に重なるか、あるいは隣接した位置で柱穴が必要である。調査結果では三列目の小さな柱穴以外、明確な柱穴は見つからない。

b 説 床を支えた柱のほかに考えられるものとして、棟を支えるための補助柱と考えることが可能である。これは各柱間が約十尺等間で柱間間隔が広いが、柱直径25〜38cm（身舎）・20〜25cm（廂）と細く、棟を支えるためにも柱は細すぎる。このため、梁を補助する用途として棟の中央に補助柱を建てたという説である。束柱と意味づけて小さな柱穴の位置をみると、身舎の中央（三列）で直線的に通るものは少なく、梁にそって直線的に並ぶ傾向にある。

このようにa説とすればA建物跡は床張りとなり、b説ならば土間が想定できる。この三列の柱の性格についてはなお検討を要するが、b説の可能性が高いと思われる。このb説を取り入れてA建物群の性格を検討していく。

A建物群の特徴

A建物群は、九間×二間の身舎に南北両面廂、身舎の間には補助柱をもつ建物群である。身舎・廂の柱痕をみると柱直径25〜38cm（身舎）・20〜25cm（廂）となり、十尺等間のわりには柱の径は細い。この細い柱であるにもかかわらず十尺等間の柱間にしたのは、住居や宮殿のような恒常的な建物ではなく、短期間で簡単な構造の建物であり、少量の柱材で建物内の空間を最大限広げようとする意図があったと思われる。また、上人ヶ平瓦工房では、四棟の建物跡が南北に整然と並ぶこと、軒を接するかのような建物配置になっている。この四棟が同時併存していた時期（三期）があると考えれば、四棟の建物はいずれも軒を接した一体の構造物として使用された可能性がある。

このA建物群（四間×九間、四棟）を瓦工房に伴う建物と想定すると

- ① 十尺等間と柱間が広く、広い空間での作業が可能となる。
- ② 柱間隔を広くすることにより、少ない材料（柱）で建物を造ることができる。

- ③ 細い柱で十尺等間の柱間としたため、棟を支える補助柱が必要となった。
- ④ 四棟の大形建物を、南北に並列して並べることにより一体の建物として利用できる。
- ⑤ S B 301の北廂(五列)の「ホコチ」の間に、瓦成形の際に使用する粘土溜の土坑(S K 360・361・362・363)がある。

このことから、粘土から丸瓦・平瓦・軒瓦や鬼瓦を成形するための瓦屋であるとともに、成形した生瓦を乾燥するための覆屋と考えることができる。

小形建物群の性格

A建物群が瓦の成形や生瓦の乾燥する作業施設の蓋然性が高いと思われるが、A建物群の東・西・北にある小形建物群については、その用途を検討する資料が非常に乏しい。建物の配置・変遷からS D 309・313・310とS B 303・304の関連性、S B 302とS B 312・311の関連性が指摘できる。

これらの建物の周辺では、他の集落遺跡に比べて生活用具である土器の出土は非常に少なく、瓦の出土が多い。この少ない土器のなかでの土器の分布状況を見ると、調査地の北東にある土坑(S K 321)での出土が相対的に多く、次いでS E 315の井戸、16・8・7・6号墳の周溝内からややまとまって出土している。また、この大形建物群の東側中央に井戸(S E 315)があることを考え合わせるとS B 311・312・313などは厨房的な建物とみることができる。一方、西側の三棟の建物の周辺ではS B 307の西隣、S B 308の北隣にある竪穴建物(S H 103)を除き、土器の出土量は非常に少なく、瓦生産に関連した道具を収納する倉庫的な建物であった可能性が高い。

上人ヶ平遺跡の復元

『正倉院文書』「造東大寺造司解」天平宝字六(七六二)年二・三月の条によると、東大寺造営事業に対して

事務官僚である将領、瓦工、雑用を行う仕丁で構成され、一ヶ月の合計として七三二名の人が造瓦作業に従事したことが知られている。また、同文書では焼成された瓦の枚数、燃料の量とその作業に従事した員数のほか、窯の構築や粘土の採取、焼成された瓦の運搬が記されている。この文書を参考にして瓦工房における作業工程については第三章第一節「鹿背山瓦窯の復元」で先述したとおりである。ここではその工程に従って、上人ヶ平瓦工房の作業内容を検討していきたい。

①粘土の準備（土取り・土打ち） 上人ヶ平遺跡では奈良時代以前、古墳時代（5世紀後半）に埴輪窯が隣接して造られており、奈良時代以前でもこの周辺地形が窯の構築に適したものであることがわかる。また、瓦生産に際して多量に使われる良好な粘土を採取した地点として「ふんどし池」がある。

この「ふんどし池」は、市坂瓦窯の南にあり、丘陵に直交する形で不自然に掘られた池であり、明治時代の地籍図にもその記載がある。粘土を採取した後の窪地を後世に池として使用した可能性が考えられる。

②生瓦成形・調整 採取した粘土は、粘土の水分を抜き、粘土を小さく打ちくずす作業を行なう。その後、砂や水を混ぜて成形しやすい粘土に加工するが、この際に多量の水を必要とする。

上人ヶ平瓦工房では、古墳の墳丘を削り取り、かつ周溝を埋めて平坦面を造っているもの（古墳C類）のほか、周溝を埋めることなく残しているもの（古墳B類）、墳丘をそのまま残しているもの（古墳A類）があり、古墳の扱われ方に違いがある。古墳の周溝を埋めることなく、周溝を拡張している古墳B類は、瓦工房に利用するために改修されたものと思われる。周溝内に雨水を貯め、粘土こね場に利用したと思われる（第三―14図）。

A建物群では、轆轤ピットなどの遺構はなく、直接瓦の成形・調整を行った痕跡を示す資料は少ないが、SB301の北廂に接して三つの楕円形土坑（SK360・362・363）では、粘土を溜め置き、瓦工人が瓦の成形を行っ

たとも考えられる。

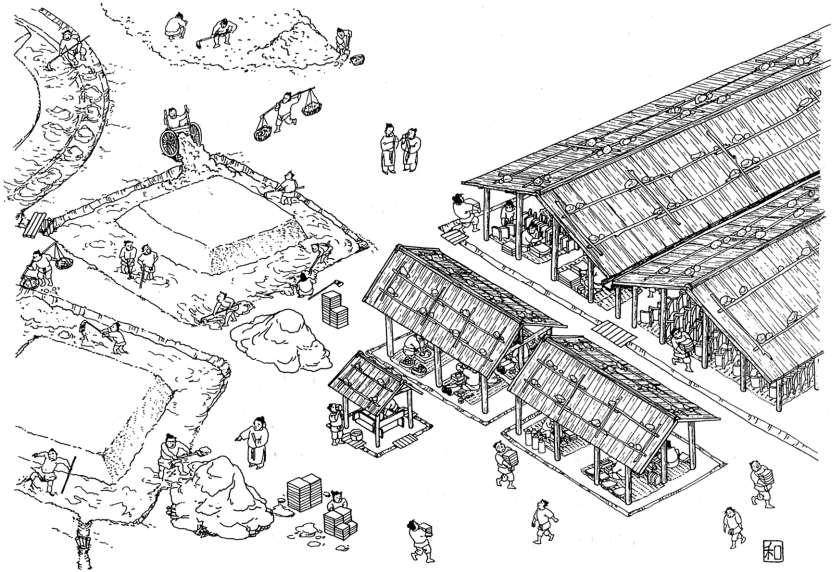
③乾燥 成形された生瓦は、数日〜十日前後乾燥させる必要がある。この乾燥にはこれまで天日で日干しするものと考えられていたが、上人ヶ平瓦工房での大形建物群の存在により、建物内に収納し、日陰干ししたものと考える。

A建物群は四棟を一带のものと考ええると、約1,485㎡(東西26.79m×南北54.7m)のスペースを確保できる。1㎡あたり十数枚の瓦を収納できたとして14,850枚程度の瓦をこの建物内で収納することが可能である(第三—15図)。

④焼成 乾燥した瓦は、A建物群の西側(SB301と302の間)の谷に向かう路面(SF380)を利用して八基の瓦窯(市坂瓦窯)へ運んだものと思われる。

上人ヶ平遺跡では、遺構・包含層を含めて整理箱で六五〇箱以上の多量の瓦が出土していることから、焼成された瓦は一旦は台地上に運ばれ、製品のチェックを行ったのち、供給地(主に平城宮)へ送られる。

上人ヶ平瓦工房(市坂瓦窯)の南、直線距離にして



第三—14図 上人ヶ平遺跡 瓦工房 想像復元図1 (早川和子作画)

30 mの位置に五領池東瓦窯がある。五領池東瓦窯は市坂瓦窯とほぼ同時期に操業していたにもかかわらず、その軒瓦・平瓦・丸瓦の特徴から、上人ヶ平瓦工房にはその製品は持ち込まれなかった可能性が高い。広大な工房跡を有する上人ヶ平瓦工房ではあるが、奈良山丘陵全域を統轄することなく、一部独立して瓦組織が存在したことが、上人ヶ平遺跡(市坂瓦窯)と五領池東瓦窯の関連から想像できる。

⑤供給地への搬出 上人ヶ平瓦工房から出土する瓦は、軒丸瓦 6133Aa・Ab・B・C、6235Ma 型式、軒平瓦 6732A・C、6725Ba・Bb、6718 型式、鬼面文鬼瓦、埴などがあり、いずれも平城宮、特に大膳職で多く出土している。上人ヶ平瓦工房から平城宮へは直線距離にして約3.2 kmであり、奈良山丘陵を越え、平城宮へ瓦は運ばれたものと思われる。

三、「造瓦所」について

上人ヶ平瓦工房では前述のように大型掘立柱建物四棟と小形建物九棟のほか、古墳の周溝を利用した水溜めあるいは粘土溜め施設、粘土を一時保管したと思われる小土坑がある。

この上人ヶ平瓦工房では八基の窯で瓦焼成を行っており、工房跡と焼成窯が明らかな瓦工房である。上人ヶ平瓦工房にみられるような遺跡を、古代文献では「瓦屋」「造瓦所」などと記載されている。

ここではこれまでに発掘調査がおこなわれた瓦窯・瓦工房遺跡の検出状況を紹介し、上人ヶ平瓦工房の状況を比較・検討していきたい。

「瓦屋」「造瓦所」関係の調査例は以外に少なく、濱田芳郎^{注三15}によると21遺跡あり、近畿地方では上人ヶ平遺跡を含め四例、他は関東・東北地方で特に関東地方での調査例が多い。

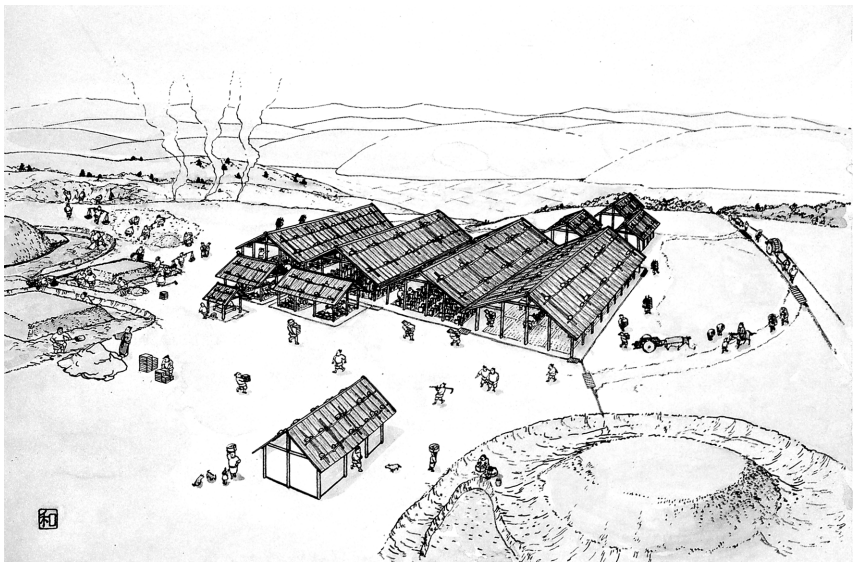
①京都府宇治市隼上り瓦窯 飛鳥白鳳時代の寺院である大和豊浦寺の創建に際して築かれた瓦陶兼業窯で

ある。生産地(隼上り瓦窯)から供給地(豊浦寺)までは直線距離約55kmを測り、遠隔地への瓦の供給が指摘されている。

隼上り瓦窯^{三三六}は、丘陵の南斜面に四基の瓦窯があり、瓦窯から西20m離れた丘陵末端の緩傾斜面に五棟の掘立柱建物、溝、土坑がある。また、調査担当者は、遺構密度が希薄な平坦面(広場)に生瓦の乾燥を行っていたと想像されている(第三―16図)。

検出した工房関連遺構は二時期に分かれ、a期は四間(7.2m)×二間(4.4m)の建物と粘土溜め土坑が、b期には規模を縮小し、三間×二間・二間×二間の建物跡が三棟と柵列がある。

建物SB13の内側には、環状溝と土坑SK01がある。環状溝はロク口あるいは成形台を伴った遺構。土坑SK01は、南北5.8m、東西2.4m以上の方形土坑で、白色粘土を多く含み、粘土溜めの機能をはたしたものと考えられている。この土坑には谷からの水をひいたよう^うで、土坑の北西角につながる全長15.8mの溝SD13がある。また、掘立柱建物SB15内にはロク口台等の関



第三-15図 上人ヶ平遺跡 瓦工房想像復元図2 (早川和子作画)

連遺構と想像されている環状溝S X 22がある。

② 奈良県大和郡山市西田中遺跡 斜面の崖ラインに平行するように大型の掘立柱建物を五棟検出して^{注17}いる。五棟の大型建物は総柱で、大型建物1は、桁行九間×梁行二間で南北の両面に廂をもち、東西長22.7m・南北長11.5m・床面積260㎡を測る。大型建物2は、桁行一間×梁行二間で四面に廂をもち、東西長29.7m・南北長11.9m・床面積350㎡を測る。大型建物3は桁行九間×梁行二間で、南北の両面に廂をもち、その規模は東西長8.35m、南北長29.0m、床面積311㎡を測る(第三―17図)。

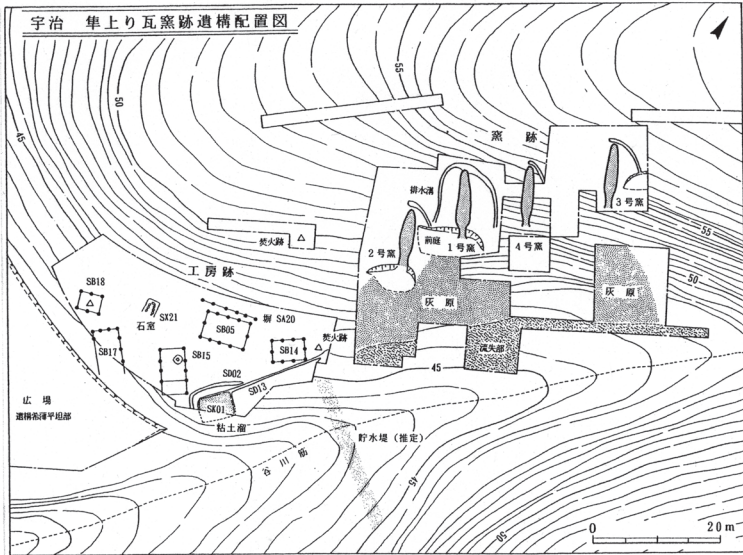
大型建物の周辺には建物に平行するように幅0.8mの溝があり、その溝からは軒瓦のほか、白色粘土がうまつており、溝を利用した粘土置き場と想定されている。また、大型建物1の南側に粘土採掘坑とともに粘土貯蔵穴とおもわれる白色粘土を含む土坑がある。

西田中遺跡は、粘土採掘坑や粘土溜めと思われる土坑や溝、軒丸瓦の出土などから藤原京へ瓦を供給した西田中・内山瓦窯に関連した瓦工房と推定されている。

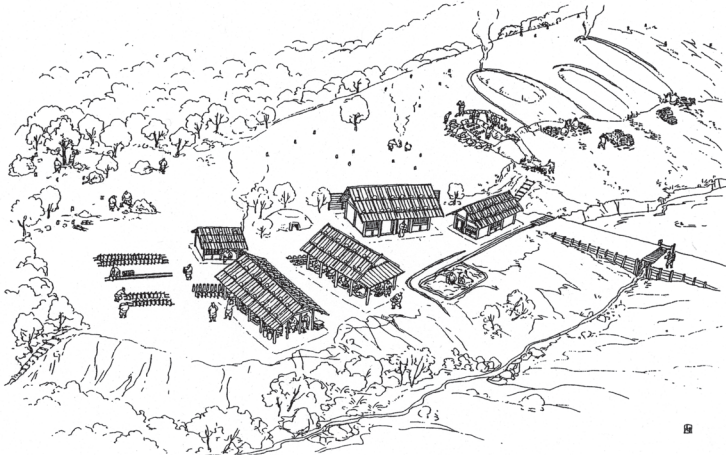
③ 音如ヶ谷瓦窯・大畠遺跡 上人ヶ平遺跡の立地する奈良山丘陵の一面にあり、出土した瓦等から上人ヶ平瓦工房に先行する平城宮瓦編年の第三・IV期(天平一七(七五七)年)宝亀元(七〇〇)年の瓦窯である。大畠遺跡は、音如ヶ谷瓦窯の北300mにあり、音如ヶ谷瓦窯に関連した工房跡^{注18}と考えられている。

音如ヶ谷瓦窯の工房跡及び大畠遺跡の奈良時代建物は、40棟の建物を数える。音如ヶ谷瓦窯の建物は三間×一間のほか、二間×二間で総柱の倉庫と思われる建物を、また、大畠遺跡では六間×二間の大形建物を含む掘立柱建物35棟と掘立柱塀8列を検出しているが、粘土溜め土坑などは検出されていない。

④ 滋賀県大津市榎木原遺跡 南滋賀廃寺の寺域の外側に隣接しており、大津宮時代から平安時代にわたる瓦工房^{注19}である。この遺跡ではA地区で瓦窯七基を、C地区では工房跡を確認し、瓦窯と工房跡は小さな谷川



集上り瓦窯跡の遺構配置図



第三-16図 京都府宇治市集上り瓦窯の遺構図と想像復元図(早川和子作画)

を境に区画されている。

工房跡は三期に大別でき、Ⅰ期は大津宮時代(六六七―六七二年)、Ⅱ期は8世紀前半頃、Ⅲ期は9世紀前半以降と考えられている。このうちⅠ期の遺構に竈窯五基と建物などがある。建物は九間×三間(SB103)と二間×二間(SB104)のものが「L」字状に配置され、SB103の建物内には粘土溜Ⅰが、SB103の東側に粘土溜Ⅱがある。また、SB103の西に池があった可能性がある。

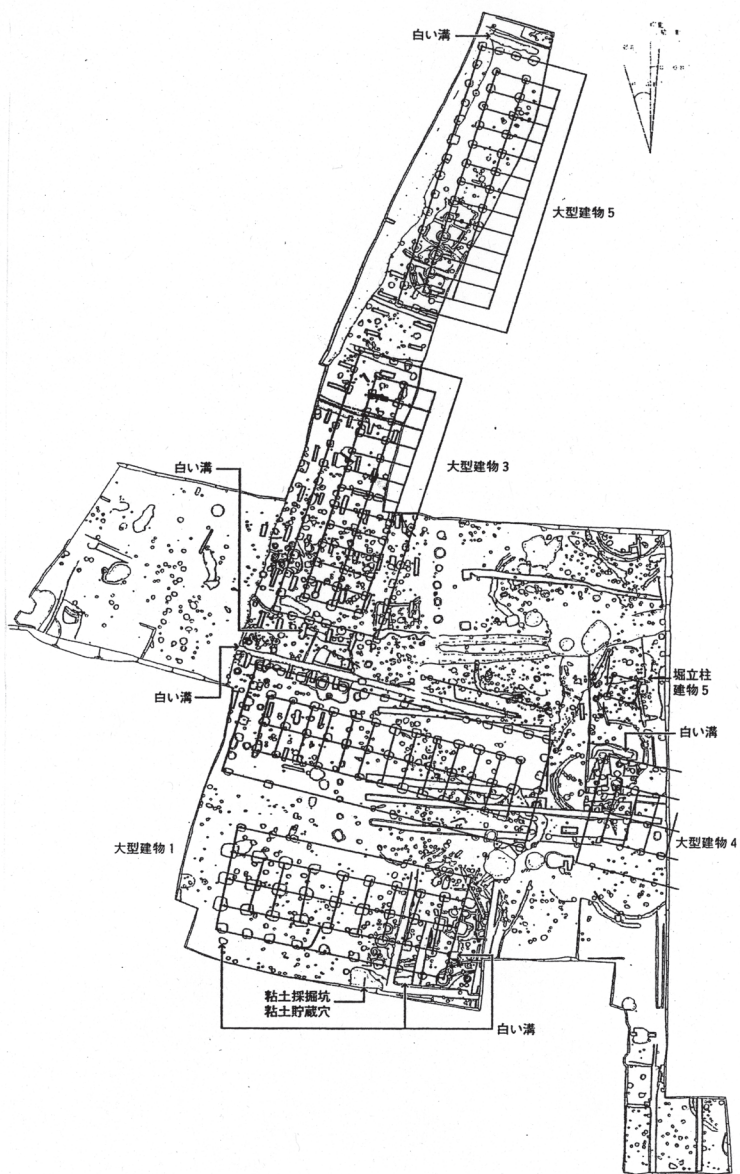
粘土溜Ⅰは、長方形で南北2.15～2.33m・東西2.5～2.71m・残存深度15cmで、下部に自然石と平瓦をほぼ一面に敷いて床面とし、その上部に純度の高い灰色粘土が堆積(厚さ0.1m)している。粘土溜Ⅱは、南北7.2m以上・東西13.0m・残存深度20～30cmを測り、粘土は粘土溜Ⅰと同様、純度の高い灰色粘土と瓦片五〇〇点が出土した。

⑤宮城県仙台市柞江遺跡 台ノ原・小田原丘陵の南斜面にある遺跡^{注120}である。

台ノ原・小田原丘陵には、大蓮寺窯跡(須恵器窯―5世紀)のほか、奈良時代～平安時代の瓦窯(蟹沢中窯跡・与兵衛沼窯跡など)など古代生産遺跡が集中するところである。台ノ原・小田原丘陵で生産された製品、特に瓦は7km以内の距離にある多賀城・陸奥国分寺・国分尼寺などに供給されている。

柞江遺跡では、竈穴建物二棟・掘立柱建物八棟のほか、土坑・溝などがある。竈穴建物二棟の周壁に瓦(平・丸瓦)を利用した暗渠等の施設がある。掘立柱建物は三間×二間のもの、二間×二間で総柱のものなどがあり、後者は倉庫的な建物と思われる。また、溝から水を集めて貯水用利用されたと思われる土坑第3号土坑―楕円形―径2.0～1.6m)などがある。竈穴建物及び掘立柱建物は瓦窯に隣接し、調査地からも多量の瓦が出土している。竈穴建物は鍛冶施設をもった工房色が強く、掘立柱建物は住居に付随し、貯蔵・保管的性格をもつ建物群と考えられている。

柞江遺跡の建物群は、多賀城のⅡ期(8世紀中頃～七八〇年)～Ⅲ期(七八〇～八六九年)に相当し、柞



第三 - 17 図 奈良県大和郡山市 西田中遺跡

江瓦窯が操業されなくなつて以降も建物群が存続しており、枘江遺跡の工房は蟹江中窯跡・与兵衛窯跡の工房としての性格を持ち続けたもので、いずれも多賀城等への瓦供給を意図した瓦工房であると考えられる。

⑥茨城県ひたちなか市原の寺瓦窯跡 台地の浸食谷に二基の窯が、狭い台地上に工房跡と思われる竪穴建物と1ヶ所の粘土置き場がある。^{注121} 竪穴建物内には粘土の堆積した部分があるもの、周辺の竪穴建物に比べて規模がやや大きい56㎡で、2ヶ所のカマドをもつもの(第四号工房跡)もある。

⑦栃木県小山市乙女不動原瓦窯跡 北側斜面で窯跡が、南側斜面で工房跡と思われる竪穴遺構が二地点で確認されている。^{注122} 竪穴遺構は粘土溜と思われる粘土の堆積が数10ヶ所確認している。

⑧埼玉県鳩山市鳩山窯跡群 南比企窯跡群の一角にあり、8世紀初頭から後半にかけての窯跡群である。小谷遺跡B地点では49棟の竪穴遺構があり、粘土溜の土坑・床面での粘土の堆積のほか、ロクロピットを認めている。また、同じ広町遺跡では、生産管理的性格をもつた床面積63㎡の竪穴遺構も見つかっている。

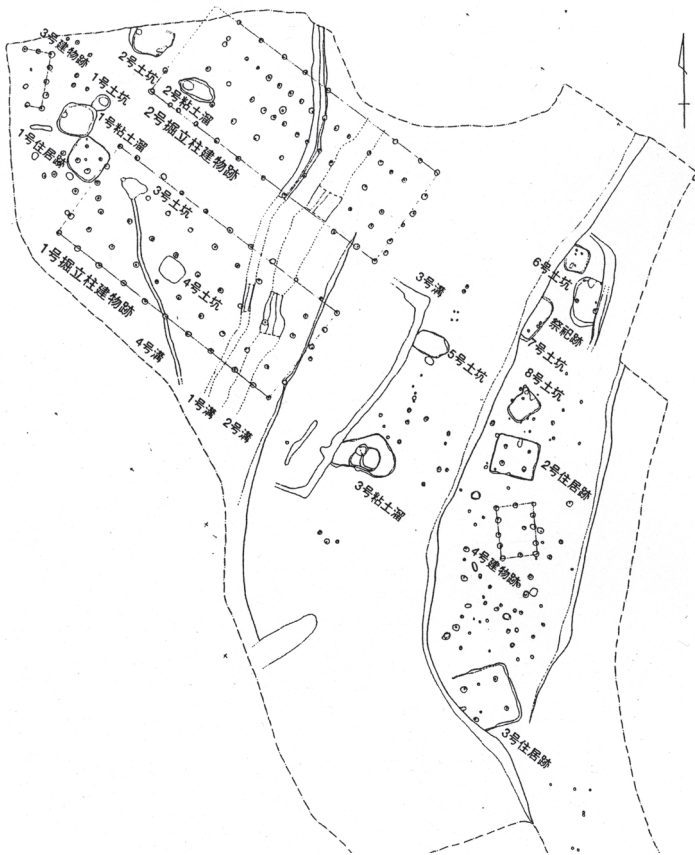
⑨富山県射水郡小杉町小杉丸山遺跡 小杉丸山遺跡では、丘陵上に7世紀の瓦陶兼業窯一基・須恵器窯一基・竪穴建物24棟・段状遺構五基のほか、粘土採掘穴(穴群3ヶ所・穴約75ヶ所)などがある。^{注124} 窯は完掘されていなが1号窯の灰原を中心に多量の瓦が出土している。

竪穴建物と段状遺構(比較的簡易な竪穴建物を想定)があり、竪穴建物は丘陵平坦上に、段状遺構は丘陵斜面を長方形に削り出してある。段状遺構は「窯で焼成する製品や、薪の仮置場的な施設」とともに「製品に係わる作業場としても使用されていた可能性が高い」と考えられている。また、平瓦の分析から「少なくとも一つの叩き板しか確認されておらず」小規模な生産組織を想定されている。

小杉丸山遺跡では建物のほか、瓦陶兼業窯(一号窯)の前面にある谷部で、粘土採掘穴が多数確認されている。なお、小杉丸山遺跡で生産された製品は、御亭角廃寺(飛鳥Ⅲ期―その距離11km)に供給されている。

⑩三重県鈴鹿市河原井瓦窯跡 伊勢国分尼寺に瓦を供給するために築かれた瓦窯^{注三二}であり、有畦式平窯三基と竪穴建物三基、南にやや離れて掘立柱建物一八棟、瓦溜め、土坑などがある。竪穴建物からは少量の瓦と灰色粘土を少量含んだ柱穴がある。掘立柱建物は廂をもの東西棟のものが二棟とその東側に総柱で四間×七間、床面積131㎡のやや大型の建物がある。

⑪福岡県築城町船迫堂がへり遺跡 豊前国分寺に瓦を供給した瓦窯で、工房跡は開析谷に立地している。^{注三二}掘立柱建物四棟と竪穴建物、



第三-18図 福岡県築城町船迫堂がへり遺跡 遺構図

土坑などがある(第三―18図)。掘立柱建物一号・二号は総柱で、床面積300㎡以上を測るもの。周辺には粘土溜め土坑がある。

⑫京都市北区上ノ庄瓦窯跡 初期平安京へ瓦を供給した瓦窯であり、台地斜面に有畦式平窯二基、台地上に掘立柱建物二棟とロクロピット3ヶ所を検出している。^{注三127}

⑬大阪府吹田市吉志部瓦窯跡 上ノ庄瓦窯跡と同様、初期平安京へ瓦を供給した瓦窯で、10㎡以下で最大50㎡にも満たない掘立柱建物15棟とロクロピット15ヶ所のほか、粘土の採掘穴がある。^{注三128}

その他、埼玉県新久窯跡・八坂前窯跡・新開窯跡などでも工房跡と思われる住居や粘土採掘坑などがみつかっている。

各瓦窯に関連した工房は検出例が少なく、その実態が明らかになっていない。その点でも上人ヶ平瓦工房は「瓦屋」を考えるうえにも重要な遺跡であると思われる。以下、「瓦屋」の調査例を比較検討してみたい。

これまでの瓦工房は、音如ヶ谷瓦窯・隼上り瓦窯・檀木原遺跡などのように、窯の低位平坦面に築造されていると考えられていた傾向にあった。ところが、上人ヶ平瓦工房では、丘陵斜面に瓦窯があり、丘陵上部に工房が造られている。同様のものは、木津川市鹿背山瓦窯・富山県小杉丸山遺跡・埼玉県鳩山窯跡群などがある。また、埴輪窯で紹介したように、高槻市新池遺跡でも埴輪窯が丘陵斜面に、工房跡が丘陵上部平坦面にある。

これまでの調査例では、大津宮あるいは南滋賀廢寺に瓦を供給したと思われる檀木原遺跡で、九間×三間の建物を確認しており、大型建物の存在は知られていた。平成元年以降は、上人ヶ平瓦工房・奈良県大和郡山市西田中遺跡、大分県堂がへり遺跡などで、床面積300㎡を越える大型建物の検出例が増加している。

大型建物は、瓦の乾燥や保管を目的とした建物で、上人ヶ平瓦工房の場合、九間×四間の建物跡が四棟も並列して存在する。

西田中遺跡は、藤原宮の宮の中枢部に瓦を供給するために造られた瓦窯で、高台・峰寺瓦窯跡、内山瓦窯、安養寺瓦窯跡などともに造られた官営瓦工房である。同じ官営瓦工房で、平城宮・京に関わる瓦工房として上人ヶ平瓦工房がある。窯の数、掘立柱建物の規模と棟数では、西田中遺跡・上人ヶ平瓦工房が飛び向けて規模が大きく、藤原宮・平城宮に関わる大規模の造営工事に伴い、選地・経営がおこなわれたものと思われる。

小規模建物は、隼上り瓦窯のように、四間×二間などの掘立柱建物とともに二間×二間の総柱の小規模建物跡がある。瓦の成形小屋や倉庫を想定されている。隼上り瓦窯は、大和豊浦寺へ瓦の供給するために造られた瓦窯であり、寺の造営に関わった短期的な瓦工房である。檀木原遺跡は大津宮から平安京造営に関わる瓦工房であるが、工房規模としては小規模である。

檀木原遺跡では、九間×三間の建物の内側に粘土溜め土坑があり、この建物跡内で粘土の生成・なま瓦の成形を行ったものと思われる。上人ヶ平遺跡でもSB301の北廂の柱穴に接して粘土を溜めたと思われる楕円形土坑が三基あり、生瓦の成形がこの建物内で行われていた可能性がある。埼玉県鳩山窯跡群は、須恵器窯を主体とした工房跡と瓦窯に伴う工房跡がある。同遺跡では、500基以上の粘土採掘坑がみつかった。また、同県新久窯跡・八坂前窯跡・新開窯跡などでも工房跡と思われる住居跡や、粘土採掘坑などがみついている。

このように、瓦工房・「瓦屋」の実態については、徐々に明らかになりつつあるが、瓦工房の調査成果例が少ないため不明な部分が多く、その点からも上人ヶ平瓦工房の調査は重要である。

- 注三一〇 石井清司・伊賀高弘ほか「上人ヶ平遺跡」〔京都府遺跡発掘調査報告書〕第一五冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）一九九一
- 注三一〇 森島康雄「市坂瓦窯」〔京都府遺跡発掘調査概報〕第六八冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）一九九六
- 注三一〇 高橋美久二「古代の道路と瓦の運搬」〔京都府埋蔵文化財論集〕第二集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）一九九一
- 注三一〇 有井広幸「煙道部を持たない平窯の構造について」〔京都府埋蔵文化財論集〕第五集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）二〇〇六
- 注三一〇 奥村茂樹「上人ヶ平瓦工房に関する一考察―大規模瓦工房の操業契機をめぐって―」〔立命館大学考古論集〕Ⅲ 立命館大学考古学論集刊行会）二〇〇三
- 注三一〇 大和郡山市教育委員会編「古代の造瓦所を考える」（第7回こおりやま歴史フォーラム 大和郡山市教育委員会）二〇〇一
- 注三一〇 杉本宏「隼上り瓦窯発掘調査概報」〔宇治市埋蔵文化財発掘調査概報〕第三集 宇治市教育委員会）一九八三
- 注三一〇 杉本宏「初期寺院の造瓦所―隼上り瓦窯跡の調査から―」〔古代の造瓦所を考える』（第7回こおりやま歴史フォーラム）大和郡山市教育委員会）二〇〇一
- 注三一〇 濱田芳郎「藤原宮の造瓦所―西田中遺跡の調査から―」〔古代の造瓦所を考える』（第7回こおりやま

- 歴 史フォーラム 大和郡山市教育委員会) 二〇〇一
- 注三―18 岡本東三・田中哲雄・巽淳一郎・吉田恵二「音如ヶ谷瓦窯の調査」(奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部編『奈良山―Ⅲ 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』京都府教育委員会) 一九七九
- 平良泰久「大島遺跡」(『木津町史、史料編Ⅰ』木津町) 一九八四
- 注三―19 林 博通他「榎木原遺跡発掘調査報告」Ⅲ(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会) 一九八一
- 注三―20 結城慎一「折江遺跡発掘調査報告書」仙台市教育委員会 一九八〇
- 注三―21 勝田市教育委員会「原の寺瓦窯跡発掘調査報告書」一九八〇
- 注三―22 坂詰秀一ほか「乙女不動原窯跡確認調査報告」小山市教育委員会 一九九七
- 注三―23 渡辺 一他「鳩山窯跡群Ⅲ」(『鳩山窯跡群発掘調査報告書第3冊―工人集落編Ⅰ』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会) 一九九一
- 注三―24 上野 章他「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第6次緊急発掘調査概要」富山県教育委員会 一九八四
- 注三―25 伊藤久嗣「32、三重県河原井瓦窯跡」(『日本考古学年報』33 日本考古学協会) 一九八三
- 注三―26 高尾栄市「船迫窯跡群」(『築城町文化財調査報告書』第四集 築城町教育委員会) 一九九七
- 注三―27 南孝雄「上ノ庄田瓦窯跡」(『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所) 一九九三
- 注三―28 増田真木「吉志部瓦窯跡(工房跡)」(吹田市都市整備部・吹田市教育委員会) 一九九八

初出:「第八節 奈良時代の遺構について」(『上人ヶ平遺跡』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)

第四章

奈良山丘陵の瓦陶兼業窯

第四章 奈良山丘陵の瓦陶兼業窯

第一節 京へ供給した瓦窯

一．はじめに

第二章第二節奈良山丘陵における瓦窯の展開では、中山瓦窯・梅谷瓦窯などの調査成果を通じて瓦窯の変遷を略述した。奈良山丘陵では、中山瓦窯・梅谷瓦窯のような瓦専業窯とともに、須恵器のみを焼成した須恵器専業窯、瓦とともに須恵器などを焼成した瓦陶兼業窯がある。

京都府、奈良県を含めた奈良山丘陵周辺での須恵器窯の調査例は少なく、前述の平城ニュータウン計画地内では、奈良山丘陵第10・11・12号地点で四基、第11号地点で一基（7世紀中頃）、第12号地点で一基（7世紀前半）、第10号地点で一基（7世紀中頃）が確認されている。^{注四一}ただ、この調査はいずれも平面輪郭のみで、窯体内の調査はおこなわれていない。藤原学・中村浩によると、^{注四二}平城京造営の時期には、最初から須恵器生産そのものを配置しなかったとの指摘がある。なお、平城京後半期の須恵器窯は知られており、生駒谷の須恵器窯（七基）などがある。また、京都府内では、同じ平城京後半期の須恵器窯として、木津川市加茂町西柵窯跡、^{注四三}綴喜郡精華町煤谷川窯址がある。^{注四四}

西柵窯跡は、平城宮土器Ⅲ（SK 820併行期）の須恵器窯であるが、整理箱にして五〜六箱の瓦が出土しており、須恵器焼成の焼き台として瓦片が使用されていた。西柵窯跡で瓦を一時期焼成したのか、あるいは周辺で瓦窯が存在するかどうかは明らかでないが、瓦陶兼業窯の可能性もある。

煤谷川窯址は、西柵窯跡とほぼ同時期に操業された須恵器專業窯と考えられているが、65点の丸瓦片が混在している。この丸瓦は、窯内の排水施設として利用するために使用された部材と考えられている。

西柵窯跡・煤谷川窯址は、須恵器專業窯の可能性が高いが、木津川市瀬後谷瓦窯は、発掘調査の結果、瓦專業窯である一号窯のほか、二・三号窯は瓦陶兼業窯であることが明らかとなった。特に、瀬後谷二・三号窯では、後述するように、軒瓦の型式・同范関係から平城宮のほか、平城京の邸宅にも瓦を供給していることが明らかとなり、これまでの奈良山丘陵の瓦窯を検討する上での有効な資料であると考えられる。

二・瀬後谷瓦窯の概略

瀬後谷瓦窯は、第三章第二節で記した上人ヶ平遺跡とは丘陵を挟んだ谷部で、上人ヶ平遺跡の南方350mに位置する。遺構・遺物は、分布調査（表面観察）では確認されていなかったが、丘陵裾でのグリットによる確認調査を行ったところ、焼土と遺物を確認し、その存在が明らかとなった瓦窯である。

窯跡は、近世の水田開発で窯本体は大きく削りとられていたが、20mの範囲に集中しており、灰原の状況から五基存在することが明らかとなった（第四―一図）。

瀬後谷一号窯

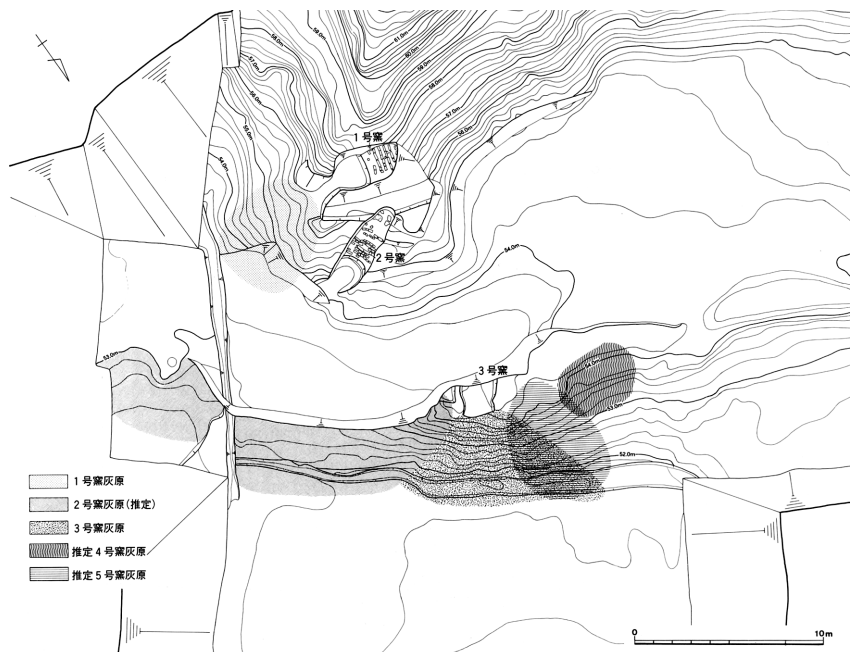
五基の窯のなかでも高所（標高56～58m）に位置する。瓦窯検出段階で、焼成部の窯尻及び天井部が削り取られていたため明らかでないが、崩落した天井部の状況から丘陵斜面をトンネル状に削り貫いた地下式構造と思われる（第四―二図）。

焼成部 焼成部床面は三面確認した。築窯当初の焼成部床面（第一床面）は、段（水平面）を設けずに斜面をそのまま利用したもので、検出全長2.03m・最大幅1.94m、床面傾斜角26度5分を測る。ただ、この第一床

一面は、第二床面を除去した際に、高温の火を受け、還元状態に床面を確認したものから想定したもので、第二床面を成形する際の準備として、まず生瓦を入れず、空焚きした可能性もある。

第二床面は第一床面の上面に、窯の主軸に対して直交するように補充粘土をカマボコ状に敷き、さらに丸瓦を据えて七列の段を造っている。焼成部の段は、玉縁部に次の丸瓦を連結した状態で据えられている。

第三床面は、第二床面の各段上面に、窯の主軸に対して直交するように二〜三枚の半截した平瓦をのせ、さらにその上面に完形あるいは半截した平瓦を敷き並べたもので、第二床面のような明確な段はない。また、燃焼部と焼成部の階は、当初0.73mであったものが、第三床面では0.8mと高くなるためか、焚口方向に向かって約30cm広げている。第三床面を造るために瓦を敷き詰めているが、瓦に交じって土製塔片(基壇部分)が使用されていた。



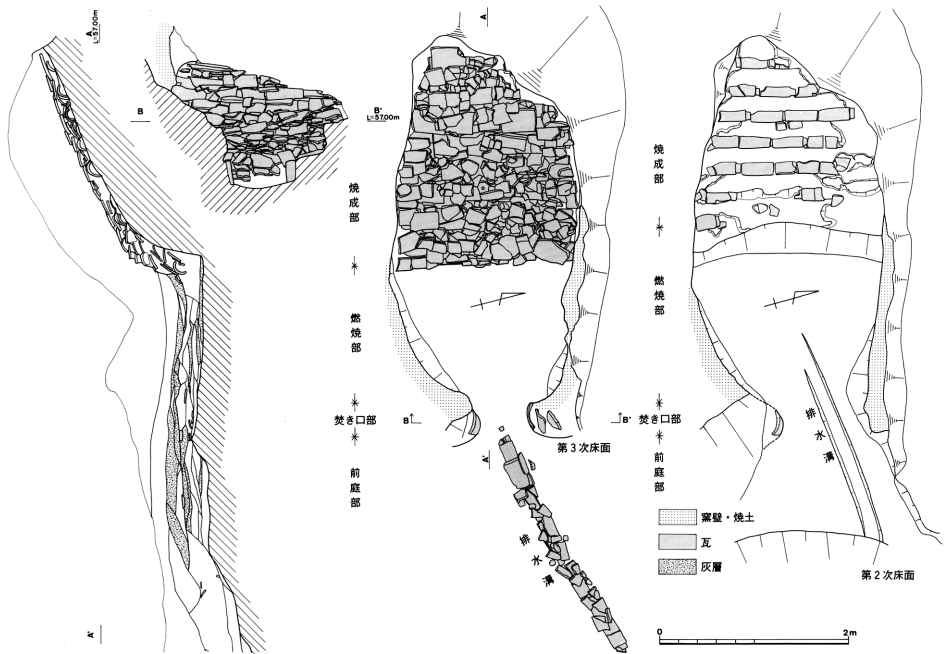
第四-1図 瀬後谷遺構図

焼成部を前面に広げる際には、第一あるいは第二床面の焼成部と焼成部の階の部分に、丸瓦と平瓦を立て並べて、裏込めにした後、その上に補充粘土を加えながら半截した平瓦と丸瓦で床面を造っている。この結果、焼成部第三床面の全長は24mとなる。

焼成部 第一・二床面(焼成部)の操業時では長さ184mを測るが、第三床面では焼成部を前面に広げたため140mと短くなる。焼成部幅は188mを測る。

焚き口部は、石あるいは磚を使うのではなく、南壁で一枚、北壁で三枚の平瓦を立てて造られている。幅は0.5mを測る。

排水溝 焼成部第一床面で築かれたもの(第一次排水溝)と第一床面の上に堆積した灰層の上層から築かれたもの(第二次排水溝)がある。第一次排水溝は、検出全長23m・幅10cm・深さ3cmで、地山土をそのまま掘り下げたもので、表面が還元状態に焼けている。第二次



第四-2図 瀬後谷1号窯 実測図

排水溝は、検出全長3.1m・幅15cmを測る。この排水溝は、幅20cm・深さ10cmの溝を掘った後、溝の底部に半截した平瓦を長辺に並行するように敷き、その上に丸瓦を並べ、さらに丸瓦と丸瓦の接合部に平瓦の破片を詰めているもので、暗渠状を呈している。

前庭部 焚口部から1.5mの範囲にわたってあり、ピット状の掘り込みを三ヶ所確認した。このピット状の遺構は、焚口および前庭部に架ける覆屋の柱穴の可能性もある。

灰原 前庭部は一部のみ遺存していたため、一号窯の灰原は前庭部にのみ確認できた。

出土遺物 瀬後谷一号窯では、軒瓦の出土が少なく、平城瓦型式666H型式が一点である。その他には、一枚作りの平瓦と玉縁式で粘土板成形の丸瓦が出土している。須恵器の出土がなく瓦專業窯と思われる。

瀬後谷二号窯

瀬後谷一号窯の立地する丘陵の下位1.0m（標高55～56m）にある有階有段式窖窯で、残存長4.97m・最大幅1.50mを測る（第四—3図）。

焼成部 瀬後谷一号窯の第二床面と同様、補充粘土を加えた丸瓦で七段の段を設けている。焼成部床面からは製品と思われる瓦がわずかに出土しており、そのなかに、軒丸瓦688H型式の破片が二点含まれている。

焼成部の奥壁部分には、後面隔壁と煙道部がある。後面隔壁は、補充粘土を加えながら平瓦の長軸を窯の主軸に対して直交するように順次積み上げた後、焼成部に面する部分にのみ、さらに粘土を貼りつけている。後面隔壁に利用した平瓦は、南側では12枚が、北側では1枚遺存している程度である。また、12枚の平瓦は側壁に接して積み上げられているが、下から一二枚目の平瓦は、一枚目の平瓦の中央から北側の瓦に架かるように積み上げられている。このことから後面隔壁の中央には、幅27cm・高さ20cmの煙道部へつながる排煙孔があったことがわかる。この構造は前述の梅谷四号窯と同様のものである。

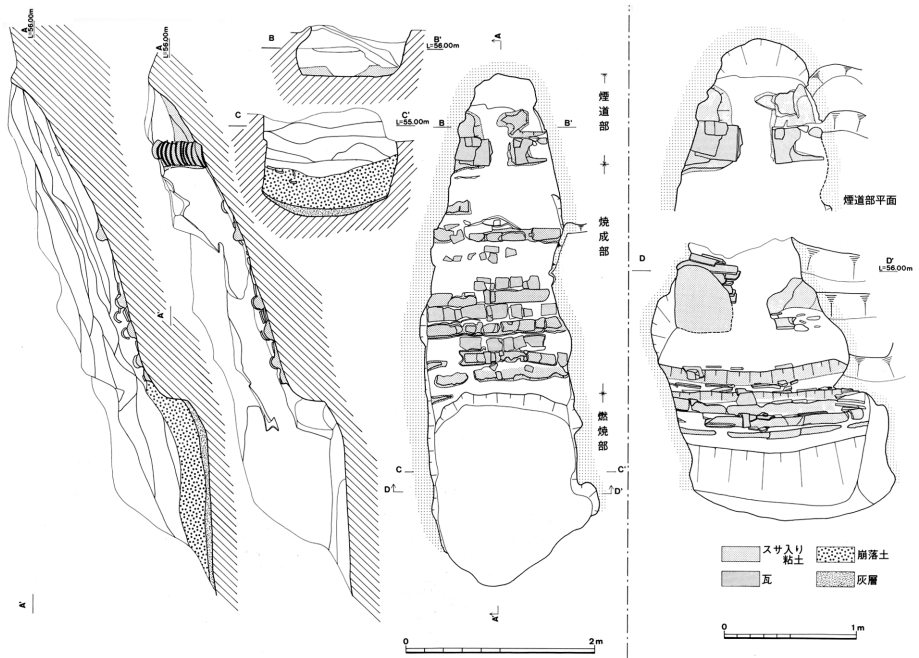
燃焼部 長さ1.7 m・幅1.5 mを測り、燃焼部床面と焼成部床面の階は0.68 mと高い。燃焼部床面からは丸・平瓦と少量の須恵器が出土した。焚口部は後世に削平されて遺存しない。

灰原 東西19 m・南北4 mの広範囲にわたって広がっている。この灰原は三号窯灰原の下層で、二号窯焚口部から派生したかのように扇状に広がるが、二号窯焚口部と灰原との間に幅7 mの近世以降の溝(河道)があり、焚口部とは直接つながらない。灰原は間層を挟んで二層に大別できる。

出土遺物 瀬後谷二号窯体内から軒丸瓦 G284Ea 型式、灰原からは軒丸瓦 G284Ea 型式、軒平瓦 6640・6664・6668A 型式が出土した。丸瓦は粘土紐成形、平瓦は粘土紐桶巻き作りのもので、他に須恵器が出土している。瀬後谷二号窯は瓦陶兼業窯と思われる。

瀬後谷二号窯

瀬後谷二号窯の北西10 mで、瀬後谷二号窯の



第四-3図 瀬後谷2号窯 実測図

推定灰原の西方向にある。煙道部・焼成部が後世に削平されており、焼成部の一部が遺存していたのみである。

焼成部 検出長1.5m・幅1.9mで、床面の明瞭な貼り替えはない。前庭部は、70cmの範囲にわたってあるが、その先端は35度の傾斜で落ち、操業時の作業を想定すると作業場所としては困難なものである。このため前庭部に作業用の床を想定する必要があるが、明確な柱穴はみつからなかった。

灰原 9mの範囲に広がり、その東側は二号窯の推定灰原と重複する。

灰原の堆積状況は、瓦を多く含んだ灰層の上面に須恵器を多く含んだ灰層が整然と堆積していたという状況は確認できず、焼成ごとに瓦と須恵器を焼き分けたという状況は考えられない。

出土遺物 焼成部床面には須恵器（主に杯A）が二〇個体以上のほか、瓦片が一点出土した。灰原からは須恵器とともに瓦が出土している。

軒瓦は、平城宮軒瓦⁷ 6284E・6298A型式、軒平瓦6640A・6664I・6668A・66711a・66711b・6679A型式などが出土している。丸瓦は粘土紐成形、平瓦は粘土紐桶巻き作り、他に須恵器が出土しており、瀬後谷三号窯は瓦陶兼業窯と思われる。

推定四号窯灰原 三号窯の焼成部から西に4mの位置で、東西4.5m・南北3mの範囲にわたって灰原が広がる。この灰原は、三号窯とは別の灰原なのかは厳密には明らかでないが、出土遺物の状況や灰原の堆積状況から、三号窯とは別の窯が存在したと考えると、推定瀬後谷四号窯灰原とした。推定四号窯灰原からは、軒平瓦6641A・66711a・6700A型式のほか、須恵器、土製塔が出土した。

推定五号窯灰原 瀬後谷五号窯も窯本体が遺存しておらず、灰原のみを確認した。灰原は三号窯の焼成部から西2mで、東西5m・南北7mの範囲にわたって広がる。推定五号窯灰原は、三号窯灰原および推定四号窯灰原と重複関係があり、推定五号窯灰原の下層に三号窯灰原が、上層に推定四号窯灰原が堆積している。

単独の窯(五号窯)か、あるいは三号窯の灰原の一部かは、窯本体が削平されているため明らかでない。灰原内からは、平城宮軒丸瓦 6298A・6313S 型式、軒平瓦 6671A・6700A 型式のほか、須恵器・土製塔などが出土した。

瀬後谷瓦窯では、直接切り合うような前後関係はないが、灰原の堆積状況とその範囲などから、わずかに前後関係を知ることができる。

すなわち、二号窯灰原の上層に青灰色粘土・黄褐色粘質土を挟んで三号窯灰原が堆積している。五号窯灰原は、三号窯の灰原の上層に堆積している。五号窯灰原の西に隣接してある四号窯の灰原は、五号窯の灰原の上層に黄褐色粘質土の間層を挟んでおり、その上層に四号窯の灰原が堆積している。このことから、二号窯↓三号窯↓五号窯↓四号窯という操業関係が灰原から推定できる。

三・瀬後谷瓦窯出土の軒瓦

軒瓦は11点で、他に平瓦・丸瓦・面戸瓦などがある(第四—5図)。

軒丸瓦 軒丸瓦は三型式三種で51点出土した。平城宮 6298A 型式は、中房に一十六の蓮子を配し、その外側に複弁八葉蓮華文、外区内縁には二四個の珠文、外区外縁に線鋸歯文を巡らしている。

6298A 型式は、中房に一十八の蓮子、その外側に複弁蓮華文を七単位と単弁の蓮華文を一単位配したもので、外区内縁には二四個の珠文、外縁に線鋸歯文を巡らしている。

6316S 型式は、中房に一十五の蓮子、その外側に複弁蓮華文を八単位配したもので、外区内縁には二〇個の珠文、外縁に線鋸歯文を巡らしている。

軒平瓦 六型式七種で56点出土している。

6640A 型式は、内区に左方向に流れる唐草文で、外区の左右両脇と下に線鋸歯文を、上外区に18個の珠文を配した偏行唐草文である。

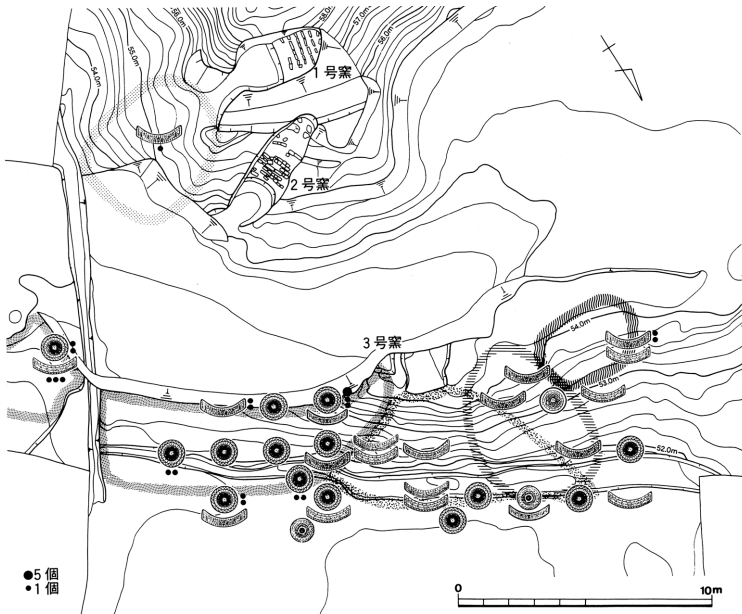
6641A 型式は、上向きを中心葉の中に花頭形の垂れ飾りをもち、左右対称に三回反転する唐草文を配したもので、外区には珠文を巡らしている。

6668A 型式は、上向きを中心葉の中に先端の尖った花頭文の垂れ飾りをもち、左右対称に三回反転する唐草文を配したもので、外区には珠文を巡らしている。

6700A 型式は、上向きを中心葉の中にX 字状の文様をもち、左右対称に三回反転する唐草文を配したもので、外区には珠文を巡らしている。

6671a 型式は、下向きを中心葉の中に紡錘形の小葉をもち、第一単位の唐草が上から下にのびる三回反転する唐草文を配したもので、下外区には線鋸歯文を、上・左右の外区には杏仁形の珠文を配している。

6671b 型式は、6671a 型式の範の彫り直しで、



第四-4 図 遺構別 軒瓦分布図

66711a型式の内区と外区の高低差が失われ、中心葉の中に紡錘形の小葉も消える。

6679A型式は、上向きを中心葉の中に十字形の文様をもち、左右対称に三回半反転する唐草文を配したもので、外区上・左右には杏仁形の珠文、下には線鋸歯文を配している。

6640A型式を除いて平城宮・京での出土が知られているが、6640A型式は前述の6316S型式と同様、今のところ瀬後谷瓦窯以外に出土例がない。

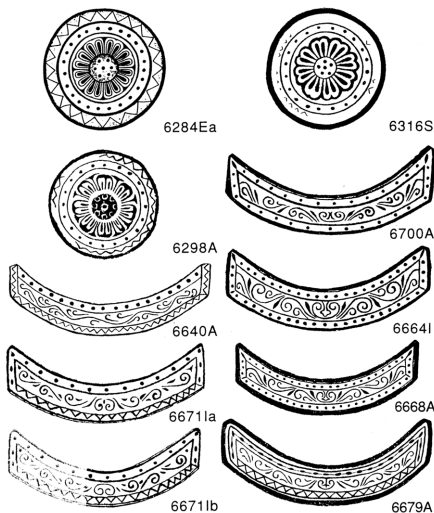
二号窯灰原では、軒平瓦6640A型式3点、6664I型式7点、6668A型式6点が出土している。

三号窯灰原では、軒平瓦6640A型式がなく、軒平瓦6664I型式5点、668A型式がそれぞれ1点のほか、軒平瓦6700A型式3点・66711a型式1点・66711b型式2点、6679A型式2点が出土している。

五号窯灰原では、軒平瓦66711a型式1点・6700A型式3点と出土量が少なくなる。また、四号窯灰原では軒平瓦6664I型式が2点・66711a型式が1点、6679A型式が1点、6700A型式が3点。二号窯の灰原でみられた6668A・66711b型式がない。一号窯の灰原からは6664I型式が1点出土しているが、後述するように他の窯から混入された可能性が高いものである。

このことから、瀬後谷二号窯は、軒丸瓦6284Ea型式と軒平瓦6640A・6641I・6668A型式で、その出土数から軒丸瓦6284Ea型式と軒平瓦6640A型式がセットとなる。

瀬後谷三号窯は、軒丸瓦6298A型式と軒平瓦6664I・



第四 - 5 図 瀬後谷瓦窯出土軒瓦

6700A・66711a・66711b・6679A
 型式で、一号窯と同様、軒瓦
 6284Ea・軒平瓦6640A型式が
 セットとなる。五号窯は、軒丸瓦
 6316S型式と軒平瓦6641I・66711b
 型式のセット関係が考えられる
 (第四—4図)。

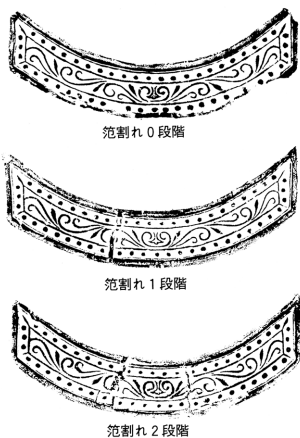
瀬後谷瓦窯の軒瓦を詳細に観察

した奥村茂樹^{註四)}によると、軒丸瓦6284Ea型式は、蓮弁の界線中央から弁の中央にかけて長さ0.5cmの范傷があるもの(范傷1段階)と、さらにもう一ヶ所加わったもの(范傷2段階)がある(第四—7図)。范傷1段階のものが瀬後谷二号窯の灰原で、范傷2段階のものが瀬後谷三号窯の灰原から出土している。

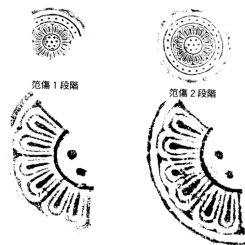
軒平瓦6668A型式では、范割れの認められないもの(范割れ0段階)と范割れが中心飾りの左側にあるもの(范割れ1段階)、中心飾りの左側のほかに右側にも范割れが進むもの(范割れ2段階)がある(第四—8図)。6668A型式の范割れ0段階のものと范割れ1段階のものが瀬後谷二号窯の灰原で、范割れ2段階のものが瀬後谷三号窯の前庭部で出土している。軒平瓦6641I型式も水平方向に范割れが認められる。

このように軒瓦の范傷、范割れの進行状況からも瀬後谷二号窯↓瀬後谷三号窯↓瀬後谷五号窯↓瀬後谷四号窯という操業順序が考えられ、灰原の堆積状況と符合する

瀬後谷一号窯については断定できないが、一号窯以外の窯の平瓦が桶巻き作り、丸瓦が粘土紐成形であるのに対して、一号窯では一枚作りの平瓦、丸瓦が粘土紐成形であることから、他の窯よりも新しい特徴をもつ



第四—6図 軒平瓦6668A型式
 范割れ進行状況



第四—7図 軒丸瓦6284Ea型式
 范傷進行状況

ている。

四・軒瓦からみたその供給先と年代

瀬後谷瓦窯の軒瓦は、主に平城宮・京へ供給されたものと思われる。ここでは、どの地区に瀬後谷瓦窯の製品が供給されているのか、既刊の報告書をもとに検討していきたい。

瀬後谷瓦窯で出土量の多い軒瓦は、前述のように軒丸瓦 6284Ea 型式(47点)、軒平瓦 6664H(20点)・6668A 型式(12点)である。

軒丸瓦 6284 型式は、中房径・珠文の数・線鋸齒文の差異のより、14種に分けられている。そのうち、平城宮朱雀門内の北方500mから展開する「第一次大極殿地域」^{注16}では、6284C 型式が180点と多く、次に6284A 型式48点、6284E 型式6点、6284B 型式15点で、6284C・6284A 型式が主体をなす。

この「第一次大極殿地域」のうち、SB 7801(6ABR-H・J 地区)・SB 7802(9ABR-H 地区)の第一次大極殿地域の南門とその東にある総柱の東西棟建物(五間×三間)に関連した地点では、6284C 型式2点、6284E 型式13点が出土しており、平城宮創建当初に葺かれたSB 7801の主体となる軒丸瓦は、6284C・6284E 型式であることがわかる。ただ、SB 7801では軒丸瓦 6284C・6284E 型式に対して、軒平瓦は6664C 型式が主体(76点)で、瀬後谷瓦窯でセット関係となる軒平瓦 6664H 型式の出土例は10点と出土比率は低い。また、推定第一次朝堂院地域(第41次発掘調査)で検出した南北溝SD 3765^{注17}下層^{注四}でも、軒丸瓦 6284C・6284A 型式、軒平瓦 6664C 型式が主体であり、宮内出土例では軒丸瓦 6284C・6284A 型式、軒平瓦 6664C 型式がセットとなる傾向にある。

軒丸瓦 6284E 型式は、「第一次大極殿地域」の南門で比較的まとまって出土しているほかは、平城宮・京と

も出土量が少ない。

軒丸瓦 6284Ea 型式は、前述のように範傷がある。瀬後谷瓦窯では範傷1段階、範傷2段階のものであるが、奥村茂樹の観察によると、平城宮第一次大極殿出土の 6284Ea 型式では範傷のないものか、あったとしても範傷1段階のものであり、範傷2段階のものはない。一方、平城京内では、範傷2段階のものが出土している。佐川正敏^{註四}によると、軒丸瓦 6284Ea 型式の中央蓮子を大きく彫り加えたものが 6284Eb 型式であり、この 6284Eb 型式は、東院地区苑池や第一次大極殿第二期の南面回廊から出土していることから、平城宮瓦編年の第Ⅱ―2期に位置づけられている。6284Eb 型式の彫り直し以前の 6284Ea 型式は、平城宮瓦編年の第Ⅱ―2期の始め、天平年間初頭と考えられる。

軒丸瓦 6298A 型式は、瀬後谷二号窯での出土はなく、二号窯の窯体内で1点、同灰原で2点、五号窯の灰原で1点が出土している。6298A 型式は、管見にのぼるかぎり、平城宮での出土例はなく、平城京左京二条二坊十二坪の調査で1点、同左京三条二坊九坪で1点、左京三条二坊七・八坪(長屋王邸)で2点出土しており、平城宮ではなく、平城京の邸宅遺構への供給が考えられる。

軒丸瓦 6316S 型式は、瀬後谷五号窯灰原で1点出土しているのみであり、その供給先については不明である。複蓮華文を配した 6316 型式は一五種あり、平城宮瓦編年の第Ⅲ―2期に位置づけられている型式であるが、6316S 型式は、外縁が直立縁で新しい要素を含みながらも、外区外縁に鋸歯文がめぐること。6316 型式のものが、崩壊した朱雀大路西側溝築地の下層からややまとまって出土していることから、平城宮の比較的古い時期に作られた可能性^{註五}も考えられている。ここでは他の瀬後谷瓦窯出土軒丸瓦に近い時期と考えておく。

軒平瓦 6664 型式は、一六種あり、前述の「第一次大極殿地域」では、6664 C 型式が312点と主体をなし、

6664I型式は10点と数は少ない。他に平城宮西辺部の西面中門(佐伯門)から同北門(伊福部門)推定地にいるたる西面大垣沿いの南北約280m・東西110mの範囲の調査^{註四¹⁰}では、6664I型式が20点、南面中央門(朱雀門)、西面南門(玉手門)、西面中央門(佐伯門)の三宮城門と宮の西南隅地域、玉手門・佐伯門間の中間地域、北面中央部の大垣地域^{註四¹¹}で12点、前述の「第一次大極殿地域」でも10点とややまとまって出土しているが、その出土量はきわだつて多いという傾向にはない。

軒平瓦6664I型式は、瓦当文様や顎の形態から平城宮瓦編年の第II-2期に当てられているが、奥村茂樹^{註四¹²}によると、瀬後谷瓦窯出土の軒平瓦6664I型式の成形に伴う桶の円弧が軒瓦6640A型式・6668A型式のものと同様であることから、6640A型式・6668A型式の軒瓦を製作した時期よりは後出ではあるが、近い時期に成形された可能性があり、6640A型式・6668A型式の年代である平城宮瓦編年の第I期末ないしは第II期初頭に位置づけている。

瀬後谷瓦窯出土の軒平瓦6664I型式は19点で、五号窯灰原を除く窯から出土している。瀬後谷瓦窯出土の6664I型式は、いずれもほぼ水平の范割れがあるが、平城宮第一次大極殿内出土の軒平瓦6664I型式では范割れの痕跡をもつものはない。

軒平瓦6671IIa型式の内区を主に彫り直したものが軒平瓦6671Ib型式である。6671IIa・6671Ib型式はいずれも直線線で一枚作り成形のものである。軒平瓦6671IIa・6671Ib型式は平城宮瓦編年の第II-1期に位置づけられており、平城京左京三条二坊七・八坪(長屋王邸)、同左京三条二坊九坪で出土している。

軒平瓦6700A型式は、平城京左京三条二坊七・八坪(長屋王邸)のほか、平城京左京二条二坊五坪と二条大路地点で出土している。

軒平瓦6640A型式は、平城京を含めてその出土例がなく、年代の根拠となる資料はない。ただ、藤原

京や平城京の初期に多い偏行唐草文であること、成形方法が粘土紐桶巻き作りであることから、軒丸瓦6284Ea型式などに近い時期のものと思われる。

このように、瀬後谷瓦窯の軒瓦は、平城宮の主体となる軒瓦ではなく、平城京を中心に供給された可能性が高い。また、平城宮では、瀬後谷瓦窯でみられるような軒丸瓦6284E型式と軒平瓦6664I・6668A型式が組み合う傾向にはなく、6664I・6668A型式の軒平瓦は6284A・C型式の軒丸瓦と組み合う。生産地と消費地での軒瓦の組み合わせに相違がある。

再度、各窯ごとに出土軒瓦をみると、瀬後谷二号窯出土の軒丸瓦6284Ea型式、軒平瓦6640A・6664I・6668A型式は、平城宮瓦編年の第I—1期の軒瓦に相当する。ただ、6284Ea型式の瓦当と丸瓦の接合が、古い様相の直角に接合しているものではなく、やや鋭角ぎみに接合されていること。范割れがあり、別瓦窯で使用された范を使用し、その使用段階で范傷が生まれ、進行したこと。軒平瓦6665H型式がすべて瓦当に范割れがみられること。また、6668A型式の瓦当にも范割れのないものが少なく、大半が范割れのものである。このことから、二号窯は平城宮瓦編年の第I—2期を上限とし、第II期初頭までの時期が想定できる。

瀬後谷三号窯で主体をなす軒瓦は、平城宮(京)内での出土量が少なく、その軒瓦の年代については、なお流動的である。ただ、軒丸瓦6298A型式の外縁部が直立縁ではなく、円弧を描いた斜縁(匙面)である。この円弧を描いた斜縁(匙面)は、平城宮瓦編年の第II期までであり、第III期には直立縁に変化することから、6298A型式は第II期までにおさまる。また、6671型式は興福寺式注四¹³の軒平瓦で、平城宮瓦編年では6671Ia型式が第I期に、6671Ib型式が第II—1期に位置づけられている。

瀬後谷五号窯で出土する軒瓦の大半は、瀬後谷二・三号窯で焼成された軒瓦であるが、瀬後谷二・三号窯で出土しない軒瓦に軒丸瓦G316S型式がある。この型式の瓦は、平城宮・京での出土例がなく、時期決定の資料に欠ける。毛利光俊彦の指摘によると、G316系は間弁c系統で、平城宮では平城還都(七四五年)以降の瓦当文様で、これまでの平城宮瓦編年では第三期に相当する。また、瀬後谷五号窯出土のG316系軒瓦の外縁部は直立ぎみの斜縁で、この形態も新しい様相を示しているが、平城宮軒瓦でも比較的古い時期と考えられる資料である。

軒丸・軒平瓦の各窯ごとの組み合わせは以上のとおりである。これは灰原という明瞭でない遺構から出土した瓦を中心にみた場合であるため、各軒丸・軒平瓦の組み合わせには疑問をのこす点もあるが、出土点数をみていくと、大きな誤差はないものと思われる。そこで各瓦の成形方法を窯ごとの資料をもとに検討していく。

丸瓦は、模骨に巻き付けた粘土円筒を半截する二分割桶巻き作りで、粘土紐巻き付け成形のものと粘土板巻き付け成形のものがある。粘土紐巻き付け成形のものは瀬後谷二・三・五号窯で、瀬後谷一号窯は、粘土板巻き付け成形のものが大半である。

平瓦は、布の綴じ合わせ目の痕跡の有無、粘土紐の接合痕跡、凹面の模骨痕跡の有無などから、粘土紐桶巻き作り註14のものとも一枚作りのものがある。粘土紐桶巻き作りは二・三・五号窯で、一号窯は一枚作りのものが出土しており、丸瓦と同様の状況である。

奈良山丘陵の瓦窯では、平城宮の創建時の和銅年間から天平期にいたる時期の窯が操業された中山瓦窯でも桶巻き作りと一枚作り註15がある。また、後期難波宮の造営(七二六～七三四年)にかかわった吹田市七尾瓦窯の平瓦は桶巻き作り註16である。

五・瀬後谷瓦窯の須恵器

瀬後谷瓦窯では、三号窯の窯体内と灰原、二号窯・推定四号窯・推定五号窯灰原から、整理箱にして一六三箱程度の須恵器が出土している。ただ、各遺構出土の須恵器は、焼き歪んでいるか破損・破砕していた状態で、失敗品として廃棄されたものが大半である。

各窯体および灰原から出土した須恵器は、食膳具として杯A・B、杯B蓋、杯C・E、皿A・B・C、鉢A・F・Eが、貯蔵具として壺A、壺A蓋、壺E・L、平瓶、甕A・B・Cが、調理具として甑などがあり、貯蔵具や調理具の出土が少なく、その大半は杯・皿などの食膳具である。また、平城宮式の軒瓦が出土しているにもかかわらず硯は細片1点のみである。

出土須恵器の主体である杯Aは、平坦な底部から口縁部が屈曲して立ち上がり、外上方に開く器形で、法量の違いにより杯A I（口径20.1 cm）、杯A II（口径17.6～19.2 cm）、杯A III（口径15.4～16.1 cm）、杯A IV（口径13.3 cm）に分類できるが、いずれも細片が多く、焼け歪んでいるためか口径・器高に明確な集中性はない。

杯Bは、杯Aの底部に高台を貼り付けたものであり、径高指数（器高÷口径×100）35程度の丈高のものと径高指数25前後の低く扁平なものがある。

杯Cは、高台を持たない平底で、口縁部は斜め上方に開き、口縁端部が内側に屈曲あるいは内側に巻き込む。杯Eは、やや丸みをおびた底部で内湾しながら口縁部が立ち上がる。杯の外面に和同開珎を押圧したものが二点出土している。

杯B蓋は、頂部が丸味をもち、縁部との境が不明瞭な笠形の側面形のもの（B形態）と、平らな頂部で屈曲する縁部になるもの（A形態）、あるいはなりつつあるものがある。杯B蓋の形態変化からみると、灰原

の堆積状況・軒瓦を中心とした瓦の分析と同様、推定四・五号窯が三号窯に比べて新しくなる傾向がある。杯B蓋は、全体の四分の一程度の残りのものが大半で、良好な出土状態ではなく、杯Bとの法量対比は検討できない。ただ、口径が推定できるものでは口径8〜12cmのものが大半で、口径15cm以上のものは少なくなる。そのセットをなす杯Bは口径14cm以上、16cm未満に集中する。

皿Aは、扁平な底部で内湾ぎみに立ち上がり、短い口縁部へ続く。皿Bは、皿Aの底部に高台を貼り付けたものである。皿Cは、広く平坦な底部と斜め上方に短くのびる口縁部へ続き、底部と口縁部の屈曲部は丸みをもつ。皿Cは、口縁部内面に一条の沈線がめぐる。

高杯は、ラップ状に開く脚柱部で、杯部は杯部と口縁部の屈曲部に丸みをもつ皿Cに類似しており、口縁部は丸みをもつておわる。脚柱部の外面には二条の沈線をめぐらし、縦長方形の透かしを三方にいられている。

甕Aは、球形の体部で「C」の字形に屈曲する頸部から口縁部へ続く。甕Bは、球形の体部で口頸部が内湾ぎみに短く立ち上がる。甕Cは、肩部の張った体部で口頸部は直立ぎみに短く立ち上がる。肩部には縦位の環耳を貼り付けている。

鉢Aは、いわゆる鉄鉢形の器形で、丸みをおびた底部から、口縁部は内湾ぎみに立ち上がるもので、底部外面には高台を貼り付けている。鉢Aの底部外面には西柵窯でも確認されているような爪状圧痕が輪状にめぐっている。鉢Eは、全形のわかるものがないが、口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。鉢Fは、厚い円盤状の底部で体部は直立ぎみに長く立ち上がる。

平瓶は、出土数が少なかったが、体部上面に断面方形の把手を貼り付け、底部は扁平で高台を持たず、平瓶のなかでも比較的古い形状のものである。

六・瀬後谷瓦窯の性格

瀬後谷瓦窯では、平城宮で出土していない軒丸瓦6298A型式、軒平瓦6671A・6671B型式のほか、平城宮内で同型式の軒瓦が出土している。ただ、平城宮内での同型式の軒瓦には範傷・範割れがないのに対して、平城京では範傷・範割れのものがある。範傷のない軒瓦を焼成した未発見の某瓦窯から、範を瀬後谷瓦窯に持ち込み、その成形のなかで生まれた範傷・範割れをもつ範を使用して焼成した軒瓦（軒丸瓦6284E型式、軒平瓦6668A・6664I型式）を平城京へ供給したものと思われる。そして現在知られている平城京の調査成果から、瀬後谷瓦窯の製品は、平城京、特に長屋王邸に近接した地域と東市周辺へ供給された。

瀬後谷瓦窯の操業は、出土した軒瓦の年代から平城宮瓦編年の第Ⅰ―Ⅱ期から第Ⅲ期中頃までで、略年代は神亀元（七一〇）年から天平勝宝元（七五七）年で、五基の窯が操業している。

瀬後谷瓦窯出土の須恵器は、高杯など平城宮の土器の中でも比較的古い段階で消滅する器形のものがある。高杯は、いずれも口径に対して杯部の立ち上がりが短く、脚柱部の外面の中心に二条の沈線をめぐらせ、縦長の長方形の透しが三方に入るもので、よく似た器形のもものは平城京左京三条二坊九坪（長屋王邸）のSD 5100から出土している。^{注17}高杯のほか、杯蓋の特徴から、平城宮土器のⅡ期（略年代七一五年～七三〇年）ないし平城宮土器のⅢ期（略年代七三〇年～七五〇年）となる。

平城宮土器のⅡ期は最近の成果^{注18}によると、古・中・新の三段階に細分でき、Ⅱ期古段階の資料として平城京左京三条二坊九坪（長屋王邸）のSD 5100・SD 5300・SD 5310、Ⅱ期中段階の資料として滋賀県甲賀郡信楽町宮町遺跡^{注19}、Ⅱ期新段階の資料として平城宮SK 820がある。

前述の瀬後谷瓦窯出土杯B蓋で記したように、形態変化が比較的追える杯B蓋では、三号窯で古相のB形

態のものが主体であるが、推定四・五号灰原ではA形態に変化する傾向がある。平城京左京三条二坊九坪（長屋王邸）のSD 5100・SD 5300・SD 5310の杯B蓋のB形態が主体を占めるⅡ期古段階に並行する三号窯、杯B蓋のA形態が比較的に見受けられるⅡ期中段階に並行する推定四・五号灰原を想定しておきたい。

瀬後谷瓦窯では一号窯、二号窯の二基を除いた三基の窯が灰原のみ遺存している状態であり、各窯で瓦と須恵器の焼成を分けたのか、あるいは二者を同時に焼成したのかの明言はむづかしいが、二号窯での状況を見る限り、二号窯では瓦と須恵器を同時に焼成したものと思われる。

瀬後谷瓦窯は平城京へ瓦を供給するために造られた瓦窯であり、瓦とともに須恵器を焼成した瓦陶兼業窯であること、軒瓦の文様から官が深く関与した瓦窯であることが想定できる。

瀬後谷瓦窯が操業された時期、若干操業時期には遅れるが、神亀元年（七二四年）太政官奏に京内の五位以上の者とそれ以下であっても能力を有するものに瓦葺き建物を奨励する文書がだされている。この神亀元年の太政官奏での瓦葺き建物の奨励とほぼ同じ時期に瀬後谷瓦窯の操業が開始されており、この太政官奏に符合するかのよう平城京へ瓦を供給させるための瓦窯として瀬後谷瓦窯が造られたものと思われる。

瓦以外に焼成した須恵器では、これまで平城宮造宮以前の須恵器窯として奈良山丘陵第10・11・12号地点で、7世紀前半から後半にかけての四基の窯を確認しているが、平城宮造宮以後での須恵器を焼成した窯で奈良山丘陵におけるものは瀬後谷瓦窯が初出である。

これまでは平城宮・京への須恵器窯は奈良盆地周辺での検出例が少なく、奈良盆地周辺では須恵器窯を敢えて造らせなかったこと^{注120}、奈良盆地周辺での平城宮後期の須恵器窯として生駒谷の須恵器窯七基などが知られているが、その多くが和泉陶邑窯^{注121}から供給されていたと考えられている。

平城宮・京での須恵器は、巽淳一郎^{注122}によると六群に分けることができ、和泉陶邑窯産（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群）と

中国地方(Ⅳ群)、尾張猿投窯(Ⅴ群)、岐阜老洞窯(Ⅵ群)がある。このうち、Ⅱ群と記されているものには「口ク口撫でやロク口削りによって墨をほかしたように糸状に延びる黒色粒子を含む」一群である。瀬後谷瓦窯でも同様の特徴をもつものが含まれている。Ⅱ群すべてを瀬後谷瓦窯産とはならないが、Ⅱ群と言われているものの中に瀬後谷瓦窯で焼成された須恵器が含まれる可能性もある。

注四―1 奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部編『奈良山ニュータウン予定地内遺跡調査概報』京都府教育委員会 一九七三

注四―2 藤原学・中村浩「Ⅱ 各地域の須恵器生産 第一章 近畿中部」(『須恵器集成図録』第Ⅱ巻 近畿編Ⅱ) 一九九六

注四―3 長谷川達ほか『西柵窯跡』(『加茂町文化財調査報告』第二集 加茂町教育委員会) 一九八一

注四―4 山田邦和『煤谷川窯址』(『京都府(仮称) 精華ニュータウン予定地内遺跡調査報告書』精華町教育委員会) 一九八七

注四―5 奥村茂樹『瀬後谷瓦窯 第三節 出土遺物』(『奈良山瓦窯跡』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九九

注四―6 岡本東三「考察 屋瓦」(『平城宮発掘調査報告Ⅺ』奈良国立文化財研究所) 一九八二

注四―7 『奈良国立文化財研究所年報』奈良国立文化財研究所 一九六八

注四―8 佐川正敏『平城宮式軒瓦の同范関係の調査』(『奈良国立文化財研究所年報』奈良国立文化財研究所) 一九九二

注四―9 森郁夫『平城宮軒瓦と国分寺』(『日本の古代瓦』収録 雄山閣) 一九九一

- 注四―10 『平城宮発掘調査報告Ⅻ―馬寮地域の調査―』奈良国立文化財研究所 一九八五
- 注四―11 『平城宮発掘調査報告Ⅹ―宮城門・大垣の調査―』奈良国立文化財研究所 一九八三
- 注四―12 奥村茂樹「第六節 瀬後谷瓦窯の瓦」(『奈良山瓦窯跡群』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九九
- 注四―13 興福寺式軒瓦は、森郁夫氏によると、興福寺の創建の時期、和銅年間(七一〇年代)から紀伊国分寺造営期の天平勝宝年間(七五〇年代)に至るまで生産されている。森郁夫「興福寺式軒瓦」(『文化財論叢』同朋舎) 一九八三
- 注四―14 桶巻き作り(四枚作り)の特徴には、1:粘土紐の痕跡が認められる 2:布目に綴り合わせが認められる 3:凸面の叩き方の方向が円弧状に認められる 4:凸面と側面の角度は鋭角であることなどがあげられている。(岡本東三「屋瓦とその技法題」(『日本歴史考古学を学ぶ(下)』有斐閣選書) 一九八六
- 注四―15 山崎信二氏のご教示による
- 注四―16 藤原学「七尾瓦窯跡」(『昭和六〇年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』吹田市教育委員会) 一九八六
- 注四―17 巽淳一郎「S D 5100出土土器と特殊土製品」(『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告―長屋王邸・藤原麻呂邸の調査―』奈良国立文化財研究所) 一九九五
- 注四―18 玉田芳英「平城京土器編年の細分―S D 5100・5300・5310出土土器をめぐって―」(『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告―長屋王邸・藤原麻呂邸の調査―』奈良国立文化財研究所) 一九九五
- 注四―19 信楽町教育委員会「宮町遺跡発掘調査報告」Ⅲ 一九八九
- 注四―20 古代の土器研究会「都城の土器集成」Ⅲ 一九九四
- 小笠原好彦ほか「遺物 土器」(『平城宮発掘調査報告Ⅳ』奈良国立文化財研究所) 一九七六

注四―21 藤原学・中村浩「Ⅱ 各地域の須恵器生産 第1章 近畿中部」〔『須恵器修正図録』第Ⅱ巻 近畿編Ⅱ〕

一九九六

注四―22 巽淳一郎「2土器」〔『平城宮発掘調査報告ⅩⅢ』〔奈良国立文化財研究所学報』第五〇冊 奈良国立文化財研究所〕

一九九一

初出：「背後谷瓦窯 検出遺構・出土遺物」〔『奈良山瓦窯跡群』〔京都府遺跡調査報告書』第二七冊）（財

京都府埋蔵文化財調査研究センター） 一九九九

第二節 瓦窯出土の土製塔

一・土製塔の出土状況

瀬後谷瓦窯の土製塔は、窯本体は削り取られ、灰原のみを確認した推定五号窯から瓦や土器とともに出土した。土製塔は推定五号窯灰原のほか、推定四号窯灰原からも出土しているが、四号窯灰原の上層に五号窯灰原が堆積していることを考えると、四号窯灰原出土の土製塔は五号窯灰原からの混入の可能性が高い。また、一号窯の窯体内の第二床面を構築するために使用された丸・平瓦に混じって、土製塔の基壇と軸部の部位が出土しているが、これも五号窯からの製品を再利用した可能性が高く、瀬後谷瓦窯では推定五号窯のみで土製塔を焼成したものと考えられる(第四―8図)。

土製塔は、細片を含めて一〇〇点以上出土しており、胎土・焼成の差異により三個体程度のものが細片と成った可能性が高い。すなわち、水ヒした良質粘土を使用して硬質の須恵質の焼成に近い一群(A類)、砂粒を多く含み淡(黄)灰色でA類よりやや軟質な一群(B類)、水ヒした良質の粘土を使用しているが、焼成がA類よりもあまく黄灰色を呈する一群(C類)がある。A類には基壇・最上層の屋蓋部・高欄部などが、B類には屋蓋部が、C類には相輪部などがある。

二・各部位の特徴

土製塔の各部位の表面には、鉛を含んだ人工釉が一部付着している。以下、各部位の概略を記述する。

屋蓋部の成形方法

瀬後谷瓦窯では四個体以上の屋蓋の部位が出土している。これらは細片が多く、バラバラの状態が出土したが、各辺の大きさや隅部の一部が遺存していたため、ほぼ元の状況に復元することが可能である。

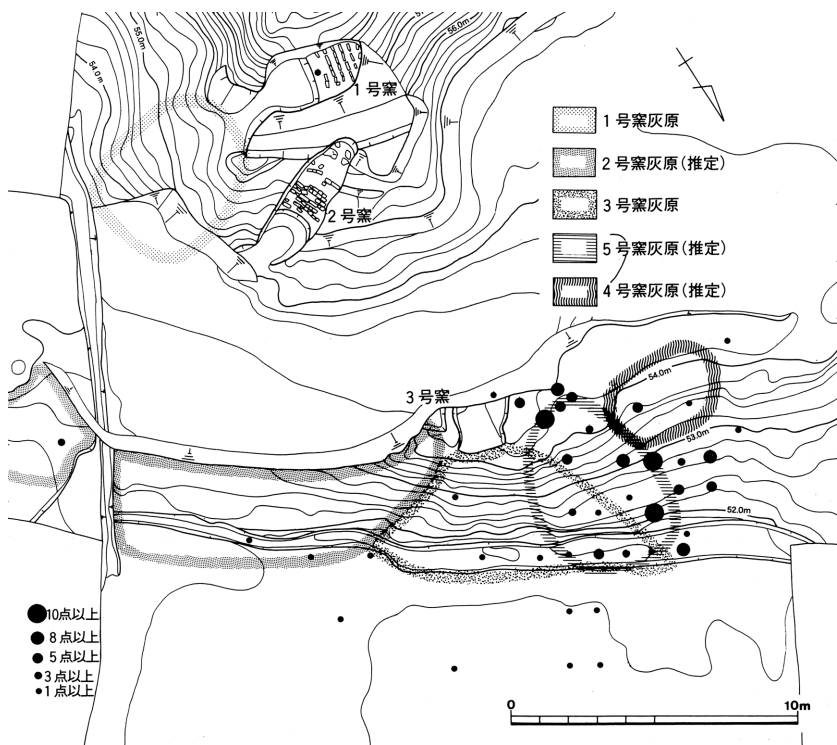
ここではまず屋蓋部の成形方法をその部位の破片から検討していく(第四―9図)。

① 一辺36cm・厚さ1.5cm前後の粘土板をつくる。

② 屋根の瓦や縁を表現するための割付線を粘土の表面に描く。

③ 割付線に沿って半円形の工具で刻みを入れて平瓦と屋根の傾斜を表現する。

④ 平瓦の表現の間に細い円棒を貼り、丸瓦を表現する。



第四―8図 瀬後谷瓦窯 土製塔出土状況図

⑨ 軸部である壁を表現した粘土板を四天柱と縁の内側に貼る。

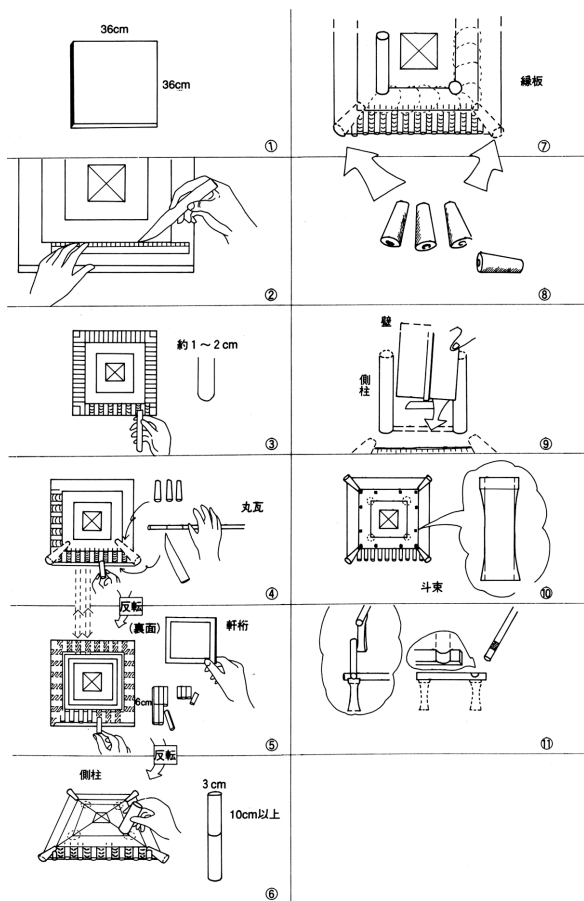
⑩ 縁の上に手摺り(高欄)の斗束を表現するため、一辺1.3cm・長さ4.5cmで断面方形の粘土棒を一

⑧ 縁を表現した粘土板の四隅の外周部分に丸瓦を表現した円棒よりも大降りやや裾広がり円棒を貼り、降棟を表現する。

⑤ 粘土板を反転させ、裏面の垂木を表現するために、断面長方形の棒状粘土を表面の丸瓦に対応する位置に貼り付け、その内側に軒桁を表現する粘土板を貼る。

⑥ 粘土板を正位置に戻し、直径3cmの円棒を粘土板の中心点から上下左右に約4cm前後の位置に立て、軸部となる四天柱を貼り付けている。

⑦ 縁を表現するために、幅約5cm・長さ27~28cm・厚さ1.5cmの粘土板を丸・平瓦の表現部分の内側に接するように貼り合わせる。



第四-9図 瀬後谷瓦窯出土土製塔製作復元図

層につき12個立てる。この際に縁を表現した粘土と斗束を表現した粘土の接着剤として前述の人工釉を使用する。

⑪斗束の上部の半円形に挟られた部分に直径1.5cm・長さ14〜15cmの円棒を横に掛けて、手摺りを表現する。この円棒は片面の端から2cm程度内側に半円形の切り込みを入れ、円棒どうしは相欠きの状態で貼付ける。

⑫最後に、四天柱と裏面の軒桁の部分に斗ますと尾垂木おたなきを組み合わせた斗とぎょう供を表現する。

このような手順で屋蓋部を成形した可能性が考えられるが、四天柱や斗供の成形手順についてはなお検討する必要がある。また、瀬後谷瓦窯出土の土製塔は、三層あるいは五層の塔が考えられるが、いずれもが細片であり、胎土・焼成を異にするため、何層の塔であったのかは断定できない。

各層は、屋蓋部と壁をセットで作り、それを何層も粘土帯で接合することなく、単に積み上げたものと思われる。以下、復元図をもとに屋蓋部の特徴を略述する。

屋蓋1(最上層)(第四—10図) 後述する屋蓋2・3にくらべて丸・平瓦の表現がおおぶりであり、裏面の垂木の出(長さ)が短い。表面の丸・平瓦の表現は軒先から中央へ9.7cmまで描かれており、瓦の上にある縁の表現はない。

屋蓋1の中央には一辺約4.2cmの方形の透かし穴があり、さらにその外側に一辺約12.5cm・厚さ1.0cmで、屋根瓦を表現している粘土板の厚み1.6cmよりも薄くて段状を呈している。この段状の窪みとほぼ同じ大きさで露盤を表現した粘土板があり、この窪みには露盤をはめ込んだものと思われる。なお、この窪みの表面には粘土板を剥がしやすくするための布を敷いた布目圧痕がある。

屋根瓦を表現した部位のうち、その角部は剥離痕があり、この部分に降棟を表現していたものと思われる。裏面の垂木は長さ3cmで、断面長方形の粘土板を貼り付けて表現しており、垂木の内側端には軒桁を表現

した粘土板がある。

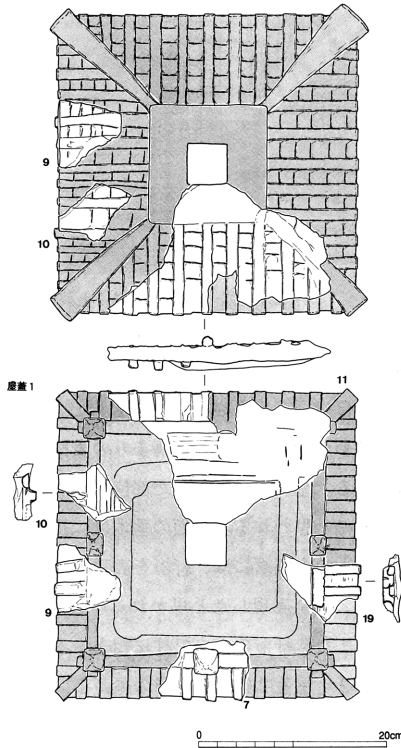
各軒桁を表現した粘土板の交点である隅部には斗を表現したと思われる一辺2.5cmで、先端部が尖った粘土板が貼り付けられていたものと思われる。また軒桁の中央で側柱に相当する位置にも斗束を表現した粘土板がある。

屋蓋2(第四—11図) 屋蓋2は、最上層の屋蓋1よりも一回り大きく、一辺35.0〜35.5cmを測る。

屋蓋1と同様、丸瓦は半円形の棒状粘土を貼って表現、平瓦は半円形の工具で軒先より順次削ることにより表現する。平瓦を表現した削りによる段と段の間隔は、屋蓋1に比べて狭く1.0cmを測る。

軒先の平瓦を表現した位置に相当する部分、裏面の垂木を表現した位置の間で、軒桁の側面に円形のスランプ状の文様を押捺している。丸・平瓦を表現した部位の内側には、屋蓋1にはない縁と高欄を表現している。

縁は、四天柱の円柱粘土を立てたのちに、長さ26.4cm・幅5cm・厚さ1.6cmの粘土板を丸・平瓦の表現部分の上に貼りあわせている。縁を表現した粘土の表面の外側で、中心より6.5〜7.5cmと約12cmの位置に、合計12個の手摺を支える斗束がある。斗束は



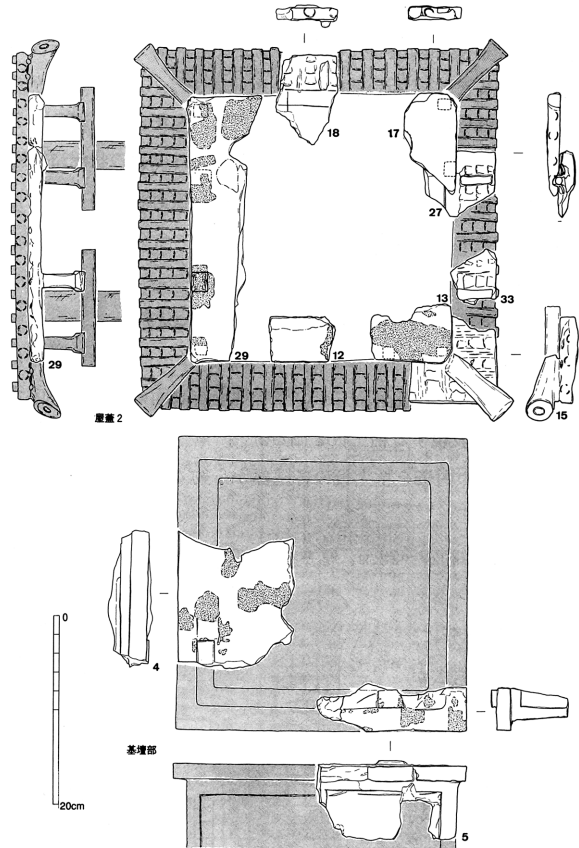
第四—10図 瀬後谷土製塔 屋蓋1 復元案

一辺1.0cmで、高さ4.0cmの方形の粘土で表現しており、その上方部は幅広となっている。上方端部は架木を表現した円棒を掛るために半円形に抉ぐられている。架木は円棒で、一方の端部から2.0cmの位置に半円形のくり込みがあり、他辺からの架木とは相欠きになっており、この位置に斗束を置いている。

縁と斗束・斗束と架木の接合には人工釉を接着剤として使用した可能性がある。

縁の内側には軸部である壁の剥離痕がなく、また、縁の内側がわずかに上方へ外反していて平坦面があることから、この屋蓋2の上面の軸部の壁には各辺に窓のような透かし穴があったものと思われる。

屋蓋3(第四—12図) 屋蓋3は四号窯灰原の中心部分から北西約1.5mの離れた位置で比較的まとまって出土したもので、他例に比べて破片が大きく、瀬後谷瓦窯出土の土製塔の復元作業の根拠となった資料であ



第四—11図 瀬後谷土製塔 屋蓋2・基壇部 復元案

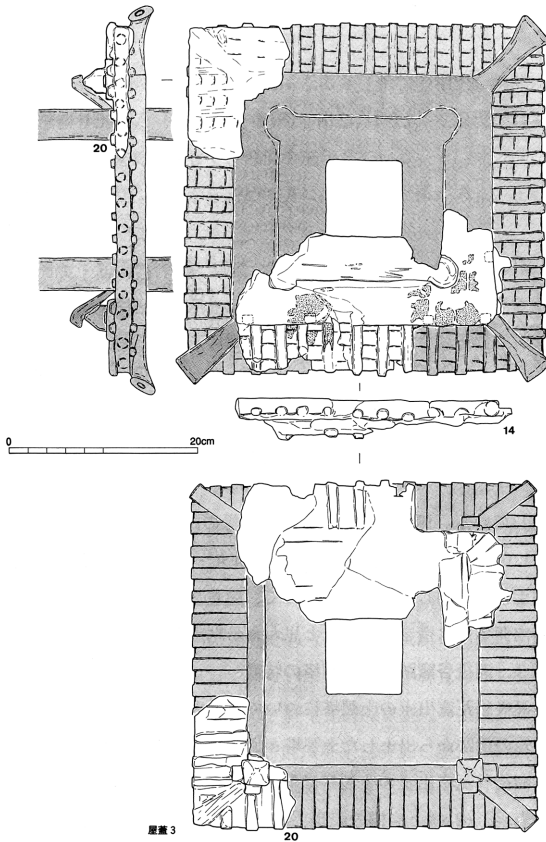
る。

一辺36.4cmを測り、表面の丸・平瓦の表現部分は軒先から5.3cmを測り、縁を表現する粘土板の幅は約4.7cmで、縁の内側から4.7cmには、縁の厚さ1.5cmに対して1.0cmと薄い粘土板がめぐる。

平瓦の表現は、幅1.5～2.0cm・長さ1.2～1.6cm間隔で、粘土板を半円形の工具で削って表現し、その間に直径1.0cmの半円形粘土を貼り合わせて丸瓦を表現する。

降棟は、垂木あるいは丸瓦の出よりも長く、その端部には円形文を押捺している。

四天柱は遺存しないが、縁の内側で屋蓋2とほぼ良く似た位置に直径1.6cm・深さ1.0cmの丸柱の剥離痕がある。縁は丸・平瓦の粘土帯の表現部分に厚さ1.5cm・幅4.7cmの粘土帯を四周して表現したもので、屋蓋2と同様、その上面(表面)には斗束の剥離痕がある。縁の内



第四-12図 瀬後谷瓦窯出土 屋蓋3、基壇 想像復元案

側隅には壁を表現したと思われる粘土板の剥離痕がある。

瀬後谷窯跡出土土製塔の特徴

瀬後谷瓦窯出土の土製塔についてその出土状況・成形方法とその特徴を簡単に記述した。ここでは他の遺跡から出土した土製塔と比較しながら瀬後谷瓦窯出土の土製塔の特徴を検討していきたい。

瀬後谷瓦窯出土の土製塔は、他例に比べて比較的良好な状態で出土しており、特に①丸・平瓦の表現 ②縁と高欄の表現 ③斗拱の表現 ④表面に人工軸が付着しているなどに特徴がある。

これらの各部位の表現を他の例と比較してみると、

①丸・平瓦の表現 平瓦は、半截竹管状の工具で刻みつけながら軒先へ削りおろして表現し、丸瓦は、

平瓦の間に半円形の粘土棒を貼り付けて表現している。このような平・丸瓦の表現は埼玉県勝呂廃寺(高崎注四一23)・光司の編年案では八〇〇年を前後する時期(注四一24)・愛知県NN二八六号窯跡(同8世紀後半)(注四一25)がある。

勝呂廃寺出土の土製塔の屋蓋では、丸瓦を表現した粘土棒の上部にも丸瓦を積み重ねて表現しているが、瀬後谷瓦窯・NN二八六号窯ではその表現がない。屋蓋裏面の垂木の表現は、瀬後谷瓦窯・勝呂廃寺・NN二八六号窯は近似している。他の多くの土製塔は平瓦を表現せず、円棒で丸瓦を表現するものが大半である。

②縁と高欄の表現 屋蓋上部の縁とそれに付随した高欄を表現した例は少なく、前述の愛知県NN二八六号窯と奈良県葉師寺出土例(注四一26)がある。

NN二八六号窯では縁の部位は不明であるが、高欄部は「地覆と平桁の間二ヶ所に、鋭利な工具で幅0.5cmの切り込みを入れて横連子を表し、架木は径1.1cmの棒状粘土を交差させて貼り付け、先端はわずかに反りをもたせている」。葉師寺出土の高欄は、斗束と架木が接合した状態で出土しており、その形態は瀬後谷瓦窯出土のものに近似している。また、表面には緑釉が施されている。葉師寺出土の高欄は瀬後谷瓦窯出土の高

欄より小ぶりです、約2/3程度の大きさである。

③斗拱の表現 高崎光司が指摘するように、斗拱は時代が新しくなると「帯状の粘土を軸部に貼り付け、鋭利なヘラ状工具で斗拱を切り出した『斗拱粘土帯(切り出し)作り』で表現されているが、瀬後谷瓦窯では、粘土帯および粘土塊で成形して各部位を表現している。瀬後谷瓦窯では大斗を表現した部位はないが、丸柱から斜め下方に出る垂木と斗拱があり、比較的実物の塔を模倣している。

④外装 瀬後谷瓦窯では表面、特に屋蓋・基壇・縁など目につく部分に人工釉が付着している。これらは特に各部位の接合部に多く、接着剤として使用した可能性がある。

この人工釉は発色が悪く、褐色あるいは暗茶褐色をしており、緑釉陶器のような色合いではない。ただ蛍光X線分析によると鉛を含み、本来は緑釉土製塔であった可能性が高い。

この表面の緑釉を施した土製塔は、平城京薬師寺跡でも出土しているが、この二例を除き、管見ではその資料を知らない。緑釉以外にも土製塔の表面を塗る例には福岡県夏井廃寺^{註四一_上}、千葉県真行寺廃寺^{註四一_中}・萩の原遺跡^{註四一_下}などで軒先あるいは垂木表面などに赤彩されているものがある。

三. 土製塔の出土状況

瀬後谷瓦窯で出土したような土製塔は、管見にのぼるかぎり日本全国で二二五遺跡から出土している。

これを府県別にみると、平成八年集計では第四―13図のように三重県以西の西日本では大阪府の六遺跡を最多とし、他は五遺跡にも満たなく、西日本では出土例が少ない傾向がある。

東海地方では、西日本に比べて出土比率が高く、特に愛知県では二一遺跡と出土比率が高い。

中部・北陸地方では、特に出土する例が多く、寺跡のほか、窯跡などの生産遺跡から出土する例が多い。

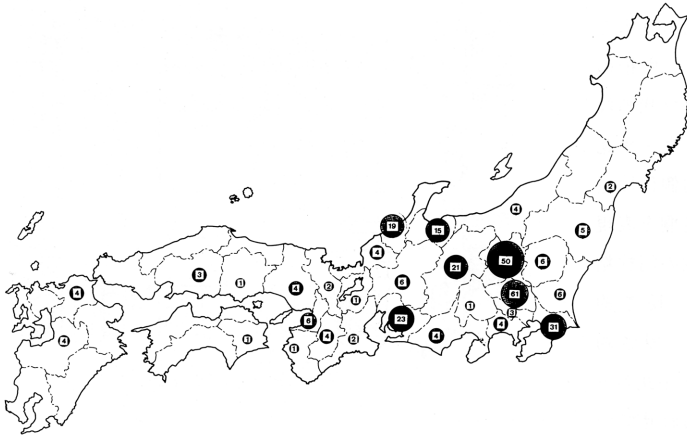
関東地方は、土製塔の出土例が群を抜いて多く、特に群馬県の四八遺跡・埼玉県の三一遺跡・千葉県の二八遺跡・長野県の二〇遺跡で、日本出土の土製塔の半数以上が関東地方に集中している。東北地方では、関東地方に近い福島県で五遺跡出土しているが、西日本と同様、出土例は少ない。

各遺跡での土製塔の出土例をみると、寺域内の安置遺構を含めた寺跡からの出土例は六五遺跡を数える。また、瓦等とともに土製塔を焼いた窯跡は三四遺跡を数える。他に小丸山遺跡・東山遺跡など墳墓遺構と思われる遺跡からの出土例もある。

瀬後谷瓦窯のように土製塔を生産(焼成)した遺構には、富山県明神遺跡^{注四一₃₀}、福山窯跡、長野県菖蒲沢窯跡^{注四一₃₁}、愛知県NN二一八六号窯、折戸八〇号窯、大阪府鶴田池東遺跡^{注四一₃₂}、兵庫県岩戸四号窯^{注四一₃₄}などがあり、土製塔の多くが、瓦あるいは須恵器と同時に焼成された例が多い。

やや特殊な例では、埼玉県鳩山窯跡群の土製塔焼成土坑^{注四一₃₅}のように「平面が略円形で断面形がなだらかな傾斜で皿状に掘り込まれた土坑(長径83cm・短径76cm・深さ約10cm)で、埋土内には木炭を多く混じる焼土層がある」ものもある。

土製塔とともに焼成された瓦あるいは須恵器から土製塔の年代



第四 - 13 図 土製塔出土分布図

を推定すると8世紀前半(国分寺造営以前)には瀬後谷瓦窯と兵庫県岩戸四号窯が、国分寺造営以降の8世紀後半には大阪府鶴田池東遺跡のほか、富山県福山窯、愛知県折戸八〇号窯、長野県菖蒲沢窯跡があり、平安時代以降には富山県明神遺跡、埼玉県鳩山遺跡などがある。

このように現在知られている資料でみる限り、初期の段階では、近畿地方を中心に土製塔が生産され、時代をおって東海・北陸・関東地方へと、生産遺跡が広がっている傾向にある。

生産遺跡では、瀬後谷瓦窯例が(平城京創建に近い時期)最古の例であるが、寺跡を含めた消費地での例では、滋賀県衣川廃寺^{注四}・大阪府五十村廃寺^{注四}がある。

衣川廃寺では、推定塔跡の版築基壇上層内の心礎掘形の上端から7世紀に遡る軒丸瓦とともに土製塔の屋蓋片が出土している。五十村廃寺では、瓦積基壇北縁の最下段周辺の瓦の中から出土しており、瓦の年代から奈良前期に遡る可能性が高い。また、奈良県薬師寺では中世の土坑内から混入した状態で土製塔の基壇および高欄部分が出土しており、中世の土坑内ではあるが奈良時代後期前半に遡る可能性が高い。

国分寺造営以後の奈良時代後半には、関東地方を中心とした寺跡で土製塔が出土することは前述したとおりであるが、土製塔の生産遺跡と同様、消費地でも国分寺造営以前には近畿地方に集中する傾向がある。

四・瀬後谷瓦窯出土土製塔の意味

瀬後谷瓦窯で焼成された土製塔は、須恵器・瓦の共伴例から、8世紀前半(中頃)に焼成されたもので、生産時期が明らかなものとしては、最古の一例となる資料である。

土製塔は、衣川廃寺・五十村廃寺など寺での出土がさらに古く、その生産遺構はみつかっていないが、須恵器・瓦窯のような施設で焼成された可能性が低いものと思われ、野焼きで焼成された可能性が高い。

瀬後谷瓦窯出土土製塔の供給先は不明であるが、瓦・須恵器は平城京の建物群に供給されていること、薬師寺でもその置かれた場所は不明であるが、緑釉の土製塔が出土しており、平城京の寺院・邸宅などに供給されたことが窺える。

施釉の土製塔ではないが、山・磐・祠を表現し、釉薬を施した彩釉山水陶器が木津川市馬場南遺跡のほか、平城京左京一条十三・十四坪、三重県松坂市伊勢寺廃寺で出土している。この彩釉山水陶器は土製塔と同様、布目が残り、瓦製作工人が造形したものと推定されており、聖武朝に代表される天平文化の嗜好に合わせて官が製作を依頼したものと想定できる。

瀬後谷土製塔は、表面には一部釉薬が塗られており、その理化学分析によると鉛を含む緑釉が施釉されている可能性が高い資料^{注四}であり、薬師寺の緑釉土製塔、馬場南遺跡の彩釉山水陶器と同じ釉薬を施した資料と考えられ、瓦工人が造形し、焼成した資料と考えられる。

この土製塔の性格については、平城京内での大寺院の一画、たとえば金堂などに安置される厨子に似た性格のものであり、元興寺における木造塔に似た性格をもったものと思われる。

平城京から離れた地方においては、その出土状況から、寺院に安置されるほか、単独で出土する例があり、実際の塔に代るものとして使用されたことが窺える。

注四―23 石村喜英「勝呂廃寺の創建をめぐる諸問題」(『埼玉の考古学』) 一九八七

注四―24 高崎光司「瓦塔小考」(『考古学雑誌』第七四卷第三号 日本考古学会) 一九八九

注四―25 注四―24に同じ

- 注四―26 杉山 洋「薬師寺出土の二彩陶塔」(『奈良国立文化財研究所年報』 一九九一)
- 注四―27 いわき市教育委員会『夏井廃寺跡Ⅲ』 一九八九
- 注四―28 (財)千葉県文化財センター『成東町真行寺廃寺跡調査概報』 一九八三
- 注四―29 日本文化財研究所『千葉県萩ノ原遺跡発掘調査報告』 一九七七
- 注四―30 富山県埋蔵文化財センター『富山市明神遺跡Ⅲ地区』(『富山県埋蔵文化財センター所報』第三五号) 一九九一
- 注四―31 小林康男ほか『菖蒲沢窯跡発掘調査報告』 塩尻市教育委員会 一九九一
- 注四―32 日進町教育委員会『愛知県日進町折戸八〇号窯発掘調査報告書』 一九七八
- 注四―33 大阪府教育委員会『西蒲橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要』(『大阪府文化財調査概要』 一九七九) 一九九〇
- 注四―34 五十川伸矢ほか『第二部 鴨庄古窯跡群』(『丹波三ツ塚遺跡Ⅲ』 丹波三ツ塚遺跡発掘調査団) 一九八一
- 注四―35 高崎光司『瓦塔焼成土坑』(『鳩山窯跡群Ⅲ』鳩山窯跡群遺跡調査会) 一九九一
- 注四―36 滋賀県教育委員会『衣川廃寺発掘調査報告』 一九七五
- 注四―37 柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 一九八三年度』 一九八四
- 注四―38 正倉院事務所成瀬正和氏に表面の釉について分析を依頼し、人工釉であることが明らかとなった。

初出:『瀬後谷瓦窯出土の土製塔』(『京都府埋蔵文化財論集』第三集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究セ

ンター 一九九六

第五章 篠・須恵器窯の変遷

第五章 篠須恵器窯の変遷

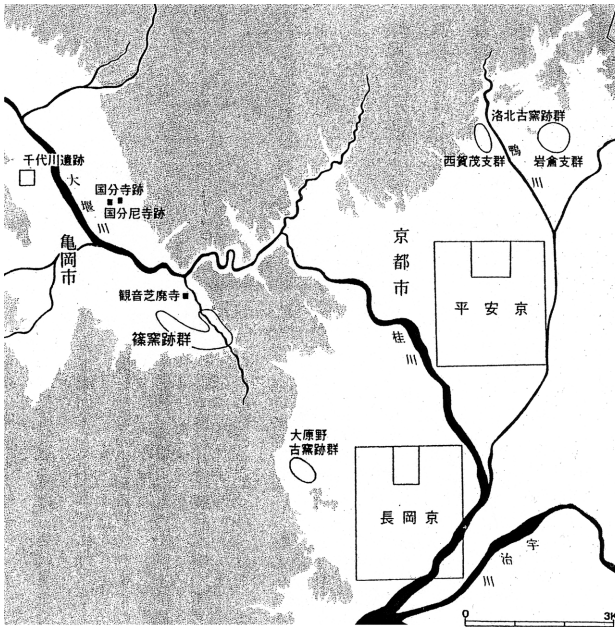
第一節 篠窯跡群の概要

一．はじめに

京都府亀岡市篠町に所在する篠窯跡群は、平安京から直線距離にして約10 kmに位置し、東西約2.5 km・南北約1.7 kmの範囲にわたって須恵器・緑釉陶器・瓦を焼いた100基以上の窯跡が点在している。

篠窯跡群の発掘調査は、昭和五一年度から昭和六一年度までの10ヶ年をかけて窯跡二五基・窯状遺構・作業場跡の発掘調査が、京都府教育委員会・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター・亀岡市教育委員会によって実施され、各窯跡及び窯跡関連遺構とその出土遺物については、各調査概要・報告書として刊行されている。

これによると、篠窯はおおよそ七〇〇年を前後する時期から一〇〇〇年を前後する時期に操業さ



第五-1図 平安京と篠窯跡群の位置

確認調査を実施し、窯跡の存在が明らかになったものについては発掘調査(九窯支群二〇窯跡)^{注五13}が実施された。調査成果は、『篠窯跡群Ⅰ』(以下「篠Ⅰ」と記す)・『篠窯跡群Ⅱ』(以下「篠Ⅱ」と記す)として公表された。また、平成八年には、マル山一号窯の発掘調査がおこなわれた。平成元年・平成五年には、亀岡市教育委員会により篠遺跡の発掘調査^{注五16}がおこなわれ、篠窯跡群で生産に関わった集団の掘立柱建物などが検出された。

平成一一年以降、亀岡市教育委員会、立命館大学^{注五17}、大阪大学^{注五18}により篠丘陵(石原畑支群・アナウシ地区など)の分布調査が行われ、新たな成果が得られた。

立命館大学大学院日本史学専攻考古学コースによる分布調査では、石原畑地区、アナウシ谷奥地区で新たに窯を、亀岡市教育教育委員会・大阪大学による分布調査では、鶴ノ川右岸の石原畑地区―大谷窯跡支群で9世紀前半から10世紀前半の遺物と窯体の一部を確認し、アナウシ谷奥窯支群・大谷窯支群の分布調査により窯の分布が広がるとともに、緑釉陶器の窯が限られた支群にのみ分布すると思われるものが、篠窯の全域に広がっていることが明らかとなった。また、石原畑地区の大谷三号窯の発掘調査^{注五19}が平成一五―平成一八年にかけておこなわれ、篠窯跡群を考える上での多大な成果を得た。

二．篠窯の概要

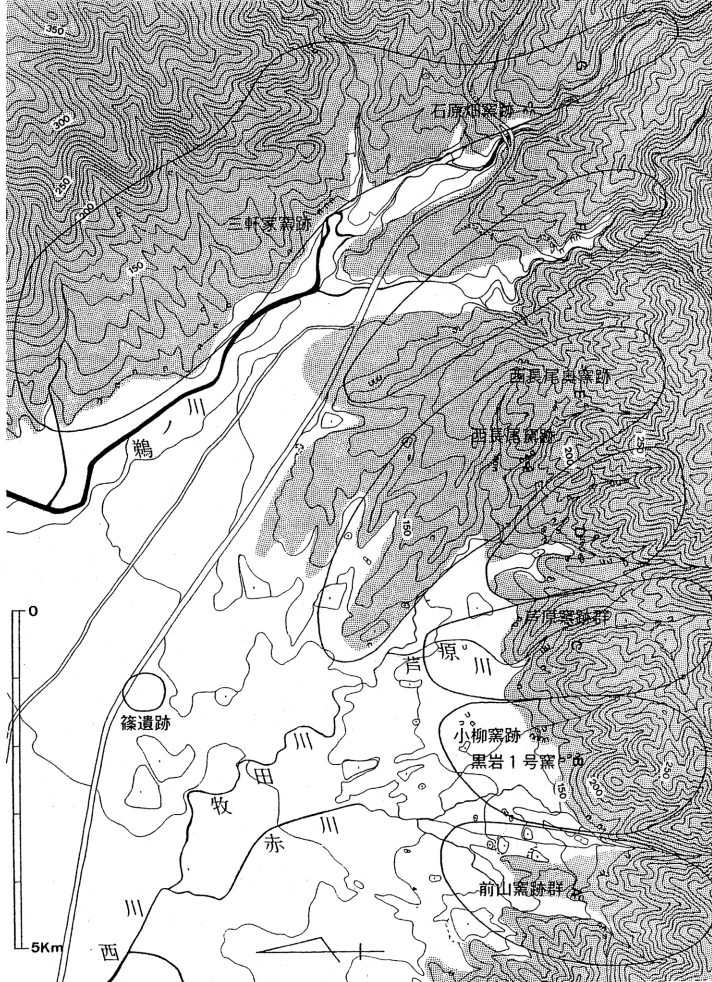
篠窯の分布状況 亀岡盆地の周縁部は、新世代第四更新世以降の堆積作用によって、砂礫層や砂層・粘土層が堆積している。この更新世には五〇m前後の厚さで礫・砂・粘土がほぼ水平に堆積した篠町層があり、その地層に篠窯は立地^{注五10}している。

篠窯の分布状況を見ると、粘土と水を考慮したためか、窯は入り込んだ狭い谷部で、近接して小川が流れる場所に多い。これら谷地形や小河川との関係からみると、窯跡の分布は、大きくは鶴ノ川・牧田川・赤川

の三河川の流域に大別することができる(第五—3図)。

一 鶺ノ川流域では、鶺ノ川右岸の石原畑窯支群から北側の竹下橋に広がる地区(石原畑地区、仮G地区)があり、近年の分布調査等により、篠窯の開窯期から9世紀末の緑釉焼成窯、11世紀前半に始まる瓦窯(三軒家南1号窯)などがある。石原畑地区(仮G地区)は広く、不明な部分が多かったが、樋口隆久は三軒家南窯跡・三軒家窯跡・ハチカメ谷奥窯跡・大谷窯跡の各支群に分けている。

石原畑地区(仮G



第五—3図 篠窯跡群 支群別窯跡分布図

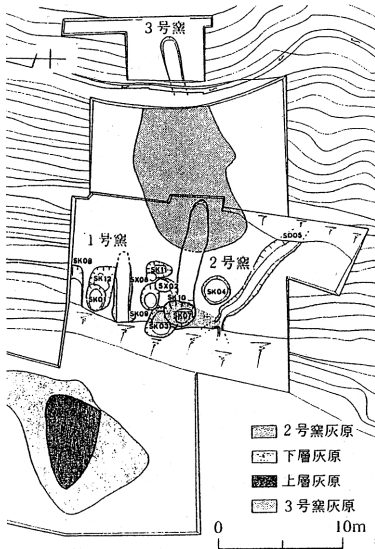
地区)とは鶴ノ川を挟んだ対岸で、丘陵の東側斜面にアナウシ地区(仮F地区)がある。アナウシ地区は、奈良時代後半から始まる意泉院裏窯跡群、アナウシ谷奥窯跡群などがあり、10世紀後葉まで断続しながらも続く窯跡群である。

西川から分かれた牧田川の右岸で、アナウシ地区とは丘陵を挟んだ西側斜面に西長尾地区(仮E地区)がある。西長尾地区は8世紀後半以降、10世紀後葉まで窯跡が点在し、篠窯での須恵器あるいは緑釉陶器窯の最終窯(西長尾五号窯)がある。

牧田川の左岸で、芦原川の間が鍋倉地区(仮D地区)である。鍋倉地区は、平安時代以降の窯が知られており、9世紀を中心として窯が分布している。芦原川流域に点在する掛ヶ谷地区(仮C地区)も鍋倉地区と同様の傾向をしめしている。

牧田川の西、赤川流域の右岸に小柳地区(仮B地区)、左岸に前山地区(仮A地区)がある。小柳地区・前山地区は9世紀中頃以降に窯が造られ、10世紀中葉まで続く。

このように篠窯は、仮G・F・E地区の丘陵の東側か



第五-5図 篠石原畑窯跡 遺構図



第五-4図 篠石原畑窯跡 位置図

ら初期の窯が築かれ、徐々に窯が西側に広がる。また各支群では、時期を異にする窯が近接して見つかる例が多く、各支群で、窯が70〜90年を単位としてほぼ同一地点に戻る傾向がある。

以下、発掘調査・分布調査の概要を説明する。

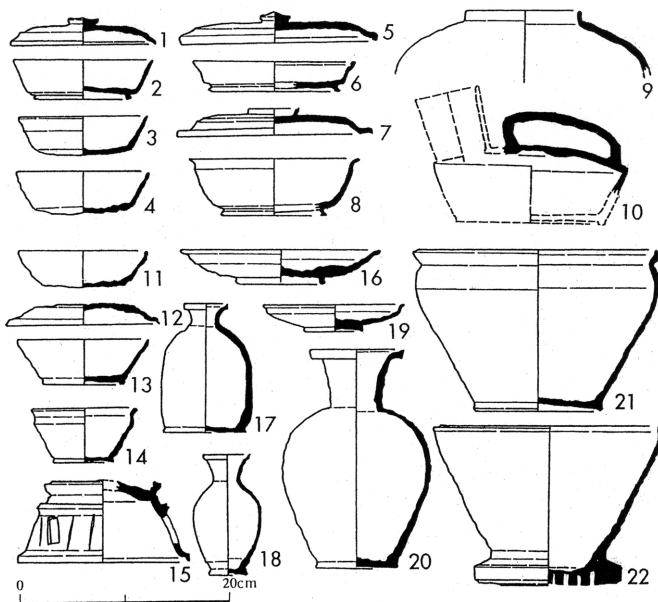
石原畑窯跡支群(仮G地区)

石原畑窯跡支群^{第五区}では、石原畑窯跡群が一九八二年に発掘調査が行われ、三基の窯(石原畑一〜三号窯)を検出した。また、分布調査で3号窯の南西30mの位置で四号窯を確認した(第五一三・四図)。

石原畑一〜三号窯は須恵器專業窯で、丘陵上位にある三号窯は、丘陵斜面をトンネル状に削り抜いた地下式窖窯、丘陵下位にある一・二号窯は、丘陵斜面を溝状に掘り窪めた半地下式窖窯である。

石原畑一・二号窯は、一号窯の操業を終了したのち、一部盛土を行って二号窯が築かれている。

石原畑一・二号窯は9世紀前半、三・四号窯は8世紀後半で、杯身・杯蓋などには「大夫」・「大」・「為」などと焼成前にへら描きされたものがある。石原畑三・四号窯須恵器は、丹波国分寺・観音芝蔭寺など亀岡盆地周辺の主要遺跡にその製品が供給されたも



第五-6図 石原畑窯跡 出土遺物

のと思われる。

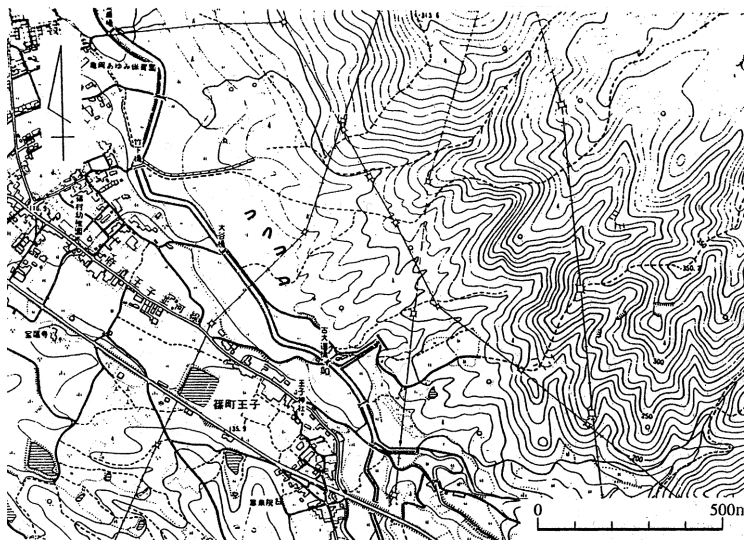
大谷窯支群(仮G地区)

石原畑窯跡群(仮G地区)の最も北側にある窯跡群で、昭和六〇年以降の亀岡市教育委員会による分布調査^{注5)12)}によって4基の窯が確認されている(第五―7図)。また、平成一五年の大阪大学大学院文学研究科考古学研究室による分布調査により、大谷窯跡群の北部、大谷五号窯で7世紀末の遺物が出土しているほか、大谷二号窯では、8世紀前葉の遺物が採集されている。発掘調査では、9世紀末頃の大谷三号窯の調査がおこなわれた。大谷三号窯は、丘陵斜面を利用した二基の窯(三―1号窯・三―2号窯)で、緑釉陶器や緑釉陶器素地などを焼成した篠窯跡群での初期の窖窯である。

三軒家窯・三軒家南窯支群(仮G地区)

鶴ノ川右岸で石原畑窯跡群と大谷窯跡群の間に三軒家窯・三軒家南窯支群^{注5)13)}がある。また、大谷地区と三軒家支群の間で、三軒家地区の北側にある灰ヶ谷地区^{注5)14)}では、8世紀中頃以降の遺物が出土しており、採集資料のなかでは金属器模倣の蓋Bが出土している。

三軒家支群では、大阪大学による分布調査により、8世紀中頃を中心とした遺物が採集されている。



第五―7図 大谷窯跡群 位置図

三軒家南一号窯(旧遺跡名王子A号瓦窯)は、丘陵斜面を利用した窖窯で、窯体内からは11世紀前半から12世紀中頃までの時期差をもった瓦があることが明らかとなっており、樋口隆久は東に隣接して新たに瓦窯を構築するにあたり、灰原に廃棄された瓦を窯体内に再廃棄したかの状態であったと報告されている。

なお、窯体内に廃棄された瓦は、観音芝磨寺のほか、平安京法成寺に供給されたものと思われる。軒平瓦には半截花文・唐草文があり、平瓦の凸面は縦方向の、頸部から頸部にかけては横方向の縄タタキが施されている(第五—8図)。

アナウシ地区(仮F地区)

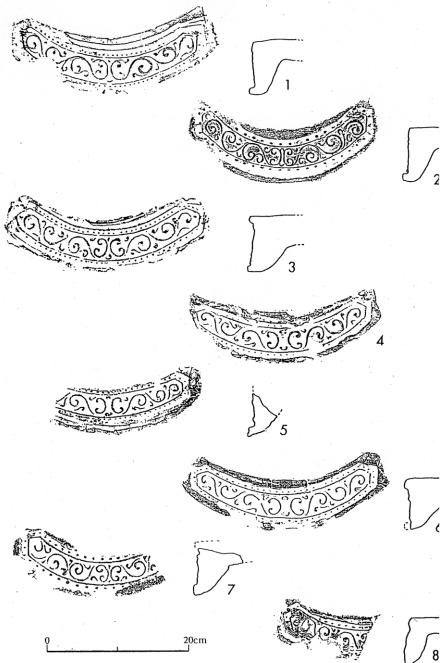
アナウシ地区(仮F地区)^{注五—15}では、丘陵北側から意泉院裏窯跡群、アナウシ谷窯跡群、アナウシ谷奥窯跡群

と並ぶ。アナウシ地区での分布調査によると、意泉院裏窯跡では三基の窯が予想されており、

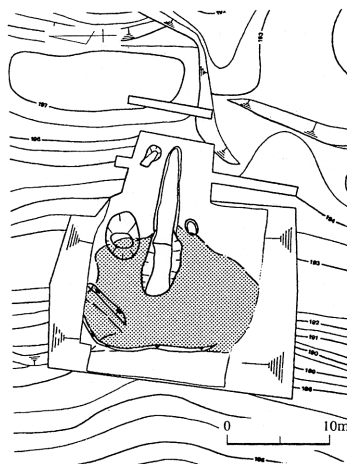
8世紀前半から中葉、アナウシ二号窯は10世紀前半、アナウシ谷二・三号窯は9世紀前半と思われる。また、緑釉陶器の素地が一定量出土する窯としてアナウシ谷奥二・三号窯、アナウシ谷二号窯などがある。

西長尾窯地区(仮E地区)

西長尾地区は、牧田川の右岸の丘陵西側斜面に窯が築かれている。西長尾地区では騎馬ヶ谷窯跡、西長尾窯跡^{注五—16}、西長尾奥窯跡など^{注五—17}



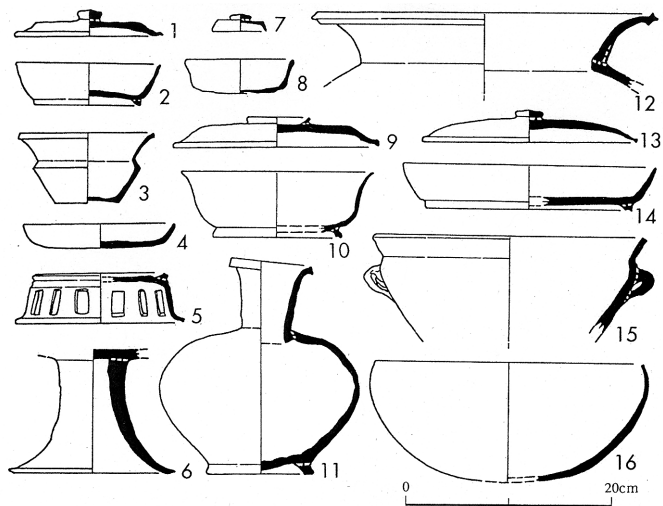
第五—8図 三軒家窯出土軒平瓦



第五-10図 西長尾奥2-1号窯実測図



第五-9図 西長尾窯跡位置図



第五-11図 西長尾奥窯跡出土遺物

がある。そのうち、西長尾窯跡で五基、西長尾奥窯跡で一
1号窯と二―1号窯の発掘調査が行われた。

西長尾奥一―1号窯は、窯本体が流失しており、その痕
跡と思われる逆L字形の焼土と灰原の一部を確認した。

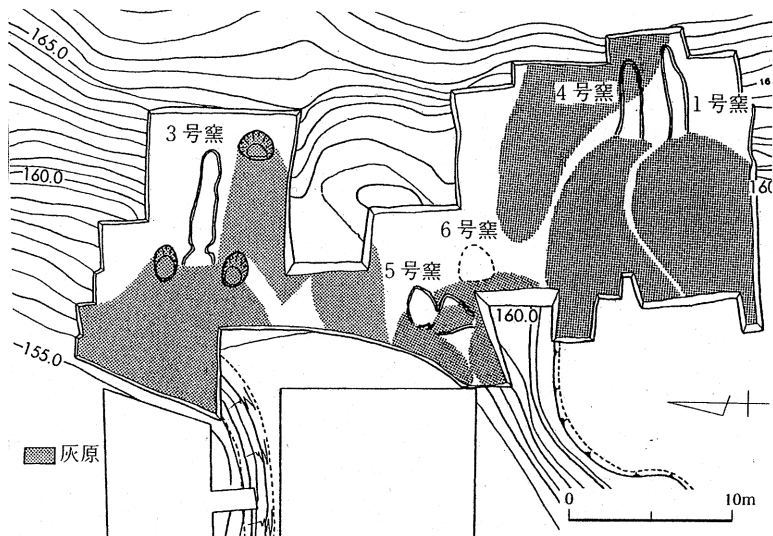
西長尾奥二―1号窯(第五―10図)は、丘陵西側斜面を
利用して築かれた半地下式窖窯で、全長9m・床面最大幅
1.8m・床面傾斜角14度を測り、これまで発掘調査を行った
篠窯跡群のなかでは最も規模の大きな窯である。

出土遺物(第五―11図)(第五―11図)は、杯身・杯蓋・
皿が全体の95%を占め、そのほかに高杯・鉢・甕・円面硯
などがある。他の窯に比べて甕の出土例が多く、口縁部
片で67点を数える。灰原は上下二層に大別でき、「下層」が
8世紀中葉、「上層」が9世紀前葉の遺物が出土している。

西長尾窯跡(第五―12図)は丘陵の西側斜面にあり、西
長尾一・四・三号窯は半地下式窖窯である。

西長尾一・四号窯は、1.4mの間に近接して築かれている
こと、出土した須恵器も相前後した時期であることから同
時操業の可能性が高い。

西長尾三号窯は、全長8.0m・床面最大幅1.5m・床面傾斜



第五―12図 篠西長尾窯跡 遺構図

角32度を測る比較的規模の大きな窯である。

西長尾六号窯は、平面三角形を呈した平窯で、窯の一辺の長さは2.3mを測る。焚口部は三角形の底辺両端の位置に二ヶ所あり、三角形の頂部にあたる位置に煙道部がある。焼成部床面で焚口付近には四本、排煙部近くには四本の円柱が据えられている。また、排煙部には燃焼部から焼成部へ流れた火がそのまま排煙部へ抜けにくくするために直径0.1m、長さ0.3mの円柱が横たわっていた。

西長尾五号窯は、六号窯の底辺を狭めたような平面砲弾形を呈し、長軸2.4m・短軸約1.35mを測る。

西長尾五号窯の焚口は二ヶ所あり、焼成部は二重床面構造で、燃焼部からの火が流れる第一床面と製品を置く第二床面からなる。第一床面には、縦四列にそれぞれ放物線状に円柱を16本立てて第二床面の支柱を造っている。第二床面は、円柱上面に拳大の粘土塊を不規則に敷いている。煙道部には焼成部の火を抜けにくくするために角礫を据えている。

西長尾一・四号窯では杯A・杯B・杯蓋・壺・鉢・円面硯などがあり、9器形18タイプで、出土量が多いためとも多い杯Bが全体の36%を占める。西長尾三号窯は杯A・杯B・壺・鉢など出土しており、全体の62%以上が碗で、器形の単純化とともに底部糸切りによる切り離しなど大量生産を意図したものへと変化する。また、篠窯で特徴的鉢Cが出土している。西長尾五号窯では、三号窯よりもさらに器種が少なく、杯・鉢で全体の98%以上を占め、そのなかでも碗Sが主体となる。底部に高台をつけた皿、碗は各一個体と極少である。西長尾地区では、西長尾奥二一1号窯が8世紀後半から9世紀前半までの比較的長期にわたって操業した窯である。西長尾窯跡群は、篠窯の操業がピークとなる8世紀末～9世紀初頭に操業されている。この時期の特徴として、複数基の窯が近接して造られる傾向にあり、複数基の窯を同時に操業することによって燃焼効率・作業効率を高めたものと思われる。西長尾三号窯は、九〇〇年前後した時期の窖窯で、篠窯での窖

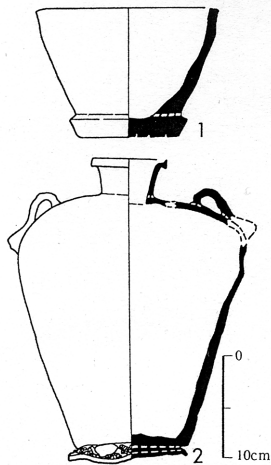
窯として最終窯の可能性が高く、三号窯の操業以後、篠窯跡群では小型窯に変化する。西長尾五・六号窯は小型窯で、篠窯での須恵器窯としては最終段階の窯である。

鍋倉地区(仮D地区)

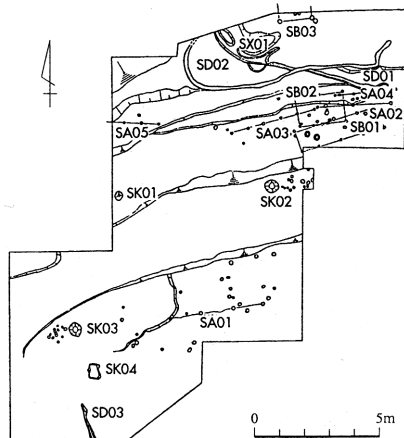
牧田川の左岸に立地する窯跡群であり、五小支群で総数18基の窯が点在しており、狭い谷部に窯が分布する傾向がある。

鍋倉地区では北から騎馬ヶ谷一号窯、黒山窯跡、芦原窯跡、鍋倉一・二・三・四号窯があり、芦原一・三号窯、鍋倉第四―一号窯^{注五・18}の発掘調査が行われたほか、芦原池に近接した位置の西長尾A^{注五・19}地区で掘立柱建物や土坑などを検出した(第五―14・15図)。

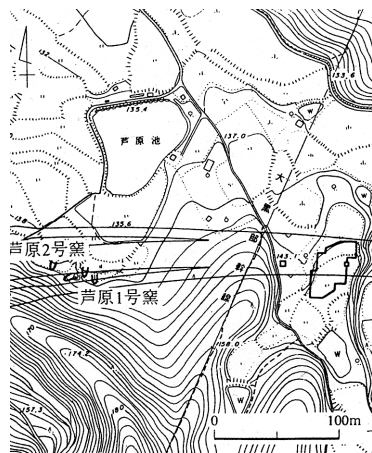
芦原一号窯は、丘陵南側斜面に構築された半地下式窖窯で、残存長約6.6m・床面最大幅1.5mで、床面傾斜角は最も急なところで45度を測る。芦原三号窯・鍋倉第四―一号窯は窯の遺存状態が悪く、窯体の一部や灰原の一部を検出したのみである。



第五-13図 芦原窯出土遺物



第五-15図 芦原地区 建物跡遺構図



第五-14図 芦原窯跡位置図

西長尾A地区では、掘立柱建物三棟、柵五列、溝状遺構二条のほか、多数の柱穴を検出した。そのうち、SB02は二間×一間の小規模な掘立柱建物で、集配場所や作業小屋であった可能性が高い。

芦原一・三号窯では、杯・杯蓋・皿・壺・鉢などが出土している(第五―13図)。

西長尾A・D地区の作業場跡からは、芦原一・三号窯の時期の須恵器のほか、後述する前山二・三号窯・黒岩一号窯の時期の須恵器を含んでおり、特に、皿には内面に花文様をへら描きした印刻花文のものや稜碗の素地が出土している。

鍋倉地区は、9世紀前半の時期に操業された窯が集中する地域であり、長岡京造営後の近接した時期がその中心となった窯跡群である。また、この地区は西長尾地区との中間点にあり、牧田川流域の窯跡群に係わった製品の集積場・作業場がある。

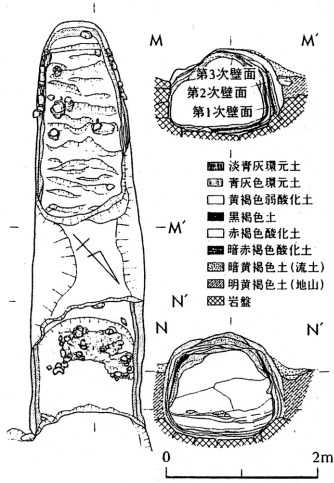
掛ヶ谷地区(仮C地区)

掛ヶ谷地区は、北から青柳窯跡群、掛ヶ谷窯跡、マル山1号窯、柿谷窯跡、柿谷奥窯跡がある。そのうちマル山1号窯の発掘調査がおこなわれた(第五―16図)。

マル山1号窯は、丘陵急斜面を利用した半地下式窖窯で、検出全長8m・最大幅1.4mを測り、灰原は幅6.5m・長さ38mにわたって広がっている。窯の床面は、平均傾斜角43度と急傾斜で、製品を置くために深さ25cmの窪みをつくり、蓋などを据えて焼き台としている。天井部はドーム状を呈し、床面から天井までの高さ1m前後を測る(第五―17図)。

窯体及び灰原からは、60箱以上出土した。杯は1:1.5の割合で杯Bの個体数が多い。皿は、皿Aが大半で、皿C・皿E・皿Sが少量ある。壺は、壺Aが大半で、ほかに双耳壺・手付瓶がある。鉢A・Bはほぼ同数出土している(第五―18図)。

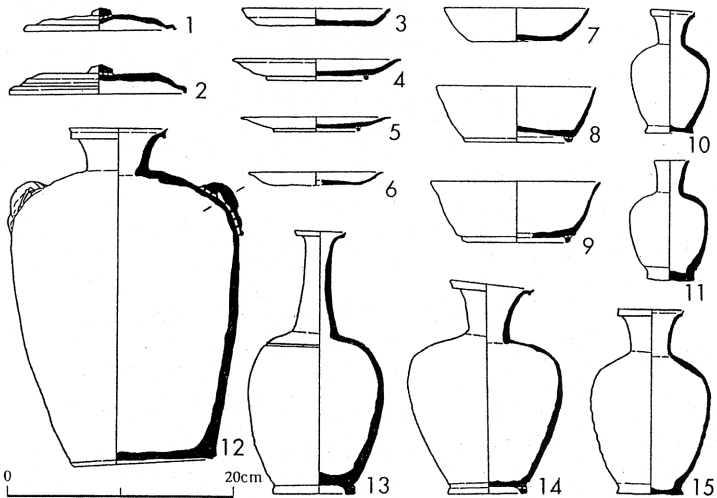
第1節 ● 篠窯跡群の概要



第五-17図 マル山1号窯 遺構図



第五-16図 マル山1号窯 位置図



第五-18図 マル山1号窯 出土遺物

黒岩地区(仮B地区)

黒岩地区では、丘陵の北斜面(標高135～155m)に窯が点在している。

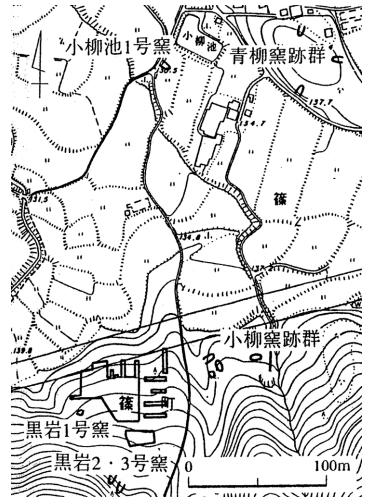
この黒岩地区で(第五―19図)は、小柳窯跡群、黒岩窯跡群、黒岩西窯跡群(時期不詳)などがある。また、周辺には黒色灰を埋土とする窯状遺構がある。窯に関連した遺構としては、黒岩一号窯の東側の緩傾斜面で、高さ0.5mの土壇状の平坦面がある列石や柱穴がある。

小柳窯跡群^{注五二}では、半地下式窖窯(一号窯)と平窯(四号窯)、窯状遺構を検出した(第五図―21)。小柳一号窯は、残存長7.0m・床面最大幅1.2m・床面傾斜角は最大46度を測る。灰原は、南北14m・東西5mの範囲に広がっている。

小柳四号窯は、平面三角形を呈した平窯(主軸長1.6m)で、床面は比較的平坦である。

窯状遺構(小柳三号窯)は、一号窯の南東約5mで、長さ4.2m、幅1.6mの長楕円形の平面を呈し、窯体内には炭が堆積していた。また、小柳四号窯に近接して埋土内に黒色灰や炭が入った焼土坑二ヶ所を検出している。

黒岩一号窯^{注五二}は、平面三角形を呈し、内法での主軸長1.5m・底辺長1.6m・床面傾斜角約10度を測る。焚口部は三角形でいう底辺の両端二ヶ所にあり、石または粘土塊を円柱状にして窯壁の末端に立てている。この焚口部から直径0.5mの範囲が燃焼部と思われる。

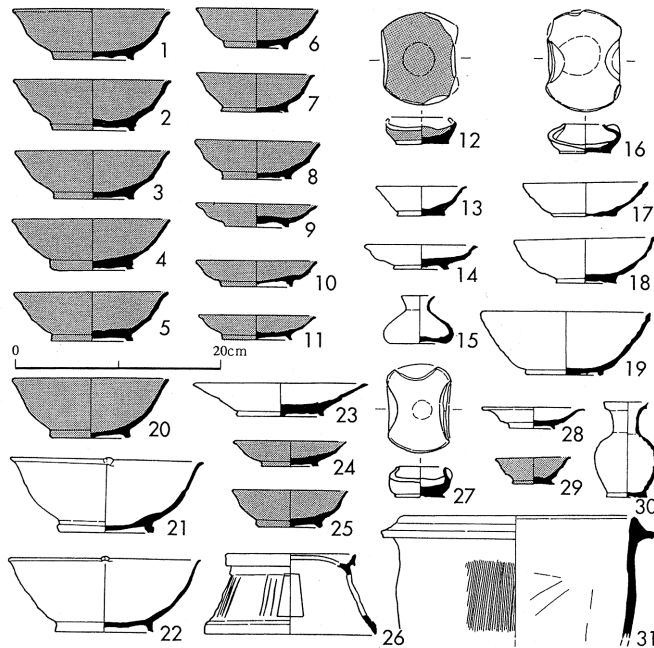


第五-19図 黒岩・小柳窯跡位置図

焼成部床面には、直径8～20cm、深さ2～4cmの円形や楕円形のくぼみが18ヶ所ある。窪み内には拳大の焼台が置かれていた。三角形の頂部にあたる煙道部の側壁の立ち上がり角度は約30度を測る。窯体内で、焚口部付近に緑釉陶器を含めて29個体の土器が出土した。

窯体の周囲には幅20～40cm、深さ6～7cmの溝がめぐり、窯体内に水が入り込まないように工夫されている。

黒岩1号窯の北東約34mでは、長径4.1m、短径1.3m、深さ0.35mを測り、壁面に粘土を貼って窯壁状に焼きしめられている窯状遺構^{注1,23}(SX01)がある。この窯状遺構は、長楕円形の平面形態で、そのなかには厚さ10～20cmの炭の層が堆積していた。この窯状遺構は黒岩1号窯のような小型窯の燃料となる黒色炭を焼いた遺構ではないかと想像されている。また、小柳窯跡群の東南約20mの地点でも、砲弾形の平面形態を呈し、残存長2.5m・幅1.3m・床面傾斜角13度を測る窯状遺構がある。この窯状遺構は、壁は床面から約10cmの高さまで遺存している。窯体内は、黒色灰や炭が5cmの厚さで堆積しており、直径2



第五-20図 黒岩窯跡出土遺物

5 cmの炭化木も4本残っていた。

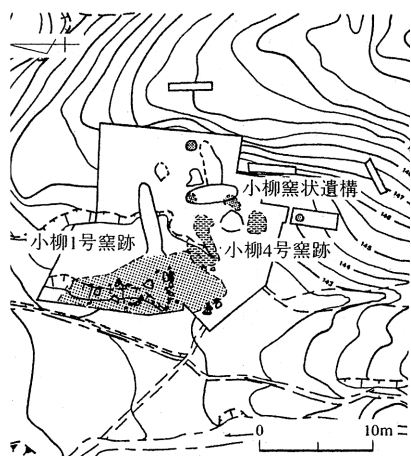
小柳窯跡群では一・四号窯の窯体及び灰原内から一七〇〇点以上の須恵器が出土した(第五―22図)。

杯は、杯Aと杯Bがあり、1・3の割合で杯Aより杯Bが多く出土している。杯Bとセットになる杯蓋は、天井部につまみをもつ蓋Aと、つまみをもたない蓋Cがあり、1・2.3の割合で蓋Cが多い。皿は、古いタイプのもと、底部が突出ぎみの平底を呈したものがある。壺Aは、中型品では底部に高台を貼り付けた壺Aa、小型品は高台を貼りつけない壺Abがある。椀Sは、平底が突出ぎみの平底で、内湾ぎみに立ち上がる。小柳四号窯では、杯・椀・鉢が主な器種である。

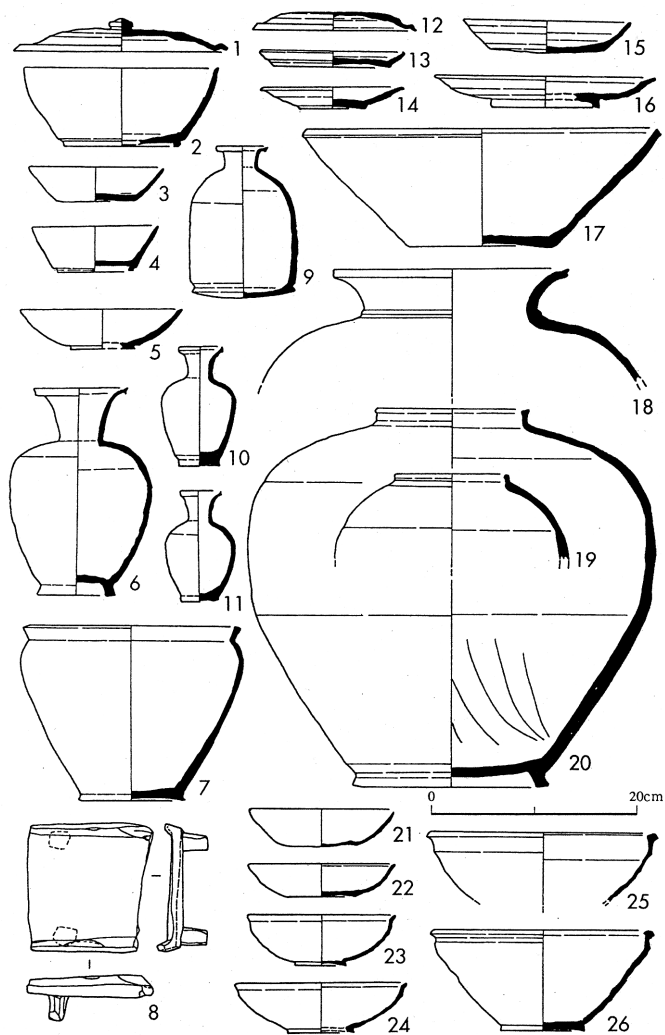
黒岩一号窯では、緑釉陶器のほか、緑釉陶器素地、須恵器雑器や土師器甕が出土した。緑釉陶器・緑釉陶器素地には椀C・E、皿C・E・耳皿などがある。須恵器は杯A・B、椀B・Sなどがある(第五―20図)。

前山地区(仮A地区)

前山地区では、前山一・二・三号窯(第五―24図)、西前山一号窯、袋谷一号窯の発掘調査がおこなわれた。前山窯跡群^{第五}は東西15m、南北30mの緩傾斜面で三基の窯が構築されている。前山一号窯は、残存長6.6m・床面最大幅1.4mを測る半地下式竈窯である。前山二号窯は一号窯の南約1.4mあり、平面三角形を呈した平窯である。前山二号窯の両焚口間の長さ1.8m、床面傾斜角約8度を測り、床面には直径10cm、深さ2〜3cmの浅い凹みが一六ヶ所設けられている。前山三号窯は、前山二号窯の南約7mで、両焚口部間の長さ2.5m、床



第五-21図 小柳窯跡群 遺構図



第五 - 22 図 小柳窯跡群出土遺物

面傾斜角10度を測る。床面には一九ヶ所の円形の凹みがあり、そのうち一ヶ所には拳大の焼き台が据えられている。両焚口部は幅0.5mで、粘土塊で密閉されていた。

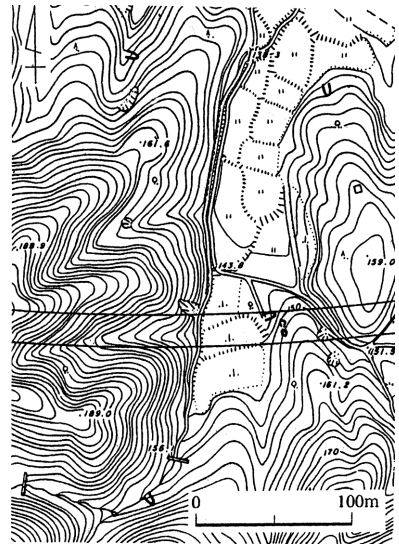
前山二・三号窯では緑釉陶器・緑釉陶器素地と須恵器が出土(第五―25図)しており、緑釉陶器片は二五〇点余りに対して須恵器片は三〜四万点である。

前山二・三号窯の遺物の識別がむずかしいが、遺物の取り上げ状況から椀S・鉢Cが三号窯で焼成されていた可能性が高く、椀Sは二・三号窯で焼成されていた可能性が高い。皿C・Dは、前山二・三号窯で焼成されているが、無高台で口縁部が大きく外反する皿Vは三号窯に先行する二号窯でのみ焼成されていた可能性が高い。

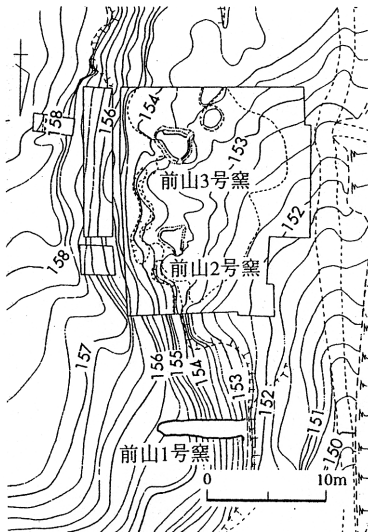
西前山一号窯^{遺址}は、前山窯跡群の西方約100mで、丘陵北西斜面に立地している半地下式窖窯である。窯体の残存長6.7m・床面最大幅1.6m、床面傾斜角は最大30度を測る。

袋谷一号窯は、篠窯の最西端に位置する半地下式窖窯で、残存長4.7m・床面最大幅1.2m、床面傾斜角23〜38度を測る。

袋谷一号窯の調査では、663個体以上の須恵器片が出土



第五-23図 前山窯跡群 位置図



第五-24図 前山窯跡 遺構配置図

し、そのうち貯蔵容器である壺が全体の34.4%と他の窯に比べて出土比率は高い。壺には中国湖南省長沙銅官窯系の手付短頸壺である。

注五―1 安井良三「篠村の古代窯址」〔亀岡町史研究報告書〕一 一九五三

安井良三「丹波篠村A号窯址I」

〔京都府立亀岡高校研究紀要〕第四号 一九六五

樋口隆久「篠町A号・三軒家瓦窯

址より採集した遺物」〔稜〕二号

一九七四

樋口隆久「三軒家窯跡群」〔亀岡市

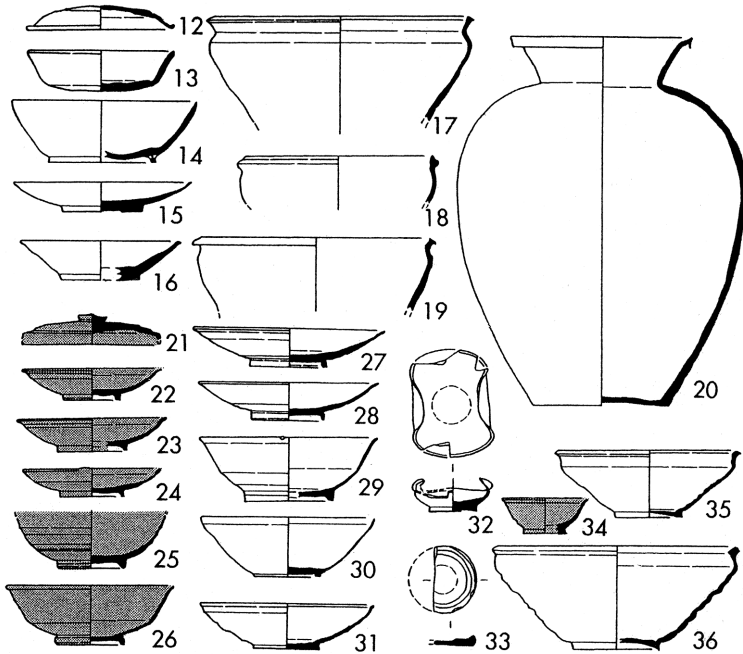
史資料編〕第一巻「亀岡市史編さん

室〕一〇〇〇

堤圭三郎「昭和五一年度 国道九号

バイパス関係遺跡発掘調査概要」

〔埋蔵文化財発掘調査概報(1976)〕



第五 - 25 図 前山窯跡 出土遺物

京都府教育委員会) 一九七六

注五―3 安藤信策「昭和五二年度国道九号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』京都府教育委員会) 一九七七

注五―4 石井清司ほか『篠窯跡群Ⅰ』(『京都府遺跡調査報告書』第二冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九八四

注五―5 水谷壽克・岡崎研一ほか『篠窯跡群Ⅱ』(『京都府遺跡調査報告書』第一冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九八九

注五―6 樋口隆久『篠遺跡第二次発掘調査』(『亀岡市文化財調査報告書』第二五集 亀岡市教育委員会)

一九九一

中澤 勝『篠遺跡第三次発掘調査』(『亀岡市文化財調査報告書』第三一集 亀岡市教育委員会)

一九九四

注五―7 木立雅朗ほか「篠窯跡群分布調査報告(一)・(二)・(三)・(四)」(『立命館文学』第五六六号、第五七五号、

第五七八号、第五八四号 立命館大学篠窯跡群踏査研究会) 二〇〇〇、二〇〇二、二〇〇三、二〇〇四

注五―8 二〇〇三年、大阪大学大学院文学研究科考古学研究室による分布調査では7世紀末〜8世紀初頭の須恵

器杯・壺などを採集しており、篠窯跡の開窯が藤原京造営の時期まで遡る可能性がある。

中久保辰夫「Ⅲ分布・測量調査」(高橋照彦ほか『大谷3号窯―篠窯跡群北部域の調査―』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室) 二〇〇六

注五―9 高橋照彦ほか『篠窯跡群大谷3号窯の研究』(『大阪大学文学研究科考古学研究報告』第五冊 大阪大学

考古学研究室) 二〇一一

注五―10 井上穎鑽「亀岡の地質と構造」(『新修亀岡市史』本文編第一卷 亀岡市) 一九九五

増田富士雄によると、篠地域に露頭している泥層は、湖に河川の洪水流起源の粘土の堆積で、焼き物の原料として適しているとの指摘がある。

増田富士雄「大谷3号窯付近の小露頭に関する地質学的検討―京都、亀岡盆地、篠窯跡群における大阪層群相当層(更新統)の堆積情報―」(『大谷3号窯―篠窯跡群北部域の調査―』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室) 二〇〇六

注五―11 石井清司ほか「石原畑窯跡群」(『篠窯跡群Ⅰ』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九八四

石井清司「篠窯跡群出土の須恵器について」(『京都府埋蔵文化財情報』第七号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九八三

注五―12 樋口隆久「大谷窯跡」(『亀岡市史資料編』第一卷『亀岡市史編さん室』二〇〇〇)

高橋照彦ほか「大谷3号窯―篠窯跡群北部域の調査―」(大阪大学大学院文学研究科考古学研究室)

二〇〇六

注五―13 注五―1に同じ

注五―14 注五―7に同じ

注五―15 木立雅朗ほか「篠窯跡群分布調査報告(四)」(『立命館文学』第五八四号 篠窯跡群踏査研究会)

二〇〇四

注五―16 石井清司ほか「西長尾窯跡群」(『篠窯跡群Ⅰ』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九八四

注五―17 引原茂治「西長尾奥第2窯跡群1号窯覚書」(『京都府埋蔵文化財論集』第二集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九一

- 水谷寿克『篠窯跡群Ⅱ』（『京都府遺跡調査報告書』第一一冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）
一九八九
- 注五―18
水谷寿克「鍋倉第4窯跡1号窯の発掘調査」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1980）』京都府教育委員会）
一九八一
- 注五―19
岡崎研一「篠西長尾A地区作業場跡」（『京都府埋蔵文化財情報』第一三号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 一九八四
- 注五―20
野々口陽子「篠マル山1号窯」（『京都府埋蔵文化財情報』第六二号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 一九九六
- 高野陽子・石井清司「篠・マル山1号窯発掘調査概報」（『京都府遺跡調査概報』第七四冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 一九九六
- 石井清司「最近の篠窯跡群の調査から―マル山1号窯の調査成果―」（『中世土器研究』第七七号 中世土器研究会） 一九九七
- 注五―21
水谷寿克「小柳4号窯の発掘」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1981）』京都府教育委員会） 一九八一
- 水谷寿克「小柳1号窯」（『篠窯跡群Ⅱ』京都府遺跡調査報告書第一一冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 一九八四
- 京都府教育委員会「昭和五四年度篠窯跡群発掘調査概要―小柳1号窯跡発掘調査、西長尾・西山試掘調査―」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1980）』） 一九八〇
- 京都府教育委員会「昭和五五年度篠窯跡群発掘調査概要―小柳4号窯跡・前山2・3号窯跡・芦原1号窯跡発掘調査、西山他試掘調査―」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1981）』） 一九八一

注五―22 安藤信策・吉永真彦・樋口隆久ほか「黒岩1号窯跡発掘調査」『埋蔵文化財発掘調査概報(1978)』京都府教育委員会(一九七八)

安藤信策「亀岡篠緑釉焼成窯」(『丹波史談』一〇五号) 一九七九

注五―23 水谷寿克『窯状遺構」「円形焼土壇」の性格について』(『篠窯跡群Ⅱ』京都府遺跡調査報告書 第一一冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九八九

注五―24 安藤信策「前山2・3号窯の発掘調査」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 一九八一

前山2・3号窯の調査では、3mメッシュで灰原の遺物を取り上げている。その地点と遺物の観察によって皿Fが2号窯に偏って存在することが確認できた。

注五―25 岡崎研一「西前山1号窯体及び出土遺物について」(『京都府遺跡調査報告書』第一一冊 『篠窯跡群Ⅱ』

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九八九

水谷寿克「篠西前山窯跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第一九号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九八六

注五―26 岡崎研一「篠袋谷1号窯」(『京都府埋蔵文化財情報』第一八号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九八五

初出…『亀岡市史 史料篇』

第二節 篠窯跡群の土器

一・土器の分類基準

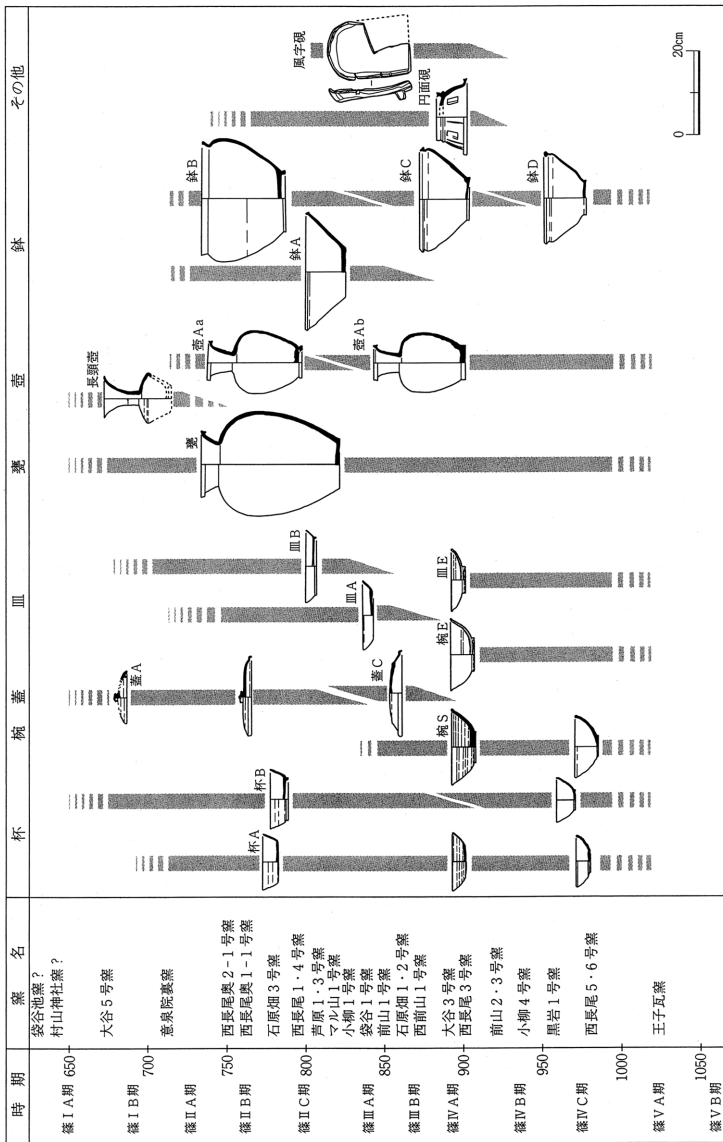
篠窯跡群出土の須恵器については、『篠Ⅰ』・『篠Ⅱ』・『篠窯須恵器』・『丸山一号窯出土遺物』・『大谷3号窯の研究』^{注27}などで分類基準が提示されているが、一部、分類基準が異なっている。ここでは二〇一二年に刊行された『大谷3号窯の研究』^{注28}に準拠しているが、一部、同研究報告書で提示されていないものについては、「篠窯須恵器」を援用して記述する。

篠窯跡出土の須恵器には、甕などの比較的大きなものは少なく、杯A・杯B・皿A・皿B・皿C・皿F、蓋A・壺Aa・Ab・B・C、双耳壺、水瓶、水滴、鉢A・鉢B・鉢C・鉢D、平瓶、鉄鉢、円面硯・風字硯など多種出土している(第五―26図)。

杯 類(第五―27図) 杯Aは、平底ぎみの底部から、口縁部が直線的あるいは内湾ぎみに斜め上方に立ち上がり、口縁端部は尖りぎみにおわるもので、奈良時代的な杯Aaと平安時代的な杯Abがある。口縁部内・外面はロクロナデ、内底面は一方方向のナデ調整を行う。

杯Bは、底部から斜め上方に立ち上がる口縁部へ続き、口縁端部は尖りぎみにおわる。底部には高台を貼り付ける。高台の形状には、外方にやや踏ん張った台形のほか、方形を呈するものがある。調整は口縁部内・外面にロクロナデ、内底面は一方方向のナデ調整を施す。

蓋Aは、水平ぎみの天井部から口縁部へ屈曲しながら続き、口縁端部が内側に巻き込んで丸みをもつもの(蓋Aa)と、口縁端部が蓋Aaにくらべて外方に広がり尖りぎみにおわるもの(蓋Ab)がある。

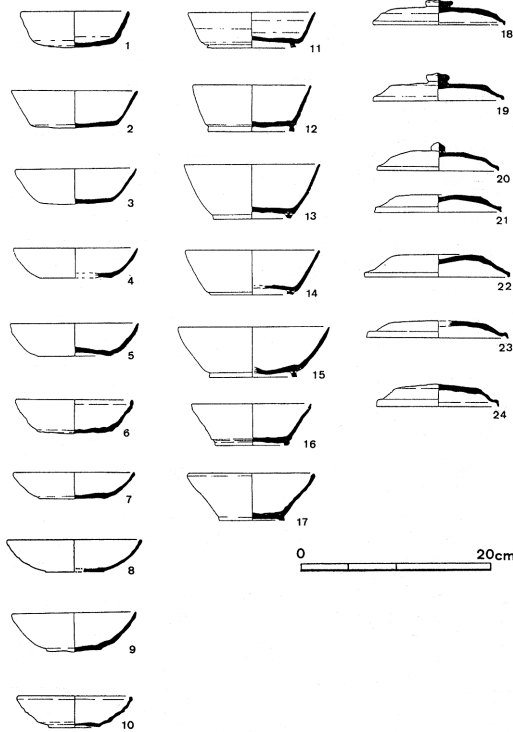


第五 - 26 図 篠窯出土土器 変遷図 (拠「大谷3号窯の研究」)

縁端部は外方にわずかに肥厚するものが多い。口縁部内・外面はロクロナデ、内底面はナデ調整を施す。皿Bは、皿Aに高台を貼り付けたものである。皿Cは、輪高台の底部で水平あるいは斜め方向に立ち上がる体部から、口縁部が外反ぎみに長く立ち上がる。口縁部を水平方向に尖りぎみにおわるものが多い。外底面も含めて全面に細かいミガキ調整を施している。皿Eは、皿C・皿Sの消滅と軌を一にするように現れる器形で、斜め上方に立ち上がる浅い体部から、口縁部は外反ぎみに屈曲す

蓋Aaの天井部には比較的高い宝珠形のツمامミを貼り付けているものが多いが、蓋Abでは、天井部に扁平な宝珠形ツمامミを貼り付けるもののほか、釘状のツمامミを貼り付けているものもある。口縁部内・外面はロクロナデ、天井部内面は一方方向のナデ調整で、天井部外面はケズリ調整を施している。
蓋Bは、水平ぎみの天井部から口縁部につづくもので、天井部には輪状のつまみを貼り付けている。
蓋Cは、水平ぎみの天井部から口縁部につづくもので、天井部にはつまみがない。

皿類(第五図―28図) 皿Aは、平底の底部から斜め上方に直線的に短く立ち上がる口縁部へ続き、口



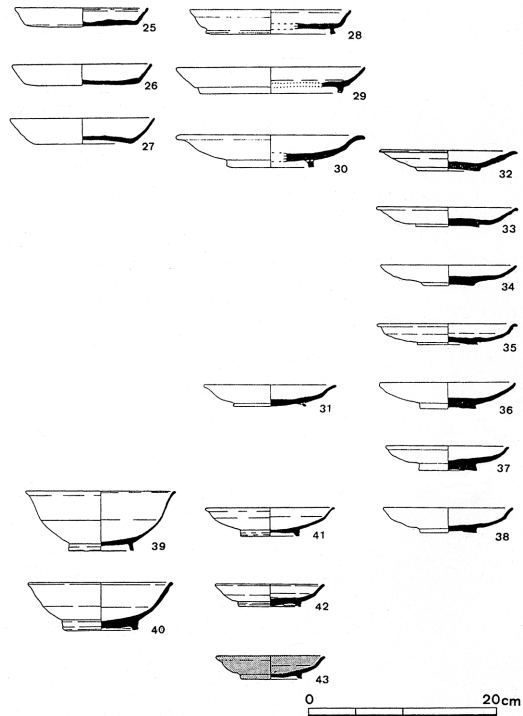
第五-27図 杯A・杯B・杯蓋変遷図

る稜皿である。底部は削り出し高台である。皿Fは、高台をもたない平底で、口縁部はやや内湾ぎみに斜め方向に短く立ち上がり、口縁端部は水平方向に短く肥厚する。皿Sは、平高台・蛇ノ目高台で水平あるいは斜め上方に立ち上がる体部から、口縁部は外反する。

椀 類 椀Aは、金属製椀(カナマリ)を模したもので、平城宮土器分類の杯Lに相当する。

椀Cは、平安時代以降に盛行する青磁椀を模したもので、斜め上方に立ち上がる体部から、口縁部は外反ぎみに長く立ち上がる深い椀状を呈する稜椀である。椀Sは、平底の底部から体部は内湾ぎみに深く立ち上がるもので、底部切り離しは回転糸切りを使用している。

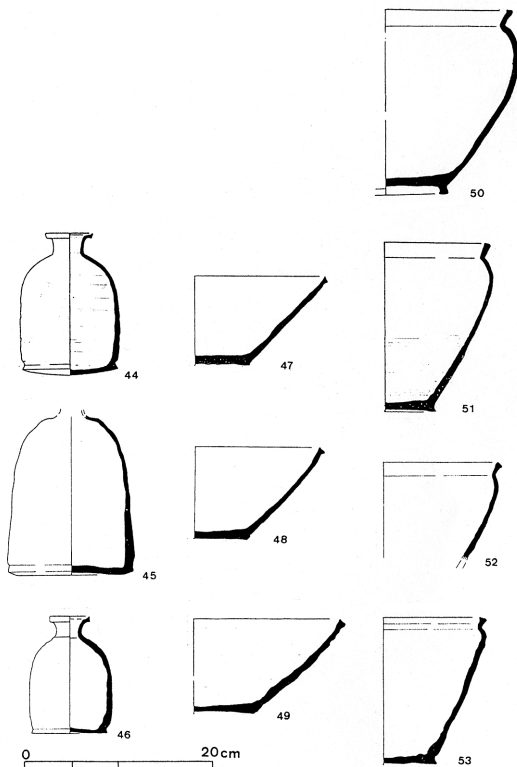
鉢 類 (第五—29図) 鉢Aは平底の底部で、斜め上方に直線的に立ち上がる体部へ続き、口縁部はわずかに内湾する。鉢Bは、半球形の体部で、口縁部が「く」の字形に屈曲する。口縁端部は内・外方にわずかに肥厚する。鉢Bは、底部に高台を貼り付けた鉢Baと突出ぎみの平底で糸切り痕を残す鉢Bbがある。鉢Cは、鉢Bbから変化した器形で、口頸部は「く」の字形に屈曲したのち、口縁端部を内・外方に強く屈曲させ、尖



第五 - 28 図 皿変遷図

りぎみにおわる。

壺類(第五—30図) 壺Aは、扁球形あるいは倒卵形の体部を呈し、口頸部が直立あるいは斜め上方に立ち上がる頸部から長く立ち上がり、口縁端部が外反する。口縁端部は上・下方に尖りぎみに肥厚するものがある。壺Aのなかには、筒状の頸部からそのまま外反することなく口頸部へ続き、口縁端部をわずかに肥厚させるものもある。壺Aは、底部の形態から糸切りののち輪高台を貼り付ける壺Aaと底部が平底で糸切り痕をそのまま残す壺Abに分けられる。壺Bは、釣鐘形の体部で、筒状の頸部から外反する口縁部へ続き、口縁端部を上・下方に肥厚する。双耳壺は、平底の底部から直線的に立ち上がる体部へ続き、体部上半は丸みをもった肩部を形成する。頸部は壺Aに比べて短く立ち上がり、口縁部が外反したのち端部は上・下方に尖りぎみに肥厚する。肩部には断面円形の耳を二ヶ所貼り付けている。水瓶は、卵形の体部で頸部が細長く立ち上がり、口頸部が外反したのち、上方にわずかに尖りぎみにおわる。底部はやや外方に踏ん張った高台を



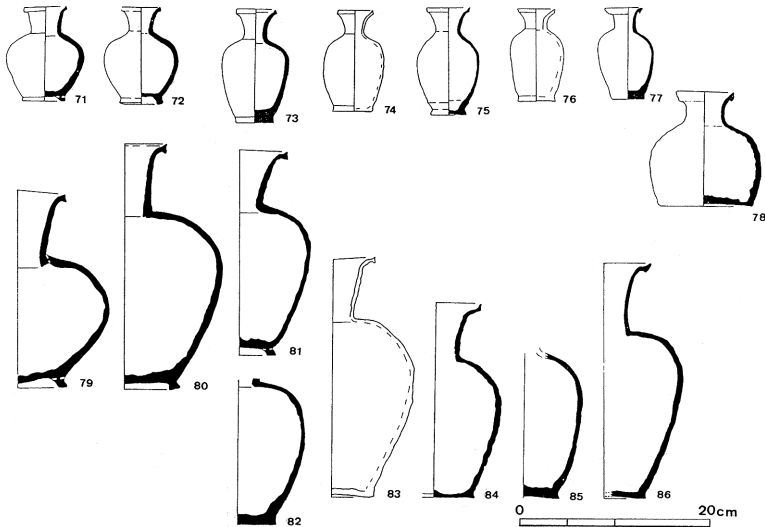
第五—29図 壺C・鉢変遷図

貼り付けている。平瓶は、肩部の張った扁平な体部で、直立する注口を貼り付けている。体部上面には断面長方形の把手を貼り付けている。底部は高台を貼り付けている。

二. 前半期の篠窯の須恵器

平成八年のマル山一号窯の発掘調査で、京都縦貫自動車道(旧名称「国道九号バイパス」)に関連した発掘調査は終了し、平成一六年の大谷三号窯の発掘調査まで篠窯跡群の発掘調査はおこなわれていない。ただ、その間には、亀岡市教育委員会・立命館大学・大阪大学・龍谷大学・藤原重彦氏等により精力的に篠窯跡群での分布調査がおこなわれている。その成果として大谷地区では口縁部が笠形で内側に短いかえりの付いた杯蓋などを採集し、7世紀代に遡る資料^{注51・29}を確認した。

7世紀代の新資料の発見があるが、ここでは篠窯での各器種ごとの形態変化とその法量変化を中心に検討をくわえていくため、7世紀代の須恵器については論述せず、発掘調査で明らかとなった石原畑3号窯から西長尾3号



第五 - 30 図 壺A変遷図

窯までの時期について検討する。

―篠窯跡群での前半期(8世紀後葉～9世紀末)には、石原畑三・一・二号窯、西長尾一・四号窯、芦原一・三号窯、マル山一号窯、小柳一号窯、前山一号窯、大谷三―一・二号窯、西長尾三号窯などがある。

杯 類 石原畑三号窯出土杯Aは、底部と口縁部の屈曲が明瞭であり、法量は口径10.2～16.0 cm、器高3.0～4.3 cmで、口径12～14 cm、器高3～4 cmが主体であり、西長尾一・四号窯に見られるような法量のバラツキは少ない。また、石原畑三号窯杯Aの径高指数(口径/器高)平均が3.74に対して、西長尾一・四号窯杯Aの径高指数は3.2となり、石原畑三号窯から西長尾一・四号窯へと器高が低くなる反面、口径は大きくなる。

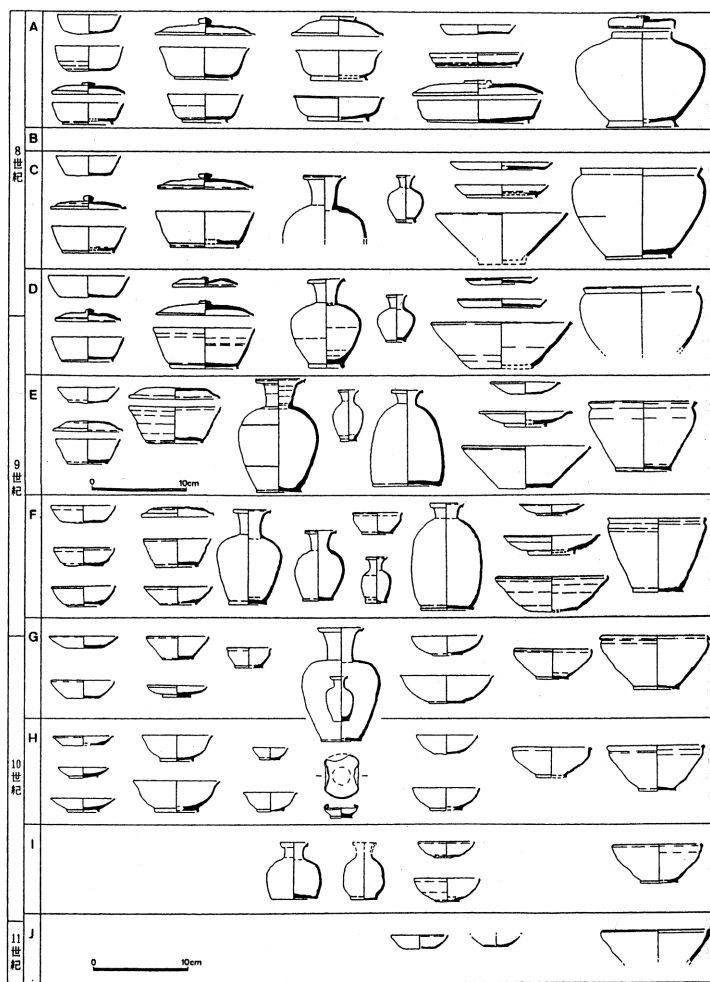
西長尾一・四号窯は杯A I・口径11 cm未満、器高2.5～3.5 cmが8%、A II・口径11～14 cm、器高2.0～4.0 cmが50%、A III・口径14 cm以上、器高2.0～4.5 cmが41.4%である。続くマル山一号窯では口径10 cm以上のもは皆無となる。

小柳一号窯杯Aは、底部と口縁部の屈曲部が丸みを持ち、口縁部の広がり強く碗形態に近づく。小柳一号窯から前山一号窯までは口縁端部が直線的であるが、石原畑一・二号窯では、口縁部が内側に肥厚あるいは巻き込んだ形状になる。口縁部の形態から石原畑三号窯以降、前山一号窯までの杯Aを杯Aa、石原畑一・二号窯以降、西長尾五・六号窯までの杯Aを杯Abと仮称する。

石原畑一・二号窯出土の杯Abは、底部が丸底ぎみとなり、口縁部の屈曲部が丸みを持ち、内湾ぎみに立ち上がる。石原畑二号窯では口径10 cmを越えるものは少なくなる。

西長尾三号窯出土の杯Abは、底部から内湾ぎみに立ち上がり、口径に対して器高は低くなる。

黒岩一号窯、西長尾五・六号窯出土の杯Abは、西長尾三号窯と口縁部の形態は同じであるが、口径が小さくなる。また、黒岩一号窯・西長尾五・六号窯出土の杯Abには底部がヘラ切りのものと回転糸切りのものがある。



第五 - 31 図 器種別変遷図

杯Bは、石原畑三号窯では口径10.4～24.2 cm、器高3.5～6.4 cmを測り、その多くが口径13.0～14.5 cm、器高3.5～4.5 cmが主体で、径高指数は3.34である。

西長尾一・四号窯では、杯B I・口径7.0～10.5 cm、器高3.0 cm前後が2.7%、B II・口径11～13.5 cm、器高2.0～4.0 cmが40.6%、B III・口径14～16.5 cm・器高3.0～3.5 cmが37.4%、B IV・口径17 cm以上、器高4.0 cm以上が41.4%で、全体に法量のばらつきが見られ、口径・器高とも石原畑三号窯出土の杯Bよりも大きくなる。また、径高指数は2.9で、口径に対して器高が大きくなる。

石原畑三号窯出土の杯Bの底部は、口縁部へつづく屈曲部から内側に、外方に踏ん張った高台を貼り付けているが、西長尾一・四号窯では、屈曲部に接して断面長方形の高台を貼り付けている。

マル山一号窯では、口径11.5 cm、器高4.0～4.5 cmを測る一群(B I)と口径14～16 cm、器高5.0～5.5 cmを測る一群(B II)、口径17.5 cm以上、器高6 cm前後を測る一群(B III)に大別でき、B IIIは比較的少なくB I・B IIが主体である。

西長尾一・四号窯の杯Bは、法量のばらつきがあり、口径20 cm以上を測るものがあるが、マル山一号窯では口径20 cm以上を測るものはない。口径に対する器高の割合を比較すると、西長尾一・四号窯では口径11.5～13 cm、器高3.0～4.0 cmのものが多く、口径に対する器高の割合は、西長尾一・四号窯よりもマル山一号窯が低くなる傾向にある。マル山一号窯と同じ傾向は石原畑一・二号窯に見られる。

小柳一号窯出土の杯Bは、石原畑三号窯、西長尾一・四号窯に比べてさらに口径・器高とも大きくなり、口径12.7 cm前後・器高4.0～5.0 cmのもの、口径15.0 cm前後・器高5.0～6.0 cmのもの、口径18 cm前後・器高7.0～7.5 cmの3タイプに大別できる。

小柳一号窯に続く石原畑一・二号窯出土杯Bでは、口径12.5～15.0 cm・器高3.0～4.0 cmに集中し、小型化傾向がみられ、径高指数は2.74となる。

石原畑一・二号窯に続く西長尾三号窯出土杯Bでは、口径に対して底径が小さくなり、西長尾三号窯杯Bの底部指数(口径/底径)平均1.3に対して、石原畑一・二号窯出土杯Bでは1.6となる。高台は底部屈曲部に接して外方に踏ん張った低い高台へと変化する。

総個体数における杯A・杯Bの割合は各窯で変化しており、石原畑三号窯では、杯が総個体数の41.2%を占め、そのうち、杯Aと杯Bの比率が1.5:1.0と杯Aが杯Bを凌駕するが、西長尾一・四号窯では、杯の総個体数が49.2%で、杯Aと杯Bの比率は1.0:2.6となり、杯Aと杯Bの比率が逆転する。マル山一号窯では、杯が総個体数の5.88%を占め、そのうち杯Aと杯Bの比率が1.0:1.5となる。小柳1号窯では、杯Aがさらに減少し、杯Bが総個体数の50.6%を占めるのに対して杯Aは27.9%とある。西長尾三号窯では、杯Abが16.2%であるのに対して杯Bは0.26%であり、杯Bが激減する。

皿 類 石原畑三号窯では皿Aとともに皿Bがあり、いずれも口縁端部内側に一条の沈線をめぐらすもので、土師器皿を模したものであるが、西長尾一・四号窯以降では沈線をめぐらすものがなくなる。

石原畑三号窯の皿Aは、口径12.8～20.6cm・器高1.2～3.1cmを測り、その多くが口径14～16.5cm・器高1.8～2.5cmに集中する。これに対して西長尾一・四号窯では口径10～22.5cm・器高0.5～2.5cmを測り、石原畑三号窯に比べて口径が大きくなり、かつ全体にばらつきが見られる。マル山一号窯では、口径10～16cm、器高1.5cm前後の小型品に限られる。小柳一号窯では口径14cm・器高17.5cm前後を測る。

皿Bは、石原畑三号窯が総出土数の23.2%で、皿Aと皿Bの割合が1.5:1であるのに対して、西長尾一・四号窯では皿A 404個体に対して皿Bが1点である。また、芦原一・三号窯で2点出土している。マル山一号窯・前山一号窯では皿Bの出土はなく、マル山一号窯以前に皿Bの消滅が考えられる。

蓋 類 石原畑三号窯、西長尾一・四号窯、芦原一・三号窯、小柳一号窯、マル山一号窯などである。

蓋Aは、水平ぎみの天井部から口縁部へ屈曲しながら続き、口縁端部が内側に巻き込んで丸みをもつもの(蓋Aa)と口縁端部が蓋Aaに比べて外方に広がり、尖りぎみにおわるもの(蓋Ab)に細分できる。

蓋Aaは奈良時代的な形態のものであり、西長尾一・四号窯、芦原一・三号窯では蓋Aaが主体である。一方、蓋Abは、蓋Aaに後出する形態であり、マル山一号窯では蓋Abが主体となる。また、小柳一号窯では、蓋Aとともに宝珠形ツマミをもたない蓋Cが出土しているが、マル山一号窯では蓋Cは出土していない。

小柳一号窯では、蓋Abとともに宝珠形つまみをもたない蓋Cがあり、蓋Abと蓋Cの比率が、蓋Abが40個体に対して蓋Cが49個体である。小柳一号窯に続く石原畑二号窯では、蓋Abが1個体に対して蓋Cが292個体を数え、個体数が逆転する。総個体数における蓋Cの比率は、小柳一号窯で3.9%、石原畑一号窯で23.4%、石原畑二号窯で32.3%と増加するが、西長尾三号窯では0.07%と激減し、以後、蓋Cは消える。

壺類 壺Aは、西長尾一・四号窯では体部が倒卵形を呈し、底部は外方に踏ん張った高台を貼り付けている壺Aaが大半である。続くマル山一号窯では、底部の形状から輪高台の壺Aaと平底で糸切り痕を残す壺Abに細分でき、その割合は1・1となる。ただ壺Aaと壺Abの法量をみると、底部直径5cm以上のものが壺Aaであり、5cm以下の小型品が壺Abとなる。なお、西長尾一・四号窯では小型品を含めて壺Aaが大半であり、わずかに数点の壺Abが出土しているのみである。

小柳一号窯では、器高9～11cm前後の小型品、器高15cm前後の中型品に限って平底で糸切り痕を残す壺Abであるが、器高20～23cmの大型品では輪高台の壺Aaが残る。続く石原畑一・二号窯、西長尾三号窯では体部の長胴化傾向がみられ、大型品を含めて糸切り痕を残す壺Abに変わる。

鉢類 鉢Bは、西長尾一・四号窯では扁平な体部を呈し、底部には高い高台を貼り付けているが、マル山一号窯では全体の形状を復原できる資料がないが、小柳一号窯と同様、平底で、糸切り痕をとどめるもの

に変化する。小柳一号窯・石原畑一・二号窯では、器高が体部最大径を凌駕し長胴化傾向がみられる。口縁端部内側を強くつまみ出し、その傾向は西長尾三号窯出土鉢Cへと続く。

分布調査により7世紀代の窯の存在が予想されるようになり、観音芝廃寺の造営に関わって篠窯が開窯された可能性が高くなってきた。ただ、窯の実態が不明であり、篠窯で本格的に窯が操業されるのは奈良時代以降である。

篠窯跡群の前半期の須恵器供給先として、昭和五八年段階では千代川国府、丹波国分寺などへ供給したと想定していた。亀岡地域での発掘調査が数多くおこなわれ、特に平成一五年以降、桂川(保津川)の川東地区での発掘調査例が増加しており、前半期に操業した篠窯跡群での製品が散見されるようになった。

時塚遺跡C地区^{注五、六}(第六次)では、東西二間(48m)、南北三間(82m)の身舎に北側に廂をもつ建物と、その建物(CSB005)の東・北・西に柵列を有する建物があり、その柵列の北東コーナーにある直径2.8m、深さ0.7mの井戸(CSE02)内から石原畑三号窯併行期の須恵器が出土している。

亀岡市車塚遺跡^{注一、二}では、掘立柱建物跡SB02・SB01で西長尾奥二一一号窯の時期と思われる須恵器が出土している。また、建物跡SB01の柱穴からは、三日市遺跡で焼成された瓦と考えられる焼け歪んだ瓦も出土している。なお、SB02では藤原京期の掘立柱建物がつくられ、その建て替えた時期に西長尾奥二一一号窯の操業時期の遺物が含まれている。

御上人林廃寺(国分尼寺)の南約1kmの河原尻遺跡^{注一、二}では、東西三間(4.5m)×南北三間(5.1m)の総柱建物SB01、その南に東西三間(4.2m)×南北三間(4.9~5.6m)の総柱建物を検出しており、二棟の総柱建物の東約11mで、二基の方形土坑(SK566:一辺1.3m、深さ0.2m、SK568:長さ1.6m、幅1.1m、深さ0.3m)

から西長尾奥二一―号窯併行期の須恵器が出土している。

このように、これまで亀岡盆地においては、千代川遺跡・丹波国分寺などが知られていたが、近年の桂川(保津川)の川東地区において、千代川遺跡以前の国府跡の可能性がある時塚遺跡などの発見があり、奈良時代の様相がより明確になってきた。これら遺跡の調査によって、石原畑三号窯、西長尾奥二一―号窯など奈良時代の須恵器を焼成した製品の多くが、これら遺跡に供給されたことが想像できる。

西長尾一・四号窯に近似した資料としては、長岡京左京第一三次の、延暦六(七八七)年〜延暦九年(七九〇)年に機能していたSD1301出土資料に類似する。

マル山一号窯は、その器種構成に奈良時代的な皿A・壺Aaなどが含まれているが、法量変化からすれば、平安時代的な様相へと変化していく傾向にある。また、器種構成では皿C・皿D・皿F、杯蓋Ab、水滴など平安時代以降の新しい器種がある。奈良時代的なものと平安時代的なものが混在した時期であり、篠窯跡群での他の窯跡出土遺物と比較したように、西長尾一・四号窯、芦原一・三号窯と小柳一号窯の間を埋める9世紀中葉でも古い時期の資料である。

平安時代にはいつて、長岡京・平安京へと須恵器の供給が広がるが、洛西地域の京都市灰方一・二号窯(平安京土器編年Ⅱ期中・新段階)の発見があり、同窯では石原畑一・二号窯に近似した須恵器とともに、緑釉陶器の素地を焼成していることが明らかとなった。また、平安京の調査成果として、須恵器杯の小型化と蓋のつまみがなくなる傾向は平安京土器編年Ⅱ期古段階にあり、関連遺構としては平安京左京二条四坊十町2区土坑^{注五―35}2516で、承和二年(八三五年)初鑄の承和昌寶九枚がまをもって出土している。

三・後半期の篠窯の須恵器

西長尾五・六号窯、前山二・三号窯、黒岩一号窯、小柳四号窯は、篠窯跡群のなかでも後半期に操業した窯であり、前山二・三号窯、黒岩一号窯については、須恵器とともに明らかに緑釉陶器を焼成している。また、大谷三号窯・西長尾五・六号窯も緑釉陶器を焼成した可能性が高い窯である。これら窯では、緑釉陶器の器形である椀C・E、皿C・Eなどが出土しているが、他に日常雑器である杯Ab・椀S・鉢C・Dなども出土している。

前山二・三号窯、黒岩一号窯出土の椀C・E、皿C・Eの緑釉陶器、あるいはその素地となるものを比較すると、底部の削り出しの特徴、口縁部の形態と口縁端部の輪花の有無などから、前山二・三号窯が黒岩一号窯に先行することが明らかであるが、ほかの器形のみが出土している小柳四号窯や焼成の主体が日常雑器である西長尾五・六号窯との比較が困難である。

そのため、四窯支群で共通して出土している椀S・鉢C・Dなどの日常雑器の形態とその法量変化から各窯の先後関係を検討していきたい。

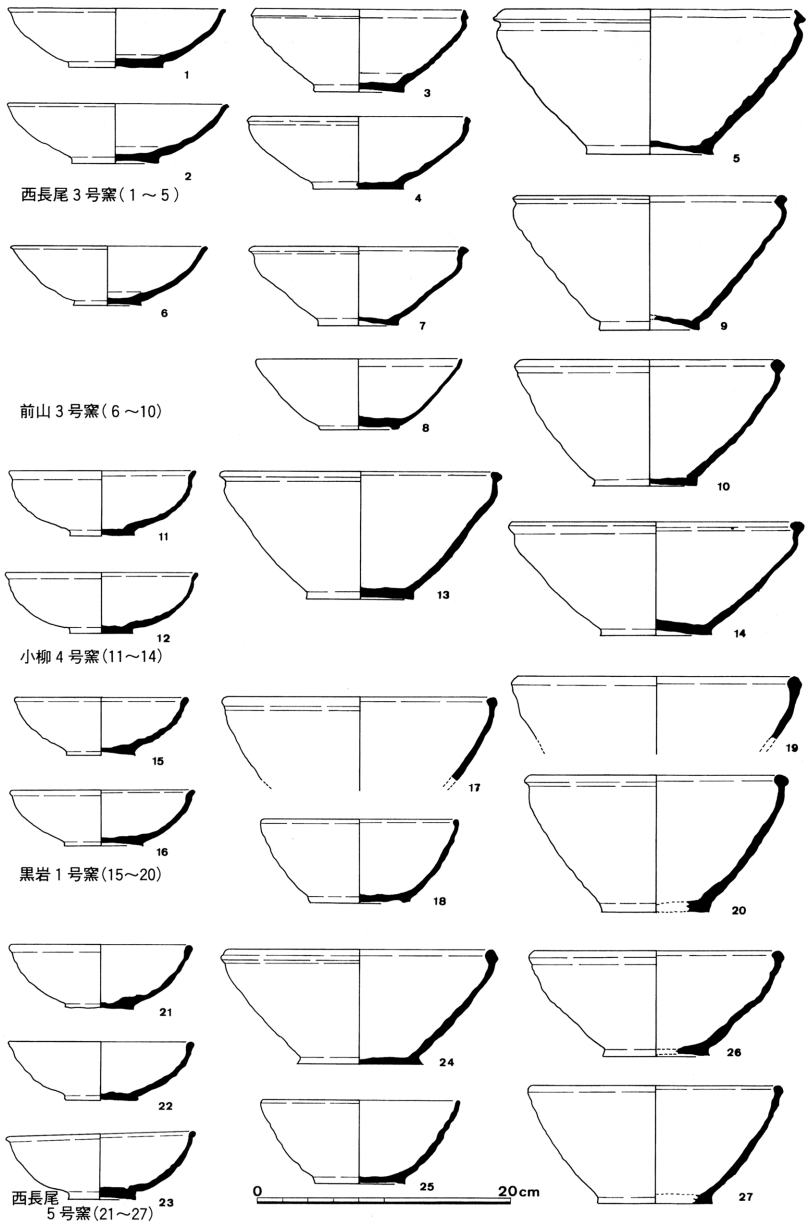
鉢C・鉢Dの変化

西長尾三号窯・大谷三号窯の鉢Cは、平底の底部から内湾ぎみに立ち上がるもので、口縁端部は尖りぎみにおわる。底部はいずれも糸切りで切り離している。大谷三号窯では、口径16 cm前後、22 cm前後の破片が最も多い。西長尾三号窯出土鉢Cの法量は第五―二表のとおり、口径平均23.01 cm・器高平均12.30 cm・径高指数0.57・外傾指数2.08を測る。前山二・三号窯の鉢Dは、体部上端で肩部を形成したのち、口縁部がわずかに内傾し、口縁端部は内・外方に肥厚させて玉縁状を呈するもので、口径平均16.5 cm前後に集中するものと20 cmに集中す

るものがあり、口径平均19.97 cm・器高平均10.03 cm・径高指数0.49・外傾指数1.34となる。小柳四号窯出土の鉢Dは、前山二・三号窯と同様、体部上端で肩部を形成するが、肩部上端では前山二・三号窯に比べて直立きみとなる。口縁端部は内・外方に肥厚させて玉縁状を呈するもので、口径平均20.55 cm・器高平均9.76 cm・径高指数0.46・外傾指数1.42を測る。黒岩一号窯出土鉢Dは、前山二・三号窯、小柳四号窯出土鉢Dのように、体部上端で明瞭な肩部を形成することなく口縁部へ続く。口縁端部は玉縁状を呈するが、その厚みは前二者に比べて薄くなる。口縁端部の形状が若干異なるため口径比較はできないが、前山二・三号窯鉢Dの口径平均19.97 cmに対して、黒岩一号窯出土鉢Dは口径平均20.6 cmで、器高平均97.5 cm・径高指数0.47・外傾指数1.65である。西長尾五六号窯出土鉢Dは、黒岩一号窯と同様、肩部を形成することなく、口縁部へ続き、口縁部はわずかに内傾したのち、玉縁状に肥厚するものと、体部と口縁部の境がなく、口縁端部が玉縁状を呈しないものが混在している。両者はいずれも灰原内出土で、その層序別での相違がなく、いずれが六号窯に帰属し、いずれが五号窯に帰属するのかが明確にできなかった。西長尾五・六号窯出土鉢Dの口径平均は20.71 cm・器高平均8.78 cm・径高指数0.44・外傾斜指数1.63で、黒岩一号窯と比較して口径は小さくなる。

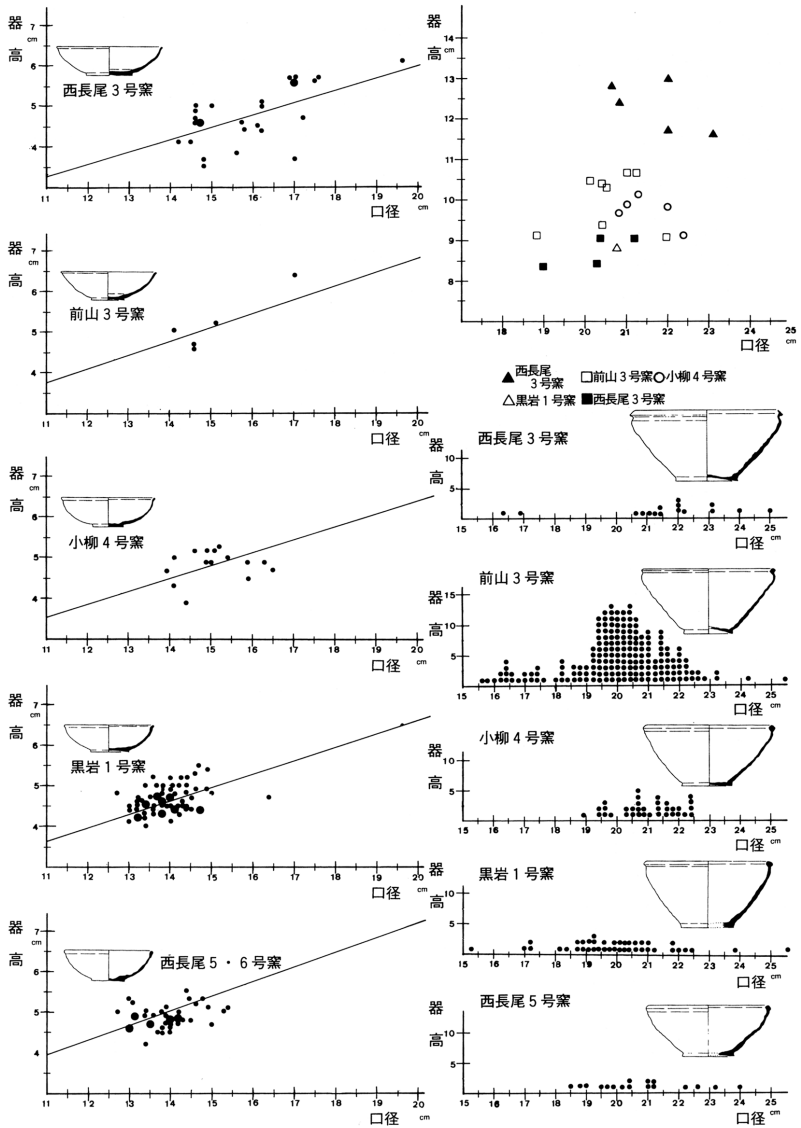
腕Sの変化

腕Sは、マル山一号窯で少量出土しており、大谷三号窯・西長尾三号窯でその出土量が多くなる。西長尾三号窯出土腕Sは、口径14.5～20.0 cm・底径平均7.27 cm・器高3.0～6.1 cmと法量にばらつきがあり、口径平均16.1 cm・器高平均4.86 cm・径高指数0.30・外傾指数1.11となる。前山二・三号窯でもその出土量は6点と少なく、その法量は口径平均15.23 cm・器高平均5.11 cm・径高指数0.34・外傾指数1.04となる。小柳四号窯出土腕Sは、口径平均14.54 cm・器高平均4.78 cm・底径平均6.02 cm、径高指数0.31・外傾指数1.05で、西長尾3号窯出土腕Sに比べて口径・底径が小さく、器高は高くなる。黒岩1号窯出土腕Sは、口径平均13.8 cm、器高平均4.59 cm、底径平均6.24 cm、径高指数



第五 - 32 図 鉢・鉢形態別変遷図

第2節 ● 篠窯の遺物と窯構造



第五 - 33 図 篠窯跡出土椀B・鉢B・鉢C法量分布図

窯名	計測 個体数	口径 平均	器高 平均	底径 平均	径高 指数	底径 指数	外傾 指数
西長尾3号窯	26	16.10	4.86	7.27	0.30	0.45	1.11
前山3号窯	6	15.23	5.11	5.87	0.34	0.38	1.04
小柳4号窯	20	14.54	4.78	6.02	0.33	0.45	1.21
黒岩1号窯	85	13.86	4.59	6.24	0.33	0.45	1.21
西長尾5号窯	32	13.96	4.98	5.67	0.37	0.04	1.24

第五-1表 椀窯別表量一覧表

窯名	計測 個体数	口径 平均	器高 平均	底径 平均	径高 指数	底径 指数	外傾 指数
西長尾3号窯	16	23.01	12.30	9.80	0.57	0.45	2.08
前山3号窯	21	19.97	10.03	7.83	0.49	0.37	1.34
小柳4号窯	19	20.55	9.76	7.48	0.46	0.35	1.42
黒岩1号窯	15	20.60	9.75	10.40	0.47	0.50	1.65
西長尾5号窯	18	20.71	8.78	9.40	0.44	0.47	1.63

第五-2表 鉢窯別法量一覧表

0.33・外傾指数1.21で、口径・底径がさらに小さくなるのに対して器高が高くなる。西長尾五・六号窯出土鉢Sは、黒岩一号窯出土の椀と同様、底部から斜め上方に内湾ぎみに立ちあがり、口縁端部は外方にわずかに肥厚し、丸味をもっておわる。西長尾五・六号窯出土の椀Sの口径平均13.96cm、器高平均4.98cm、底径平均5.67cm、器高指数0.37・外傾指数1.24で、器高がやや高く、底径は小さくなる。

後述するように平安京を中心として消費地では、大谷三号窯・西長尾三号窯出土の鉢Cと前山二・三号窯形態の鉢Dが同一遺構から存在している例がある。ただ、鉢C・鉢Dの形態変化と椀Sの法量変化をみるかぎり、各窯は同時期に操業したのではなく、徐々に変化しており、その変化が時期差を表していると考えている。大きくは大谷三号窯・西長尾三号窯↓前山二・三号窯↓小柳四号窯↓黒岩一号窯↓

四・消費地からみた篠窯後半期の年代

平安京の土器類は、「土師器の小型食器類の製作技法や形態変化などをもとに」I〜IV期に区分され、「各期は、法量や器種の組合せ、細部の形態変化によって」さらに古、中、新の三型式注五136に分かれている。

西長尾五・六号窯へと変化していくものと思われる。

各期、各型式には紀年名資料を伴うなど暦年代を推定できる資料があり、20～30年単位で細分されている。ここではこの細分化された各期、各型式に準拠して関連資料をみていく。

大谷三号窯、西長尾三号窯出土の鉢Cに近似した資料は、平安京右京二条四坊溝1(図37―6)、同右京六条一坊S E 155(図31―15)、同右京八条二坊第8層(図版53―34)、同右京四条二坊S D 83(図4―21)、右京北辺二坊七町S E 6(図18―33・34)、平安宮職御層司跡(図4―32)西寺跡(図15―32)、一乗寺向畑町遺跡S K 322(図版3―100)などがある。各遺構は紀年銘を伴う資料はないが、平安京右京六条一坊S E 155は、平尾政幸によると平安京Ⅱ期中、平安京右京二条四坊溝1は、山本雅和によると冷泉小路の北側溝に推定されており、溝1の土器群を「9世紀の終わり～10世紀初頭」に位置づけている。平安京での鉢C出土状況から援用すると、大谷三号窯、西長尾3号窯は平安京土器編年のⅡ期中段階(実年代八八〇～九〇〇年頃)と思われる。

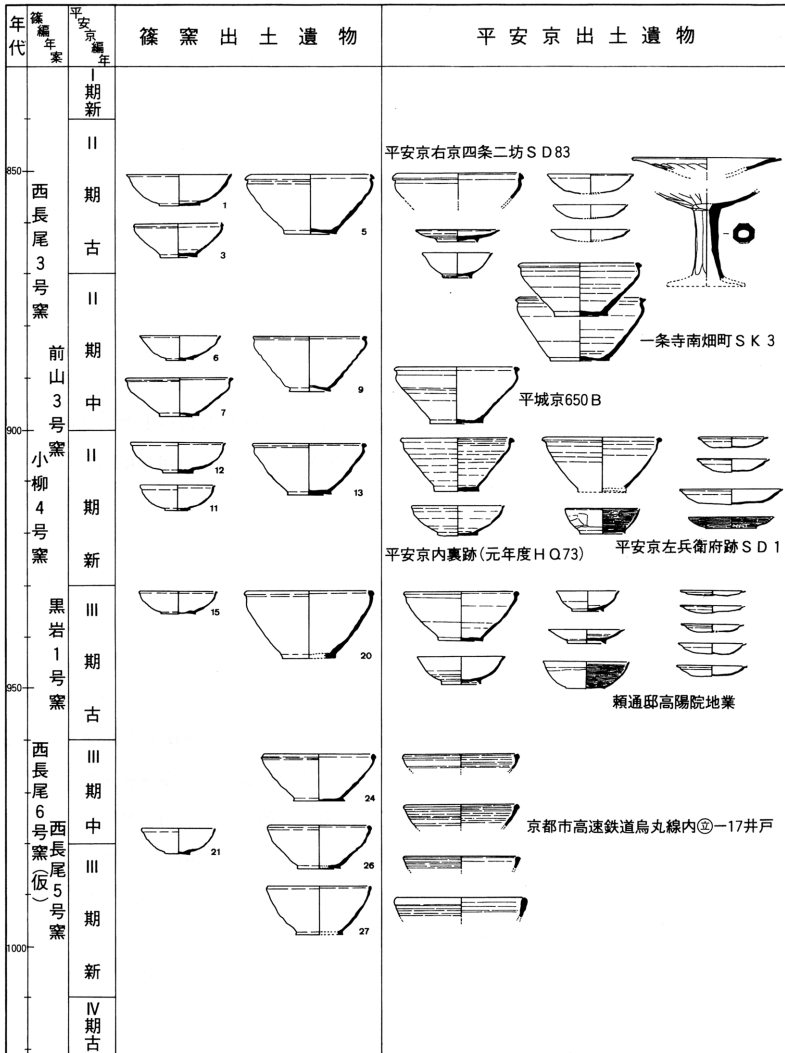
前山2・3号窯出土の緑釉陶器は、平安京及び他地域でも多く知られているが、緑釉陶器では前山2・3号窯の製品のみを単体で出土する例が少なく、時期決定の資料とは言い難い。一方、鉢Dは特徴的な器形であり、消費地での出土から時期をおさえることができる。これによって前山2・3号窯出土の鉢Dに近似した資料をみると、平城宮S D 650 B(659)、平安宮内裏H Q 73―S K 07(図17―37)、平安宮内裏蘭林跡(第22図22)などがある。

平城宮S D 650 Bは、天長五(八二八)年、天長七(八三〇)年の紀年木簡が出土したS D 650 Aの上層で、下層は寛平大宝の銭貨(初鑄八七〇年)使用の頃、上層は延喜通宝(初鑄九〇七年)の銭貨使用の頃と推定されている遺構である。平安宮内裏H Q 73―S K 07は、内裏内廊の東北部、淑景北舎の東部にあたり、平安京Ⅱ期新(九〇〇～九三〇年頃)の基準資料である。また、内裏S K 07に近接しており、よく似た時期と思

われるSK01からは初鑄年九〇七年の延喜通寶が出土している。

小柳四号窯の鉢Dは、前山二・三号の鉢Dと頸部の形態に微妙な差異があるだけであり、その峻別は困難であるが、前述のように頸部の形態から、敢えて前山三号窯と小柳四号窯の遺物を峻別することは可能である。前山二・三号と小柳四号窯の遺物を峻別したとしたら、小柳四号窯に近似した鉢D・腕Sの出土例には、前述の平安宮内裏HQ73—SK07(図17—38・同36)、内裏土坑2(図版45—83)、平安京左兵衛府跡SD1(図版35—28)、仁和寺境内SD34(図版7—66)・同SK47(図版7—86)、北野廃寺SK15(図版45—83)などがある。平安宮内裏HQ73—SK07は、前述のように平安京Ⅱ期新(九〇〇—九三〇年頃)の基準資料、内裏土坑2は同遺構内から多量の壁土が出土しており、天徳四(九六〇)年の内裏焼亡の土層の近似したもので、同地点のSK25と同時期の平安京Ⅱ期中の基準資料の中に含まれている。平安京左兵衛府跡SD1は、「小野道風(八九四—九六六)晩年の時代より下ることのない土師器」であり、一〇世紀中頃に推定されている資料である。

黒岩1号窯に近似した鉢D・腕Sには平安宮西限隄(1)(図14—28)、同陰陽寮跡(図17—25)、同右京六条一坊SD20(15)、同左京二条二坊(高陽院)、同左京八条三坊SD29B(図面14—157・158)、高速鉄道烏丸線立会17—SE1(図版108—74・77)、北野廃寺SD14(PL17—465)などがある。平安京左京二条二坊(高陽院)は、藤原頼通の邸第として著名であるが、寛仁三(一〇一五)年の新造以前にも賀陽新王として利用されており、9世紀前半の洲浜の上に盛土された白色粘土から黒岩1号窯に近似した鉢が出土している。この同一層には土師器の特徴から平安京Ⅱ期新からⅢ期古の土師器と位置づけられている。高速鉄道烏丸線立会17—SE1では、延喜通宝一枚、乾元大宝(初鑄九五二年)四枚が出土しており、平安京Ⅲ期中(九六〇—九八〇年頃)の基準資料であり、黒岩1号窯に近似した鉢Dとともに西長尾5・6号窯に近似した鉢Dも



第五-34図 消費地での篠製品との関係

出土している。

西長尾5・6号窯出土鉢Dに近似したものは、前述の高速鉄道烏丸線立会17—SE1(図版108—78・79)のほか、平安宮内裏内郭回廊の焼土層(図7—34)、^{注51}土御門烏丸内裏跡溝2(第38—26)、^{注51}平安京右京二条二坊(8)、^{注51}同右京三條二坊一町跡一次調査(6)、^{注51}同左京四條三坊SE21(20・21)、^{注51}多賀城跡SE2132(第67図)などがある。

高速鉄道烏丸線立会17—SE1は、前述のように平安京Ⅲ期中(九六〇—九八〇年頃)の基準資料、平安宮内裏内郭回廊の焼土層から出土した遺物は、天徳四(九六〇)年の内裏焼亡時の土器群に近似している。右京二条二坊は、高陽院跡と推定されている地点で、鉢Dが出土したSX1からは天曆七(九五三)年と墨書された緑釉陶器も出土している。多賀城跡SE2132は、一〇世紀前半代の火山灰層の上面に堆積した層の上位にある。

このように消費地での篠産の製品の出土状況から考えると、西長尾三号窯は平安京Ⅱ期古・中、前山二・三号窯は平安京Ⅱ期中・新、小柳四号窯は平安京Ⅱ期新、黒岩一号窯は平安京Ⅲ期古、西長尾五・六号窯は平安京Ⅲ期中・新の段階と考えられる。

注五—27 注五—8に同じ

注五—28 酒井将史「第6章 出土遺物」注五—8に同じ

注五—29 野島智美「10篠窯各所での表面採集遺物」注五—8に同じ

注五—30 時塚遺跡(第6・8・10次調査)「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成16・18年度発掘調査

- 注五―31 報告」(『京都府遺跡調査報告集』第一二七冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 二〇〇八
 車塚遺跡(第7次調査) 「国営農地再編整備事業」亀岡地区「関係遺跡平成16・17年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概要』第一二三冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 二〇〇七
- 注五―32 河原尻遺跡 「国営農地再編整備事業」亀岡地区「関係遺跡平成15年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概要』第一二四冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 二〇〇七
- 注五―33 山中章・高橋美久二・百瀬正恒ほか「長岡京跡左京第一三次(7 ANESH地区) 発掘調査報告」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第四集 向日市教育委員会) 一九七八
- 注五―34 『灰方窯跡・灰方の塚跡・南春日町片山遺跡・勝持寺旧境内』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一〇―八) 二〇一〇
- 注五―35 山本雅和「平安京右京二条四坊」(『平成三年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研究所 一九九五(図37―6)
- 注五―36 上村憲章「須恵器」(角田文衛編『平安京埴要』平成6年) に準拠し、器高÷ 0.5 (口径÷底径)で、係数が小さくなればなるほど体部が外側に開いていることを意味している。
- 注五―37 小森俊寛・上村憲章ほか「第二章 土器と陶磁器」(角田文衛編『平安京埴要』角川書店) 一九九四
 平尾政幸「緑釉陶器の変遷と波及」(『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東 3 施釉陶器』古代の土器研究会) 一九九四
- 注五―38 西長尾3号窯出土鉢Bに近似した鉢を出土する生産遺跡として滋賀県大津市仰木遺跡がある。
- 注五―39 木立雅郎「滋賀県大津市仰木遺跡発掘調査概報Ⅰ(遺構編)」立命館大学文学部 一九九九
 平尾政幸「平安京右京六条一坊」(『平成七年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研

- 究所) 一九九七 (図31―15)
- 注五―40 菅田 薫『平安京右京八条二坊』(昭和六三年度平安京跡発掘調査概報) (財) 京都市埋蔵文化財研究所) 一九八九(図版53―34)
- 注五―41 平方幸雄・高橋 潔『平安京右京四条二坊』(昭和六二年度京都市埋蔵文化財調査概要) (財) 京都市埋蔵文化財研究所) 一九九一 (図4―21)
- 注五―42 川村雅章・吉村・吉本『右京北辺二坊七町』(平成六年度京都市内遺跡発掘調査概報) 京都市文化観光局) 一九九五(図18―33・34)
- 注五―43 川村雅章『平安宮職御曹司跡』(平成六年度京都市内遺跡立会調査概報) 京都市文化観光局) 一九九五 (図4―32)
- 注五―44 山田邦和編『平安京出土土器の研究』(古代学研究所研究報告『第四輯』(財) 古代学協会) 一九九四 (図15―32)
- 注五―45 平尾政幸『一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報 昭和六一年度』京都市文化観光局 一九八七(図版3―100)
- 注五―46 高橋照彦は、西長尾3号窯並行期の資料として、別に平安京右京三条三町SK07、同右京六条一坊SE 51、同右京六条二坊三町土坑141などをあげている。
- 注五―47 横田拓実ほか『平城宮発掘調査報告VI』奈良国立文化財研究所 一九七五 (図版75―659)
- 注五―48 吉村正親『平成二年度京都市内遺跡試掘立会調査概報』京都市文化観光局 一九九一 (図17―37)
- 注五―49 山田邦和編『平安京出土土器の研究』(古代学研究所研究報告『第四輯』(財) 古代学協会) 一九九四 (第22図22)
- 注五―50 高橋照彦氏によると、青森県三沢市平畑遺跡TR38HP出土資料として前山2・3号窯段階の特徴をもつ

た緑釉陶器皿の出土例を紹介している。同遺構は九一五年に降下した十和田a火山灰の下層から出土している資料がある。また、高橋照彦氏は「鉢口縁部の微妙な傾きの差によって前山3号窯と小柳4号窯を区分するよりも、両者が平安京Ⅱ期新段階前後であると判断すべきであろう」と指摘されている。

（高橋照彦「7操業の実年代」（注五―8に同じ）

注五―51 注五―49に同じ 図17―38・39

注五―52 網 伸也・鈴木久男「平安宮内裏」（『昭和六三年度平安京跡発掘調査概報』 京都市文化観光局）

一九八九（図版7―86）

注五―53 平尾政幸「平安宮左兵衛府跡」『平安京跡発掘調査概報一九七八―Ⅱ』（『京都市埋蔵文化財研究所概報集一九七八―Ⅱ』（財）京都市埋蔵文化財研究所）

一九七八―Ⅱ（財）京都市埋蔵文化財研究所 一九七八（図版35―28）

注五―54 百瀬正恒「仁和寺境内発掘調査報告」（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第九冊（財）京都市埋蔵文化財研究所）

一九九〇（図版7―66・86）

注五―55 堀内明博「北野廃寺跡発掘調査報告書」（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第七冊（財）京都市埋蔵文化財研究所）

一九八三（図版45―836）

注五―56 丸川義広・鈴木久男「平安京内裏（一）」（『昭和六二年度 平安京跡発掘調査概要』 京都市文化観光局）

一九九八

注五―57 注五―53に同じ 八八頁

注五―58 辻 裕司「平安宮西限（Ⅰ）」（『平成二年度平安京跡発掘調査概報』 京都市文化観光局） 一九九一

（図14―28）

注五―59 本弥八郎「平安宮陰陽寮跡」（『平安京跡発掘調査概要一九七八』（『京都市埋蔵文化財研究所概報集

- 一九七八」京都市文化観光局）一九七九（図17―25）
- 注五―60 平尾政幸「平安京右京六条一坊」（平成八年度京都市埋蔵文化財調査概要）（財）京都市埋蔵文化財財研究所 一九九八（15）
- 注五―61 網 伸也「発掘調査からみた頼通伝領前の高陽院」（『研究紀要』第五号）（財）京都市埋蔵文化財研究所 一九九八
- 注五―62 『平安京左京八条三坊』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第六冊）（財）京都市埋蔵文化財研究所 一九八二（図版15―157・158）
- 注五―63 大矢義明ほか「京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ 一九七六年度」（京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会）一九八〇（図版108―74〜77）
- 注五―64 注五―55に同じ（図版17―465）
- 注五―65 山本雅和「平安宮内裏内郭回廊」（平成六年度京都市内遺跡発掘調査概報）京都市文化観光局）一九九五（図7―34）
- 注五―66 注五―49に同じ（第38図26）
- 注五―67 辻 裕司「平安京右京二条二坊」（『昭和五六年度平安京跡発掘調査概報』）（財）京都市埋蔵文化財研究所 一九八三（8）
- 注五―68 馬瀬智光「平安京跡右京三条二坊一町跡」（『平成八年度京都市内遺跡試掘調査概報』 京都市文化市民局）一九九八（6）
- 注五―69 平尾政幸「平安京左京四条三坊」（『昭和五七年度京都市埋蔵文化財調査概要』）（財）京都市埋蔵文化財研究所）一九八四（20・21）

注五―70 『多賀城跡 宮城県多賀城跡調査研究所年報一九九一』 宮城県多賀城跡調査研究所 一九九二

(第67図)

初出：「篠窯跡群出土須恵器について」(『京都府遺跡調査報告書』第二冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研

究センター) 一九八四

「5、篠窯須恵器」(『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社) 一九九五

「篠窯の実年代」(『京都府埋蔵文化財論集』第四集 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター)

二〇〇一

第三節 篠窯の小型窯

一・西長尾五・六号窯の窯体構造

篠窯跡群では、丘陵斜面を利用した全長5m以上の地下式・半地下式窖窯のほか、丘陵の比較的平坦面を利用した全長3m以内の平窯がある。

篠窯での平窯の発掘調査例として黒岩一号窯、前山二号窯、前山三号窯、小柳四号窯、西長尾五号窯、西長尾六号窯があり、分布調査の結果、アナウシ谷四号窯、大谷窯の一部に同様の窯が存在すると予想している。ここではこれら平窯を平面の形状から「三角窯」「楕円窯」と仮称して説明を行なう。

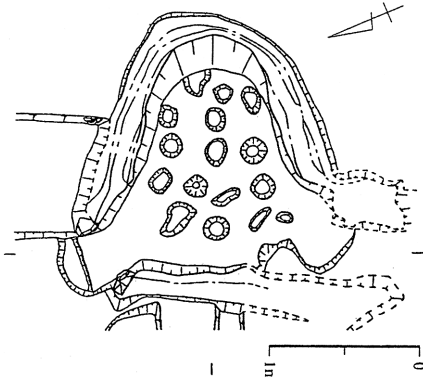
篠窯跡群では、黒岩一号窯、前山二・三号窯、小柳四号窯・西長尾六号窯が「三角窯」であり、「楕円窯」には西長尾五号窯がある。

三角窯・楕円窯は、傾斜角10～15度を測るゆるやかな丘陵に構築され、三角形の頂点を煙道部と推定しており、底辺の両側二ヶ所に焚口部がある。

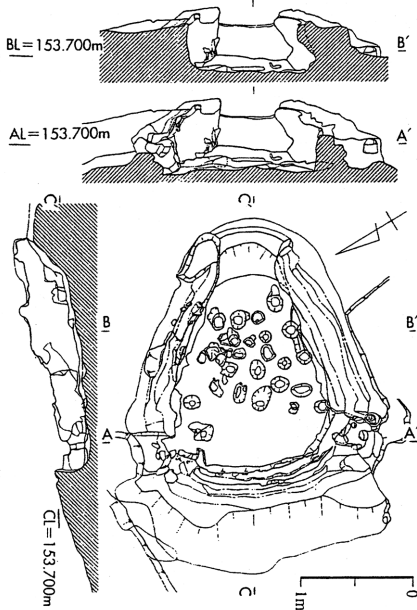
発掘調査で検出した平窯は、床面から側壁の立ち上がりが30～40cm程度残っているだけで、側壁上面や天井部は崩落あるいは削平されて遺存していない。

焚口部 黒岩一号窯(第五―37図)は、焚口部外側に高さ27cm前後の角柱状の自然石を二本立て、その内側の立石と側壁の間には高さ25cm前後の円柱状の粘土棒(直径15cm)を据えている。両立石の間は21cmを測り、両立石の上部に石を横架したと推定すると、焚口の高さは30cm前後、幅25cmと推定できる。

前山二号窯(第五―35図)は、南焚口部が壊されていたが、北焚口部は高さ20cm、厚さ15cmの自然石を一



第五 - 35 図 前山2号窯 実測図



第五 - 36 図 前山3号窯実測図

対にして立てており、その自然石の間隔は30cmを測る。
 前山三号窯(第五—36図)は、両焚口部とも粘土塊によって密閉された状態で検出された。遺跡が保存されているため、焚口部の詳細な調査は行われていないが、右焚口部に粘土柱があることから、前山二号窯と同様の構造であると思われる。

西長尾五・六号窯(第五—39・40図)の焚口部は、自然石や棒状の粘土柱は遺存せず、焚口部の状況は明らかでないが、前山二・三号窯・黒岩一号窯と同様の構造であったと思われる。西長尾五・六号窯の焚口部は土圧によってそのまま崩落した状態で検出でき、それから推定すると、焚口の高さは50cm前後となる。

前山三号窯では、焚口部が粘土塊で密閉された状態で検出されていることから、煙道部を壊すか、天井部

を壊して製品を取り出したものと思われる。一方、西長尾五号窯では焚口部周辺の遺存状態が悪いことから、南焚口部を壊して製品を取り出した可能性がある。

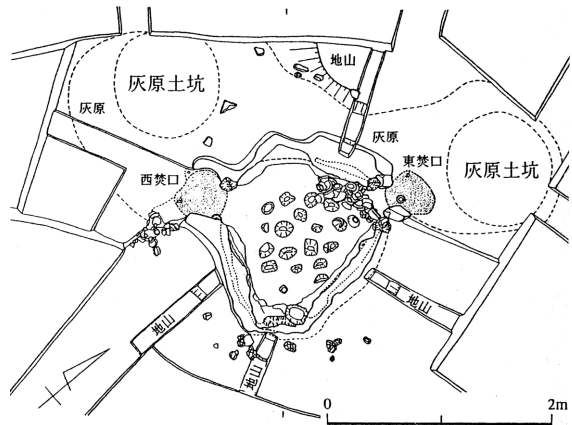
三角窯・楕円窯が小形窯であるにもかかわらず焚口が二ヶ所ある。焚口部が二ヶ所存在すれば火力は短時間で得られるが、三角窯・楕円窯が緑釉陶器焼成の窯と仮定すると、火力を短時間に上昇させる必要があるのかとの疑問も提示されている。「窯内の温度を均質に保つ」ために二ヶ所の焚口を設けているとも考えられる。

燃焼部・焼成部 黒岩一号窯、前山二・三号窯の焼成部と燃焼部の境が不明瞭であるが、床面の窪みの有無によって焼成部と燃焼部を分けることができる。

黒岩一号窯では、床面に直径8～20cm、深さ2～4cmの不整形の窪みが一八ヶ所あり、その窪みの中には拳大(直径10cm前後)の粘土塊を置き、その上に緑釉陶器が伏せた状態で置かれていた。同様の窪みが前山二号窯で一六ヶ所、前山三号窯で一九ヶ所ある。

小柳四号窯は、燃焼部と焼成部の境は明らかでないが、焚口部から30～40cmの範囲で炭層や赤色焼土層があり、その部分を燃焼部と考える。そのことから焼成部は1.9㎡となる。

小柳四号窯の焼成部床面は、黒岩一号窯のような窪みがなく平坦であり、製品をどのように据えて焼成したのかは明らかでない。ただ、焚口部の外側70cmで粘土柱を検出している。その粘土柱は、第二床面を形成



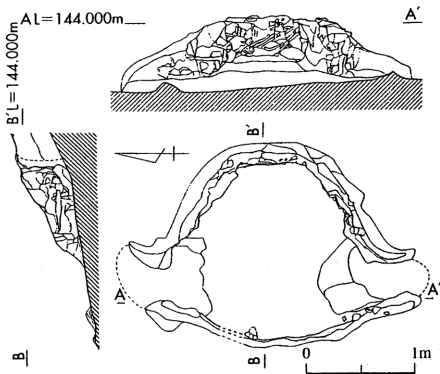
第五-37図 黒岩1号窯 実測図

するための支柱の可能性があり、西長尾五・六号窯のような二重床面の可能性も考えられる。小柳四号窯は須恵器のみで、緑釉陶器が出土しておらず、同じ傾向は西長尾五・六号窯でもあり、西長尾五・六号窯と同様の窯構造であると推定している。

西長尾五号窯も燃焼部と焼成部を分ける明瞭な段はなく、薄く堆積している灰層の有無から、灰層が堆積している部分を燃焼部と考えている。西長尾五号窯の焼成部は、第二床面を支える円柱状の粘土(直径13~15cm)が、煙道部を中心として放物線状に四列配されている。この配列は支柱としての役割とともに、火の流れを窯体内全体に流れるように工夫された分焰柱の役割も兼ねている。

西長尾五号窯の第一床面の床面傾斜角10度30分に対して、第二床面の床面傾斜角は8度30分で、円柱の高さを微妙に変えて水平に近づけている。円柱粘土で支えられた第二床面は、円柱の上面に拳大の粘土塊を隙間を残しつつ貼り付けている。第一床面の炎は、第二床面の粘土塊の隙間を通って上昇するように工夫を加えたもので、窖窯の倒焰式から昇焰式へと変えている。第一床面の焼成部と煙道部の境には10cmの段差を設けているとともに、焼成部の奥壁近くでは円柱が近接して据えられている。また、煙道部は角礫で面を焼成部側に向けて据えており、第一床面の炎を火盾によって、第二床面の隙間に火が抜けるように工夫されている。同様の工夫は西長尾六号窯にもある。

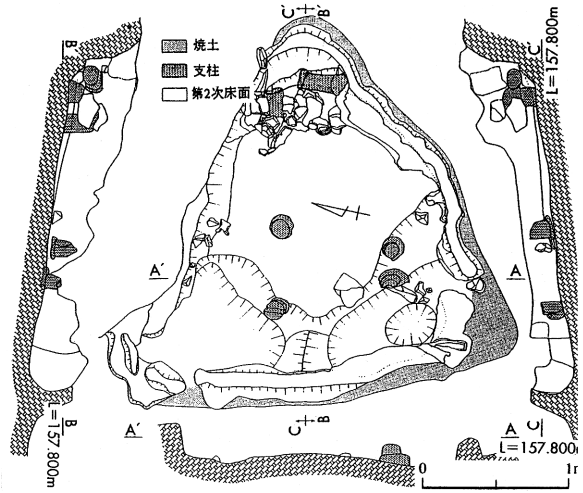
西長尾五号窯では、底部の第一床面から第二床面までを燃焼室、第一床面からが焼成室と考えている。



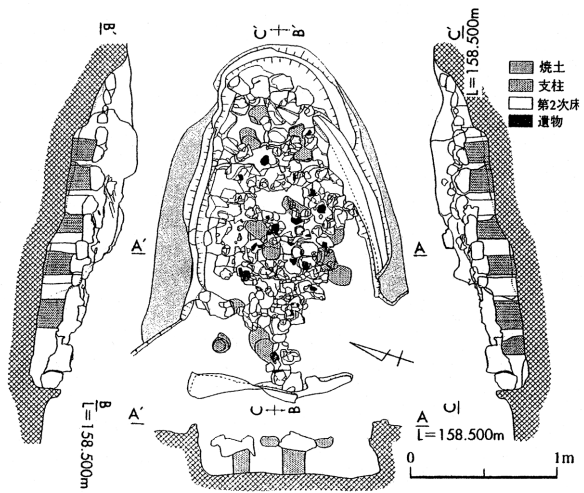
第五-38図 小柳4号窯 実測図

西長尾五・六号窯の窯体構造で、問題提議として木立雅朗^{注五171}は「本焼き（緑釉の焼き付け）用であつた煙管状と煙管状窯の技術が合成された」窯という魅力ある提案をされている。

西長尾六号窯は、西長尾五号窯の築窯に際して焼成部が大きく壊されており、窯の遺存状況は良くなかつた。西長尾六号窯の煙道部付近では、粘土で造られた円柱とその上面に粘土塊が貼り付いており、燃燒部と



第五 - 39 図 西長尾 6 号窯 実測図



第五 - 40 図 西長尾 5 号窯 実測図

焼成部の境に火盾を設けたものと思われる。

西長尾六号窯の床面では、両焚口部から半径40cmの範囲がわずかに窪んでおり、その窪みに焼土とともに薄く灰層が堆積していた。この部分を燃焼部と想定している。床面には燃焼部の境を含めて六本の円柱が残っている。

二．窯体構造の変化

篠窯における小型窯の窯体構造をみると、黒岩一号窯、前山二・三号窯と小柳四号窯、西長尾五・六号窯に分かれる。この二者での製品をみると、黒岩一号窯、前山二・三号窯は緑釉陶器の出土が多く、焼成部に緑釉陶器がそのまま残った状態で出土していることから、緑釉陶器を焼成するための二次焼成窯として使われていたことが窺える。一方、小柳四号窯は須恵器のみで緑釉陶器の出土がなく、西長尾五・六号窯でも緑釉陶器を数点含むが、緑釉陶器を焼成した二次焼成窯とは言い難い。

緑釉陶器は、須恵器あるいは土師器に、鉛を主体とする釉薬を塗り、青磁を模したものであるが、色好く発色するには低火度焼成^{注517}が必要である。黒岩一号窯、前山二・三号窯は、緑釉陶器生産のための低火度焼成を必要とするために、窯体構造に工夫を加えたものである。焼成時には、製品である皿・椀の内底面に釉がたまるのを防ぎ、製品同士が癒着しないように焼き白を据え、製品を伏せた状態で焼成したと思われる。

篠窯跡群の緑釉陶器の特徴として、三叉トチンを使用することなく、直接、須恵器^{注517}どうしを重ね焼いており、底部に緑釉を施さないものが大半であると考えられていた。ところが、大谷三号窯^{注517}で緑釉陶器および緑釉陶器の素地を焼成した窯の発掘調査がおこなわれ、三叉トチンを使用している可能性が高くなった。また、この調査によって小形窯以前の窖窯焼成で、緑釉陶器が焼成されていることが明らかとなった。同様の

例は京都市灰方1・2号窯がある。灰方1・2号窯は窖窯で、緑釉陶器および緑釉陶器素地、須恵器を焼成している。9世紀末頃には、窖窯焼成と小型窯焼成を併用して、緑釉陶器および緑釉陶器の素地を焼成していることが明らかとなりつつある。

西長尾五・六号窯は、緑釉陶器を生産しなかった可能性が高く、須恵器の生産を専ら焼成したものと考えられる。また、西長尾五号窯とよく似た窯体構造のものとして滋賀県甲賀市春日北遺跡窯跡がある。春日北遺跡^{注五、74}では、六基の窯を検出し、一号窯では、瓦窯の焼成室に使われる「畦」を設け、その上面に窯壁の破片を利用した床面を造った二重床面であり、焼成された製品は緑釉陶器・灰釉陶器の素地のほか、須恵器が出土している。春日北窯群と篠西長尾五・六号窯の先後関係は厳密ではないが、両者が何らかの形で影響しあった可能性があり、その要素として畦や畦の前に分焰柱の可能性がある円錐形の支持が存在することから瓦工人からの影響があったものと思われる。

須恵器の焼成温度は、摂氏一二〇〇度以上の高温を必要としたために窯構造を二重の床面に変えている。第一床面と第二床面との間の支柱は、酸素を多く供給するとともに燃焼部からの火力を拡散させ、窯全体に火が行き渡るように工夫し、製品を第二床面に正位置に据えることにより、第一床面から上昇した火力が登りやすくなり、酸素の流れも良く、火力が高くなる。また、煙道部に据えた粘土棒を横倒しに据えることにより火力を焼成部に籠もるように工夫されている。

西長尾五・六号窯は、これまでの須恵器生産に通用な地下あるいは半地下式の窖窯ではなく、小型三角窯であるのは、甕などの大型品を焼成することを目的とせず、椀・皿の小型品を焼成することを目的としたものであり、その結果、少ない燃料で効率良く焼成することを可能にした。

西長尾五号窯の側壁は還元炎で硬く焼きしめられており、西長尾六号窯に比べて高温で焼成されていたこ

とが窺える。西長尾六号窯から西長尾五号窯への変化は、両焚口部間の幅を狭め、三角形の平面形態から楕円形に近い平面に変化している。焼成部第一床面は中央を頂点としてわずかに弧を描いた山形に変化して火の回りを良くし、第一床面と第二床面の間にある支柱の配置も扇状に配置することにより、火を窯全体に均等にめぐらすように配されている。

西長尾五号窯の煙道部は、角礫を据えて火盾の役割をし、焼成と煙道部の境には支柱を10～20cm間隔の狭い隙間を残して配置されており、火力をできるだけ放出しないように工夫されており、西長尾六号窯からの改良が加えられたものと思われる。

注五―71 木立雅朗「丹波・篠窯跡群の「小形窯」について―問題提起―」（『須恵器窯の技術と系譜2―8世紀中頃

―12世紀を中心にして―」窯跡研究会）二〇〇四

注五―72 山崎一雄「いわゆる正倉院三彩の科学的考察」によると、緑釉陶器の釉薬は、金属鉛を過熱して鉛丹（四三

酸化鉛）をつくる。次に混和合料として緑青（塩基性炭酸銅）・赤土及び白石を加える。白石（石英）を

加えると鉛ガラスに近い釉となり、この鉛を含んだ釉に緑青（塩基性炭酸銅）をくわえると濃緑色となる。

注五―73 大谷3号窯では三又トチンは出土しているが、共存する緑釉陶器には三又トチンの使用痕を留めるもの

はなく、三又トチンもちいかなかったことが多かったとの指摘がある。なお、篠窯での緑釉陶器の開始

期には、洛北・洛西の窯跡群では三又トチンを使用している。注五―8に同じ

注五―74 平井美典・堀真人「春日北遺跡―甲賀市水口町春日―」（『県道水口竜王線緊急地方道路整備工事に伴う

発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会）二〇一一

初出…「西長尾5・6号窯の窯体構造について」(『篠窯跡群Ⅰ』(『京都府遺跡調査報告書』第2冊(財)京
都府埋蔵文化財調査研究センター)一九八四)

第四節 篠製品の流通とその画期

一・篠の製品

篠窯で生産された須恵器は、大きくは三つの時期区分が考えられる。すなわち、第一期は、丹波国府の整備・丹波国分寺の造営時期から長岡京・平安京造営までで、律令的な土器様相を呈している。この時期の前半の製品は、その多くが観音芝廃寺・推定丹波国府や丹波国分寺など、亀岡盆地周辺に供給されていた。また、第一期の後半には、長岡京・平安京の遷都を契機として都にその製品が供給される。

第二期は、平安京の遷都以後、弘仁・貞観の治といわれるような、平安時代の政権が安定し、貴族文化が定着した時期であり、奈良時代的な土器様相がくずれ、須恵器の器種構成が変化していく時期である。前半には律令的な土器の形態をとどめつつ退化形態がみられ、後半には器種が淘汰されていく傾向にある。

この第二期の製品も平安京へ供給されるとともに、都を経由して地方へと製品が供給されていく。ただ、この時期の篠の製品は壺(瓶子)などのある特定器種を除いて、他地域の窯で焼成された製品との識別が困難であり、供給先について言及するだけの資料にかける。

第三期は、平安貴族文化が崩れ、中世に移行していく時期であり、前半期の律令期に代表される多くの供膳具や貯蔵具が整理され、より単純化した器種組成へと変化していき、篠窯独自の鉢C・Dや碗Sが作られるとともに緑釉陶器を生産しており、他の地域での篠製品の供給を検討することが比較的容易である。

このため、おおよそ9世紀末から11世紀初頭までに、篠窯跡群で生産された製品についてその供給先を検討できる。

二・第三期の土器様相

第三期の土器群を代表するものとして前山二・三号窯・黒岩一号窯で生産された緑釉陶器がある。

篠窯の緑釉陶器には、杯A、碗C・D、皿C・D、酒杯・耳杯・鉢C・D・壺などの器種がある。

碗C・D、皿C・D等の底部は、糸切りあるいはへら切りののち、内面を削りつつ高台を成形する削り出し高台である。同時期に緑釉陶器を生産していた近江系緑釉陶器の貼り付け高台とは異なっている。また、高台接地地の内端の段差や内面見込みの外縁に沿って沈線をもつ近江系緑釉陶器とよばれているものは、今のところ篠窯跡群ではみつからない。

素地は近江系緑釉陶器が軟陶のものを主体とし、へらミガキなどの素地調整を行なわないが、篠産緑釉陶器はへらミガキ調整をおこなない、硬質のものが主体である。

篠産緑釉陶器ではうわ薬をかけて焼成する二次焼成に際して、大谷三号窯では三又トチンを使用していた可能性が高いが、前山二・三号窯以降は三又トチンを使用することなく、そのまま重ね焼いている。

大谷三号窯出土の緑釉陶器及び緑釉陶器素地は、洛西窯の製品との識別が困難である。そのため、ここでは前山二・三号窯以降の製品を対象に検討をおこなう。

近江産緑釉陶器^{注五七}は、釉薬の付着を避けるために三又トチンを使用している。防長産緑釉陶器^{注五七}の素地は軟質で、釉調は若草色と呼ぶにふさわしい淡緑色（長門産）や緑色から濃緑色を呈したもの（周防産）がある。底部の高台は貼り付け高台で、施釉焼成には三又トチンを使用しており、篠産緑釉陶器との識別が可能である。また、愛知県庄内川を中心に展開する東海産緑釉陶器^{注五七}の胎土は軟質で、素地にはへらミガキ調整を器面に微細に施し、一次調整は直接重ね焼いているが、二次調整には三又トチンを使用している。底部の高台は

貼り付け高台である。

このように、前山二・三号窯・黒岩一号窯での緑釉陶器の生産と、併行あるいは相前後した時期に近江・防長・東海の各窯跡群で緑釉陶器を生産しているが、各地域での緑釉陶器にその特徴がある。

篠窯の第三期の遺物には、緑釉陶器とともに椀S・壺Ab・D、鉢C・Dなどの須恵器も生産している。

椀Sは、粘土塊からロクロ成形により口縁部まで一気に引き上げたもので、口縁端部が尖り気味におわるもの（大谷三号窯・西長尾三号窯）から、口縁端部が肥厚し丸みをもつもの（前山二・三号窯・黒岩一号窯・西長尾五・六号窯）へと変化し、時期が新しくなるにつれ、器高に対して口径が小さくなる傾向がある。底部は平高台で、回転糸切り痕をそのまま残すものが特徴である。

壺Abは、肩部の張った倒卵形あるいは偏球形の体部で、筒状にのびる頸部から口縁部は短く外反したのち、直立あるいは斜め上方に短く立ち上がる口縁端部へ続く。底部はいずれも突出ぎみの平底である。底部切り離しには回転糸切りをおこない、糸切りをそのまま残している。同形態のものは大阪府陶邑窯^{注五一七}でも生産されているが、伊野近富が指摘するように口縁端部の形態が篠産と陶邑産では異なる。

鉢Cは、突出ぎみの平底で、直線的に外上方に立ち上がる体部へ続き、体部上半で肩部を形成したのち口縁部へ続く。口縁部は短く外反したのち、端部を内側に屈曲させ、尖りぎみにおわる。底部は回転糸切りにより切り離したもので、糸切り痕をそのままとどめる。鉢Cは、西長尾三号窯・大谷三号窯でこの形態のものが焼成されている。

鉢Dは、体部下半は鉢Cと同様、口縁端部は内・外方に肥厚して丸みをもっておわる。鉢Cの古いタイプ（前山二・三号窯）では、鉢Bと同様の肩部を形成するが、新しいタイプ（黒岩一号窯・西長尾五・六号窯）では肩部を形成せず、底部から口縁部へ向かって直線的に続く。

鉢Cに近似した形態のものは、滋賀県大津市仰木遺跡^{注五、一七九}でも出土しており、消費地での識別が困難となりつつあるが、主体は篠窯と考えたい。椀Sも全体の特徴は近似しているが口縁端部、体部の立ち上がりの凸凹など篠窯ではその特徴がある。

このように篠窯跡群出土の第三期の遺物には、篠特有の製品が生産されていることが明らかになるとともに、他地域（消費地）での篠製品に注目して報告されている事例があり、篠製品の消費地での分布状況を検討する上での資料が増加しつつある。

三．篠産緑釉陶器・須恵器の分布状況

篠産を含めた洛北・洛西・篠・近江・防長・東海産の緑釉陶器は五〇〇点以上を数える。消費地で出土する緑釉陶器には、その特徴が記されているものが多く、生産地を特定することも可能である。また、前述のように篠産の須恵器椀S・鉢C・Dを報告している例が多く、報告書および遺物を見ましたもので、その分布状況を知ることができる。

以下、各地域での緑釉陶器と篠製品の分布状況について概観していく。ただ、列記する遺跡名は平成八年段階のものであり、各地で発掘調査例が増加しており、出土遺跡がさらに増加しているものと思われるが、要旨にはおおきくは変化しないものとして記述する。

九州地域 九州地域では、北部九州に緑釉陶器の分布の中心がある。これは西都である大宰府と平安京を結ぶ西海道を媒介として緑釉陶器が持ち込まれたものと思われる。また、九州では筑後国府跡・豊前国府を經由して豊後国府へ向かうルート上に緑釉陶器を出土する遺跡が点在している。

中・南九州では、熊本県の肥前国分僧寺跡・鹿児島県の薩摩国府跡・宮崎県鬼付女西遺跡などがあるが、

北部九州に比べて緑釉陶器の出土遺跡が激減する。

北部九州の緑釉陶器を概観すると、緑釉陶器の分布の中心である大宰府では、9・10世紀には京都洛北産あるいは洛西産の緑釉陶器の出土例があるが、防長産緑釉陶器の出土が目立つ。

防長産緑釉陶器の出土比率を検討した高橋照彦^{注5180}によると、「筑前北部でも東に位置する多々良込田遺跡では、六割程度というかなりの量の防長産緑釉陶器が確認できるのに対して、西の博多遺跡や石丸・古川遺跡では、むしろ畿内産緑釉陶器の方が防長産よりも高い比率を占め（中略）、大宰府では（中略）畿内産が多数で防長産の比率の減少がみられる」ようである。

このように九州、特に北部九州においては、京都産緑釉陶器と防長産緑釉陶器が主流であり、防長産緑釉陶器は、長門から離れるに従ってその出土比率が減少する傾向にあることが指摘されている。

篠産緑釉陶器と須恵器の出土状況を見ると、大宰府に至る官道と西海道に分岐点にあたる地点に位置する北九州市寺田遺跡^{注5181}で、前山二・三号窯の製品と思われる緑釉陶器小椀と須恵器鉢Dが出土している。また、大宰府では、中島恒次郎^{注5182}によると10調査地点17点の篠製品が出土している。

豊前国府（幸木遺跡）では、防長産緑釉陶器が主流であるが、数点の篠産緑釉陶器が出土している。また、宮崎市平畑遺跡^{注5183}で、前山二・三号窯の可能性がある緑釉陶器が、同県小山尻東遺跡では前山2・3号窯の製品と思われる鉢Dが出土しているが、その点数は少ない。

中国地域 山口県は緑釉陶器の出土する遺跡が多く、管見にのぼる限り27遺跡を数える。これは周防・長門の地域が「北九州・特に大宰府への供給」を主な目的として緑釉陶器を生産した地域^{注5184}であるためで、山口県下の消費地では、その結果として大半が防長産緑釉陶器である。一方、近畿産緑釉陶器は、防長産緑釉陶器の出土比率と反比例するように山口県下では少なく、広島県・岡山県など西に行くに従ってその出土例が

付表五-3 篠製品出土遺跡地名表(1)

所在地	遺跡名	須恵器				緑釉陶器		備考	番号
		西長尾3	前山2・3	黒岩1	西長尾5・6	前山2・3	黒岩1号		
宮崎県	宮崎市	小山尻東遺跡		○			○		1
	宮崎市	平畑遺跡					○		2
福岡県	太宰府市	大宰府条坊跡	○			○	○	西都	3
	京都郡豊津町	幸木遺跡			?			肥前国府推定地	4
	久留米市	筑後国府跡	○						
山口県	北九州市	寺田遺跡		○	○		○		5
	防府市	周防国府					○	○	周防国府
	山口市	吉田遺跡				○			7
広島県	萩市	見島ゾーコンボ古墳群					○	防人の墓。対外関係の戦略的拠点	8
	福山市	草戸千軒町遺跡			?		○	港	9
	福山市	ザブ遺跡					○	備後国府の港	10
岡山県	庄原市	牛乗遺跡					?	鍛冶関連遺跡?	
	北房町	桃山遺跡					○	火葬墓・蔵骨器に使用	11
	津山市	美作国府						美作国府	12
	長船町	西谷遺跡							14
鳥根県	倉敷市	菅生小学校裏山遺跡					○		13
	安来市	才ノ神遺跡					○		16
	安来市	門生黒谷Ⅱ遺跡						平安京周辺産緑釉陶器	17
鳥取県	松江市	出雲国庁跡					?		15
	倉吉市	大御堂廃寺						?	18
高知県	中村市	後川・中筋川遺跡				○			19
愛媛県	松山市	石井幼稚園遺跡		○			○	洛西産9～10世紀初篠岡4号窯式	20
	松山市	古照遺跡		○					21
	今治市	八町遺跡	○			○			22
	今治市	中寺遺跡				○			23
香川県	丸亀市	郡家原遺跡					○		24
	坂出市	讃岐国分寺跡				○			25
	坂出市	下川津遺跡			○		○		26
	坂出市	讃岐国府					○		27
徳島県	徳島市	阿波国府						灰釉(黒笹90号窯式)、洛西小塩産緑釉、篠産小型壺	28

第4節 ● 篠製品の流通とその画期

付表五一 4 篠製品出土遺跡 地名表(2)

所在地	遺跡名	須惠器				緑釉陶器		備考	番号
		西長 尾3	前山 2・3	黒岩 1	西長 尾5・6	前山 2・3	黒岩 1号		
兵庫県	龍野市					○		布勢駅家	29
	姫路市			?					30
	柏原町						○		35
	柏原町					○			36
	青垣町			?					31
	水上町					?			32
	水上町					?			33
	西紀町							宮田荘	37
	春日町			○		○			34
大阪府	能勢町						?		38
	吹田市								42
	寝屋川市								43
	寝屋川市	○		○		○		地方官人(郡司)の居宅・地方官衙	44
	南河内郡					○			46
	東大阪市					○			45
	高槻市	○				○			43
	堺市					○			48
	岸和田市					○			49
	豊中市					?			47
	泉佐野市						○		50
	高槻市	?							41
	豊能町					○			39
	滋賀県	野洲郡中主町	?						
野洲町						○		近江系緑釉陶器	58
近江八幡市							○	東濃系灰釉陶器	55
近江八幡市						○			56
大津市						○			62
大津市									63
大津市									64
大津市									65
大津市									66
大津市						○			67
大津市									68
守山市						○			59
守山市									60
守山市		?							61
高島町									51
高月町		?							52
マキノ町						○			53
マキノ町								54	

付表五-5 篠製品出土遺物 地名表(3)

所在地	遺跡名	須恵器				緑釉陶器		備考	番号
		西長尾3	前山2・3	黒岩1	西長尾5・6	前山2・3	黒岩1号		
石川 県	松任市	三浦遺跡					?	郷保長級在地領主居室	71
	松任市	上二口遺跡					?	近接して銅製帯金具出土	72
奈良 県	天理市	布留遺跡		○				近江産緑釉	70
宮城 県	多賀城市	多賀城跡			○		○		73
	仙台市	山王遺跡					○		74
	多賀城市	新田遺跡					○		75
岩手 県	水沢市	胆沢城					○		76

増加する。

岡山県・広島県での緑釉陶器の分布状況を見ると、西海道沿いと瀬戸内海沿岸部にその分布の中心があり、一部出雲・伯耆に抜ける街道沿いに点在している。

山陰地域、鳥根県下では出土例^{注51-85}が多く14遺跡以上を数えるが、鳥取県では緑釉陶器の出土遺跡は少ない。

山口県下では、周防国府で前山二・三号窯、黒岩一号窯の製品と思われる緑釉陶器が出土している。また、萩市の海上46kmにあり、平安京から派遣された貴族の墓と推定されている見島ジーコンボ古墳群でも黒岩一号窯の製品と思われる緑釉陶器が出土している。篠産の鉢Dが山口市吉田遺跡で出土している。

広島県では、福山市草戸千軒遺跡^{注51-86}・福山市ザブ遺跡^{注51-87}で、前山二・三号窯の製品が出土している。岡山県ではさらに篠産の須恵器・緑釉陶器の出土が多くなり、津山市美作国府跡^{注51-88}・倉敷市菅生小学校裏山遺跡^{注51-89}・北房町桃山遺跡^{注51-90}などがある。このうち、桃山遺跡は中国山地の中央部にあり、須恵器壺の蔵骨器の蓋に篠産緑釉陶器の皿二個体を使用しており、京都産(篠産)の緑釉陶器の消費地での扱われ形を考えるうえで、の良好な資料となる。

鳥根県では、松江市出雲国庁跡^{注51-91}で緑釉陶器皿が、安来市才ノ神

遺跡^{注五192}で須恵器小皿と緑釉陶器皿が、同門生黒谷Ⅱ遺跡^{注五193}の木棺墓でも篠産の可能性がある緑釉陶器が副葬されている。鳥取県では倉吉市大御堂廃寺^{注五194}で緑釉陶器碗が出土している。

四国地域 四国地域では、瀬戸内海沿岸で緑釉陶器を出土する遺跡が多いが、太平洋側にも比較的緑釉陶器が出土する遺跡がある。

香川県での緑釉陶器は山元素子^{注五195}によると「京都洛北・洛西窯が圧倒的に多く、猿投産は讃岐国分寺・大浦浜遺跡・買田岡下遺跡で出土例がみられるだけで（中略）京都産が優位を占めている。香川県での篠産緑釉陶器や須恵器の出土する遺跡^{注五196}には、丸亀市郡家原遺跡・坂出市下川津遺跡・同讃岐国府跡などがある。愛媛県では、松山市古照遺跡^{注五197}・今治市八町遺跡^{注五198}・同中寺遺跡^{注五199}・松山市石井幼稚園遺跡^{注五200}など多くの遺跡で出土している。香川県・愛媛県では、篠産の緑釉陶器とともに篠産の須恵器鉢Dのほか、平安京で特徴的な「て」の字口縁の土師器皿の出土が目立つ^{注五201}。

北陸地域 管見よると、緑釉陶器の出土遺跡は石川県三七遺跡^{注五202}、富山県五遺跡、福井県一二遺跡で、石川県の出土例が特に多い。北陸、特に加賀地域での施釉陶器の様式パターンを前川要^{注五203}は「9世紀代Ⅱ尾張産緑釉陶器＋灰釉陶器、9世紀末～10世紀前半Ⅱ京都系洛西産緑釉陶器＋尾張産灰釉陶器、10世紀中葉～後半Ⅱ近江系緑釉陶器＋東濃産灰釉陶器」とまとめている。一方、高橋照彦^{注五204}によると「9世紀前半には緑釉陶器の流入はそれほど多くないが、畿内洛北産の緑釉陶器がほとんどである。9世紀後半になると東海の猿投産緑釉陶器が定量的に出土し、9世紀末にかけて増加傾向にある。しかし（中略）あくまでも畿内産が多数を占めることに変わりがない。（中略）10世紀後半になるとこれまで主体を占め続けていた畿内産が急減し、10世紀中葉から搬入されていた近江産が畿内産に代わって圧倒的多数を占める」らしい。

この10世紀中葉は、篠窯で緑釉陶器が生産されていた時期である。北陸地方では前川・高橋の分析のよう

に近江産緑釉陶器が主体であり、篠産の緑釉陶器の出土する例は少なく、石川県松任市三浦遺跡・上二口遺跡、同金沢市千木ヤシキダ遺跡^{注五116}で出土している程度である。

中部・東海 東海地方は、愛知県の庄内川を中心に展開する猿投古窯跡群と尾北古窯跡群、岐阜県東濃地区を中心にした一大窯業地であり、黒笹一四号窯式期（9世紀中葉）に灰釉陶器の生産とともに緑釉陶器の生産を開始する。

この地域での緑釉陶器生産窯には、猿投古窯跡群のなかの鳴海地区（熊ノ前第1地区A・第4地区A・B・鳴海82号窯・日進地区の岩崎24号窯）で確認しているほか、緑釉陶器を施釉する以前の素地を生産している窯として黒笹14号窯・90号窯・東海72号窯などがある。尾北古窯跡群では、篠岡4号窯・5号窯・48号窯・81号窯などがある。

これらの窯跡群では、原則的には灰釉陶器を主体とした窯であり、緑釉陶器は灰釉陶器と併焼されており、小規模な生産体制であったと推定されている。

中部地域は、灰釉陶器の一大生産地であるために灰釉陶器の出土遺跡が多く、緑釉陶器の出土点数は少ない。特に、岐阜県下ではその特徴が顕著であり、長野県でも灰釉陶器の出土が多く、竪穴建物からも多く出土している。

緑釉陶器は、管見にのぼるかぎり、長野県^{注五117}では28遺跡・山梨県9遺跡・静岡県5遺跡で、長野県松本市吉田川西遺跡で代表されるように9世紀中葉（7期S B 144段階）で京都産緑釉陶器が、10世紀後半（9期S B 114段階）（S B 52段階）で近江産緑釉陶器が含まれているほかは、一貫して東海産緑釉陶器が使われている。

関東・東北 関東地域では9世紀段階、国府・国分寺のほか、郡衙施設推定地で京都洛北・洛西産の緑釉陶器が点在しているが、10世紀段階には京都産緑釉陶器が影をひそめ、猿投・尾北産の緑釉陶器が主体とな

る。

猿投・尾北産の緑釉陶器を出土する遺跡は、埼玉県・群馬県で比較的多く、竪穴建物内から帯金具とともに出土する例もある。ただ緑釉陶器と灰釉陶器の出土比率をみると灰釉陶器の出土比率が圧倒的に高い。

関東地域における篠産の緑釉陶器・須恵器の出土については、文献及び実見したかぎりではその出土例が少なく、群馬県前橋市清里・長久保遺跡^{注五100}で京都産の可能性が高い緑釉陶器が1号墓壙内から出土している。

東北地方では、9世紀段階では畿内産が、10世紀以降には東海産のものが主体といわれており、陸奥国府多賀城跡・鎮守府胆沢城跡・陸奥国衙と思われる多賀城城外などで緑釉陶器^{注五100}がまとまって出土している。

篠産緑釉陶器は、実見したところによると多賀城跡・多賀城市新田遺跡・岩手県水沢市胆沢城・平畑(一)遺跡^{注五101}で出土している。また、篠産の須恵器鉢Dは多賀城跡で出土している。

文献及び一部地域では、実物の観察をもとに消費地での、平成八年段階の篠窯跡群から出土した製品の分布状況を検討した。それによると、現在篠産と思われる製品の消費地での出土遺跡は76遺跡以上を数え、実見する機会が増えればその数は増加するものと思われる。

現状での分布状況を概観すると、篠の製品は西日本に多く、篠産緑釉陶器は大宰府・多賀城のほか、国府推定地(豊前・筑後・周防・美作・讃岐・阿波・近江)^{注五102}と西国の瀬戸内海沿岸沿いに点在する傾向にある。

かつては、緑釉陶器が出土する遺跡は公的施設というイメージ^{注五102}にあったが、前述のように緑釉陶器の出土数が五〇〇以上になると、その評価は再検討する必要がある。

緑釉陶器の性格については、祭祀あるいは宮中の儀式や斎会の器物として利用されたほか、磁器の代用品として奢侈的高級陶器の側面も持ち合わせていたという指摘^{注五103}がある。そのほかに「国家的儀式あるいはその

他の饗宴において使用される唐風文物指向の容器として「緑釉陶器が使用されたと考えられている。9世紀中頃になると日常什器の量が増え、「食膳具を基本としつつも調度品的な器種や密教関係の器種など多様な用途」へと、緑釉陶器が変質するという高橋照彦^{注514}の指摘もある。

生産体制では、「中央の主導により畿内の中央官営工房」で生産されていたものが9世紀中頃には生産地が拡大し「生産管理が必ずしも厳格なもの」でない「新規範」^{注515}が成立するようである。

緑釉陶器自体や消費地での扱われかたが変質するなかで、篠窯での緑釉陶器の生産を開始する。篠窯での緑釉陶器生産は9世紀末に始まり、10世紀第4四半期をもって緑釉陶器の生産を終了する。

篠窯での緑釉陶器を生産しつづけた時期には、前述のように生産地・消費地での緑釉陶器の扱われ方が9世紀段階から大きく変化し、緑釉陶器の有無をもって、消費地での遺跡の性格を論述するわけにはいかない状況になりつつある。

篠産の緑釉陶器の消費地での遺跡のなかには国府推定地が六ヶ所（豊前・筑後・周防・美作・讃岐・近江）ある。ただ、篠窯での緑釉陶器が生産された時期には国府自体が「10世紀内にだいたい中枢部は新しい遺構が作られなくなり、中枢部は10世紀頃で機能しなくなる」時期であり、「古代末期の国府はほぼ10世紀初頭から変容の時期を経



第五 - 41 図 篠製品分布状況図

て11世紀半ばをもって終わりを遂げるのではないか」とも考えられているように、国府推定地での出土をもって篠産の緑釉陶器の性格を論述することは難しい。^{注五―七〇}

国府推定地出土の緑釉陶器の生産地別出土比率については、厳密には把握できていないが、肥前国府推定地である福岡県京都豊津町幸木遺跡では、距離的に近い防長産緑釉陶器が主体で、次に近江産が、そして数点の篠産緑釉陶器がある。他の国府推定地でも篠産緑釉陶器は10点にも満たない少量の数のものであると思われる。一方、篠窯に近い兵庫県丹波地域や大阪府能勢地域では、緑釉陶器の大半が近江産か篠産であり、基本的には生産地の距離に左右されて、その供給地が変化するものと思われる。ただ、山口県萩市見島ジークンボ古墳・島根県安来市門生黒谷Ⅱ遺跡・岡山県北房町桃山遺跡・群馬県前橋市清里・長久保遺跡では、墓と思われる遺構から篠産（あるいは洛西産）の緑釉陶器が出土しており、単なる生産地の距離だけでは割り切れない遺跡もある。墓からの出土については、被葬者の出自とその経歴に左右されているものと思われる。

篠産の須恵器（この場合第二期の遺物をさす）も、基本的には篠産の緑釉陶器と良く似た分布状況を示すが、特に、須恵器鉢C・Dは四国の瀬戸内海沿岸部でその出土量が多い。これについては、一大消費地である京都での食料変化に影響されて、篠の特産品である鉢C・Dを、陸路あるいは海路で移動したものと思われる。

注五―七五 森 隆「近江地域出土の古代末期の土器群について」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』一九九〇

注五―七六 高橋照彦「防長産緑釉陶器の基礎的研究」（『国立歴史民族博物館研究報告』第五〇集 国立歴史民俗博

物館）一九九三

- 注五―77 齊藤孝正「尾張・美濃における緑釉陶器生産」〔『緑釉陶器の流れ』三重県埋蔵文化財センター・斎宮歴史博物館〕一九九一
- 注五―78 伊野近富「篠窯原型と陶邑窯原型の須恵器について」〔『京都府埋蔵文化財情報』第三七号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）
- 注五―79 木立雅郎『滋賀県大津市仰木遺跡発掘調査概報Ⅰ（遺構編）』立命館大学文学部 一九九九
- 注五―80 注五―76に同じ
- 注五―81 佐藤浩司ほか『寺田遺跡』（『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第七〇集 北九州市教育文化事業団）一九八八
- 注五―82 中島恒次郎「大宰府における搬入土器―篠窯系資料―」〔『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会〕一九九〇
- 注五―83 高橋照彦「日向出土の畿内産土器」〔『中世土器研究』第七五号〕一九九四
- 注五―84 高橋照彦「防長産緑釉陶器の基礎研究」二二三頁〔『国立歴史民族博物館研究報告』第五〇集 国立歴史民俗博物館〕一九九三
- 注五―85 島根県教育委員会松本岩雄氏の御教示による
- 注五―86 広島県草戸千軒遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡発掘調査報告―北部地域北半部の調査』一九九三
- 注五―87 前川要「資料紹介」広島県ザブ遺跡出土平安時代緑釉陶器について」〔『中近世土器の基礎研究Ⅴ』日本中世土器研究会〕一九八九
- 注五―88 岡田博「美作国府遺跡の調査」〔『岡山県埋蔵文化財報告』岡山県教育委員会〕一九七二
- 「美作国府」〔『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（6）』岡山県教育委員会〕一九七三

- 注五—89 浅倉秀昭ほか「菅生小学校裏山遺跡」(『山陽自動車道建設に伴う発掘調査5』岡山県文化財保護協会) 一九九三
- 注五—90 田中満雄「桃山遺跡」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告2』岡山県教育委員会) 一九七六
- 注五—91 町田 章「出雲国庁跡発掘調査概要」松江市教育委員会 一九七一 島根県風土記の丘資料館で展示されているものを見する
- 注五—92 大庭俊次「才ノ神遺跡」(『一般国道九号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書九』島根県教育委員会) 一九九五
- 注五—93 寺尾令「門生黒谷Ⅱ遺跡」(『島根県教育庁文化課 埋蔵文化財調査センター年報』Ⅲ 島根県教育委員会) 一九九五
- 注五—94 倉吉市博物館「発掘された倉吉の歴史」倉吉市博物館で展示されているものを見する
- 注五—95 山元素子「四国の緑釉陶器―香川県を中心に―」(『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東3、施釉陶器―』古代の土器研究会) 一九九四
- 注五—96 片桐孝裕「第5章考察―古代から中世にかけての土器様相―」(『川津元結木遺跡』香川県教育委員会) 一九九二
- 注五—97 粟田正芳・河野史知「古照遺跡七次調査地」(『松山市埋蔵文化財調査年報 平成四年度』松山市教育委員会、埋蔵文化財センター) 一九九三
- 注五—98 「八町遺跡」(『一般国道一九六号今治道路埋蔵文化財調査報告書』愛媛県埋蔵文化財調査センター) 一九八九
- 注五—99 「特集 中世土器」(『埋文えひめ』第七号 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター) 一九八七

- 注五―100 栗田茂敏「石井幼稚園遺跡」(松山市埋蔵文化財調査報告書「四五 松山市教育委員会」一九九四)
- 注五―101 鋤柄俊夫「瀬戸内を中心とした終末期の須恵器―全国シンポジウムの準備会の報告―」(中世土器研究第五八号) 一九九〇
- 注五―102 吉岡康暢「施袖陶器」(『東大寺領横江庄遺跡』石川考古学研究会) 一九八三
- 出越茂和「北陸の施袖陶器―加賀を中心に―」(『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東3、施袖陶器―』古代の土器研究会) 一九九四
- 注五―103 前川 要(『研究報告』第三五回 北陸出土古代施袖陶器について)(『北陸古代土器研究』創刊号 北陸古代土器研究会) 一九九一
- 注五―104 高橋照彦「加賀出土の施袖陶器」(『北陸古代土器研究』創刊号 北陸古代土器研究会) 一九九一
- 注五―105 出越茂和「金沢市千木ヤシキタ遺跡Ⅱ」金沢市教育委員会 一九九一
- 注五―106 齊藤孝正「尾張・美濃における緑釉陶器生産」(『緑釉陶器の流れ』三重県埋蔵文化財センター・斎宮歴史博物館) 一九九一
- 注五―107 原朋芳「信濃の施袖陶器」(『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東3、施袖陶器―』古代の土器研究会) 一九九四
- 注五―108 高橋照彦「東国の施袖陶器」(『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東3、施袖陶器―』古代の土器研究会) 一九九四
- 注五―109 群馬県埋蔵文化財調査事業団「清里・長久保遺跡」一九八六
- 注五―110 柳澤和明「東北の施袖陶器―陸奥を中心に―」(『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東3、施袖陶器―』古代の土器研究会) 一九九一

注五―111 高橋照彦・長尾正義「三沢市平畑(一) 遺跡から出土した緑釉陶器について」(『研究紀要』第一五号 青

森県埋蔵文化財調査センター) 二〇一〇

注五―112 消費地における施釉陶器の出土状況から、高橋照彦氏は、東国では施釉陶器中の緑釉陶器の比率で、

20%程度を占める国府型、5〜10%程度を占める有力集落型あるいは拠点集落型、ほとんど出土しない一般あるいは小規模集落型に分類している。高橋照彦・前掲載注五―111

注五―113 坂野和信「日本古代施釉陶器の再検討(一)」(『考古学雑誌』第六五卷第二号 日本考古学会) 一九七九

注五―114 高橋照彦「平安期緑釉陶器の生産の展開と終焉」(国立歴史民俗博物館研究報告』第六〇集 国立歴史民俗博物館) 一九九五

注五―115 阿部義平「報告3 遺跡からみた国府」(国立歴史民俗博物館研究報告』第二〇集 共同研究「古代の国府の研究(続) 国立歴史民俗博物館) 一九八九

注五―116 佐藤宗淳「報告6 遺跡からみた国府」(国立歴史民俗博物館研究報告』第二〇集 共同研究「古代の国府の研究(続) 国立歴史民俗博物館) 一九八九

初出:「共同研究 古代における生産と流通―篠窯跡群を中心として―」(『京都府埋蔵文化財情報』第六一
号(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 一九九六

第五節 篠窯の展開

一・平安京造営以前の須恵器窯

京都府内における須恵器生産は、陶邑の第一画期である地方窯への派生時期と機を一にし、古墳時代後期以降窯跡が点在する。数基の窯跡群の分布を別にして、20基以上を数える窯跡群としては、篠窯のほか、幡枝窯、園部窯、末窯がある。

幡枝窯は、京都盆地東北部岩倉に所在し、岩倉川を境に西南部を幡枝地区、西北部を木野地区、東部を花園地区に分け、精力的に分布調査が行われている。分布調査の結果、幡枝窯は、6世紀末に窯業生産が開始され、7世紀には瓦窯とともに瓦陶兼業窯が操業、8世紀には須恵器専業窯となる。幡枝窯の特徴として8世紀末以降、平安京の瓦を焼いた官窯である栗栖野・小野西瓦窯が設けられ、以後須恵器生産は衰退する。園部窯は、園部町を中心に天神山北西部から弓状に湾曲しながら南東にのびる谷地形に窯跡が形成されており、東西2.3 km、南北1.0 kmの範囲に約25基の窯跡が確認されている。各窯は、四〇五群に分かれ、5世紀後半から8世紀に至る時期で、その盛期は7〜8世紀とされ、平安時代には終息を迎える。

末窯は、福知山市夜久野に所在し、東西2 kmの範囲に53基の窯跡が確認されている。窯跡は牧川を挟んだ北側(高内グループ)に11基、南側(末グループ)に36基あり、古墳時代後期(7世紀前半)に始まり、奈良時代に最盛期を迎え、平安時代後期(9世紀)まで操業している。

このように、京都府下における窯跡群は、古墳時代以降、窯跡は点在しているが、平安時代になると各窯跡群に消長変化がみられる。

幡枝窯は、瓦陶兼業窯・須恵器專業窯から平安京遷都後は官窯的色彩をもつ瓦窯へと変化し、園部窯は末窯と同様、古墳時代以降も窯の操業を続けているが、遺物の特徴などから地方窯的な色彩が強く、広範囲にその製品が供給されなかったものと思われる。平安時代以降、幡枝窯は瓦窯に、園部窯は終息していくのに対して篠窯は平安時代以降、隆盛を極める。

篠窯は、7世紀末から8世紀初頭に、亀岡盆地では観音芝磨寺を含む四ヶ寺、丹波国府、丹波国分寺、国分尼寺の造営が始まり、その造営に係わって篠の丘陵での窯の操業が始まったと思われる。

この時期の窯には、大谷窯、石原畑地区の石原畑三号窯、西長尾奥地区の西長尾奥二―一号窯、アナウシ地区の意泉院裏窯がある。このうち、意泉寺院裏窯が分布調査の結果からであり、複数基の窯が同時期に操業されていたのかどうかなど詳細は不明であるが、他の窯跡は、発掘調査成果でみるかぎり、各支群で一基程度の窯が操業していたと思われる。亀岡盆地での須恵器の供給を目的とした地方窯的な要素をもつものと思われる。

二．平安京遷都以後の須恵器・緑釉陶器窯

続く8世紀末～9世紀初頭には、篠窯とは丘陵を挟んだ北側で長岡京が造営され、更に平安京への遷都を契機として篠窯の性格が大きく変化する。

これまでの亀岡盆地を中心として窯業集団の性格から古墳時代における陶邑窯のように、国家が大きく関与した須恵器群へと変貌したものと思われる。

8世紀末～9世紀初頭の窯は、石原畑地区、西長尾奥地区、アナウシ地区では操業されず、新たに西長尾地区・芦原地区で窯が展開する。この時期の窯では、西長尾一・四号窯、芦原一・二号窯のように近接した位

置（両窯の間5m程度）に二基の窯が、いかにも同時操業しているかのような状態（灰原の堆積状況などから）であり、古墳時代の埴輪窯、奈良時代の瓦窯と同様の形態をなしている。一大消費地での供給を目的として窯の焼成時間、作業内容を効率よくするためのものであると思われる、初期の窯業体制とは異なった形態となる。

七九四年、桓武天皇は、山城・葛野の地に平安京を造営する。平安京の造営に際して岩倉の地に瓦工房を開置するが、同時に、幡枝須恵器窯を築窯する。

平安時代の須恵器窯は、岩倉の地から洛西の地へと須恵器窯は展開するが、同時に緑釉陶器の生産窯が造られる。京都近郊の緑釉陶器を焼成する窯は、洛北・洛西・篠があり、傾向として初期の段階には洛北で築かれ、続いて洛西、篠へと展開する。

京都洛北では、9世紀初頭には緑釉陶器の生産を開始する。9世紀後葉の妙満寺境内窯跡の緑釉陶器は硬質で、椀・皿類の底部が平高台や蛇ノ目高台のものが多く、釉は全体に淡色である。洛西産の緑釉陶器は石作窯跡に代表されるように器形は椀・皿・唾壺・香炉・壺・鉢などがあり、椀・皿では陰刻花文を施すものが多い。椀・皿の底部は平高台や蛇ノ目高台のほか、輪高台のものがある。

洛西地域では小塩窯で小型窯を検出しているほか、窖窯構造の灰谷一・二号窯がある。一方、篠窯跡群でも前述のように大谷三号窯で、窖窯構造の緑釉陶器あるいはその素地を焼成している。

篠窯跡群での須恵器窯としては9世紀前半～後半には、8世紀末～9世紀初頭の窯が築かれた位置に隣接しては造られず、8世紀第3・4四半期に築かれた窯跡に近接した位置に窯が再度築かれる。この時期の窯として石原畑一・二号窯、鍋倉一・四号窯があるほか、新たに篠窯での西端、黒岩地区、前山地区や北端の山谷地区での操業が行われる。

8世紀中頃から9世紀前半にかけて操業される篠窯跡群の展開をみると、大きくは各支群とも窯が操業されてから七〇〜九〇年を単位として、その窯での操業を中止したのち、同一地点で新たに窯を構築し、操業を再開しているという一定のサイクルが認められる。

このことは、窯の構築、製品の成形に必要な粘土の採取とともに、燃料であるマキの確保が大きく左右しているものと思われる。これは発掘調査した灰原の炭化物の分析からもある程度類推できる。灰原の炭化物の樹種鑑定では、初期の窯から終末（8世紀中頃〜11世紀初頭）の窯まですべてカシ類・シイ類という自然の照葉樹を構成する樹種を用いているが、9世紀中頃以降の窯では一部、森林の二次林化を示す二葉松を含むという結果がでており、高野陽子は「9世紀以降、生産規模の拡大に伴い、新たに燃料材の確保、補充のためマツ材の育成が進められ、その結果、（中略）窯が構築された地区での操業を再び可能にした」と考えている。

一回の窯の操業に必要なマキの量については想像の域を出ないが、多量のマキが必要であり、ある程度乾燥させておく必要がある。数回あるいは十数回の窯の操業によって周辺の樹木の大半が伐採された可能性が高く、その森林が再生するのに八〇〜一〇〇年を必要とし、その再生をまって同地点での窯の操業を再開したものである。それまでは別の地点に、新たに窯の操業に必要な地形を探して窯を構築することも考えられるが、篠窯での小河川、地形条件、粘土の確保などから、小河川があり、水の確保ができる同地点にもどり、窯を再開することが効率的であったと思われる。なお、現在の篠丘陵は砂防・風致地区であり、奈良平安時代の窯での森林破壊が今に影響を及ぼしている可能性も考えられる。

三・篠窯の変遷

篠窯跡群のこれまでの調査成果をもとに、その変遷を検討したい。

篠窯の第一期 第一期は、大谷窯の築窯から始まり、石原畑三号窯、西長尾奥一―1号窯、意泉院裏窯へと続く篠窯跡群の開窯期である。

古墳時代後期は、陶邑から地方窯へと、その技術が派生する時期にあたる。篠窯ではその時期の窯の実態は明らかでなく、篠地域では須恵器の生産は行われていないものと思われる。篠窯の開窯契機としては、亀岡盆地での四寺のひとつである観音芝廃寺があげられる。7世紀末の観音芝廃寺の造営以後、時塚遺跡・車塚遺跡などの集落・官衙の形成とともに8世紀第3四半期に石原畑三号窯、西長尾奥一―1号窯などが築窯される。

この時期は、原口正三のいう須恵器生産における「第三の画期」、中村浩のいう「第5段階の地方窯」の時期であり、国府の整備・国分寺の創建などを契機として、窯の操業が全国的に行われた時期である。

亀岡盆地には、千歳町国分に丹波国分僧寺が、河原町河原に御上人林廃寺(丹波国分尼寺)、馬路地区では丹波国府の可能性がある池尻遺跡や時塚遺跡、千代川町北ノ庄に推定丹波国府がある。このうち、丹波国分僧寺第五次調査で検出した土坑内から、石原畑三号窯の特徴的な杯・皿類が出土しており、この時期の篠の窯製品は丹波国府・国分寺・国分尼寺に供給されたと思われる。なお、石原畑三号窯、西長尾奥一―1号窯では「大」・「大夫カ」とヘラ描きされた杯・皿・蓋などが出土している。

篠窯の第二期 第一期が観音芝廃寺の造営・丹波国府の整備・国分寺の創建により成立したものに対して第二期は平安京への遷都を契機として成立する。

第二期の窯は、西長尾一・四号窯、芦原一・三号窯などがあり、数基の窯が連立して築かれている傾向がある。第二期にあたる8世紀末～9世紀前半は、かつて一大生産地であった大阪府の陶邑古窯跡群が衰退する時期であり、それに変わって篠窯跡群が隆盛する時期である。

陶邑古窯跡群の衰退については、平城京の出現による薪・粘土などの絶対的な不足、長岡京・平安京への遷都による遠隔地への製品の輸送による困難さ、工人の支配体制の変化などがあげられる。そしてこの陶邑古窯跡群の衰退と反比例して長岡京・平安京に隣接した洛北・洛西・篠窯跡群が隆盛する。

篠窯跡群の位置をみると、西山丘陵を挟んで、その背後にあり、陸路ならば旧山陰道に近接しており、水路ならば宇川（大堰川・保津川）・桂川があり、陸路・水路を利用して長岡京・平安京へ製品を運べるという立地条件にめぐまれている。また、第一期である国府の整備・国分寺の創建を契機として工人体制が整っていること、古墳時代からの大規模な窯業生産を行っていないため、粘土・薪などの材料が豊富であることから篠窯跡群が一大生産地へと変化したものと考ええる。

篠窯跡群での平安京遷都に伴う一大消費地の供給を意図した9世紀第1四半期の窯である西長尾一・四号窯、芦原一・三号窯に続いて、9世紀第2四半期にはマル山一号窯、第3四半期には小柳一号窯、石原畑一・二号窯、前山一号窯、袋谷一号窯などがある。

9世紀第3四半期を前後する時期の窯は、分布調査の結果、各支群にわたって窯が築かれ、伊野近富の推定では一〇〇～一四〇人以上の複合集団（薪などの燃料・粘土などの確保、窯の操業、製品の搬出に従事する集団）が山でひしめいていたこととなる。

9世紀第3四半期を前後する時期の窯の製品（須恵器）をみると、その前段階が杯A・B、皿A・B、杯蓋A・B・C、鉢、平瓶、高杯、硯など多種にわたるが、須恵器の器種は、器種の多様化がみられず、杯・碗の小

型品が半数以上を占めるといふ傾向にある。そしてこの時期には篠窯跡群に近接した園部町にある園部窯跡群では操業の空白期間であり、一時期、平安京への需要に応じるため園部窯跡群の工人が吸収された可能性も考えたい。

篠窯跡群が盛んに築かれる9世紀中葉の時期には、平安京が活気を迎える時期であり、平安京の需要に対応して篠窯跡群が隆盛を迎えたものと考えられる。

篠窯の第三期 第二期の須恵器増産体制から、第三期は須恵器の器種を淘汰し、小形窯へと変貌していく時期である。一大消費地である平安京では、8世紀末から9世紀初頭の律令的な供膳具・貯蔵具が9世紀中葉には減少し、より単純な器形へと変化し、消費地での土器の使用変化が認められる。9世紀中葉の時期の消費地での土器の出土例をみると、その時期以前が黒色土器・施釉陶器が少量で、土師器の杯・皿・椀が供膳具の主体を占め、次に須恵器杯・皿・蓋になる。そして9世紀中葉以降は白色土器、中世陶磁器が加わり、黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器などの出土量が増加し、須恵器杯・皿・蓋などの出土量が激減する。

9世紀中葉以降の須恵器の生産地の変化を如実に表すのが、篠窯跡群での大谷三号窯・西長尾三号窯である。西長尾三号窯は9世紀末の九〇〇年を前後する時期の窯であり、生産された製品(須恵器)は、杯Ab・椀Sなど器種が限られており、その器種形態も単純なものとなる。

長岡京・平安京への遷都を契機として増産を続けていた篠窯群は、西長尾三号窯をもって半地下式窖窯は消滅する。この半地下式窖窯の消滅から前山二・三窯、黒石一号窯のような須恵器とともに緑釉陶器を生産する小型特殊窯へと変わっていく。

小型窯は、10世紀の第1四半期の前山二・三号窯、大谷窯に始まり、続く10世紀第2四半期の黒石一号窯・小柳四号窯、10世紀第4四半期の西長尾五・六号窯へと続くが、篠窯に先行する形で、西山丘陵にある京都

市石作一・二号窯で、9世紀後半に小型特殊窯で緑釉陶器を生産している。

前山二・三号窯は、前述のように須恵器とともに緑釉陶器を生産する窯であり、製品の約3%が緑釉陶器である。この緑釉陶器は9世紀中葉以降の施釉陶器の需要にこたえるため、洛西地域から篠へと緑釉陶器焼成技法が拡散し、緑釉陶器を生産するための小型特殊窯が築かれたものと考えられる。

緑釉陶器を生産するために築かれた前山二・三号窯は、消費地、特に大膳職・内膳司・平安貴族・地方有力者の要求とともに生産体制（組織）に著しい変化があったものと思われる。すなわち西長尾三号窯が築かれた九〇〇年前後には粘土の採取・薪の確保や窯を築く場所にも限界があり、悪条件のところでも築窯が可能な技術が必要となったものと考えられる。

前山二・三号窯は、3m四方にも満たない範囲で丘陵斜面を必要としない窯であり、5～10mの丘陵を必要とする半地下式窖窯とは築窯条件に差異がある。また、窯の規模が小さく大型製品ではなく、杯・椀・皿・鉢などの小型品を主体としているため、焼成時の燃料も少なくて済み、少人数の工人で生産が可能となる。

この半地下式窖窯から小型特殊窯への窯体構造の変化は前述のように石作一・二号窯の技術が伝播したものと考える。そしてこの技術伝播及び窯構造の変化を、伊野近富注51は「主たる需要機関である大膳職や内膳司が須恵器の調納悪化に対処して、生産者の直接把握に乗り出した」ためであり、生産者自身にも「台頭した富豪層によって窯業集団を維持できなくなったことを、目の当たりにみており（中略）内膳司などの権勢を頼って、その寄人となる道を選んだのであろう」と推測されている。

この第三の画期は、前山二・三号窯の10世紀第一四半期から西長尾五号窯の10世紀末まで連続と窯が築かれているが、この小型特殊窯については時期を追って窯体構造の変化が見られる。そしてこの窯体構造の技術がピークに達した西長尾五号窯をもって篠窯跡群での須恵器の生産を終える。この伊野近富の言葉を借り

れば「篠窯の須恵器生産は余力を残して途絶える。」

篠窯跡群の終焉

10世紀末の西長尾5号窯、アナウシ谷窯の操業をもって篠窯跡群での須恵器生産を終える。

篠窯跡群の終焉を前述の伊野近富は「丹波・篠窯の終焉」で詳細に論じてられている。伊野近富によると篠窯跡群から旧山陰道を挟んだ三軒家南一号窯へのと工人の移動があり、その王子瓦窯の築窯をもって篠窯での須恵器の生産を終えたと考えた。

三軒家南一号窯は、対岸に宇川が流れ、宇川から保津川・桂川を下れば平安京へたどり着く。この地理的条件により重い瓦を水路で運搬できるという利点がある。四〇〇年近くにわたって須恵器窯を築いていたことにより限界が生じつつあった。この衰退する運命にあった篠の工人が、寛仁三（一〇一九）年、藤原道長によって発願された法成寺の造営を契機として変化する。三軒家南一号窯で焼成された瓦は、瓦当面の裏面に粗い縄目タタキが施され、焼成は堅緻で、灰色を呈する須恵器に近い焼き上がりである。須恵器工人の介在があったと考える。7世紀後半から始まる篠窯は、須恵器窯から須恵器・緑釉陶器を併用する小型窯、さらに瓦窯へと消費地での需要に対応しながらも四〇〇年近くにわたって窯が連綿と操業され続けた。

注五―117 中村浩「須恵器生産の諸段階・地方窯成立に関する一試考」（『考古学雑誌』第六七巻第一号 日本考古学

会）一九八一

注五―118 伊野近富「丹波・篠窯の終焉」（『中近世土器の基礎研究』Ⅱ 日本中世土器研究会）一九八六

初出：「第三節 篠窯跡群にみる3つの画期」（『京都府遺跡調査報告書 篠窯跡群Ⅱ』第11冊）（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）一九八九

おわりに

龍谷大学に入学した初年度、気軽な気持ちで発掘調査に参加した城陽市平川廃寺の調査以後、学部生時代、京都府教育委員会嘱託調査員の2年間、京都府埋蔵文化財調査研究センター設立以後は、調査員として発掘調査を続けてきた。振り返れば、京都府内の遺跡を40年近く経験したことになる。

センター設立時には篠窯跡群、平成元年にはいつて学研木津地区の調査に関わり、幸いなことに多くの窯跡の調査を経験した。

本書は、窯跡に関わり、調査報告書・概説書・論集に書いたものをまとめたものである。

窯跡で考えたことをひとつにまとめたという構想は5年前からあり、準備はしてきた。ただ、何度となく、こんなものを刊行していいのかどうか、迷いがあり、中断を何度となくくりかえしてきた。

私自身、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでの退職も目前となり、「何かの役に立つのでは」と思inaおすとともに、私自身の足跡として再度、これまでに書いたものを読み返し、一部訂正を加えた。何かの参考になれば幸いである。なお、本書編集に際しては、同僚である筒井崇史氏に多大な協力を得た。ここに記してお礼を申し上げる。

古代生産遺跡の研究 -宮都の窯業生産-

発行日 平成 28 年 12 月 19 日

著 者 石井 清司

印 刷 三星商事印刷株式会社

発 行 〒 604-0093 京都市中京区新町通竹屋下ル

電 話 0 7 5 - 2 5 6 - 0 9 6 1

F A X 0 7 5 - 2 3 1 - 7 1 4 1